
戦人の迷宮探索（改訂版）

乙黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦人の迷宮探索（改訂版）

【Nコード】

N0765Y

【作者名】

乙黒

【あらすじ】

世界発の仮想現実の技術が使われたゲーム、“ダンジョン・セルボニス”がついに発売された。世界中のゲーマー達が待望したゲームをプレイし、ログアウトすると一転。――地獄の迷宮探索が始まった。主人公である青年は、この世界独特の強さである――レベルやスキルそれ等が最低ランクだった。ゆえに、この世界の元の住人や、新しく現れたゲームプレイヤーから嘗められる日々が続く。やがて大きな渦に巻き込まれた彼は、善につくのか、悪につくのか、その大きな選択を強いられるのだった。

この作品は、戦人の迷宮探索（仮題）の改訂版です。前回はあまりに稚拙な作品だったので、思い切って書き直すことにしました。読者様には多大な迷惑をおかけしますが、今後はこちらの作品のご応援をお願いします。

第零話 プロローグ（前書き）

まだ序盤ですが、できるだけ早く前まで追いつきたいと思っていますので、これからも応援お願いします。

第零話 プロローグ

太陽の光が閉ざされた深い闇の中で、壁に生えている白い花だけが明かりをくれる通路があった。天井は高く、右を見ても左を見ても壁。幅は狭く、幅は二メートル程。

そんな通路はただ長く、後も先も闇だけが広がっていた。

ここは、迷宮ダンジョンと呼ばれる場所だった。秘宝が、財宝が、金銀が、数多く眠り、荒稼ぎしたい者にはとっておきの場所である。

だが、そんなメリットばかりの迷宮ダンジョンだが、そこには危険もある。
トラップ モンスター
罠や、怪物が潜んでおり、時には命を失うこともあるのだ。

だが、それが苦とせず、迷宮ダンジョンを突き進むのが、“冒険者”という生業だった。

命を糧に金を求め、犠牲の果てに栄光がある。

冒険者とは、そんな職業であった。

そんな場所にただ一人――灰色の青年は立っていた。

彼は、変わった青年であった。

麻製の服の上を灰色のマントをで包み、顔は愉悦で染まっ
ただ歩みを進めるだけ。

云うならば、一般人の“格好”だった。これで町に出ても、なんらおかしくないだろう。間違っても、命を糧に金を求める――冒険者の格好ではない。

そんなここに不釣り合いな彼が、ここに居たのは理由があった。
それは生きるためだ。

急に独りになった彼は、現在金目の物を持っていなかった。生き

るためには金が必要だ。その金を稼ぐため、彼は冒険者になったのである。

今の彼は、そんな職業に就いて早一週間経っていた。

冒険者という職業に慣れない最初は戸惑いもあったが、今は“ある理由”からこの職業に悦びさえ覚えていたのである。



それは、彼が狭い通路をしばらくの間進んだ時のことであつた。そこでは目に強い光が現れ、光の中から音が聞こえたのだ。

「くっそお！ どうしてこんな低階級にこんな高レベル怪物モンスターがいるんだ！！」

それは、不運を嘆く、哀れな者の声であつた。
悲痛な声が聞こえる場所は、通路の終わりだ。だが、その続きは壁ではなく、大輪の白い花が天井を多い尽くすほどある広い空間がある。

そこは、剣呑な空気であつた。

中世の鎧を着た三人の“冒険者”と、人より二回りも大きい金属で覆われた二足歩行の人によく似た体の構造を持った怪物モンスターがいて、お互いがお互いを目で牽制しあっていた。

敵を睨みながらも、弱弱しく立っている冒険者の武器は、それぞれ槍と棍棒と弓だ。

この三人は既にこの戦闘の数分前、力量レベルが22の敵を十体倒して

おり、本来なら宿に帰って休みたいところだった。
ゆえに体調が万全ではなく、呼吸も深呼吸である。

彼等とは反対に、堂々と立っていた怪物の姿は——異様だった。
防具のような纏っている金属が赤色。体の前に逆さに置いた太く、
分厚い大剣でさえも赤色である。

その姿は、血を喰らって生きる——まさしく“物の怪”だった。

イレギュラー
「異常なんて……!!」

三人の“冒険者”内の、誰かが口にする。

イレギュラー
異常とは、本来存在する怪物の突然変異で、それは通常の物より
強い。

イレギュラー
今のままでは異常に勝てない、それが三人の冒険者の心境だった。

レベル スキル
それは彼らが、力量も技も足りなかったからだ。

レベル
力量とはその者の強さを数字で表し、通常は高ければ高いほど強い。

レベル イレギュラー
そんな力量で異常を表すと40程。

レベル
逆に三人を力量で表すと、彼らはそれぞれ20位しかなかった。

イレギュラー
それは、冒険者である彼らが、生贄という代償を用意しても、異
常十人集まってやっと一人生き残れる確率だった。

これだけでもその強さは明らかで、三人に勝ち目は無い。

スキル
ところで、技とは武器の熟練度を上げることによって、それを一
定以上貯めるとそれぞれに適した技が開放され、その者の体力に応
じて何回か使えるようになる一定の現象のことだ。

その現象には色々あり、例えば剣から衝撃波を飛ばせたり、練習

もしてないのに槍を連続で突けるようになる。など、様々な種類があった。

「諦めるな！ 諦めなければ勝機は必ずあるはずだ！！」

また、三人の内の誰かが言った。

無駄だろう、と灰色の彼は思う。

何故なら彼らが向かう出口は、イレギュラー異常が塞いでおり、自分がいる方に逃げて外には出られず、むしろ迷宮の奥へと続く道なので、もしかしたら“より”強大な敵がいるかもしれない。

——だから、三人は“このまま”の状況では、イレギュラー異常に勝つ以外に、生き残る手段は無いのであった。

「仕方ねえ、ちょっと英雄になってくるか」

そんな絶望的な三人の光景を目の当たりにした彼は、わざとくさい台詞を吐きながら一歩踏み出した。

彼の歩みの矛先は、イレギュラー異常へと真っ直ぐ続く。

相手は難敵にも関わらず、淡々と、まるで家の中を歩くように、彼は足を進めるのであった。

「き、君、止めとけ」

三人の内の槍を持っていた一人が、彼を止めた。

彼の無謀な挑戦を止めさせようとしたのだ。

何故なら彼が、目ぼしい武器も、目ぼしい防具も持っていないからだ。

だからだろう。その一人は、防具どころか武器すら持ってない彼を、その見かけから弱いと判断したのだ。

「本当に……本当に……死ぬぞ!!」

いや、見かけだけではなかった。

彼は力量^{レベル}すらも低かったのだ。それは三人の冒険者よりも、圧倒的に低かった。

「どけ。邪魔だ」

だが、口角が上がっている彼は、その止めた者の手を乱暴に払った。

先程、英雄になる、と大層に言っていた筈なのに、彼に三人を助ける意思是全然無く、むしろ彼には異常^{イレギュラー}と戦いたい気持ちのほうが大きいのである。

どこまでも彼は――獣のような“餓えた”人間だった。

「――さあ、戦^やろうぜ」

五メートル先にいる彼の発言で、異常^{イレギュラー}は剣を構えた。両手を突き出し、その太い腕で大剣を支える。

これで事実上、彼の宣戦布告を異常^{イレギュラー}が受け取る形になった。

ダッ!

そして、先に仕掛けたのは、灰色の彼だ。

上体を前のめりにし、己が出せる最高スピードで、異常^{イレギュラー}との距離を一気に詰める。

キリキリッ!

敵は彼が近づくのが分かると、独特の歯車が回る音を出しながら、大剣を驚異的な速さで振り落とした。

彼はそれを、右にかわす。が、完全には敵の大剣はかわせず、皮膚を浅く切った。

だが彼は怪我を気にもせず、イレギュラー異常の背後に回る。それは大剣をもう一度振らせる暇など与えないほどのスピードであった。

「——まっ、死ねや」

次に灰色の青年は背を駆け上がり、両手で大事そうに、顔らしき部分を持った。

そして、首を力強く——廻す。

瞬間、首元からは瞬間的に鈍い音がし、首は顎が上になるように折れる。

そして彼は背から下り、首を——限界まで下に引っ張る。

すると、どうだろう。

捻られ、引っ張られたコードは、それも首にある多種多様の色で覆われたコードは、あまりの“力”に耐え切れず、無残にも千切れる。まるでロボットの首が取れたかのように、彼は敵の首を——取ったのである。

「えっ……!!」

イレギュラー奇想天外な異常の斃し方に、三人は大きく目を見開き、驚愕した。やがて、彼の手首についた時計のような無機質な声が——鳴った。

——ピコーン、レベル力量が11になりました。

第一話 日常

「ほれ、避けんか！」

早朝、静かな山奥にしゃがれた声が響いた。それは眠気を邪魔するのには、最適な殺気だった声であった。

だからか、危険を察知した小鳥達が飛び立ち、木々がざわめく。

「うるせえ！ ジジイこそ孫相手に背中を狙うな！！」

次に森に響いたのは、低い青年の声。こちらもドスの効いた“怖い”声だ。

そんな二つの声の出所は、山の中腹にある小さな神社の裏手にある板間の道場だ。

中にいた者は――二人。

どちらも一流と云える武芸者であった。

片方の青年は汗で黒く汚れた道着と白い帯を着ており、背は170後半。腕や足などの体は遠くから見れば細く見えるが、実際に近くで見ると常人の“それ”より太く、細かな傷もついており一般人の腕とはまるで違っていた。

そんな青年と対峙していたのは、白髪の老人。

青年と同じような道着だったが帯の色だけは黒で、それだけでも強いと錯覚する。そして、その老人の最大の特徴は青年より細い体躯で、筋肉も然程しかない肉体だ。しかし、無駄な贅肉もついていない。

まさしく、不必要な肉を全て削ぎ落とした体だった。

そんな風貌の二人は、殴り合っていた手を止め、一旦距離をとった。即座に二人は睨み合い、――同時に踏み込む。

青年は拳で、老人は足で、それぞれを狙い、やがて拳と足が激突した。

一般的に手と足では足のほうが三倍強いと云われるが、この二人の威力は同等だった。

若い故の青年の優れた瞬発力が勝ったのか、やはり老いた老人の肉体が負けたのかは分からない。

だが、どんな結果であろうと、威力が同じだった“事”に違いはない。

なので、二人はその結果に大した動揺は見せず、すぐに次の行動へと移る。

最初に仕掛けたのは青年だ。

ぶつかった右手をすぐに引っ込め、右手で老人の胸倉を掴む。老人は蹴りだった為、次の動きへと移るのは遅れたが、それでも負けてはいなかった。

老獺とまで云われる、永い年月をかけた技術のみで青年の胸倉を掴んだ腕を、左で持ち、肘を右手で逆方向に――極める。

「糞がっ！」

しかし、青年もすぐに反撃した。

関節が極められていない逆の二本の指で、咄嗟に老人の目を狙う。

「うわっ！ 危ないのう。いたいけな祖父を殺すつもりか？」

老人はこれに対して急いで両手を離し、後ろに上体を倒す。ようするにスウエーであった。

「いや、老人思いの俺が、そんな事するわけないだろ。それより、ジジイも折るつもりだったのか？ 俺の右腕」

「いや、孫思いのわしが、そんな虐待のような事するわけないじやろ」

似たような答えを返す二人。

青年は口では笑っているが、目が笑っていなかった。勿論、老人も口では笑っていたが、目は笑っていない。

「ははっ……」

「ほほっ……」

両者とも分かっていた。

乾いた笑いをしながら、お互いがお互いに本気だったのを。しかし、表面上では冗談のように振舞っている。

とんだ茶番だ。

本当を知っているのに、あえて知らない振りをする。

だが、そんな偽りは長くは持たない。込み上げる激情は、そう我慢できるものではないのだ。

「死ねやっ!!」

「くたばれっ!!」

やがて、似たもの同士の二人の堪忍袋の緒が同時に切れ、――またぶつかり合った。



「はあ……」

こんな朝が、あの二人には毎日のように訪れていた。メビウスの輪のように、昔から永遠と続いていたのだ。

だからか、この光景を、もう千を超えるほど見たこの光景を、道場の外から見ていた女性がそつと嘆息する。

「氷雨^{こひり}もお祖父ちゃんも止めなさいっ!!」

そして、大声で二人を止める。

二人は何度も交わりながら戦いあったのが、目に見えるほど汗をかいている。これを見た女性は、また洗い物が増えた、と溜息を吐いた。

先程の一瞬は、この二人にとっては、ほんの短い時間なのだった。彼女の声が耳に届くと、そんな二人も動きを止める。

両者とも相手に対するぎらつく目を押さえ、エプロン姿の彼女に目を向けるのだ。

「ほう、もう朝食か。小僧、命が助かったな」

「そういえば腹が減ったな。ジジイこそ死期が早まらなくてよかったな」

戦いが終わった後の、こんな言い合いも日常のように行われていた。

そんな祖父と弟には、同族嫌悪の言葉がよく似合う。性格も、戦い方も、遺伝子でさえも似ている二人。

だから、まるで自分を見ているようで苛立つ。

何故、自分も同じような遺伝子なのにこうはならないんだろうと、彼女は不思議に思った。

（そういうわけね。性別が違うからか）

勝手に彼女はそう納得する。

もとより、こんな疑問などどうでもいいこと。

なので、適当に理由づけるのであった。



それは、これまたいつもの静かな朝食の風景だった。畳に置かれた長いテーブルに姉弟そろって座り、その向かいに祖父が座る。

それぞれの目の前には焼き魚と味噌汁とご飯が置かれ、テーブルの真ん中には白菜の漬物が置かれていた。

「姉ちゃん、たしか今日が発売日だよな」

先程戦っていた青年が、味噌汁を啜りながら尋ねる。

今は道着ではなく黒い学ランを着ている彼は、エプロン姿の彼女の弟で、あの老人の孫だ。

名は、南雲氷雨。

高校二年生の彼は、一般的に見れば地味であった。

今は春先なので長袖。だから服の上からでは筋肉は見えず、細かい傷痕も見えない。

勉強の成績は平凡的で、理数系が少し苦手な程度。

体育は少し得意だが、それも部活に所属している者には負ける。専門職の人間には、いくら彼でも敵わないのだ。

顔つきは目が少々鋭いだけで、ほかに目立つようなことはない。

髪は染めてもなく普通の黒色である。

友達も多くもないし少なくともない。クラスの皆と喋るが、いつもは4、5人ぐらいのグループにいる。

これまた地味だ。

当然ながら、そんな彼に目立った噂はなく、今後も生まれる予定がなかった。一つあるとすれば、姉の話題ぐらいだろう。

クラスの女子には、「ああそんな人いた」としか認識されてない。さらにクラスの全員が、彼が山奥に住んでいるので祖父から武術を嗜んでいる事など、友達も知らない。

ゆえに学校の皆には、氷雨は一般人としか認識されていなかった。

「ええ、そうよ。ちゃんと氷雨の分のゲームも、予約していたから安心していいわよ」

「ふう、良かった。もしも俺の分が無かったらどうしよう……と思ってたところだな」

お茶を一杯口につけた彼女が氷雨の問いに答える。

彼と彼女が言っているゲームは、本日発売の世界初VRMMORPG、“ダンジョン・セルボニス”だ。

これは実際に体験できる“バーチャルリアリティ”という最新のバーチャル技術を使ったゲームで、“リアル・カモフラージュ”と

いう機械を使うことによってそのゲームに応じた仮想現実へと行けるのだ。

その画期的なシステムが使われた第一陣のゲームが“ダンジョン・セルボニス”で、彼も彼女も楽しみにしていたのだ。

「それも見てみたいわね」

「……勘弁してくれよ」

優しげに氷雨に微笑む彼女の名は、南雲雪^{ゆき}。

少しの乱れもない真っ直ぐな黒髪は長く、肌は真珠やシルクのように白い。目はぱっちり二重で、セーラー服からは体の細さが伺える。

正座をしながら朝食を食べている彼女は、誰が見ても日本人形のように美しいと思うだろう。

学校で勉強の成績がよかったり、運動が出来たりと、彼女は優等生扱いされていた。さらに美人だが誰とでも分け隔てなく接し、優しいと、校内でも男女問わず人気の高い女性だ。

地味な氷雨の話題がクラスで挙がるとしたら、殆どが彼女の弟だということでもあった。

「にしても、姉ちゃんがゲーオタだって学校の皆知ったら、どんな顔をするんだろうな？」

「驚くんじゃないの？」

「なあ、冗談で姉ちゃんがゲーオタって、言ってもいいか？」

「――殺すわよ？」

「だ、だよな……」

雪は氷雨の質問に、箸をばちんとテーブルに叩きつけて答える。
まさしく雪のような冷たい殺気が、彼女からなだれ出た。

誰もが羨むような完璧さを持つ彼女にも、やはり隠しているとある“秘密”があったのだ。

それは生粋のゲームオタクだという事。

携帯ゲームからテレビゲーム。それまたネットゲームまで、RPGなら大体手を出している。ほかに^{シューティングゲーム}STGやFPSなど、種類は様々だ。

だが、彼女はそれが回りに知られると、自分の周囲の評判を落とすことをよく分かっており、それをひたむきに家族以外には黙っていたのだ。

「ふん、氷雨に一言釘を刺しておくがな。いくら、ばーちやるりありていーでも、武術の腕はまったく上がらんぞ！」

朝食の途中、ゲームの話題があがる度、祖父は氷雨にことある度にしっかりと言い聞かせていた。

いくら仮想現実でも本当の現実とはまるで違う、ということだ。
祖父は薄々だが、氷雨が誰かと戦いたがっていることに気づいていた。

交通事故によって親を亡くした孫を引き取ると、二人を甘やかしてはいけないと心を鬼にしながら己が嗜んでいた武術の稽古をつけた。

その方向性を氷雨だけちょっと間違えたな、と思う。

雪は別だ。

彼女はいい姉として、いい女性として、素晴らしく成長した。だが、氷雨は違う。

彼の組み手相手は、幼少の頃から実の姉と祖父だけだった。

——故か、氷雨は血に餓えている。

「けっ、だからなんだ。ジジイには関係ないだろ」

食べ終わっていた氷雨は、祖父に悪態付きながら、学校の準備に自分の部屋へと戻った。

「おじいちゃん、じゃあ私も行くね」

「お、おう。氷雨を宜しく頼むな」

「うん、分かってる」

と、彼のすぐ後、雪も部屋へと戻る。朝食の食器は全自動の食器洗い機に入れば済むので、それは祖父の仕事だ。雪に迷惑をかけるため、祖父が自ら提案したのであった。

そして、その数分後、姉弟の二人は学校へと出かけた。

「はあ……」

そして、二人が学校に向かった後、こうして縁側で神主の格好をしながら、祖父は一人考えに耽った。

——修羅道へと堕ちれば、二度と人へは戻れない。

祖父は知っている、墮ちた者の人生を。
祖父は知っている、墮ちた者の結末を。
しかし、いい案が出ない。

「さてどうしたものかのー」

だから白髪の老人は、そう溜息を吐くのであった。

第二話 学校

別段大きくもなく、小さくもないどこにでもありそうな校舎。

校舎の中からは吹奏楽部だと思える楽器の音に、そのすぐ隣にあるグラウンドでは野球部やサッカー部などによる練習が行われていた。

そんな学校の門を、氷雨と雪はくぐる。

二人が通っている学校は、周りにある学校より平均的に学力は少し低く、しかし他県まで有名な部活動はない。

要するにどこにでもありそうな高等学校だった。

「それにしても、疲れたな……」

「私も……眠たいわね」

そんな普遍的な学校を、彼らを選んだのに理由があった。

——近いからである。

彼らが住んでいる山の神社から一番近いこの学校でも、徒歩で最低二時間はかかる。この学校は自転車通学が出来るのだが、それを使うとより時間がかかるので、二人は徒歩で近道として柵を越えたり、道なき道を越えたりしていた。

二人はそんな苦労をしながらこの学校に通っている。

なので、一緒に通学するような友はいなく、一人で通っても暇なので、二人で喋りながらいつもこの学校の行き来をしているのだった。

「じゃ、氷雨また帰りね」

「ああ、またな」

そして、玄関で上履きに履き替え、そこで姉弟は別れた。

弟である氷雨は、そのまま三階にある二年生の自分の教室の扉を開けた。

「よ」

「おはよう！」

「よっ！」

そんな軽い挨拶を氷雨は低テンションで交わしながら、教室の中にある自分の机に座った。隣の引っ掛けに斜めがけのカバンをかける。

「それにしても、いいよなあ。南雲はあんな綺麗な姉がいて、毎日一緒に登校できて。オレならきつと禁断の感情が生まれてるぜ」

「オレもオレも。いや、オレなら襲ってるな。そして……ぐふふ。はあ、本当にいいよなあ、南雲は」

氷雨が席に着くと、すぐさま彼とこのクラスで仲がいい二人の男子が寄ってきた。

だが、まだ朝に必ず行われるSHRには二十分程度の時間があり、いつも氷雨がいるグループにいるメンバーには足りない。

もう一人は、いつも朝のSHRギリギリに学校に来るのである。

「おいおい、お前らは俺と会うといつもそれだな。それ以外に言う

ことはねえのかよ？」

氷雨はまたか、と低く二人に返した。

これは、彼の友達である彼らの雪に対する賞賛は挨拶のようなものだ。

毎日飽きることなくやっており、だが二人にも氷雨の友達として“常識”はある。だから、“礼儀知らずの氷雨達の先輩”とは違い、脅迫じみた姉への紹介の催促はしないのだ。

「無い……かな？　だって南雲って、大体の話題は軽く流すじゃないか！　ほかにどんな話題に食いついてくれるんだよ？」

「うんうん、氷雨って名前どおりに、冷たいじゃねえか。お前は、よ」

「だよな。オレもそう思うよ」

二人は、氷雨にわざわざ目を伏せながら話した。気分はさながらハリウッドスターである。

「そうか？　そりゃあ、悪かったな。今度からは、もうちょっと付き合うよ」

氷雨はまんまと騙されて、目を丸くする。

そんないつもとは一風変わった戸惑うような氷雨を見て、二人の同級生は大きく笑った。彼はまんまと騙された、と舌打ちをしたのだった。

「あー笑った笑った」

「お前ら……いつか殺してやる」

「うわっ！ 怖えよ、南雲！ そう怒るなって……」

「そうそう、確か今日が“あの”発売日だよな」

そんな笑い声も終わると、話題は変わった。

それは、今テレビのニュースでも話題のVRMMORPGの“ダンジョン・セルボニス”である。ゲーム好きでなくとも、一度はやってみたいゲームナンバーワンと有名で、この話題性は未だ尽きていない。

「あのゲームかあ、欲しかったが金……がなあ……」

このゲームの発売価格は、世界初の体験できるゲームとして様々な最新技術を使っているとの理由で、ソフトとハードのセットで十万円とされている。

「いや、金があっても無理だろ。だって限定5000セットだぜ。オレ達にはコネがない限り無理だな」

そして、このゲームのもう一つのネックが、その入手経路。これは日本の企業が作ったので、どの国よりも早く日本で先行発売される。その数は五千個であったが、予約は既に開始してから十分で終わっていた。

コネが無いと手に入れるのがほぼ不可能に近かったのである。

「確か、オークションには百万と書いてあったよな。つまりあれだけの大金があればオレたちにも……」

だが、数個だけこのゲームのセットがオークションで販売されているのがあった。数少ないゲーマーたちの希望の星だ。

「あれって、詐欺も多いとテレビでやってたなかったか？」

氷雨がここでやっと発言した。

最近ニュース番組で知った知識を、言ってみる。

「だよな。つまり、オレたちがプレイするのは何年後になるか……」

彼の友達の一人在落し込んだ。

その詐欺は現在社会問題にもなっており、一か八かでそれに賭ける人も少なくはないのだ。

「あーあ、雲林院うんりんいんのような金持ちの友達がオレにも居たらな……」

「無理無理、あいつはイケメン久遠にぞっこんだったろ。つまり、オレ達はおこぼれをもらうぐらいしかないわけだ」

久遠、今この名前がチラッと出たが、彼はこの学校では雪並みに有名であった。

名は光ひかる。

顔や目付きや鼻が欧米人の祖母の影響で酷く整っており、髪は金色。スポーツも上手く、勉強の成績も高い。そんな男として完璧な要素をもち、またこれを自慢しない謙虚な性格さえ持ち合わせる。なので、この学校の女子からは王子だと言われることもしばしばある。

要するにイケメンで、隙がない優等生なのだ。

そんな彼であるからして、困っている女子を助けることが多く、

非常にモテていた。その中の一人に雲林院という日本を牛耳るようなお金持ちまでいるのである。

そして、今はそんな彼が雲林院から希少価値の高い“ダンジョン・セルボニス”の、お試しプレイを今日やるという情報まで回っている。

だが、もし彼に手を出せば学校中の大多数の女子から非難を受ける羽目になる。

だから、そんな彼と正反対の三人は、こうやってひそかに彼の事を愚痴る事しか出来ないのだ。

「そういえば、南雲の姉ちゃんはいつに惚れてなかったよな？」

「そうさそうさ。その点もあってこの学校では一番人気が高いんだ。やっぱりいいよ。お前の姉ちゃん」

ここでまた話題が氷雨の姉に戻った。

雪はミーハーなほかの可愛い女子たちとは違い、久遠に全くなびかない。

その点が、彼女がこの学校で男子達の人気を数多く集める理由の一つだった。

（けっ、姉ちゃんは男よりゲームなんだからしょうがねえだろ。）

だが、氷雨は心の中で思いだしたことがある。

彼の姉の雪は他の女子に比べて、久遠に助けられる“こと”自体が無い。

そこらの不良には、氷雨と同じ武術で簡単に蹴散らすし、弱みであるオタクも家族以外には完璧に隠蔽しているからだ。

「それに彼氏がないのもポイント高いよな」

「そうだな。南雲、たしかお前の姉ちゃんあんな辺境に住んでるか
ら男との接点もないもんな」

最後に彼女は、男より“ダンジョン・セルボニス”に関心が向け
られており、彼氏を作る気などさらさらなく、現在も過去も居ない
のだった。

「もう、この話題やめようぜ？」

氷雨は嫌そうに言った。

それは、それがどんないい評価であれ、身内の話はあまりしたく
ないというむず痒い思いからだった。

「分かったよ。それじゃあ次は一年のあの子の話にするか？」

「いやいや、それよりも、テレビで話題のあの女優の……」

キンコンカンカーンカーン！

ここでSHRの開始のチャイムが鳴る。

「ようろう！ オレ様！ 降臨だぜ！！」

と、同時にうざい奴も来た。机の上に仁王立ちし、左手は腰にあ
て、右手の人差し指が天を向いている。わけの分からないポーズだ。
氷雨の残る友人である。

普通の学生服なのだが、赤いたすきをかけている。ちなみにたす
きの意味は、特になかった。

「……じゃ、またな」

「……お、おう」

「……後でな」

「ちょいちょいちょい！！ オレは？ ねえ、オレは無視ですか？
？？ ここまで頑張ったんですよ！」

たすきの男は他のメンバーからは無視されるのだが、これもある意味挨拶であった。

こうして、彼の学校生活の恒例の出来事は終わったのだった。

——そして、これが、かけがえのない大切なものだったと、彼が気づくのにそう時間はかからなかった。

第三話 始動

学校が終わり、放課後。

氷雨と雪は急いで家に帰った。

そして着替えもせずに、自宅にある畳が敷かれた部屋に向かう。

そこは、二台のノートパソコンと二つのダンボール箱がある簡素な部屋だ。

雪はダンボールを開け、中に敷き詰められた梱包材を丁寧に一つ一つ取り除きながら、“リアル・カモフラージュ”という機械を取り出す。

それは頭につける大きな丸い装置に、それに沢山のコードが繋がれた小さな丸い機械が四つある装置だ。その小さな装置は、手首と足首の四肢につけるものである。

「姉ちゃん、これでいいのか？」

氷雨はそれを体に一つ残らず身につけ、畳の上に横になった。

コードの内の一つはパソコンに繋がっており、既にパソコンには“ダンジョン・セルボニス”のソフトがダウンロードしてある。

これで、いつでもゲームを起動できた。

「ええ。でも氷雨、あっちについたらどこにも行かずその場所で待ってなさいよ。ゲームのいろはも知らないんでしょ？」

「……わかったよ」

氷雨はの頭の中は、既に興奮でいっぱいだ。

何ヶ月も待ったゲームが、いよいよ始められる、と。戦える、と。

だが、彼はどんなコネかは知らないが、今手に入れるのが最も難しいゲームを、弟の自分の為に入手してくれた姉に心から感謝している。だから、気まぐれに雪の言葉を見殺しできないのであった。

「――じゃ、はじめるわよ」

そして、この声を最後に氷雨の意識は失われた。
それは雪がマウスをクリックした瞬間である。



指が動く。

手が動く。

腕が動く。

膝が動く。

足が動く。

口が動く。

光を感じる。

それらは同時に行われ、徐々に脳が覚醒していった。例えるなら、朝起きた時に近いだろう。そして、少し前の記憶を思い出し、ゲームの世界に來たんだ、と考えてから目を開けた。

「……!!」

その眼下に広がる光景は、まるで変わっていた。

古びた畳も、何度も張り替えられた障子もない。代わりに合ったのは、上に雲がない快晴の天空。足元は並べられた石畳。周りにはレンガで作られた町並みがあった。

「……うっわ！」

その、色が塗られた鮮やかな仮想現実^{バーチャル}の完成度に、氷雨は言葉すら遅れる。ここを現実だと思わない人は居ないと思うほど、現実^{リアル}に近い完成度だと彼は思った。

氷雨はそんな感動を胸に感じながら、佇んでた場所から少しだけ移動し、道の脇に並べられた区切りのような段差に座り込む。

雪を待つためであった。

先ほどの自分が立っていた場所を見ると、ぽつぽつと人が突然現れる。どうやら皆このゲームを始めた者は同じ場所から始まるからだ。

そして、彼はそれに納得すると、自分の姿を確認し始めた。

服は紺の学生服ではなく布製の簡易なズボンとシャツだったが、それ以外は明らかに“自分”だ。顔を触り目の位置や鼻の位置、口の位置などを確認しても、それも“自分”だ。手の長さや足の長さ、^{リアル}全て現実と遜色がない。

だが、一つだけ違う部分があった。

胸や腹などの体の中心部分の動きが少しばかり弱いのである。これは“リアル・カモフラージュ”という機械の性能上しかたがなかった。頭や四肢の先端にしかつけないので、そこから遠くなればなるほど動きが僅かだが鈍くなるのだ。

しかし、それは氷雨のように全身の感覚が非常に鋭い人間に限ってである。一般人ならこのゲームをする上で気づきもしなかったのだ、特に何の問題はないとゲーム会社は判断したのだ。

「よかった。氷雨、ちゃんと待ってたのね」

氷雨が考察に耽っていると、目の前から自分と似たような雪が声をかけた。やはりだが、雪の顔も現実リアルと変わらない。

彼女は氷雨と同じ機械を付け終わると、すぐにゲームの世界に飛んだのであった。

それが、このゲームの特徴だ。

このゲームでは、仮想現実バーチャルをよりよく体験してもらうため、アバターといった自分の分身のようなキャラクターを作ることが出来ない。良くも悪くも現実の顔や身体が、そのまま影響されるのだ。

これに対して最初、発表時にはプライバシーなどの反論などが多数あった。

だが、メーカー側の身体のパーツを変えると最初のゲームの基礎的な動きが全く出来なくなり、慣れるまでに数週間の時間がかかる。それにこれに慣れたら現実リアルに戻ったとき身体が動きずらくなる、という弊害の説明の結果、反論は殆どなくなったのだ。

「ああ。で、姉ちゃん、最初はどこに行くんだ？」

待ちくたびれたように彼は言った。

これからたくさんできる戦いに興奮してか、氷雨は貧乏ゆすりをしている。おそらく、待ちきれないのだろう。

「決まってるじゃない。——チュートリアルよ」

「チュートリアル？」

「簡単に言うと、ゲームの説明ね。ゲームの最初には必ずあるの。例外的にスキップできるゲームもあるのはあるけど、大体はこれを

受けないと先には進めないわね」

「だったら、早く行こうぜ」

「フツ、でも、もう少ししたらこの場所で説明が入ると思うわ。そうWikiに書いてあったから」

雪は笑顔の氷雨を見て、少し笑った。

彼の貧乏ゆすりの意味が、分かったのである。

『皆さん、お待たせいたしました。こちらに集まりください。チュートリアルを始めます』

そんな時だった。頭の中に電子音が響いたのは。

それと共に、そこに居た全員が、反射的に“その”声の方向へと目を向ける。

と、この時、氷雨はいつからだっただろうか、と考え始めた。この場所に存在していた人は誰一人減っていないく、増えた者もずっと居た。

なるほど、この場所に一定の人数を集めてから一斉に説明を受けさせる。ただしチュートリアルが始まるまでこの場所からは移動できないのか、と納得した氷雨である。

「氷雨、行くわよ」

氷雨がそんな考察を繰り返して立ち止まっていると、雪が彼の行動を促した。そして、声の方向にあった一つの建物に、二人揃って入って行く。

カランカラン！

扉を開けると、甲高い鈴が鳴る。

その中はただの広い空間だった。暗く光の玉がいくつか浮かんでプレイヤーの顔を照らす地球上では、まずお目にかかれなような幻想的な空間だ。

だが、そんな場所に感動してる暇など、今はない。

『ゲームの説明はこちらで行います。画面をご覧ください』

また、頭の中に響いた。だが、不思議とその音に不快感は感じられない。

皆は突然に現れた真ん中に映し出された映像を見始めたが、その殆どのプレイヤーは一人で見ている。

どうやら、二人で行動している姉弟が、この場所では異様のようだ。

『それでは、まず……』

それから、ゲームの簡単なチュートリアルが始まった。

「……普通ね」

ゲームの説明としては、と雪は述べる。

それは数多くある武器の種類を軸に、一定の種類^{レベル}の武器熟練度を上げると使える技^{スキル}。そして、力量はどうやったら上がるか等の説明。それに付け加えるように迷宮^{ダンジョン}の簡単な仕組みや、フィールドの仕組みなど。他にはログアウトの仕組みとゲームオーバー時には所持金を全て失った上で最後にいた町に戻ることや、能力値^{ステータス}の見方など、全て合わせて説明は五分程度で終わり画面がプツンと消えた。

『最初の軍資金として、プレイヤーの方々には1, 000ギルを渡します。ご自由にお使いください』

突如、目の前の空中には布袋が浮かんでいた。それはふわふわと漂っており、手に取るとジャラつと音を鳴らして、重力を取り戻す。ゲームのパターンとしてはこれもよくあると、雪は言う。最初に手に入れたお金で装備や道具を整えるのは普通なんだ、と知った氷雨だった。

『――最後にこれは助言です。北には、まだ行かないほうがいいと思いますよ。そこには、迷宮ダンジョンでも上位に位置する危険な動物モンスターがいますから……。では、今後とも“ダンジョン・セルボニス”を宜しくお願いいたします』

この言葉を最後に、頭の中の声は消えた。

そして、用の無くなったプレイヤーが次々とこの部屋から出て行くのだった。ただ、氷雨の顔だけは、なぜか少し綻んでいた。



姉弟が部屋を出るとその扉は、光となって霧散する。一度出ると、二度と入れないような仕様である。

そんな外に出た光景は、ある“一つ”を除いて入った時と変わっていない。

それは“人”であった。

プレイヤー、ノンプレイヤーキャラ問わず、先刻とは打って変わ

って人数が増えている

「やあやあ、ユキ殿でございますか？」

そんな大勢の中、二人に喋りかけたのは似たような格好をした四人。

四人はまっすぐに雪を見つめていることから、二人をではなく、雪を待っていたようだ。

「ええ、じゃあ、もしかして貴方がノボル君かしら？」

「そうでございます！ いやいや会えてよかったですなあ！ それにしても美しい！ こんなお方と冒険できると思うと、こちらとしても心が踊りますなあ！！！」

「そう。お世辞をありがと。こちらこそ、宜しくね！」

皮の鎧に、腰に両手剣を携えた小太りのノボルと雪が笑顔で握手した。

氷雨は仲間はずれとされているが、この五人はとあるゲームで噂になるほどのパーティーである。そんな雪を除いた四人は、今日だけ学校や会社を休んでおり、家にこのゲームが届いた時から集まってゲームの攻略を目指していた。

先程、雪から今から始めるとの連絡が入ったので、ノボル達は初心者が必ず通るこの場所に集まったのである。

そんな中、ノボルは雪が連れて来た氷雨が気になっていた。

「ところでユキ殿、次はこちらの方を紹介してもらってもいいでございますか？」

「ええ、弟の氷雨よ」

「ほう、この子がヒサメ殿ですか。いやはや、これからよろしく
お願いするであります」

「は、はい、こちらこそ宜しくお願いします」

氷雨は固い感じで、差し出されたノボルの右手を握った。若干だが、頬も引きつっている。

どうやら彼は敬語がなれないようである。

「そんな緊張しないでいいでございますよ！　これから仲良くし
ようではありませんか！」

「は、はあ……」

いや、氷雨は高テンションのノボルが苦手なのだろう。両手で握
った片手をぶんぶん大きく振り回されながら、彼は苦笑いをして
いた。

「氷雨、この方は私達のゲームを入手してくれたのだから感謝する
のよ」

「ああ、うん」

「いえいえ、ユキ殿。同士の頼みとあれば、断れる筈が無いではあ
ります！」

雪のゲームの入手先はこのノボルだった。

このノボルという男は謎であったが、ゲーム会社に多数のコネがあり、それを駆使して雪の分とは言わずこのパーティーの分のゲームは、全て彼が仲間の為にと用意していた。

その時、氷雨がこのゲームをしたい、と急に言ったので無理を承知にノボルに頼んでみると、二つ返事で了承との連絡が入った。

もちろんそれぞれお金は払うのだが、それにしても六個分。へたしたら最多くのこのゲームを手に入れている彼の素性はパーティーの誰も知らないのだった。

「オレも宜しく！」

「うちも宜しくね！」

「僕も宜しくな！」

何故だか、雪以外の全員がハイテンションのパーティーメンバーに、氷雨はまたも微妙な表情で順番に握手していく。

それは今日始めて会ったといえる雪も、同時に。

その四人は槍、弓、杖とそれぞれの武器を装備しており、鎧はノボルと一緒。

スタートダッシュを早く切れているだけあって、その四人は周りの人たちよりかは豪華な金属製の武器で、幾分か強そうだ。

それは怪物を斃すと結晶が手に入り、その結晶を売ったお金でより強い武器等が手に入ると、チュートリアルで言っていた。
モンスター

それから考えると、彼等はどれだけかは分からないが怪物を少なくて何匹かは討伐した事になる。ならば、力量も上がっているの
レベル
だろう。と、氷雨は推測した。

「――で、ヒサメ君も当然我がパーティーに入るのは確定でありますよね？」

ここで、突然、氷雨にとってノ衝撃の言葉を、ノボルは放ったのだった。

第四話 プレイ（前書き）

読者の皆さん、作者の勝手なわがままを承諾していただきありがとうございます。

作品の修正は少しずつですが、これからもご応援お願いしますね。

第四話 プレイ

「確かにそうよね。氷雨はゲームを全然知らないし……」

「うちもその方がいいと思うで。ここから東に行けば簡単に力量^{レベル}も上がるしな」

ノボルのその意見に次々と賛同の意が募る。空気としては氷雨がこのパーティー、通称アンタレスに入るのが当然のようだった。

「氷雨くん、では、パーティーの手続きに行こうではありませんか！」

パーティーの手続きには、とある段階を踏む必要がある。

それは一つはパーティー組合所という店に入り、その掲示板の中で自分が入りたいパーティーを指名する。その後、リーダーが許可を出すと、正式にそのパーティーのメンバーとなる。ここでの注意は、一つのパーティーには六人までしか入れないということであった。

もし仮に、新しくパーティーを作りたい場合は、パーティー組合所で新規パーティーの要請をすると誰でもできるのである。

「氷雨、行くわよ」

と、雪が、氷雨の手を取ろうとすると、彼はその手を払った。そして一言。

「――嫌だ」

と、言った。

彼は、さっさと戦いたかった。一人で戦闘を、それも高純度の死闘を行いたかったのだ。そこに仲間などというのは不要だと、氷雨は考えていたのである。

「えっ、どうしてであります？」

「なんでなんだよ？　こう言っちゃ悪いが、初心者には安売りだぜ」

「うちらそんな弱いわけちゃうしな。ほんまお得やで」

「僕らは現在、このゲームの攻略の五本の指に入ってます。なので、パーティーに入りたい方は沢山いるんですよ」

氷雨のこの発言に、四人からは次々と驚きの声が飛んだ。

彼等、アンタレスはスタートダッシュが少しばかり遅れたが、攻略スピードが群を抜いて早く、とある初級迷宮ダンジョンを二つもクリアしている。これは、今、三組しかない凄まじいことで、彼等のパーティーに入りたい者は後を絶たない。

それに、他の二組のパーティーはじつくりと時間をかけて迷宮ダンジョンをクリアした。だが、彼らはWikiなどの誰でも編集が出来るwebサイト等で情報を集め、早々とクリアしているのだ。

「はあ、氷雨、いいからこのアンタレスに入らない理由を教えて？」

最後に雪が聞いた。

彼女は予想はついている。

——獣のように獯猛どうもうな彼は、血を求めている。それを祖父から教えてもらっていたからこそ、雪も氷雨の“戦闘衝動”を知っていた

のだった。

「決まってるだろ。存分に、心行くまで、——“戦^やりたい”んだよ」

最後に、彼はそう問題発言をした。

これに対し雪はやっぱり、と溜息を一つ。そして、冷静に基本馬鹿の弟の目指す場所を聞く。

「で、どこに向かうの？」

「北——」

「——でしょうね。ま、死なないように頑張りなさいよ？」

これを最後に彼はこの“ヴァイスの町”を去った。

動揺の声はアンタレスだけでなく、耳に入った通行人までも発する。だが雪だけはそれを分かっていたように、呆れ顔をしていた。

「ユキ殿！ ヒサメ殿を止めなくてよかったのでありますか？ あそこは……？ 北の森”は……とてつもなく、危険な場所なのですよ？」

「いいのよ。あんな馬鹿はほっとけば。それより私たちは武器や防具を整えに行きましょう？」

そう実の弟へ冷たい雪に、アンタレスの仲間は戸惑うが、

「ゆ、ユキ殿がそう言うなら分りました。では、装備品の調達に行きましよう!!」

「お、おう」

「ええ」

すぐにノボルの声に賛成し、五人はヴァイスの町中へ消えていった。

そんな街中での五人の会話は、凄く明るいものであった。

「ユキ殿、知っていますか？ ヴァイスの西通りには、まだサービスが始まって数時間なのに“凄腕”の職人がいるんです！ 是非、そこに行きましよう！」

「そうね。でも、私はまだ1,000ギルしか持っていないわよ？」

「ご安心ください！ このノボルが、全てのお金を出すであります!!」

「ありがとう」

「いえ！ 雪さんのためならいくらでも……!!」

実は“ダンジョン・セルボニス”は剣士や槍使いなどの戦闘技^{スキル}だけではなく、鍛冶や服飾などの生産技^{スキル}も充実している。

彼らはNPCが売っている装備を探しに行ったのではなく、同じゲームプレイヤーが作り出した装備を探しに行ったのであった。

（さて、氷雨は何匹斃せるかしら？）

雪は街中でアンタレスのメンバーと話をしながら、氷雨のことを考えていた。

まさか、ゲームの仕様を全く使わずに戦う人間はどんな強さになるのか、という疑問に彼女は思いをはせていたのだ。

ある意味、このゲームを作った人間ですら考えないことである、古流武術でのゲームプレイ。

（楽しみ……ね！）

「ユキ殿？ どうして立ち止まっているのですか？」

「ごめんね、すぐに行くわ」

雪はいつのまにか立ち止っていたのか、ノボルに注意され初めて気がついた。

（ま、頑張りなさいよ）

雪はそう思ってから、仲間を追いつくまで走り出した。

テュートリアルで警告されるほどの難易度を誇る“北の森”。まだ、このゲームのサービスが始まって、八時間ほどしか経っていない今の状態で挑むのは無謀とされている領域で、一組だけ挑んだパーティーが居たが、結果は四分で全滅。

“北の森”を超えた先にあるとされる迷宮の攻略はおろか、森を通り抜けることすら難関とされる場所で、間違っても初心者が一人で挑むような場所ではないのであった。



氷雨は最初に持っていた1,000ギアで、上から羽織る灰色のフード付きマントを買っただけで、北の森に来ていた。

武器も無く、防具も無く、葉草などの回復薬もないゲームを舐めているとは思えないような装備である。いや、ある意味ゲームをしに来たわけではなく、習った武術を試しにきた彼にとっては、当然の装備だと言えるだろう。

「はあ……はあ……」

そんな準備など全くしていない彼の状態だったが、この“北の森”に訪れて早十分、未だ彼はゲームオーバーになっていなかった。これだけでもある意味彼は、ゲームプレイヤーの中の異常だと云えるだろう。

人が作ったとされるような道は無く、全てが緑に染まっているこの森。

危険、そうチュートリアルで言ったのも氷雨は納得できた。

自分に襲撃してくるのは強く、大きく、気高く、動物だからだ。

三百六十度周囲を常に警戒してなければ、いつゲームオーバーになってもおかしくなかった。

それにまだ彼は“一匹”も討伐していないのである。

ササッ！

今も狼をモデルとし、体色が白で全長2メートル程の動物が、モンスター後の草むらから飛びかかってきた。数は一匹。遭遇したのはこれで

三度目。

しかし、前回も前々回の遭遇時も最後には逃亡した。

それは、敵の弱点は分からず、素手の攻撃も効かず、間接も極められない相手に氷雨が苦戦していたからであつた。

そして、今回も、隙を見つけ出し何とか逃亡した。

逃げた先は木の上。

ここまでは良かった。

だが、彼に休憩できる暇などなかった。すぐに上空から鳥に似た動物が数十匹。氷雨は額にかいた冷や汗を手で拭い、足場の悪い幹の上で腰を低く構えた。

その鳥のような動物は、モンスター翼を畳み、鋭いくちばしで突き刺そうと、氷雨に向かって――落ちる。

一匹目は最小限の移動で避けていた。ただ、皮膚を浅く切つてしまったので、視界の左端に固定されているHPヒットポイントだけは、着実に減っていく。

「ちっ!!」

十匹目まではそれで攻撃を避けたのだが、十匹も来ると、急に氷雨は追い込まれた。

――ここで枝の先端まで来てしまったのである。

ピンチだった。凄くギリギリの状況だった。

だが、彼は慌てることだけはしない。

すぐに木の枝から跳躍し、下にいた狼がモデルの動物に、モンスター踵落とすを行った。既に氷雨の事を視界から外していたその動物は、上からの彼の攻撃を予測できず、頭蓋に直撃する。

ゴンッ！

鈍い音が響いたが、それだけであった。

敵はHPがあまり減らず、大したダメージには繋がっていない。

「はっ……！」

上からは鳥。

正面には狼。

それぞれに似た怪物を位置を確認した上で、氷雨は少し笑う。

ああ、楽しい、と、この絶対的状況を分かった上で、彼は笑ったのだ。

「これだよ、これ。こういうのが欲しかったんだよ！」

彼は、日常では絶対得られないような命のやり取りに興奮していた。

やっと、念願の“戦い”^{モンスター}が出来る、と。戦^やれる、と。

まだ、一匹も怪物を殺してはいない彼だったが、既に敵を一匹殺したような充実感に浸っていた。

グアアアアーーーー！！！！

だが、それに浸っている余裕など——無い。

上空の鳥の攻撃は当たる寸前で、狼も氷雨に飛び掛っている。

その二つの攻撃をそれぞれギリギリまで引き付け、転がるようにして氷雨はその場から離れた。すると、鳥のくちばしは次々と狼を貫いた。

狼は悲鳴を上げる。鳥は標的を氷雨から瀕死の狼へと変えた。

弱肉強食が、この世界の縮図だからだ。

人も亜人も怪物でさえも、弱者は強者に虐げられる。このゲームはそんな重厚な世界観で作られていたのだ。

「はあはあ……」

氷雨は疲労した体で、その場を離れた。

この数瞬の激闘は結果的に氷雨の勝利となったが、彼の力量は上がっていなかった。このゲームでは、自分もしくはパーティーメンバーが怪物を斃さないで経験値が手に入らないのである。したがって、本来貰えたはずの莫大な経験値によって起こるレベルアップが行われなかった。

ガサッ！

だが、そんな彼に、休息の時間など与えられない。

また、すぐにどこかで草が動く音が聞こえたのだった。



（今日は満足したし、そろそろ帰るか）

それから数十分、彼はずっとその森で彷徨っていた。その間、数多くの怪物と気を抜けない攻防を行っていた。

HPは少しずつ減っていたのだが、0になることはなく、氷雨は結局ゲームオーバーにはならなかった。

そしてほどよい戦いの満足感を感じていた彼は、そろそろログアウトしようと思っていた。

それはメニュー画面に搭載してあった時計を見て、夕食の時間だと知ったからである。

もし、夕食の時間に遅れたら、姉に叱られる。この折角のゲームが出来なくなるかも知れないかと、危惧した結果だった。

「メニュー、オン」

そうして、テュートリアルの説明にもあったメニューを開けると、目の前に透明の液晶が現れた。その中にはログアウトのボタンがあり、氷雨はそれをタッチした。

また、あの意識が消失する感覚がくる。

こうして、彼の初日のゲームプレイは終わった。

これが最後のゲーム——とは知らずに。

今回の氷雨の討伐数0。——未だ、力量^{レベル}1。

第五話 リアルとバーチャル

夢から覚める。

氷雨の現在の感覚だった。少し前までの程よい殺気と適度な戦闘の後だったので目など開けず、ずっと、ずっと、その感覚に包まれていたかった。

「おいおい、これ……なんだよ……っ！」

「お、俺、ログアウト……したよな？ おかしいだろ、これっ!？」

「お前ら、何者なんだよっ!？ 管理者か？」

だが、そんなわけにはいかない。

傍らから聞こえるのはしよぼくれた祖父の声ではなく、凜とした姉の声でもなかったからだ。声質は上がり、次々と湧き出る情けない言葉。

(チツ、黙れよ)

氷雨はまだ目を開けず、言葉の主をそう思った。“今”の自分がどんな体勢でどんな場所にいるかなど、些細な事だと考えていたからで、悲鳴を雑音のコーラスだと判断したのである。

彼は興が削がれたような煩わしい気持ちで、視界に光を受け入れた。

(……あれ?)

彼は首をかしげた。

そこにはざっと見て、五十人は存在するだろう。

氷雨を中心とした手を縄で縛られた数十人の人間に、剣を持って囲う数人の戦士。戦士の眼は鋭くギラついており、常人の目じゃない。幾戦の死闘を渡ってきた“武芸者”の、眼であった。

その様子を見て人一倍察しの悪い氷雨は、欠伸を一つ。

彼の思考は表面的には機能しているが、実際は寝ぼけが半分ほど混じっており殆ど働いていない。阿鼻叫喚を響かせるこの領域で、ただ一人彼だけが慟哭せずに、楽観していたのだ。

——慌ててるなあ、と。

(ふう、腹減ったな)

と、お腹がぐーと鳴った時、氷雨はとある違和感に引かなかった。お腹が空いたのだ。否、それだけではない。

もし、ゲームの世界ならここまでお腹の動きを再現率が低いはずなのに、今は腹の全てが“完璧”に動く。腹筋や背筋も、だ。ゲームの世界では無かった筈の稼動率である。それは、現実と体^{リアル}全ての動きがなんの遜色もなかった事を意味する。

「聞いてんのかよ？ 俺達のロープを解いてくれよ！」

「そうだそうだ。ここはどこなんだよ？」

氷雨同様、縄で後ろに固定された人間が、周りの剣士達に声をかけた。その剣士以外の誰もが、初心者用の装備である同じ型の布の服である。氷雨だけはその布の服の上に、安っぽいマントを一枚着ていたが、それはお世辞にも防具とはいえない薄いものだ。

初心者服は同じで、その上から防具や武器を身に付けたり、お

金に余裕が出来たら布の服もより高価な物に買い返られるというシステムが“ダンジョン・セルボニス”というゲームだ。

その説明を氷雨は覚えていた。

とすると、ここはゲームの世界で、周りの人間は自分と同じゲームの世界の人間——つまり、ゲームプレイヤーと考えた。

しかし、氷雨はこの推測に自信を持って答えられない。なぜなら、ここがゲームの世界ならば、この腹の動きが感じられないからである。

——ゆえに、現実リアルと仮想現実バーチャルという二つの概念が、氷雨の中で激突した。どちらとしてもおかしくはない。どちらとしても納得は出来る。

でも、どちらと納得をしても、違和感だけが残った。

現実リアルならば、自分がいるのは家のはずだ。今頃、実の姉と実の祖父と一緒に住んでいる家の畳の上にいる。こんな丸裸の土の上で座っているなど有り得ない。

ならば仮想現実バーチャルとすると、自分はある危険な怪物モンスターが多く出現する“北の森”にいるだろう。怪物ではなく、人が何十人もいるなど考えられない。

それにHPの値も視界に無かったし、メニュー画面も現れなかった。

氷雨は少ない脳を絞って思い出す。

自分は確かにログアウトした、と。その時、ログアウト以外のボタンは触らなかった、と

他に情報はないかと探すが見つからない。手詰まりであった。そんな風に、無言で思考を巡らせていると、——突如、声が鳴っ

た。

「皆さん、聞こえますか？ 君達是我々の“奴隸”となったのです！」

ゲームプレイヤーであろう人の、質問に答えるかのように、遠くの壇上に立っていた煌びやかな貴族風の豪華な衣装の男が高らかに言う。

残酷な内容を、あっさりと。

これに全員が声を失った。

皆が、誰もが、理解したくないのだ。

その単語の意味も分かる。その言葉も通じてる。ゆっくりと、頭の中で何度も何度も何度も確認をする。

そして、ぐっと——飲み込んだ。

「ふざけんな！」

「私達を家に帰して！」

「開発者はどこにいるんだ！！！」

ここにいる原因は不明だが、“弱者”に落ちた、と。それはゲームプレイヤー達は分かっていた。

しかし、それぞれが無駄だと言わず、口々に反論した。

——納得できないのだ。

奴隸という身分に。もし、勇者や英雄としてなら、もっと高貴な立場なら、こんなに反抗はしていなかったかもしれない。

「――黙らせなさい」

けれども、その行動が逆効果だった。

“上”の人間が、“下々”の人間の戯言などに付き合う暇は、どこの世界でも無いものだ。“上”の人間は、常に自分の事を優先させるからである。

「はい、カナヒト様……」

剣士の一人は、貴族風の男の命令に従い、腰にあった剣を――抜いた。

意味は子供でも分かるはずだ。

沈黙を要求するのに、最も簡単でこの上なく早い方法は恐怖で相手を縛る。これが最も早く、ある意味単純な方法だ。

「あ……あ……」

それは誰かの嘆きだった。

剣士は別に誰でもよかったのであろう。

男でも、女でも、老人でも、中年でも、若者でも、子供でも、脅しつけるのは誰でも。

そして――剣を振るった。

それは一番近くに居た男の太ももに当たり、線が走る。血は勢よく飛び出た。次に出たのは斬られた男の声にならない悲痛。彼が悲鳴を上げなかったのは、今度声を出すと殺されるととっさに思ったのだ。

男の、いい判断であった。

これに、誰もが静かに冷静を失う。

ゲームの仕様では怪我などせず、怪物の攻撃でも痛み一つ感じない。ただ、HPが減るだけ。

だが、今の状況は違う。

斬られたら傷を負うと、斬られたら痛いという、人間として当たり前の感情が蘇るのだ。

だが、誰もそれを口には出せなかった。

恐怖という針金が、全身を強く縛っているという感覚が、心に染み込まれたからだ。獅子が鞭に怯え芸をするように、溺れた人が水を怯えるように、殺されるかもしれないという“最悪”の予測が、脳裏に染みついた。

それが――悲しい現状だった。

「ふふっ、何度見てもこれは飽きませんね。素晴らしいです」

貴族風の男は円になっている自分の静かな“所有物”を見て、嗤う。

これ等を生かすも殺すも自分の自由という愉悦に浸り、また多くの財が手に入ると嗤ったのだ。

やはり、“上”はいいとも男は思った。

一方的に、下から搾取し続ける権利があるからだ。

同時に、“下”にはなりたくないとも思う。

どの権利が無いからだ。生かさず殺さず働き続け、使い捨てのようにならなくていい。ただ、それだけの存在にはなりたくなかった。

「あーはっはっはっは！！！！！！！」

男はまた、嗤う。

プレイヤーの中には反乱を起こしたいと思う者も居たが、手が縛

られたままでは、無駄死になるしかない。

ぐっ、と唇を噛み締め、辛い未来に、堪えるしかないのだ。
そう達観していた。諦めた、と云ってもよかった。

(……)

——けれどたった一人——例外がここにいた。
多数の怖さに震える人間が存在する中。仮想現実バーチャルじゃない現実リアルに、
より喜び、より愉悦し、より感動し、震えていた人間がいたのだ。
萎えた感情も蘇り、下を向いた座った状態で、

最初に、ゴキッ、誰にも聞こえぬよう、手首の間接を抜くように
無理やり外した。関節が外れて縄が緩むと、両手を拘束から外した。
次に、ゴキッ、と誰にも聞こえぬよう今度は関節を無理矢理入れ
た。手のひらを地面につき、全体重を片手にかけるような感じで、
一個ずつ両手の関節を入れたのだ。
そんな彼には、現実リアルという心地よい激痛が走り、貌に笑みが宿っ
た。

最後に、ポキッ、と誰にも聞こえぬよう座ったままで、全身の骨
を満遍なく動かした。

首も。

肩も。

腹も。

足も。

全ての動きは、正常であった。どれも十全に動かせる。

これで、彼はいつでも“衝動”を解き放つことができる。

——戦闘という、衝動を。

自分の状況の見当などさっぱりであったが、一つ分かるのはあの貴族や剣士は悪者なので、殴ってもいいとの事。

初めての人相手という“戦い”が、彼を怪物相手の時よりも興奮させたのだ。

——さあ、と。

第六話 初戦

カナヒトが多くのゲームプレイヤーを見て、嗤っている最中、

「ははっ——」

彼も嗤った。

顔を伏せ、口角を上げ、座ったまま。手は後ろにあるままで、見た目の変化は何も分からなかった。

だが、会場は静かさに染まる。

異常だからだ。

草食獣が、肉食獣に笑いかけるように、下の者が上の者を貶すように。本来ならありえない現象だったからだ。そのため、周りのゲームプレイヤーも、剣士も、貴族風の男でさえも、その嗤った人物を信じられないような目で見た。

「——ああーおもしれえ。非常におもしれえよ——」

見知らぬ人物に語るようなその声は、静かな広場に響き渡る。

この時、誰もが彼を注目した。

そこは異様な静けさだった。風も、木の葉が掠るような音も、息でさえ、大きいと思えるほど静かだった。

「——さあ、戦^やろうぜ」

彼が脈絡もなく、そのなんの変哲もない顔を上げた。それは歓喜に染まり、快感に溺れ、快楽を求めるような貌だった。

彼の貌は——獣の貌だったのだ。

戦いに餓え、血に餓え、勝利に餓えていた現実^{リアル}。

貴族風の男は、彼が勝手に決めた悪人である。ならば、我慢しくていい。誰に拳をぶつけても構わないという考えになる。

そんな風に、免罪符を得たような気がした。

と、同時にこれが彼の“本性”であった。

危機的状況では、その者の剥き出しにされた心が見えるという。ならば、この“戦いたい”という欲求が、彼の全てなのだろう。

「なっ、なにがっ！　なにがおかしいんですっ！　誰でもいいのであいつを黙らせてくださいっ！」

当然、狂ったような事を言い出す彼に、貴族風の男はうろたえた。

——訳が分からない、と。そして、すぐにその気持ち悪い貌をトドメをさすよう剣士に命令する。

ゲームプレイヤーで出来た円の真ん中より少し外れた彼に、囲んでる十人の内の一番近い剣士が近づく。座っている彼に、命令どおり、剣を——抜いた。

「はっ！？」

それは一瞬の出来事である。

誰もが予想にしていなかった“結果”だった。

彼が、“氷雨”が、立ち飛ぶように剣を避けたのだ。

縄が無く、全身が自由になっている彼の姿を見て、貴族風の男をはじめ様々な人間が驚愕に染まった。

「ふふっ、どんなトリックを使ったかは知りませんが、問題ありません。——たかが、力量^{レベル}1です。この中の底辺の中の底辺です。“

雑魚”は蹴散らしなさい！」

貴族風の男は慌てはしたが、取り乱しはしなかった。

氷雨が、力量^{レベル}が1だからである。この世界では、生まれて15程度の人間ならば必ずしも2以上は持っている。それがどんな職業でも、だ。稀に体が病弱な場合などに限り、1というケースもあるが稀は稀だ。滅多にない。

それは男が奴隷にしたがっているゲームプレイヤー何十人も同じだ。彼等の力量^{レベル}は平均5。最高は12で、最低が彼の1。彼だけが力量^{レベル}1のため、貴族風の男は氷雨の顔をよく覚えていた。

力量^{レベル}だけに意識をいき、彼を雑魚を決め付け、その鍛えられた肉体は気にも止めなかった。

その力量^{レベル}絶対主義は、剣士にしても同じである。力量^{レベル}のみを気にし、30程度を彷徨っている剣士たちにとって、己の十分の一以下などが反抗するなど、万死に値すると思った。

「死ねっ！」

だから、その剣士は己の頭で彼の強さについてなにも考えず、今度は横に薙ぎ払った。

彼はそれを潜るように避け、剣士の体制を崩す為だけに、拳を剥き出しの顎に一発。予想外の一撃に、体を揺らしながら戸惑う剣士。

「まっ、死ねや」

その後、彼は剣を持っていた右手を、引くように自分の元へ引き寄せる。その向かってくる相手の顔を両手でしっかりと、抱きかかえるように掴んだ。

ポキッ！

そして、首を掴んだまま、前転のように剣士の向こう側まで飛んで、曲がらない方向まで首を曲げた。

男は、天を見上げるような顔の位置のまま頸椎が圧迫される。そして、今折れ曲がった首に、今度は振り返った勢いのある裏拳が炸裂する。上を向いたまま首を横にしたおかげで、完全に気道などを閉じられ、――絶命した。

首の骨の音が折れる音は、呆気なく鳴ったのだった。

男は白目を向き、涎は口から溢れ出た。その姿は、かの有名な武蔵坊弁慶の立ち往生に非常に似ていた。

「鳴……呼……」

友の変わり果てた痛々しい姿を見て、仲間の剣士が嘆く。
それほどまでに、死んだ兵士は痛々しい姿だった。

「おいおい、あいつ正気かよ！ オレは……大丈夫だよ……な？」

「いや、これは夢だな。そうだ。そうに違いない」

「キャアアアア……！！！！！！！！」

一方、ゲームプレイヤー達も始めて目にした“人殺し”の光景に戦慄を覚える。

ある者は氷雨に恐怖を見た。

ある者は現実逃避をした。

ある者は耐え切れなくなった恐怖に悲鳴をあげた。

この広場は一気に騒がしくなる。これまで亀裂が入りながらもなんとか決壊を逃れていたのが、“殺人”というきっかけにより、ゲームプレイヤーという集団のパニックを引き起こしたのである。

縄で手を縛られているため、立つことしか出来ない彼ら。

だが、もう一つ剣によって動いたら殺されるという針金が、彼らを縛っていた。だから立ったまま彼らは足踏みだけをして、動けずに居たのであった。

（以外だな。まあいいか。さて、あいつは弱ますかったのだが、この中で誰が一番強うまいんだろ？）

そんな中、初体験した人殺しに氷雨は、罪悪感を微塵も感じなかった。

気持ち悪くなる、と本や漫画ではよく書いてあったが、そんな気持ちは湧いてこない。むしろ、早く次がしたい、という感情が強かった。

そんな氷雨は人間として最低ながらも、次の獲物を探す。

まるで血の味を初めて覚えた獣と、同じ行動だった。

きよろきよろと彼は辺りを見回す。

六角形の壁によって閉ざされているこの広場。出口は二つ。その両方が脇を屈強な槍を持った兵士で固めており、彼らも強そうであった。

だが、彼の脳は“より”強い獲物を見つけ出す。

そして、見たのは貴族風の男。

正確には貴族風の男の護衛である二人の剣士を見ていたが、この場の全員が“にたあ”と嗤った氷雨の顔が貴族風の男に向けられたと思った。

トスツトスツ！

一歩ずつ一歩ずつ噛み締めるように大地を踏め締めながら、氷雨は標的に向かって歩みを進めた。

それに、ゲームプレイヤーは皆、道をあけた。

殺されたくない、という一心からだ。今の氷雨は、見るだけで怖くなるほど、殺気立っていたのだった。

目が合ったら殺される、そう思ったほどだ。

「皆さんッ！ あいつを殺したら特別ボーナスをあげますっ！」

そんなモーゼの海割りを垣間見て貴族風の男は、“にたあ”と嗤った氷雨の殺意に、顔を蒼白にし怯え、奴隷なんかよりも自分の身を守ることを考えた。剣士がこれだけいたら勝てる、と男は思ったのだろう。

剣士は特別ボーナス、という輝きの持つ言葉に引かれ、氷雨に近づいた。氷雨を囲んでいたゲームプレイヤーも剣士から離れた。これにより、氷雨、貴族風の男、剣士の間に人は無くなったのであった。



（やった！ これで死中に活ありだ！）

その頃、混乱の中でゲームプレイヤーの一人が――動き出した。順調に進めていたゲームからログアウトすると、仲間の雲林院や雛形と共に氷雨と同じようにこの場所に居た。

彼こと、久遠光は仲間を助けたかった。だが、迂闊な行動に走ると死ぬ、というのがあの剣士の行動で分かり、助けたいのに助けられないと、非常に齒がゆい思いをしていた。

だが、そんな彼に好機が訪れたのだ。

氷雨が剣士の一人を殺し、彼が敵の目を全員引き付けていたからである。

久遠はばれないように殺された剣士に近づき、そっと足元に落ちていた剣で、後ろに縛られた縄を切ったのだ。

あいにくそれは、ゲームプレイヤーも、剣士も、カナヒトも、氷雨を注目していたので誰にもばれなかった。

「静かにして……」

「はい！」

「ええ！」

その剣をこっそりと持ち、久遠は仲間の雲林院と雛形の縄を切った。彼女らの頬は、久遠という王子様に助けられたことにより、ほんのり朱色に染まっている。だが、そんなのを久遠は気づいていなかった。

久遠はその後、騒ぎにならないように、近くのゲームプレイヤーの縄を切っていくことになる。

——そして、これが次なる“混沌”を招く。

第七話 混戦（前書き）

読者の皆様、変わらない応援ありがとうございます。
これからも頑張るので、気軽な感想などをよろしくお願いしますね。

第七話 混戦

（一発か……）

氷雨はカナヒトへと歩きながら、体の調子を確認していた。

体に異常があったのは両手で、やはり、関節を無理やり外し、無理やり嵌めたので痛い。

右手に殴れないほどの激痛は無いが、左手は使えそうにない。先程の裏拳により、手首から先の感覚がもう無いのである。

そう考えると、右手も一度しか使えなかった。一度だけ使った左手の感覚が無くなったことを考えると。

残り一発の弾丸で、十人以上の戦士を斃さなければならないのだ。

だが、この絶体絶命の苦境に——より彼は燃えた。

目を滾らせ、手が駄目でも足があると。

そう考えると、剣が峰に立っていたとしても、貴族風の男の隣にいる剣士へ氷雨は全速力で——走れた。

「旦那様のために死ねっ！」

彼が地を駆けると、右からすぐに邪魔者が飛んできた。

氷雨は斬り下がる剣を一步下がって避け、剣を掴んでいる両手を蹴る。武器が無くなり剣士を無力化できたので、氷雨はそれ以上の剣士に攻撃しない。

彼の目に映ってるのが、弱い剣士ではなく強い剣士だからであった。

「……」

今度の剣士は、無言で突いてきた。前の男は声を出して攻撃したから氷雨に気づかれた、と思ったためである。

彼はそんな攻撃を上^かに飛んで^{かわ}躲す。

そのまま遠慮なく蹴り、剣士の男を沈めた。頭への、上段蹴りであった。兜の上から遠慮なく蹴ったため、足に痛みが奔るが、両手の激痛に比べるとなんてことはない。

氷雨は足の痛みなど気にせず、また狙いの男に向かう。

「はあっ！」

「ひゅっ！」

次は二人同時に、氷雨へと切りかかった。

その二人の頭に、氷雨の力量が低いという意識は既^{レベル}にない。これまで、三人も楽に斃せた彼を強敵だと認識し、油断は微塵もなかった。

だが、それも氷雨には通じない。

二人が攻撃する瞬間、一度だけ止まり、また走り出したのだ。そのためタイミングを外された兵士たちの剣は、宙を斬った。彼等の攻撃は不発に終わったのだった。

「皆、立ち上がれっ！ 僕たちの自由を手に入れるんだっ！！」

と、そんな時だった。

久遠が剣を頭上に掲げたのは。

とがらせた金髪に、端正な目鼻立ち。掲げた剣が太陽によって輝き、後光が差しているかのような光彩がそこにはある。

殆どの人間が、怪しいと思えるほどの魅力的を持つ彼に目を向けた。その時、時間が止まったと感じる者までいた。

「――全員で協力したら、数で対抗したら、どんな強敵にも勝てないことはないっ！ 僕たちの正義は、正義は必ず勝つんだ！！」

久遠は、自分達を正義だと決め付けている。

縄で自分たちを縛り、仲間の雲林院や雛形を危険な目に遭わせた彼等。それだけで、久遠の中では剣士他大勢を、何らかの理由がある可能性があることも考えず、悪だと決定していた。

まあ、当然カナヒトたちは悪なのだが。

これとは反対に、カナヒトは次なる危機を覚えた。

あの青年が居る限り、奴隷の反乱は簡単には沈静しない。圧倒的な武力により謀反を止め、反乱分子の根絶やしによって、初めて沈静したと言えるのだ。

これは反乱を起こす前に、奴隷たちを静めなければ自分の命が危うい、と貴族風の男は思ったのだった。

「奴隷達をっ！ 奴隷達を静めなさいっ！ “雑魚”は私の護衛がなんとかしますっ！ 先に奴隷をっ！」

だから、心から男は叫んだ。

それは、悲痛の叫びと云えるだろう。

「オレ達でもできるよなっ！」

「ああ、だってこんなファンタジーな事滅多にないぜ？」

「正義は私たちにあるもんねっ！ 奴隷なんて制度を使う彼らが悪者っ！」

だが、時すでに遅し。

奴隷ならぬゲームプレイヤー達の士気は上昇していた。それは、上限を知らなかった。

久遠の剣によって縄が解かれた十人は、それぞれが刃物も使わず別のゲームプレイヤーの拘束を外す。自由になったゲームプレイヤーねずみさんは鼠算のように増えていった。

それらは武器を持っていないとしても、力量レベルが低いとしても剣士達には脅威である。

——数が多いからだ。

数はそのまま力になる。かの有名なナポレオンは、数の利を生かして幾つもの大局に勝ったのであった。

それに士気の高さも、そのまま力に繋がる。

士気が限りなく上昇した者が、死に恐れなくなるからだ。恐怖を失った者は、捨て身の攻撃を何度も行う。捨て身などは、当たり前前に。

ゲームプレイヤー達は久遠の言葉によって士気が上がり、そんな——勝てれば死んでもいい、という異様な空気に包まれていた。

「ぐっ！」

剣士達は、そんな“空気”にたじろいだ。

それは剣士たちの圧倒的有利な状態が終わったからで、ここからは血みどろの勝つか負けるかの争いだからだ。

勝者が全てを得て、敗者が全てを失う——そんな戦いだ。

この戦い、分だけ見れば、おそらくゲームプレイヤーの方が高いだろう。

いかに剣士たちの力量が^{レベル}高いとしても、それが有利になるのは一対一の場合だ。一騎当千の実力がない限り、人対人であれば4〜5人で囲んでしまえばまず負けることが無い。

——人海戦術が、戦場では一番強いからである。

そして五十人ほどのゲームプレイヤーは久遠を一番前とし、集まっていた。一方、十人程度の剣士も氷雨に軽く倒された者も含め、集まっていた。

それぞれが、心を激しく滾らせながら。

「皆、一人ずつ囲んで武器を奪え！ 武器を手に入れたらこっちのもんだ！ 勝つためには恐れるな！ 正義は僕達にある！ ——勝利の女神は僕たちについてるっ！！」

「おおおおおおおおおおおおおおお！！！」

久遠の咆哮と共に始広まったのは——勝利への応援歌。

「勝つぞ！ 負ければ死だ！！ 全員齒を食いしばれっ！！！」

「うおおおおおおおおおおお！！！」

その反対に、一人の剣士の雄叫び^{おたけび}から始まったのは——制圧への

序奏曲。

二つの軍団は、まもなくぶつかるのであった。



「――ははっ、やっとだな」

そんなゲームプレイヤーと剣士による激戦の少し前、氷雨も貴族風の男とその護衛の剣士の元に来ていた。

護衛の剣士は貴族風の男の前に出て、氷雨と睨み合う。

「お前の強さの理由は分からない。興味も無い。――だが、我輩をこれまでの者と一緒にするなよ？」

剣士は言った。

自分の実力はこの中で一番上だ、と。

そんな男の力量は40^{レベル}。氷雨は知りなどしないが、それはやはりこの上で一番上であった。

「――けっ、上等だ」

氷雨は腰を低くして、半身になる。左足を前に出し、右手を腰元に、構えていた。

彼は戦いに、ぶるっと震える。

――武者ぶるいであった。

戦えることに歓喜し、強者と巡り合えたことに感謝し、興奮に痺れた体に支配された、彼だけの戦闘準備であった。

「――ふんっ、減らず口が言えるのも今の間だけだ」

反対に、護衛の剣士は、腰の剣を抜いた。

太陽の光が鈍く光る剣。それは魅せるために作られたわけではなく、儀式のために作られたわけではなく、ただ――人を殺すために作られた剣だ。

ゆえか、怪しい魅力があった。

鈍色に輝くその剣には、人の目を引きつけて止まない怪しい魅力があった。

「早く、早く雑魚を殺してしまいなさいっ！」

そして、この二人の戦いは、貴族風の男の罵声をきっかけに始まったのだった。

第八話 終戦

「うおおおおおー！！！！！！」

「

ゲームプレイヤー達は勇ましく雄叫びおたけを上げ、死ぬという恐怖を
取り除いた。

そこにまともな思考判断などない。

作戦ともいえない久遠の作戦に従い、各々が剣士に向かって突進して行くのである。

その先頭は久遠であつた。

自らが旗揚げした烏合の衆を率いるためだ。ばらばらな集団を一つにするには共通の目的を持たすことが最も早い。

だが、旗揚げした本人が率先して戦わなければ、その効果は薄いのだ。それを本能で理解している久遠は、仲間を守るという強い意思のもと、最初に走り出したのであった。

「はあっ！」

久遠は一番近い敵に、持った剣をがむしやらに振り落とした。

武術の素養などない彼は、どのフォームが最も効率よく敵にダメージを与えるか分からないため無茶苦茶な素人の振りとなつたのであった。

そんなでたらめな攻撃は、やはり剣士に簡単に防がれた。

当然だろう。

どこに落とすかフェイントも全くない攻撃なのだ。むしろ防がなければ、剣士はこれまで何を習っていったのかという疑問さえ出る。

「弱い奴がオレ達に逆らうなっ！」

剣士は嘲笑った。

ぶつかり合った二つの剣は何度もぶつかり合う。

押されているのは久遠だった。秀でた反射神経だけで、何とか攻撃を防いでいるが、後ろに下がりながら逃げているだけでまず敵わないだろう。久遠もできるかぎり粘ってはいるが、いずれ負ける。これもこの“世界”では当たり前であった。

「はっ！」

だが、本来なら当たり前に勝てるはずだった剣士は、負ける羽目となる。

まず、ゲームプレイヤーの誰かが、血気盛んに突撃した。剣士は久遠のみに注意を向けていたので、体と体はぶつかりあった。そのおかげで一瞬の隙が剣士にできる。

久遠はそこを狙った。

その瞬間剣士の剣を、自分の剣で塞ぎこむ。聞こえはいいだろうが、実際は剣を剣士の剣に押し付けているだけだ。

凶器の危険を少なくすることによって、素手のゲームプレイヤー達を活かそうとしたのだ。

「やれえ！！！」

「今だあ！！！」

「オレ達が……オレ達が勝つんだあ！！！」

そしてその魂胆が分かった彼らは、久遠と同じように隣から何人

も何人もやってきて、剣士の動きを封じ込んだ。

彼らの封じ込め方は、右足、左足、右腕、左腕を、それぞれ一人ずつ全身で止める。こうなれば、幾ら筋力があるうとゲームプレイヤーに抑えられない道理は無い。

所詮、どれだけ力量^{レベル}が高かろうと、剣士も人間なのだ。

筋力差はあるが、それはあくまで人間範囲でのこと。

もし、彼等が別の“人種”なら、結果は違っただろうが、同じ人間ならばそう大きな差は出ない。

氷雨だって、この人数に抑えられれば攻撃できない。それは彼もやはり人間であるからだ。

だが、彼ならきつと、その抑えられる前に、――斃す。だから、先程の数人の剣士との戦いを退けられた。

集団戦では――力を抑えられる形になればもう“終わり”なのだ。

「うわっ!? 止めろ! 離せ!」

その封じられた後の剣士は無残であった。

いくら力量差^{レベル}があっても、大群には勝てないからだ。武器を奪われ、剣士は成すすべも数人に攻められた。ある者は馬乗りになり、ある者は手足を抑え、またある者は地味に鎧のない部分を蹴ったりと、そこに遠慮はなくリンチに近い。

彼等は“正義”という美酒に酔い、そこに罪悪感は全くないのであった。

そんな風に、次々と彼等は剣士を大勢で蹂躪して行く。

誰かが決死の思いで剣士に突撃し、一瞬動きを抑えて他の者が次々と襲い掛かる。中にはゲームプレイヤーの中には、その突撃で大怪我を負った者も居た。だが、ゲームプレイヤーは止まらなかった。

崩壊したダムから流れる水のように、逆に勢いは増えていく。

卑怯、と剣士達は思っただろう。

ゲームプレイヤーのまともに戦わない戦法に。

だが、それを声を出す者は剣士の中に居なかった。

自分達も気が失っていたゲームプレイヤーをここまで連れて来たのだから……。

その数十分後、この場の主導権は逆転していた。



一方、氷雨はの中で最強の剣士相手に苦戦していた。
攻めきれないのだ。

剣というリーチ差が氷雨を不利にしていたのである。

「チッ！」

氷雨は迫り来る剣を、バックステップで避けた。

それを追うように、剣士はまた剣を薙ぎ払った。氷雨はそれをくぐる様に躲し、自分の間合いに近づこうとするが、剣士は氷雨が懐に入る寸前に後ろに下がる。

「けっ！」

「はっ！」

氷雨は男の剣を強引に潜り、顎を狙い右の拳を突き立てる。が、

男は氷雨の腹を蹴って、そのアッパーを躲した。

護衛の男は“お綺麗な騎士剣術”ではなく、戦いの中で築きあげた“自己流の剣術”で戦っている。それが何よりも、氷雨にとっては厄介だった。

「……！」

「しつこいっ！」

氷雨は剣士の傍に張り付いていながら、上手く攻撃できないでいた。

——隙がないのだ。

彼は剣士の攻撃を縫って、さらに防具の隙間を狙わなければいけない。そんな“大きな隙”を、この剣士は作ってくれないのだ。

なので、こんな状況が繰り返される氷雨は、防戦一方であった。

まず、氷雨には武器のリーチが足りない。70センチはあるかと思われる剣と腕の長さで足なら確実に足のほうが短く、リーチは短ければその分不利になる。

それに、防具の差も大きかった。防具で覆われている部分の多くに、氷雨の蹴り技は通用しないからである。体のどこを狙われても致命傷になる氷雨と、鎧のない部分しか致命傷にならない剣士。

速さは氷雨、後の基礎能力は剣士が勝っているだろう。

だから、氷雨は全ての攻撃を避けている。一瞬でも隙を見せれば、たちまち鋭い刃を体に浴び、死を免れないと本能で分かっているからだ。

だが、このままでは永久に決着はつかない。

両者ともそう思っていた。

「――終わりだ！」

――先に動いたのは剣士であった。

この状況を変えようと、剣士は数メートル近く氷雨と離れたのだ。剣士はそこで剣を構え、縦に振った。

（なんだ？　これに何の意味がある？）

氷雨は、この行動に最初は疑問しか持たなかった。

むしろ、休憩できるいい時間だと思った。

だが、この判断は失敗であった。

ブーン！

鋭い風切り音が鳴った剣からは、透明のガラスのような三日月状の“何か”が出た。

その瞬間、彼の野生の勘が働いたのか、“何か”が出ると同時に動き出していた。体を毛を逆立たせて、その場から脱兎のごとく離れたのである。

しかし、その行動は、もう遅かった。

三日月状のそれは時速150キロ位出っていて、氷雨が完全に避ける前に、彼の左肩の皮膚を掠り、肉を抉る。血が舞った。

この強い痛みが、彼の思考を混乱させる。

こんな攻撃は今まで見たことが無いのだ。

氷雨の目は大きく見開き、誰が見ても驚愕していたように見えた。

「はっ、その様子だと剣技スキルの一つ、『飛斬』も知らないのか？」

挑発するように剣士は言う。

だが、剣技スキルという言葉に心あたりのない氷雨は、まだ困惑している。

この剣士は、わざわざ自分の技の理屈を言うような馬鹿やお人よしではない。

無言で、その場から、『飛斬』を放つ。

いくつも、いくつも。

時には縦に、時には横に、時には斜めに、剣士はその場から動かず、縦横無尽に剣を振る。

剣からは幾つもの三日月状の“何か”が出た。

(スキル? どこかで聞いたような……)

氷雨はその迫ってくる『飛斬』を全て避けきる。

縦のは右に、横のは跳んで、その全てを躲しながら、彼は頭を回していた。だが、頭には靄がかかっており、スキルというのが中々出てこない。

血を土の上に垂らしながら、余計に氷雨の戦況は過酷になっていった。なぜならこちらは相手に近づけず、相手は離れた所から攻撃できるからだ。

(クソッ、頭がぼーとしてきた)

そして、肩から流れ出る血が、より彼を不利にさせていった。血を失えば、正常な判断力を失うからだ。

『飛斬』を避ければ避けるほど、氷雨は集中力と体力を失っていく。

故に、動きが鈍り、先程まで躲していた筈の『飛斬』を受け、肌

に一つずつ掠り傷をつけていった。

氷雨は攻められないわけではない。

死ぬ可能性はある神風特攻のような攻撃なら、いつでもできる。

だが、その結果は悲惨なものだろうもし、上手いこと賭けに勝ち、相手に勝てることになっても、自分が死ぬ恐れがある。

それだけは避けたかった。

やっと、こんな世界に來れたのだ。どうせ帰るなら、この世界を堪能してから帰りたいかった。

「クソッ！ クソッ……」

彼は攻撃を避けながら朦朧としてきた視界で、必死に探す。飛び道具を。石でもなんでもいい。固いものなら。投げられるものなら。

だが、そう容易くは見つからなかった。

やはり、世の中は非常なものだ。

そう自分に都合よく出来ていない。

氷雨は一発使えもしない左手で、自分の顔を殴った。

大して痛くもない。

だが、活を入った。たかだか、この程度の出血でなんだ。たかだか、この程度の怪我でなんだ。たかだか、この程度の不利でなんだ、と。

勝たなければ、と思う。

もっと、このゲームよりスリルな興奮を味わいたいからだ。

『飛斬』を避けながら、氷雨はマントの端を破り、大きな怪我の左肩を無理矢理止血する。

血の流れは、殆ど布の動きで止まった。

もう一度覚悟を決める。

勝て、負けるな死ぬな、と。

「はあはあ、お前ももう少しで終わりだな。最後は我輩の剣で直接降してやる！」

そして、有利な剣士の息は、――既に切れかけていた。

この時、氷雨の脳裏にある“可能性”が浮かんだ。

もう『飛斬』は出せないという可能性だ。もし、無尽蔵に『飛斬』を出せるなら自分なら使ってる。相手が傷つき、倒れるまで使ってる。

ならばもしあの技に制限があって、もう『飛斬』を使えないなら、近づけると氷雨は思った。

近づけたらいくらでも斃す手立てはある。

氷雨のその考えは、間違っ**スキル**てはいなかった。男が覚えて**スキル**いる技を発動するのに、体力の消耗が必要不可欠だからだ。技の発動時、体力が一定以下の使用は、満足に発動しない場合や発動してもそのまま気絶する場合がある。

“冒険者”なら大体の技に、体力の消耗など常識であるが、冒険者ではない氷雨は**スキル**もちろんその常識を知らない。

もちろん、男はそれを知っていたため、これ以上の『飛斬』の使用はしなかった。傷ついた獣ならば狩るのは簡単だと思っていたからだ。

「けっ、やってやる。やってやるんだ。勝つんだ、よ。俺はな……！！」

氷雨は疲れなどを隠して、高くいきり立った。

だから、一か八か体に最後の活を入れ、腰を低くした。近づいてくる敵に、いつでも駆け出せるための準備である。

彼の頭は、大量のアドレナリンの出すぎで正常ならば機能する痛覚さえ失っていた。

ゆえに、いつもより、不思議と体が軽かった。

「――勝つのは俺だ……!!」

[illegible]

氷雨は弱弱しく、剣士は荒々しく吼えた。

お互いとも、既に体は限界である。

いや、剣士は限界を超えてないが、氷雨は限界を超えている。左腕の損傷はかなり酷く、左腕自体の感覚がもう——無い。

ダンッ！

二人はほぼ同時に地を蹴る。

そんな二人が激突するまで、時間にして十秒もないだろう。しかし、貴族風の男にはもっと永く見えた。

そして、氷雨に近づいた男は、ぎりぎりの剣が届く距離を見切つて、剣を右から左に振った。

「なっ!？」

男は、灰色のマントで咄嗟に脱いで避けた氷雨に驚いた。

劍にまわりついたマントのおかげで、氷雨の姿が消えた。かのようにだった。そして、男が目を逸らした隙に、氷雨は自分の得意距離である数十センチに移動した。

だが、氷雨も無傷ではない。避けたように思われた剣は腹の皮を一枚分切っており、そこから血が少しずつあふれ出る。

彼は腰の位置に構えた右の拳を、指を広げて四本の指を綺麗に揃えた。

男はこの時、少しだけ安心した。この世界では、“貫き手”などという技術がないからである。だからその危険性に、溢れんばかりの氷雨の殺気に、気付かなかった。

「——まっ、死ねや」

彼は揃えた四本の指で、男の剥き出しな喉を狙う。

喉に指は深く突き刺さり、男は少ししてから——死んだ。それは「うっ……あ……」と、最後の言葉を残した剣士からも分かる。

そして、勢いよく抜いた彼の右手には、自分ではない赤い血が滴っていた。ぽとぽと、と地面に流れ落ちるのが、氷雨にもわかる。

「はあはあ……」

彼は体がぼろぼろな状態でも、十分なほどの満足感を味わっていた。それは緩んだ彼の顔からも分かる。

「やったぜ！」

だが、近くから聞こえるゲームプレイヤーの歓声のおかげで、その感覚に浸っているのもほんの数秒ほどだった。



「やったぜ！」

「正義はやっぱり勝つんだ！」

「リーダー俺たちを率いてくれてありがとう！」

ゲームプレイヤーが剣士達を完全に制圧した。

この動きにそう時間はかからないのであった。

彼等がぼこぼこにした剣士は、武器を取り上げられた上で、端っこに居た。かつてゲームプレイヤーが縛られていた縄で、体中を雁^が字^ん掬^めにされているのだ。兵士たちはみじめな気持ちであろう。

そんな彼等を縛った張本人であるゲームプレイヤーは、広場の中心で勝利の宴を開いていた。

「いや、皆のおかげだ！ この反乱は僕一人では絶対無理だった！ 皆ありがとう！」

だが、そこにご馳走も酒も何もない。

けれども、人だけは居た。

数時間前まで、“ダンジョン・セルボニス”をプレイしていたゲームプレイヤーが。世界初のVRMMOのゲームをログアウトすると、後ろで手を縛られ、貴族風の男には自分たちの事を奴隷だと言われた人々が。

あのままでは、本当に奴隷になってただろう。底辺の生活を送っていただろう。そんな生活は久遠、彼によって免れた。救われたと云ってもいい。

そんな人々の中には、踊ってる人もいた。
泣いてる者もいた。

笑ってる者もいた。

様々な人々が様々な方法で、今の喜びを表現していたのだ。

「いや、リーダー！ あんたのおかげだ！ あんたが居なければ、きつとオレは奴隷になっていた。いや、間違いない。だったら、オレは、オレを助けてくれたあんたに付いて行くぜ！」

「オレもオレも！そしてオレ達に栄光と安全な生活を！」

「私も！ 貴方だったら危険が多いこの世界でも信じられる！」

これからも、苦難は山ほどあるだろう。

もとの世界に方法も分らないし、この世界では現代ほど満足に生活をおくれないかもしれない。他にも色々とギャップがあるだろう。

だが、そんな不安も今だけは取り除けた。

久遠光、という英雄がいたからだ。

彼には感謝をいくらしても足りない。この場に居たゲームプレイヤーの誰もがそう思った。そして、誰もが彼についていこうと思う。それは彼にある独特の魅力が成せることであろう。

——そう久遠の栄光の第一歩は、これが始まりとなるのである。

第九話 次なる……

「あ、そうそう、忘れてたな」

「ヒイツ！」

突如、振り返った氷雨の発言は、貴族風の男に動揺を与えた。さらにそれだけではなく、全身に血を浴び、ところどころ赤くなつた布の服を着た氷雨を見ていて、恐怖は倍増する。

「ま、待ってください！ 私を殺すと、色々とデメリットがありますよ！ だから……どうかどうかお情けを……」

貴族風の男は高価な衣装を砂で汚しながら膝と手をつきながら、殺されないよう懇願していた。

この場の主導権は、完全にゲームプレイヤーにあるからだ。生きている剣士は、縄に縛られている。門を守っていた門番は、とうの昔に逃げていた。つまり、貴族風の男に味方はいないのだ。

——生きてさえいればいくらでも再起できる。

そんな野心を目に宿らせたまま、頭を地につける。これは一種の賭けであつた。

氷雨はそんな男に、無表情で近づいた。そして、男と同じ目線になる。

「じゃあ、ここはどこだ？」

「……あつ、はい。ここはクリカラの町の南部に位置するエルフィ

ンの森の一角です」

「なら、この周りは森なんだな」

「ええ、そうです。ここから近いのは、北部はクリカラの町で、西はエータルの町になります」

男は人が変わったように、饒舌に話し出した。

氷雨はそれをうんうんと頷くように、聞いている。

これからのことを氷雨は考えていた。自分の状況がさっぱり掴めていない彼であったが、お腹は空いている。人間の三大欲求である食欲には、どうやっても勝てない。

食べていくには働けばならない。

世界の常識だ。これだけは、時代が変わろうと国が変わろうと、常に変わらない常識である。盗みという方法もあるにはあるが、これはあまり好みではない。弱者と戦ってもなにも面白くもないからだ。しかし、自分を襲ってきた者や死んだ者からは遠慮しない。金品や売れそうな物なら遠慮なく貰う。

そして、氷雨は自分の行き先を、男の話で決めようとしていた。

「クリカラとエーテルはどう違う？」

「クリカラは商業都市ですね。物の流通が盛んです。エータルはここだけの話、かなり治安が悪いので、行くのは控えたほうがいいですよ。近くに“長年攻略の出来ない迷宮”^{ダンジョン}があってがらの悪い冒険者や浮浪児も多いですからね」

決まったな。

氷雨は行く場所を、そう心の中で決めた。

ところで、次の行き先は決まったが、彼には聞きたいことがあった。

「――で、どこで俺たちを見つけた？」

――現在の立ち位置だ。

自分はゲームからログアウトしたはずなのに、現実リアルからは程遠く、仮想現実バーチャルも近くない“第三の現実”にいる。

そして、その疑問を解決するためには情報がいると考えた。

そう、聡明な姉に教えられていたからである。

「森の中です。森の中にこの全員が寝ていました。だから私は剣士に頼んで、この場所まで運んだんです」

「へえーそうかよ……」

だが、結果は不発。

頭がいい人なら、他に質問することもあるだろうが、氷雨はそれほど頭がよくなかった。

（探すか……）

騒いでいるゲームプレイヤーを遠めで見て、そこに久遠や雲林院、雛形など、自分の学校でも有名な連中を彼は見つけた。今日、学校に行くと友達は、久遠達が集まって“ダンジョン・セルボニス”をすと言っていた。

そして、もし“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーが、この“第三の現実”に来ているなら、――居るはずである。

同じゲームをしていた彼自身の姉である雪が。

頭では逆立ちしたって勝てない彼女がいれば、この疑問が取れると彼は思った。

彼は、何か強い思いがあって帰りたいわけではないが、帰れるなら帰りたい。そして、自分の家へと帰って、祖父と戦って勝ちたいのである。

これは一種の野望であった。

祖父の古い先は自分が見ても短く、いつ立てなくなるかも分からない。ならばその前に、彼が一番強いと思う祖父と戦って勝つ、と。

「――で、これだけ話しましたよね。もしよければ彼らに私の身を安全するよう交渉してくれませんか？ これでもエータルの自宅に帰れば、たつぷりと支払えるほどの財産があります。どうでしょう？ 私に協力してくれませんか？」

貴族風の男は、これでなんとかなると思っていた。ここまで話した。少しは見返りとして、親身になってくれる、と。

「――自分でなんとかしろ。俺がそこまでする義理はない」

だが、甘い。甘かった。

氷雨には最初から貴族風の男の願いに応える気などは、ない。聞くだけ聞いただけであった。

「どうか、どうか、お願いします。どうか私にお情けを……」

男は、少し破れたマントを剣から取る氷雨の服の裾を持って、必死に願った。

しかし、その慈悲を求める手を氷雨は乱暴に払って、男に笑いか

けた。

「調子乗ってると……殺すぞ？」

「ヒイツ！」

だが、その笑みは決して優しさからくるのではない。うっとおしさから来るものだ。

彼は本当なら貴族風の男をのような弱者を殺したくないし、それ以前に殺す余裕などない。表面上にある凄みと羽織ったマントの間から見える血、この二つだけで貴族風の男を圧倒したのだった。

「あ、そうそう……忘れてたな——」

氷雨は一旦カナヒトから離れ、思い出したようにまた近づいた。

「——お前への借りが、な」

「ヒイツ!! すいません……すいませ……グボツ!!」

そして能面のような無表情な顔で、貴族風の男を——蹴った。

殺すつもりはなく、ただ痛いだけの蹴りローキックであった。彼は縄で縛られた仇を、この時返したのである。この時、奇怪な目線が彼に向けられる。

やはり彼は容赦の無い男であった。



氷雨は二つの門の内の一つに向かっていた。

方角は分らないが、二つある門は対になっているのではないので、その一方がクリカラにもう一方がエーテルに通じてるのは何となく予想できる。

先程の戦いで、破いたマントの切れ端で強引に血を止めた左肩の血は、もう止まっていたので当てていた布をとった。この止血方法は本来は間違っていたのだが、あの時はこれしか出来なかったの所以我慢したのでだ。本来なら水で洗ってから、綺麗なガーゼで傷口を覆いたかった。

あの時は肩しか覆えなかった。今はどこでも覆える。だが、ほかのは全て大きくはないので、そのままにしておいた。血がまだ出ている箇所もあるが、いずれかさぶたができ止まるだろうと思ったのだ。

もし、道の途中に川があれば、口を潤し怪我もとを洗いたい氷雨である。

「――ちょっと待ってくれ！」

「はっ？」

だが、そんな氷雨を止めた人物がいた。

「君のおかげで皆が本当に助かったよ。ありがとう！」

あの久遠であった。

久遠は氷雨の戦闘によって剣を得て、あの反乱を引き起こせた。なので、久遠は氷雨にとっても感謝していた。

「私もありがとう。貴方のおかげで助かったんで、お礼は言っとくわ」

「あ、あ、ありがとうございます！ 貴方がいなければ私達は反抗さえできませんでした！」

氷雨はああ、と知っている顔の久遠の隣にいた二人の女性を見た。上から発言は雛形、雲林院だ。

雲林院と雛形で、背の高い金髪が雲林院で背の低い黒髪が雛形だ。雲林院はスタイルがよく顔も整っており、どこから見ても美人。雛形のスタイルはお世辞にもいいとは言えないが、こちらも顔が整っており美少女であった。

「本当にありがとう！ おそらく、あの場に居た全員が君に感謝していると思う。ところで、どうだろう？ 皆で、もとの世界へと帰る手助けをしてくれないか？」

久遠は爽やかに両手で氷雨の手を握った。その目は期待に満ち溢れ、きらきらと輝いていた。

そんな久遠の意見を、女性陣も賛成する。

「確かに光の言う通りね。彼がいれば心強いし……」

「そ、そうですね。今回も助けられましたし、今度もきっと助けてくれるはずです！」

氷雨は一回、じつくりと心の中で考えた。

（仲間になるのは……いや、やめところ。メリットも多そうだが、

デメリットが多い。自由な行動は無理そうだし、そしてなにより、“考え方”が違うからな)

ここでいうメリットは仲間だ。仲間が多ければ出来ることが増え、様々な可能性が飛躍的にアップする。氷雨一人では勝てないような強敵も、協力すれば勝てるだろう。

反対にデメリットは、好きなように戦えないだった。仲間が入れば敵は取られるし、戦いたい時に戦えない。

それにあの雰囲気を見るに、あの何十人全員が久遠の配下に加わるのだろう。“人殺し”の自分が、あの“人を殺していない”中に入るには居心地が悪いとも思った。

それに、先ほど――カナヒトを蹴った時に感じた視線である。

何故、そこまでするんだ、という視線から、彼を仲間に入れたくない、というムードが伝わってきたのだ。

そして、氷雨はこの三人と自分では、“考え方”が違うと思う。

彼等はいくまで他人の為に戦っている。それは、自分の為に戦う氷雨とは対極に位置するのだ。

久遠たちは、おそらく人を助けるならいくらでも命を賭けられるだろう。だが、氷雨は出来ない。強敵と戦うことのついでに、人を助けることなら出来るが、それは似ているようで全く違う。

背中あわせのようで、それは真逆の考えであった。

「話は以上か？ 俺がそれに付き合う義理はない」

彼は、久遠の手を払って、短く淡々と三人に応えた。

呆然としている三人を見て、彼は門へとゆっくりと歩き始める。早く三人のいない町へと行って、飯をたらふく食べ、ゆっくりと休みたいのである。

金は死んだ剣士が持っていたすかすかの巾着を奪ったので、少しはある。これは戦利品としていただいた。死んだ者からは何を頂いても問題はないだろう、と氷雨は強引に納得しているからである。こういった考えもまた、久遠たちとは相いれない考えであった。

「ああ、うん。そうだよね……ごめんね無理言って……それじゃあまた」

「ひ、光、落ち込まないでよ……」

「ひ、ひ、光君、大丈夫ですか？」

久遠は断られるなんて思っておらず、目で明らかになるほど落ち込んでいた。

だが、そんな後ろの状況など全く気にせず、氷雨は広場を出て、自分の目的地である“エータル”に向かった。

治安が悪いほうが自分に合っている、と彼は考えたのだ。戦いに餓え、戦いを求め、戦いを快楽とし、“人殺し”の業を背負っている自分には。

広場から出ると、風を感じた。

森独特の爽快な匂いと、火照った体を冷やす冷たい温度。それに丁度いい風量。

そんな全てが、心地よかった。

上には太陽がまだ空を照っていて、真下には草が一本もない整備された道がある。

遠くには町が見えた。これなら傷ついた今の体でも、今日中にはつきそうだ。

そして、彼は次なる目的地へと、歩き出したのだった。

——やがて、氷雨と久遠は時が経つと再会する。その時、二人の立場には大きな差があった。それがまた、大きな戦いを生むのであった。

第十話 不法都市

あれから数時間。

やっと目的地に着いた。

その町は暗い。いや、夜なので仕方がないといったら仕方がない。だが、電球で夜空を照らす日本の風景に見慣れた氷雨にとっては、とても暗く——不気味に見えた。

ゾワッ！

そして、そんな町に一步入ると、その身の毛もよだつような異質な雰囲気始めて気づいた。

それは一步入ったその瞬間、町中にいた全員が灰色のマントを羽織った氷雨を目測で図ったのだ。強いのか、弱いのか。金があるかと。

平和な日本に住んでいた氷雨にとって、感じたことのない視線であつた。

常に何かを怯え、他者を出し抜こうとするような、強烈な生への執着心。平和に溢れた日本ではまず考えられない感情だ。

それが、この都市の特徴だった。

この都市では大勢の犯罪者が“とある理由”で暮らしているため、国によって定められてる法律が正常に機能しない。故に強奪、殺人、強姦などが当たり前に行われている。だから、この町では弱いものから死ぬ。

弱い者が搾取され、強い者が全てを得る。

そんな世界の縮図が色濃く出た町であつた。

——そして、これが無法都市エータルの最初の洗礼となるのだ
た。



「おばちゃん、宿屋は開いてる？」

氷雨は早く休みたかったので、三階建てぐらいであろう木造の宿屋に入った。この店を宿屋だと分かったのには理由がある。先程、金をチラつかせ薄汚い服を着ていた子供に、宿の場所を聞いたのだ。いい宿屋はないか、と。

そしたら、その子供が指した宿屋がここだった。

宿屋の中はホテルや旅館ほどの清潔さはなく、入り口は広くもない。冒険者が泊まる為だけに作られたような泊まるためだけの宿屋であった。

入ってすぐのカウンターに位置する女主人に話しかけた。

「いらっしやい。おや、新顔だね。宿屋の仕組みは知ってるのかい？」

「いや、“この”宿屋の仕組みは知らない」

「ちっ、そうかい、じゃあ説明するよ」

女主人は、氷雨に分からないほどの小さい舌打ちをした。“この”を付けたと言うことは、この町にある他の宿屋に泊まったことがあると考えたからだ。

もしこの町の“初心者”なら、部屋で寝た時にいくらでも金品を盗めるが、町の仕組みを知っているとそうとはいかない。

金目の物は隠すだろうし、寝る時も厳重な警戒をしてから寝る。この町ではいかなる時も、油断も隙もあってはならない、と知っているからだった。

——こうして、氷雨は知らず知らずの偶然の内に、“戦いの種”を失っているのであった。

「以上だよ。分かったら金を払って、さっさと食堂なり部屋へと移動しておくれ」

女主人による宿屋の説明はとても簡単で、終始けだるそうに説明していた。

臨時報酬が無いのが、よっぽど堪えたのだろう。

だが、この町の宿屋はこれで普通だ。これでも良心的な宿屋である。酷いところでは、部屋だけでベットすらない店もある。木の床に眠れ、と普通にいう主人もいたのであった。

この宿の値段は夕食込みで、一泊1000ギル。

銀貨一枚分だ。氷雨はそれを今日の一日分だけ払った。

彼の残りの全財産は、残り銀貨一枚。明日、この宿に泊まるだけで終わってしまうような全財産であった。

「あんたの部屋は二階の間だ。この鍵と同じ部屋に入るんだね」

「ああ」

氷雨は女主人から乱暴に鍵を渡される。

それを受け取り、彼は奥の食堂へと消えていくのだった。



氷雨は食堂でパンとスープというこの世界では普通の食事を取った後、井戸へと向かった。夕食の量は質素で、味付けはほんのり塩が効いてるだけ。

現代食に慣れた氷雨にとって、味の濃さも量も物足りない食事であった。

だが、これで我慢するしかなかった。

その食堂には、自分と同じような客が沢山いて、中には彼より二周りも大きい人間でさえ、同じ食事の量で納得していたからである。金が出来たら、肉を腹一杯食べたいと思う彼であった。

「冷たっ！」

彼は上半身の服を脱いだ後、井戸の水で今日出来た傷口を全て綺麗に洗った。

冷たい水は体にとっても染みたが、自分の未熟な武術の腕のせいでここまで体を痛めつけたと思うと、何故だか氷雨は我慢できた。

これもそうだ。

両の引き締まった腕に無数にある細い傷。これも自分の未熟さが引き起こした傷だ。この胸にある大きな切り傷も、背中にある丸い傷もそうだ。

度重なる修練の果てにできた勲章である。

氷雨はその全てが誇らしく思う。

姉は今日作った傷を見れば「また、無茶して」と怒ると思うが、これは自分の成長の証。一つ新しい傷を作るたびに度に、反省し、強くなった努力の結晶だ。

今日、自分は初めて真剣勝負をした。武器を持った者と初めて対戦した。そして――初めての人殺しを経験した。

ほかに、今日は様々なことが色々あった。

そして、彼は、思う。今日、自分はまた成長した、と。

ここまで考えて、彼は宿にある自分の部屋へと戻った。

上半身裸で、夜風にあたりながら考えることではないな、と思ったのだ。下手をすれば風邪をひく。現在、体が商売道具である彼は、自分の体を労わらなければいけないなかった。

「寝るか……」

彼に用意された部屋は大きくはなかった。だが、小さくもない。

一人用のシングルベットと、丸い小さな机に椅子が二個。それに壁には火の消えたランタンがあるだけだ。

そんな部屋は、窓から差す青白い月だけで照らされていた。

ベットにある布団は固く、お世辞にもよく眠れそうとは云えない。

地べたで寝るよりかはまし、といった所であろう。

そんなベットに潜り込み、氷雨は目を瞑る。

明日の事を考えながら……。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。

所持金、1000ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数0。――未だ、力量^{レベル}1。

第十一話 初めての冒険(前書き)

PVが40,000。ユニークが13,000を突破しました。
皆さん、本当にありがとうございます。

第十一話 初めての冒険

次の日の昼のことだ。

氷雨は冒険者ギルドへと来ていた。

金を稼ぎたかった彼は、この町にあった巨大な迷宮ダンジョンに訪れた。すると、そこに居た門番にギルド公認通行証を持っていないと通せないと言われたのだ。なのでその門番からギルドへの行き方を聞いて、ここへと来ていた。

“冒険者”の手ほどきも知らない彼にとっては、“冒険”の初歩を知るいい機会なのであった。

「姉ちゃん、こっちにも酒だ！」

「がっはっはっは！ お前、死にそうになったんだってな！」

「う、うるせえ、だから今日は昼間っから飲んでるんだよ！」

——冒険者ギルド。

ここのギルドの中は広く、酷いアルコール臭がする。

ここでは、酒場と受付の場所は分かれており、酒場のほうが受付より4倍ほど大きい。酒場では冒険者であろう屈強な男たちが、昼間から自分たちの武勇伝を肴にエール酒を煽っていた。肴は各々の武勇伝だ。

「迷宮ダンジョンの通行証をくれ」

だが、氷雨の目的は酒ではなく通行証なので、酒場には目もくれずカウンターにいたアッシュブロンドの短髪の受付嬢に向かった。酒を飲まない氷雨にとって、酒の匂いなど嫌な臭いに近いのである。

る。

「あ、はい、通行証ですね。再発行でしょうか？ 新規の発行であればこのギルドに登録してもらわなければなりません……一体どちらでしょう？」

「新規だけど、登録ってなにをすればいいんだ？」

「新規ですか……！ かしこまりました。少々お待ちください」

始めは事務的な態度だったが、新規と聞くと急に慌てはじめた。実はこのギルド——新規が入る時期は月の終わりに一回と決まっております、それ以外では新規登録がまず無いとされる。

今は月が終わった時期とは遠く離れているので、受付嬢は新規登録がないと思っていたのである。

「ありました。こちらに生体情報として血を垂らしてください。新規の登録手数料として、銀貨一枚がかかりますが宜しいですか？」

カウンターの下に潜って数分、やっと受付嬢は顔を出した。下の棚にある申込書のような物を探していたのだろう。

受付嬢は、無骨な石をカウンターの上に置いた。これが——冒険者ギルドの申込書であった。

氷雨は受付嬢が言った、このDNAを調べるような方法に少し疑問を感じたが、気にはしなかった。

ここはこういう場所なのだと、無理矢理納得したのだ。

昨日、急に広場で目を覚ました彼にとって、信じないものはない。もし目の前に神様が現れたとしても、すぐに信じるだろう

「ああ、だけど刃物は無いのか？　実は俺、刃物を持っていないんだ」

「ありますけど……一本も持ってないんですか？　珍しいですね」

受付嬢は銀貨を出した氷雨を怪しそうに疑いながらも、自分が持っていたナイフを手渡した。

この町では、護衛のためどんな人間でも最低刃物を一本持つ。持っていないと言うのは大抵、ハンマーのような鈍器を持つ者か、もしくは見せられないような高価な刃物を持つ物である。

だが、彼は鈍器らしき物を持っているような雰囲気はなく、かといって高価な物を持ってそうな服装でもない。ところどころ切れたマントを着ているからだ。

「そうか？　普通だろ」

氷雨はナイフを受け取って、手を軽く切った。手から出た血は、たらたらと石まで垂れる。

この彼の発言に受付嬢はまた疑るような視線を彼に送るが、彼はあくまで“日本”の常識を話したので、二人の間のずれは世界観のずれなので、当たり前といえるだろう。

“ここ”は、やっぱり“日本”なのではないのだった。

「そうですか……これで登録は終わりです。後はお名前を教えてください」

「氷雨だ。

「ヒサメ様。かしこまりました。この名前と個人情報登録して、ギルド公認永久の迷宮通行証（トシエダンジョン）を発行するので、また少々お待ちくだ

さいね」

受付嬢は、今度はカウンターの向こう側にある部屋へ消えてから数分後、またカウンターへと戻ってきた。

戻ってくると、カウンターの上に時計のような機械を置いた。

「こちらが通行証となっております。こちらは他にも力量^{レベル}が上がる
と自動的に知らせる機能を持っております。どうしましょう？ こ
のギルドのシステムを説明しましょうか？ 使用料として銀貨一枚
がかかりますが……」

「いや、遠慮しとく。聞きたいことがあったらまた来るし、別に
いや」

「分かりました。――では、またこのギルドでお待ちしております」

氷雨はお金が無かったので、受付嬢の申し出を断る。

受付嬢は何度も使い古された冊子を、すぐに片付けた。そこには
ギルドの様々なシステムが乗っているのだが、この世界では紙が高
価なため、全ての冒険者で共同に使っているのである。

そして、文字盤もなく、デジタル盤もない腕時計のような機械を
氷雨は腕に巻き、この冒険者ギルドから出て行った。

去っていく氷雨の後姿を見ていたのは数人であったが、その冒険
者たちの顔は何故かにやけていたという。

――こうして、晴れて新米冒険者となった氷雨であった。



午後。

遙か彼方では太陽と空が混じったような黄昏時に、彼は迷宮の入り口へ訪れていた。

門番は日中見た二人とは変わっていたが、この腕時計のような機械を付けているとすんなりと入り口を通してくれた。

地上から見える“この”迷宮ダンジョンの入り口は大きくは無い。地下へと続く階段が、地表に突然現れているだけだ。

「――気をつけな。そこから先は、冥府となんら変わんねえ」

「また、それかよ……この町でお節介をするのはお前ぐらいだな……」

門番の二人が言いあっている。

この門番は、新顔を見ると助言のようにこの言葉を言う。誰か親しい者が中で殺されたか、迷宮ダンジョンの中に、苦い思い出があるのかは定かではない。

だが、これが彼への忠告であるのは確かだった。

コトツコトツ

氷雨は、階段を慎重に降りていく。一步一步周りに、敵に、罠に、注意しながら着々と先を進んでいるのだ。

やはり彼の頭の中では、先ほどの男の声が反響していた。

――そこから先は、冥府となんら変わんねえ。

この言葉が槍となり、彼の心に深く刺さっていたのだ。

冥府——簡単にいえば地獄だが、他の言葉でいえば死後の世界。つまり、ここに足を踏み入れた時点で、棺桶に片足を入れているのと同義だと、あの男は言いたかったのだ。

だから、この忠告を素直に受け入れ、彼は階段を下りていたのだ。

（死ぬわけにはいかなからな。絶対に——）

と、心に釘刺しながら、階段を降りていった彼に見えたのは、長方形の石で作られた床であった。

床だけではなく壁も、同じ石で作られている。そこは広い空間で、天井には発光した大きな白い花があり、この花によって奥行きまで確認できた。

（で、どうやって稼ぐんだ？）

やっと、迷宮^{ダンジョン}へ到着した氷雨だが、ギルドで何の説明を聞いていなかったなので、金の稼ぎ方をあまりよく分かってはいない。

とりあえず売れそうな物を探そうと、今いる大部屋を探索していると、目の前から——スライムが現れた。

「おっ」

半透明なゲル状で、プヨプヨしてるだけの怪物^{モンスター}。体長は60センチ。横幅は40センチ。見た目ではそれ以外に特徴は無く、特出したような器官さえ無い。

ただ、その場で少しだけプルプルと振動していた。

氷雨は、そのスライムを見るとすぐに拳を握り、——突きを放った。体は全快とはいかない。昨日の怪我が残っているし、まだあちこちが痛い。

しかし、問答無用に放った突きは、とても綺麗な型であった。体の動きに一切の乱れはなく、これ以上の突きであった。並みの武芸者なら、一撃喰らうだけで悶絶するような痛さだろう。

プルンプルン！

だが、そんな鋭い突きも、気持ち悪いぐにっとした感触と共に、スライムは軟らかく揺れるだけ。

ダメージなど——全く与えられてなかった。

プルンプルン！

スライムは氷雨に飛び掛るが、彼はその攻撃を簡単に下がって避けた。特別早くもないその攻撃を避けることは、誰でも容易いだろう。

それだけ敵は、のろまだったのである。

プルンプルン！

まだスライムは震えていた。もう、こちらに襲ってくる気配も無い。

だが、それが返って氷雨には恐ろしく見えた。

まるで、己はいつでも攻撃できる。氷雨の攻撃では己の体に傷一つ付けられないんだぞ。などと気持ち悪い外見からは想像できない“高み”からの、余裕に見えたのだ。

氷雨はその苦境を跳ね返すように、今度は全力でローキックのよな攻撃をした。しかし、また変な手応えと、不気味に揺れるだけである。

形はやはり元に戻り、スライムは反撃すらしらない。

関節技は絶対通じないと思うので、次は体を一回転した踵落とし。
——スライムは揺れた。

次は手を全て開きそのままスライムへと直進に、掌底。——スライムはまた揺れた。

突き、アッパー、フック、回し蹴り、飛び蹴り、胴回し。既に氷雨は、普通の思考状態ではなかった。——スライムはただ揺れるだけで、これまで時間をかけて教わった武術が通じないのだ。

それも自分が最も自信のある突きが。そして次に自信のあるローキックのような蹴りも。

だから、自暴自棄になり、大技ばかり放ったのである。

(これが……世界の広さ……なのか?)

その時、何十発もの攻撃をして、やっと彼は頭が冷めた。すると、急にスライムに恐怖が、ふつふつと心の奥底から湧き上がってきた。そのスライムの姿に、飄々とした底が見えない姿に、言いようのない感情を感じたのだ。

——始めてであった。

戦いを楽しいと愉しいと感じたのは何度もある。だが、戦いを怖いと思ったことは無かった。

スライム、ゲームでは初期に位置する怪物と聞いたが、実際は全く違う。こんな、こんな、うんともすんとも云わない怪物だモンスターと。

自分に初めて恐怖を与えた存在であり、遥か上にいる存在。背を無様に晒しながらも、その名をしかと胸に刻んだ。

——そう、彼は逃げ出したのだった。



「うわっ、だっせ。スライムなんか逃げ出してるぜ、あいつ」

「ププッ、スライムの力量は1。^{レベル}あいつの力量も1。^{レベル}あいつの命も今日1日」

「まあ、言うな。ルーキーなんだぜ？ 今日“冒険者”デビューした可愛い可愛いルーキーなんだぜ？ 許したれよ、まあ、身ぐるみは全て剥ぐ、がな」

「ふっ、あんなルーキーから搾り取るとは我らも悪よう」

地上へと続く階段の近くで、逃げ出した氷雨を見ていたのは、酒場でカウンターに最も近い席に居た四人。

強さ中堅より少し下。装備は似たようなめした革で作られた防具に、剣、剣、槍、斧とそれぞれが強いと思う武器を所持していた。

彼等がスライムを雑魚というのはしかたがない。

スライムは打撃系の攻撃は全て無効化するが、剣や槍による斬撃。もしくは魔法や、地に武器を叩きつけるなどして衝撃が出る技^{スキル}を持っていると、“絶対”に一撃で斃せる怪物^{モンスター}だからだ。

そんな迷宮^{ダンジョン}の中でも足元に位置するスライムと一対一で戦って、勝てなかった氷雨。そんな彼が雑魚と認定されるのは自然の成り行きであった。

「ププッ、あいつ先へと進んでいった。こんな時間に無謀だ。無謀だ。無謀だ」

「流石、初心者。オレ達の想像の斜め上を行くぜ」

奥へと進む氷雨を見て、四人の冒険者たちは、また、囁う。

今の昼と夜が混じった黄昏時は、大抵の怪物が凶暴化する時間帯だ。スライムみたいな怪物は別だが、昼間や完全な夜間になど比べると死亡率が高い。

つまり、同じ階級でも強さが別段なほど、違うのだ。

だから、殆どの冒険者はこの時間だけは迷宮ダンジョンに来ない。自らを鍛えたい冒険者や無知な馬鹿な冒険者以外は。

もちろん、氷雨は後者に入る。

四人の冒険者は、まだここが一階層のため、黄昏時でも大丈夫だ。もう少し下に行くと、このパーティーでも、命が危うくなるほどである。

「――さ、ルーキー狩りの始まり始まりだ」

そして、四人の冒険者は、“狩り”慣れた迷宮ダンジョンを歩き出したのだ。
つた。



「はあはあ……」

氷雨はスライムから命辛々逃げ出したと思っている。

久々の脇目も見ない全速力で走ったため、息は切れていた。体には嫌な疲労感だけが残る。過程がどうであれ、結果自分は逃げ出したのだ。

その負けた後味は――決していいものではない。

(次は……殺す)

彼は広間ではなく、薄暗い狭い通路を歩きながら、密かに決意していた。それは誰にも語られることのない決意だった。

だが、そんな思いを抱いても、恐怖の後に残った胸の中の苛立ちが消えない。後ろから探偵のように着いてくる四人の男達にも気づかないほど、心はスライムに対する思いに覆われていた。

そして、何かにこの怒りをぶつけたい、とそんな狂気に彼は包まれている。

グルグル！

そんな今触れれば凶器であろう人間の遠く向こうで、牙を見せ、深く唸っている者がいた。

狼のような怪物である。モンスター

その種族名は——ルー。モンスター

だが、北の森で見た動物と比べると、同じ形で合っても大きくはない。体色も黒で、“あれ”ほどの威圧感はない。

その怪物は黄昏時によって瞳を赤くし、より凶暴になっていた。モンスター

だから、本来なら、獲物を見つけた時点で一気に駆け寄り飛び掛る筈なのに、このルーは何故か飛び掛らずに、通路の端にいた。

野生の第六感か、怪物の勘か、詳しいことは不明だが、ルーは一目で氷雨を危険だと気づいたのだ。モンスター

なので、通路の端でそっと息を殺す。

氷雨に殺されないためであった。

不幸にも氷雨は、壁にある白い花が光っているだけの見えにくい通路のせいかな、すぐ横に居たルーなど見えていないようで、すんな

りと横を通り過ぎようとしていた。

ルーは心臓をどくどくとさせ、丸くなりながら待っている。氷雨がこの場からいなくなるその時を。そんな無限とも思える刹那を、ルーは感じていた。

やがて、氷雨は前だけを見据え、この場から去っていった。

ルーは、その安堵ゆえか、ほっとした一息をついたように見えた。

——これがまた、彼が戦いを逃した瞬間であった。



グルグアツ！

ルーは氷雨の後に来た男達に飛び掛った。

氷雨と比べると弱いと思っただろう。この迷宮で生まれたばかりの怪物に、^{モンスター}“強さ”を正確に測るような選別眼は備わっていなかったのだ。

そんなルーは、男達に飛び掛るものの、二人の剣士によって動きを取り押さえられ、最後に1メートルは軽く超える斧を持った男の^{スキル}技によって、頭をバキッと割られた。

ルーは生まれて数十分で、命を失ったのであった。

それは、いくら黄昏時で怪物が^{モンスター}獰猛といえども、たかだか力量^{レベル}1では長年冒険者を行っている彼らの敵ではない。

だが、念のため、男はとどめとして、^{スキル}技を放った。

その技の名は、『重斬』^{スキル}。

斧技の一つで、大きな斧の特性である重さと硬さを最も活かした一撃必殺の縦切り。隙も多いが、通常では考えられない程のパワーで斧を振り落とすので、威力は絶大であった。

まさにとおきおきの名に恥じない一撃である。

怪物が彼に怯えて隠れていたことなど知らない男たちは、氷雨が先に行ったことで残ったルーを始末しながら、口々に思いのたけを喋っている。

「うわっ、あいつルーにまで逃げ出してるぜ！」

「ププッ、ルーの力量^{レベル}これまた1」

「――でも、ちょっと変じゃねえか？ 幼児でも2は持ってるぜ。あんな成長した男が1なんて考えられねえよ」

槍を持っていた男が感じた違和感であった。

力量^{レベル}が低くすぎる人間。1などありえないのだ。男は力量^{レベル}1の間など、赤ん坊しかこれまでに見たことがない。

だから、この男は疑問に思ったのだが、

「ふっ、どうせ温室育ちなのだろう。病弱で温室育ちのどこかの貴族の嫡子なら、力量^{レベル}1でもおかしくはないはずだ。そういった噂は、どこかで聞いたことがある。実際に見たのは初めてだがな」

斧を持っていた男に即座に否定された。

これは、貴族風の男に似た意見でもあった。

「いや、そんな貴族の坊ちゃんならこんなとこ来ないだろ？」

「ププッ、そうだな」

「そこでだな、オレは考えたんだが、あいつには凄い秘密があるんじゃないかね？ それも特上な秘密が、だ。例えば力量^{レベル}の偽造とか、詐欺だ。これは今、都市伝説であつただろ？」

「ふっ、都市伝説はあくまで都市伝説だ。そんな物に踊らされるなんて、お前もまだまだだな」

「ププッ、力量^{レベル}が偽造が、本当だった。としても、問題ない。どうせ、あいつはルーすら斃せなかった。それに武器も持ってない。だったら、オレたちなら斃せる」

「まっ、そうだよな。じゃなきゃ、あんな出来立てはやはやのスライムやルー相手に、逃げるわけねえもんな……」

「それにもし、あいつが貴族の嫡子なら、我々もいい金づるを見つけたと言うことだ」

「だな！」

氷雨を見つからないよう足音がしないよう追いかけながら、一人の男が思った疑問は仲間の声によってすぐに泡となって消えた。

そうだそうだ、と彼の力量^{レベル}1という事に納得したのだ。

力量^{レベル}をどれだけ偽造してても、その“もと”が弱ければ偽造の意味がないからである。

もし、その者が三桁になるほど強くて、その強さを目立たぬために隠したいのであれば、不可能とされる力量^{レベル}の贋作もありえる。

だが、彼は弱い。

力量^{レベル}1の怪物すら斃せぬようでは、全てが杞憂だろうと男は思ったのであった。

「で、あんなふとしたオレの勘違いは無かったことにして、どこであいつを嵌めるんだ？ この先にある広間なんか、丁度いいと思うぞ」

「ふっ、そこはちゃんと考えておる。あの広間には地下へと続く階段があつたであろう？ そこを降る直前に仕掛けるんだ」

「ププッ、君たち流石。階段を降りようと油断してる時に狙うなんて外道」

「ふっ、そう褒めるでない」

斧を持っていた男は、自分に酔っていた。

彼が貴族の嫡出子ならぼろ儲けだし、もし一文も持っていないくても奴隸として売ればいい。

どっちに転んでも金が稼げる。

そう、この時は、こう樂觀してられたのだ。



氷雨は狭い通路を腕をぶらぶらとぶら下げてゆつくりと歩きながら、刺々しい瞳で獲物を探していた。

スライムから逃げ出して以来、怪物の影すら見ていないのだ。それはルーと同じように怪物^{モンスター}が彼を見かけると即座に逃げるか、隠れ

るという行動を行っていたからであつた。

ゆえか彼の周りは、殺気に満ち溢れていた。

溢れ出る戦闘衝動を、発散できないためである。

男達も力量^{レベル}1という色眼鏡がなければ、随分前に逃げ出していたであろう。

（戻るか？）

その時、氷雨は今日は宿に戻って後日スライムに再戦する、という選択肢を思いついた。

だが、それを実行はしない。

まだ金目の物が見つかっていないからだ。

振り返ればここに鬱憤を晴らしに訪れたわけではない。空腹を満たしに、金を稼ぎに来たのだ。

しかし、甘い。

この階にある宝は、既に他の冒険者に掘り尽され全く残っていない。40や50まで行けばまた違う結果になるだろうが、彼にそんな予備知識はないし、そんな下の階まで行ける仲間も、力もなかった。

初めての冒険である彼には、何年かけても攻略者が“0”の、この永久の迷宮はそれほど厳しいものなのだ。^{とこしえダンジョン}

今、彼がいるこの一階には、既に何千人と人が訪れた。故に、マップの詳細も、出現する怪物^{モンスター}も全ての情報は、冒険者の中に出回っている。

だから、一階を拠点としたら、稼げる金も稼げないのであつた。

「はあ……下に行くか」

彼はそんな知識もないのだが、目の前に現れた階段を降りることを即決した。それは、この広間に先に続く道がなく、先へと続く道は下しかないからであった。

そして、階段に向かって踏み出すと、

「今だっっ！！！！！」

野太い男の声が、部屋中に響く。

四人が、一斉に、片足を階段へと踏み入れた氷雨へ襲い掛かったのだ。

「……！」

この場面で不意打ちされることは氷雨も予想していなく、足を階段のふちに引っ掛けながら、無様に転げるようにして、四つの刃物は避けれた。

だが、床の上に転がる氷雨に、すぐ第二陣がやってくる。

「死ねっ！」

槍であった。鋭く、長い槍。幅広大型な三角形の穂先を付けた長槍で、俗に云うパルチザンである。

剣より長い槍が、転がっている彼に突く。

氷雨は近づいてくるそれを、冷静に、刃ではなく柄の部分を上へと殴って逸らす。

「ププッ、次っ！」

第三陣が襲撃する前に彼は起き上がるが、膝立ち状態の彼に今度は剣が薙ぎ払われた。氷雨はそれをバックステップで避け、敵の情報を整理しようとした。

だが、そんな余地は与えてくれなかった。

今度も剣だった。

深く踏み込んだ男が、剣を彼の頭上に落とす。また、氷雨は下がつて避けた。

続けざまに別の一人が、剣を振るう。

槍を振るう。

さらにまた別の一人が斧を振るった。

しかし、これはただの序章であつた。濁流のような勢いで、彼を飲み込む攻撃は、これから始まるのだ。

剣。

槍。

斧。

剣。

剣。

斧。

剣。

槍。

まだ、四人の男による猛攻は終わらない。誰もが氷雨に向け、容赦もなしに武器を振るってきた。

氷雨は精神を削ぎ落としながら、一つ一つ命のやり取りをしている。瞬きや深呼吸の暇さえ、与えられない。

氷雨の頭には躲すという事柄しかなく、時には丁寧に、時には大胆に、攻撃を一つ一つ後ろへと下がりながら躲していった。

「もっとだっ！」

男達も氷雨と同じように戸惑っていた。

初撃で葬る予定だった氷雨が、まだしぶとく生き残っているからだ。だが、彼が何者かという思考する余裕は——ない。

これで殺さなければ、これで殺さなければ、と攻めても攻めきれない相手に、手をこまねいているのだ。

「ププッ！」

後ろへ一心不乱に躲していた氷雨は、ついに背を壁についた。

そこを狙っていた槍使いが、槍技『疾槍^{スキル}』を放った。『疾槍』は単なる突きであるが、『重斬』同様リミッターを外した筋力によって行う並外れた速さの攻撃であった。

それはやはり早い。

だが、重い槍であるが故に、祖父のジャブほどのスピードではなくぎりぎり見えたので、氷雨は頭に迫り来る槍を、首を左に傾ける。

髪が少し切れた。しかし、皮膚までは切れなかった。

狙いの外れ、勢いのついた槍は壁に当たり、刃が欠けた。

氷雨にとっての——絶好な好機だった。

「なっ！」

氷雨は研ぎ澄まされた感性で、その一瞬の隙を見逃さない。槍を片手で支え、もう一方の片手で関節を折るようにする。

ボキッ！

そして、――極めた。

人の骨を折るように、木で作られた柄を折ったのだ。

「あっあっ……」

槍使いは斬られたのではなく、折られた槍に声すら出ない。武器とは消耗品なので、代えの武器を持っているが、懷に隠した武器を出す時間を与えられなかった。

氷雨は、一步で相手に近づく。

槍使いの仲間は槍使いを守るよう、先に氷雨を殺そうとする。だが、その前に彼は槍使いの兜が無い顔面を殴った。

「……」

もう一発顔を殴る。さらに睾丸のある股間に上蹴り。音はなかったが、ぐにやりとした感触から潰れたな、と氷雨は感じた。

槍使いは――くる、と思った。

それは睾丸を潰された痛みである。数秒後、やはりきた激痛に悶絶した。その痛みは、すぐに全身を走る。やってきた絶え間の無い痛みの波は、槍使いの戦意を消失していた。

そんな男は股間に手をやった。

痛みが消えぬと分かっている、股間に手をやったまま膝から崩れ落ちた。目を固く縛り、呻き声をあげ男は倒れたままジタバタしていた。

戦えないわけではない。立てないわけではない。

だが、感じたことの無い激痛に、終わらないだろう激痛に、槍使いの戦意は消失していた。

いつそのこと死にたい、そう思ってしまうような痛みだった。

そんな氷雨は、状況は以前として不明だが、先に仕掛けられているのに、殺さないや手加減するなどといった感情はない。

やられたらやり返す、との心情のもと、攻撃には手を緩まなかったのである。

そういった覚悟が、弱点を的確に狙ったのだった。

「あ……あ……」

そして、槍使いの仲間の三人は、仲間を立ったまま見ていた。男なら誰でも感じたことのある他のどれとも違う云い様のない痛みに、耐え抜いている槍使い。

その姿を見て、仲間の自分の股間も押さええなくなった。

「うおおおおー……！！！！！！」

次に吼えた仲間が居た。

あの痛みを見た後で、自分を奮い立たせるために、急所を的確に狙う敵を斃すために。

先刻の不安は、杞憂だったのではない。

——敵は強大だと。

だから、剣を強く握った。

だから、大地を強く踏みしめた。

そして、氷雨へと距離を詰め、剣技『連剣』を行なった。『連剣』

とは、人外の速さで幾つもの剣による閃光を起こす技だ。

何発も。何発も。何発も。

だが、高威力しかも連続技であるこの技には弱点があった。発動

すれば終わるまで、その場から動けないのだ。

剣のリーチは拳に比べると長いが、槍に比べると短い。

氷雨はその剣の距離を冷静に見極め、下がった。胸や腹など、『連剣』によって体の正面に傷が数箇所入ったが、深くは無かった。

そこから先は言うまでもない。

男は技の効果で、その場で剣を振り回しただけであった。技とは、効果的な場面で使えば予想外の強さを発揮するが、一歩間違えると不利になる。

この剣技『連剣』もそうだ。『連剣』とは他の技よりも強力だが、一旦放つと途中で止められないというデメリットを要する。そして、男の攻撃が終わった。同時に動きもとまる。

顔が青白くなり、無呼吸運動を続けたが故の、——酸欠だった。大きな深呼吸をしたかった。だが、それも叶わない。

氷雨は動きが止まった男を待ってたのか、がら空きの目に人差指で一突き。

そのまま——指を穿り出した。

眼球が飛んだ。地面に転がる。眼があった眼底からは、血が間欠泉のように出る。

剣使いの男は痛みよりも、片方の光が無くなった事に驚いた。すぐにその原因が、もう片方の目に映る。

「ああああ————！！！！！！！！」

——絶叫した。

だが、この男の凄いところは、片目が無くなっても氷雨に反撃し

た事であつた。

技は使わない。^{スキル}いや、使えない。もう一つの『連剣』のデメリツトに、使用すれば体の負担を減らすため、一定時間は他の技は使えないのである。^{スキル}

だから、男はすぐ傍にいた氷雨に袈裟切りをした。

しかし、氷雨の攻撃とは速さが違った。

拳と剣。超近距離であれば、拳のほうがその速さゆえに有利になる。

拳はフックの要領で、鎧の隙間をぬって男の脇腹、肝臓の部分に刺さる。

ボキッ！

あばら骨が何本か折れて、体がくの字に折れ曲がる。その衝撃ゆえか、剣も手から離れて地面に落とした。

剣使いの男は、人間による内臓を的確に狙った攻撃は初めてのようで、意識を簡単に手放した。

「くそつたれ！」

そんな氷雨に背後から、斧を振り落とす者がいた。

それは『重斬』。^{スキル}それを斃した技と、同じであつた。

——結果から云うと氷雨はそれを食らった。避けるには時間が余りにも足りないからであつた。

「ぐっ！」

だが、彼も負けてはいない。

斧自体は体に命中したが、斧使いの方へ体を動かしたため、刃ではなく金属部分の柄がもろに右肩にあたる。

右肩は『重斬』の威力によって外れたが、大した怪我ではない。

次にくるんとターンして、氷雨は筋骨隆々の斧使いの男の正面に立った。

そして、左手の手刀を斧使いの首に。男も斧で反撃しようとするが、その重さゆえに取り回しにくい。

両手で振り上げてもう一度、斧を落とす前に、首にもう一度右ハイキック。首は、太いゆえかまだ折れてなかった。

男は斧で反撃するのを諦めたのか、武器を手放した。

そして、斧使いは幹のように太い腕で氷雨を殴ろうとする。

これが、――斧使いの間違いであった。この体格の違いからの筋力差に、斧使いは素手でも勝てると思ったのだろう。

だが、徒手空拳がずぶの素人である斧使いと、素手のみを長期に渡り鍛錬してきた氷雨。

戦力差は誰が見ても歴然であった。それに、斧使いがつけている筋肉は斧を使うための筋肉であって、殴る筋肉ではない。

氷雨は殴ろうとする男の左腕を逸らすように取る。そして、背負うように投げ、地面に叩きつけた。受身知らない男は、背中を強く打つ。

そして、氷雨はそのまま首を取り、両腕で頭部を挟み込み、捻るように回して、――極めた。

――ピコーン、力量^{レベル}が2になりました。

その声は、氷雨の左手からした。斧使いが死んだことによる力量^{レベル}アップだった。

だが、氷雨は力量^{レベル}アップに関心を向けない。彼が興味あるのは、“ほどよい”殺意であるからだ。

「あっ……あっ……」

地面に横たわる三人。

そして、未だ立っていて、氷雨が見つめてるのは自分。未来は楽に考えられる。

彼は、剣を持っている自分の狙っているのだ。

いくら力量^{レベル}がたった今、2になった彼でも、脅威だという事実に変わりはしない。逃げることも出来ないだろう。鎧を着ている剣使いとマントのみを着た氷雨。

どちらのほうがスピードは早いのかは、猿でも分かった。

「……あああー！ー！ー！！！！」

男の慟哭は、部屋中に木霊する。

このパーティーで一番強かった斧使いが負けたのだ。そんな相手に、パーティーで一番弱い自分が勝てるわけなど無い。

だが、勝てぬと分かっても、抵抗するしか道は無い。それで奇跡が起きなければ自分は負けるのだ。

剣使いの男は、『飛斬』を目隠しに、氷雨へと近づく。

だが、既に『飛斬』を目にしたことがあった氷雨はそれを難なく避け、近くに落ちていた斧を剣使いに投げる。

「えっ！」

男は迫ってくる大きな斧に剣で防ごうとするが、パキッと剣が折れた。斧は柄の部分が腹に当たったので即死は免れたが、すぐ前に――氷雨がいた。

ブシュッ！

そして、細い男の首に、氷雨の貫き手が突き刺さっていたのだった。

「っ！！」

氷雨は貫き手をした左手を、首から引き抜く。肌についた血を飛ばすように腕を二、三回振ってからマントで血を完全に拭う。

そして、死屍累々と横たわる死体と、呻き声をまだあげている槍使い。それに片目を失ったまま気絶している剣使いなどの惨劇を見て、一言。

「ふう……やりすぎたか？」

氷雨は、軽く言いかけたのだ。

あの貴族風の男がいた広場にて、人を二人も殺しているのもう人殺しに慣れたのだろう。まるで動物が当たり前に呼吸をするように、氷雨も当たり前のように人を殺したのだ。

だが、ただ一つ。勿体無かった、と彼は思っていた。

彼は不意討ちが嫌いで、正々堂々が好きなのだ。不意討ちはしてもされても、“戦い”の興奮が悪い意味で存分に味わえない。

その点、正々堂々は体の芯まで“戦い”を味わえるのだ。

本日は、“戦い”を十二分に堪能とまではいかないが、ある程度の充足感を手に入れた。

これ以上の高望みをしても衝動は際限なく湧くだけ、と彼は考え、今は早く帰りたいかった。そして、当初の予定通り飯を腹一杯食べたかったのだ。

（さて、全部盗るか）

幸い金の当てはあった。

それは、死人に口なしの如く、一人ずつ装備や金になりそうな物を剥ぎ取っていったのだ。そこに遠慮の二文字など無く、ただ黙々と奪い取っていった。

（ふう、この程度か？）

まず貨幣を手に入れ、武器も手に入れた。その他装飾品など、金になりそうで軽い物は全て奪う。しかし、防具だけは脱がすのが大変なので諦めた。

氷雨は両手に抱えきれないほどの戦利品を手に戻ろうとした時、ふと――妙な空気を感じた。そして、周りを丁寧に見回した。

グルルル！

その胸騒ぎは、間違っていなかった。

――ルーがいたのだ。それも数十匹も。

狼のような怪物であるルーは、――やはり鼻が発達していた。だから、氷雨が殺した二人の血に誘われてここまできたのだろう。

「へえー、俺と、戦^やるのか？」

氷雨を丸く囲んでいる数十匹のルーは、例外なく目が赤かった。黄昏時の影響は、まだ切れてないのだろう。そんな、ルーの数による威圧感^{モンスター}は間違いなく氷雨を刺激し、戦利品を全て地面に置くと、彼もルーと同じように殺気を出した。

大群のルーは、少し氷雨から退く。

あの生まれたばかりのルーと同じように、このルーたちも類稀な嗅覚で匂いだけでなく強さも、本能的に嗅ぎ分けるのだ。

「逃げたきや逃げろよ。今日の俺は機嫌がいいから見逃してやるぞ？」

氷雨はそう挑発してからルーを一瞥し、さっさと戦利品を拾い上げた。

朝から何も食べていない空腹の彼にとって、満腹という未来がとても輝かしく見えたのだろう。戦いという欲求には勝てても、食欲という欲求には勝てない氷雨であった。

グアッ！

ルー達も氷雨の言葉の意味は分からなかったが、言葉の真意は分かる。

大勢の怪物は氷雨から四人の冒険者へと視線を変え、その肉へと喰らいついた。足に、腕に、内臓に、思い思いの場所へと一斉に喰らう。

辛うじて生き残っていた冒険者は、大量のルーによる体を引き裂かれる苦痛に目覚めて叫びだす。だが、黄昏時のため助けてくれるような人もおらず、そのまま死んでいくのだった。

これが、迷宮ダンジョンのメカニズムだった。
何か死ねば必ずハイエナのように怪物モンスターが現れ、死体を骨だけに
する。

服や鎧は、見つけた冒険者が拾うので、結果的になくなる。そして残った骨でさえも、迷宮ダンジョンという生き物に――喰われてなくなるのだ。

なので、何百人と死んでいるとされるこの迷宮ダンジョンには、骨一つ残らない。常に綺麗であった。

だが、それは、絶えず行われている――迷宮ダンジョンの浄化作用のおかげなのだった。



夜。

氷雨は町に戻ると、昨日泊まった宿屋に向かった。食事の前に武器等をどこかで売り捌こうとも思ったが、既に空は薄暗くなっていたのと空腹の為、諦めた。

なるべく早く腹一杯食べたかったのである。

この宿屋の食堂のシステムとして、夕食込みの場合の食事はパンとスープだけだが、追加料金を払うと肉や野菜などが食べられる。パンとスープの種類は毎日変わるので飽きることはなが、物足りないと感じる者だけ追加メニューを頼む。

だが、そんな者は極僅かであった。

この宿に泊まる大半が、並程度かそれ以下の冒険者である。
冒険者の資本とは命だ。

彼らは死にたくないため、装備や薬草などに一番金をかける。少しでも高価で丈夫な装備を、と冒険者はいつも保険をかけるのだ。なので、質素な食事だけで満足し、金のかかる豪華な食事など一番後回しにする。一時の幸福感のために命を疎かにするなど、冒険者の間では考えられないのだ。

中には追加メニューを頼む者もいるが、その者達は皆冒険者の中でも上級者である。高い装備に身を包み、永久の迷宮の50階以上を、軽く踏破する強者しか食べることはまずないのだった。

「——これで買えるだけの肉をくれ」

氷雨はぼろい灰色のマントのまま、食堂のキッチンの人間に銀貨を3枚出した。

キッチンにいた料理人の一人は、こんな貧相な格好の男が追加メニューを頼むなんて、と驚いたが客の内情に口を挟むほど愚かではない。

氷雨の注文通り分の肉の塊を焼いてから、塩だけで味付けをし皿の上に置いた。パンとスープも一緒に。

彼は空いていた椅子に座ると、即座にがつつき始めた。

他の客が居れば、力量が低いのに追加メニューを頼んでいる彼に目を付けるだろうが、黄昏時が終わったこの時間。もう一度日々の路銀を稼ぎに、迷宮へと潜る冒険者が多いため、現在この宿屋の食堂に彼以外の客は居なかった。

氷雨は肉を食べ、パンを口に入れながら、スープで流し込む。味はやはり薄かったが、量だけで云えば昨日より遥かにいい。

食事の時間は数十分で終わる。
その後、今日の戦利品をすべて部屋に置くと、彼は外に出て行った。



外に出ると、雲ひとつない黒い頭上には、煌びやかな星が無数に輝いていた。例えば、存在感のある一等星や二等星のような大きな星や、天の川のような屑星が集まっている集団。白く光る月や様々な形に見える星など、それは街灯がないこの世界ならではの、素晴らしい景観だった。

それらの星達は、一晩ではとうてい語りつくせないであろう“物語”が作れそうであるかつて、古代の人が星座でいくつもの“物語”を作ったように、神話がここから生まれたように。――無限に想像力が湧いた。

そんな雄大な景色の下で、氷雨は地面に両手をつき、腕立てを始めた。両手で普通の腕立てを五十回。指立てを五十回。その後親指だけの腕立てを五十回し、氷雨は立って走り出した。汗はかいていない。

軽く流すだけの運動であるからだ。

日々の鍛錬を怠れば実力も落ちる。

武術に関してだけは、そんな祖父の教えを律儀に守っている氷雨だった。

適当な距離を走り終わると、今度は空き地のような場所を見つけ、マントを脱いだ。

そして一個ずつゆっくりと技の確認をしていく。

突き、手刀、貫き手、上段蹴り、中段蹴り、下段蹴りなど、どの技も丁寧で綺麗な型である。技スキルのような筋力アシストがある雑な技ではなく、精巧に作られた日本刀のような鋭い美しさであった。

型が終わると、今度は股割りをする。その身体は足が定規のように真っ直ぐになっているので、体操選手のように柔らかかった。次に、前屈など様々な関節のストレッチを始めた。

武術家にとって、身体の柔軟性は筋力と同じくらい大切である。特に蹴り技は、身体の柔軟性がないと行うことすら出来ない。

「帰って寝よ」

そんな一通りの筋トレと柔軟の訓練を行ってから、氷雨は宿へと帰ったのだった。また、明日の冒険のために体を休めようと。

——彼の現在の装備、古びた灰色のマント。持ち物、売却予定の装飾品や武器多数。

所持金、4670ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数0。モンスター レベル2。

第十一話 初めての冒険（後書き）

試験的にですが、迷宮と迷宮？と鍛錬を一つに纏めてみました
読みやすさはどうだったでしょうか？

もしこれについて何かあれば、ご感想、ご評価などをいただけると、
とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第十二話 怪物狩り

氷雨は二日の休息をとり、迷宮^{ダンジョン}へと来ていた。

彼が今居るのは一階。景色は相変わらずの石壁で、照明は白い花である。

まだ怪物は一匹も殺していないが、殺す為の対策はきちんと考えているので、“^{モンスター}どんな怪物”でも斃すことが出来ると、彼は敵と遭遇するのを嬉々と待っていた。

そんな彼の休息の理由は——怪我である。連日に及ぶ連戦で、体にはがたがきていた。貴族風の男の護衛を斃すときは両手首を外し、左肩に大きな損傷を。次の日に戦った四人の冒険者には右肩を外された——だけかと思いきや、次の日にその怪我の確認をするとうっ血していた。

体に負った傷はこれだけではなく、細かい切り傷などを数えれば数十にのぼる。どれもこれも戦えないほどの傷ではないが、無視できるほどの怪我でもない。焦らずとも先があると彼は考えて、二日間は休息と情報収集に力を入れたのだ。

グルルル！

迷宮^{ダンジョン}を探索していると、見慣れた怪物^{モンスター}の姿があった。

ルーだ。相変わらず狼に、よく似ている。

この階層ではルーがよく出ると、ギルドでの調べは事前についてある。ギルドでは情報提供があった怪物^{モンスター}の生態や弱点などは、まとめて保管しているのだ。

それらが載せられた写本を貰うのに当然金が必要となるが、氷雨

は必要経費と割り切って十階までの怪物資料は全て買った。

中には喉から手が出るほど欲しかったスライムの詳細も載っていたので、——本日の目標はスライム討伐と、勝手に心の中で決めていたのである。

シュツ！

氷雨は本来なら狩らない格下の敵相手に、全力の蹴りをした。鋭い蹴りは飛び掛ってきたルーの頬にぴったりのタイミングであたる。ルーはその威力の高さのあまり、遠くの地面に転がる。

彼は手刀で、その動きが止まったルーの首を一閃した。

そして——ボキッ、とルーの首が折れたのであった。

（はあ、弱い^{ます}。でも、リハビリには丁度いいな）

氷雨は嘆息を一回。

彼の性分として、弱い者虐めは基本嫌いだ。強い者と戦い勝つことが彼の至福の時間なので、不味い肉を大量に食べるような行為である弱者を斃すことには嫌悪感すら感じる。

だが、二日の間体が疼くばかりだったのと、久々の戦いで勝負勘を取り戻そうと思っていたので、今回は特別にルーを殺していたのだ。

それと怪物^{モンスター}を殺すと金ができる、という理由もある。

迷宮^{ダンジョン}で生まれ、迷宮^{ダンジョン}で死んでいった怪物は黒い霧のような瘴気と^{モンスター}なって霧散し、迷宮^{ダンジョン}の壁に吸収される。

その時に残った色々な色彩を放つ石、すなわち“結晶石”がこの大陸の大切な資材となり、そこそこの値段で売れるのだ。

氷雨はこれをお金が入っていた巾着に入れながら、拾うのが少し

窮屈に感じていた。“結晶石”はお金となるので拾い残しはないが、これを腰に持ちながら戦うのは少し面倒だと思ったのである。

「よっと」

キャウンキャウン！

氷雨は細い通路の前方を塞いでいるルーを蹴りで飛ばす。彼は床に倒れたその頭を、自分の体重のみで踏み潰すと、それは呆気なく絶命した。

「はあ……」

キャウンキャウン！

氷雨は後ろから飛び掛ってきた三匹のルーの内、一匹目は頭に体を一回転させた踵落として、二匹目の頭はただの肘撃ちで、三匹目は頭を掴み膝に打ち付けるように蹴った。

どれも頭がぱんつと弾け、“結晶石”だけが残った。

「……」

キャウンキャウン！

氷雨は走った勢いに任せて、また狭い道を防いでるルーに飛び蹴りする。彼の攻撃は胴体に当たったが、そのまま首を両手で持って、捻るように回し、――極めた。

ちなみに、この時の彼の目は笑っていない。

グルルル！

彼の進行方向に、またルーが現れた。

当然、彼の細道を塞いでおり、先程のルーを斃してからまだ一分と経っていない。

ルーの遭遇率はこの階にいる他の怪物モンスターに比べてそう高くはないのに、五分の間に六匹とは凄まじい確立であった。

「――俺に恨みでもあんのか！！！！」

氷雨は怒鳴りながらルーに近寄り、顎にアッパーをする。怒りに染まった彼の拳は岩石のように硬く、弾丸のように早かった。ルーは二メートル程しかない天井に激突し、重力によって地面にも叩きつけられ、――死亡した。

――ピコーン、力量レベルが3になりました。

また、左腕から音が鳴った。氷雨は殺した経験のない怪物モンスターばかりを討伐した事によって、経験値が少しだが多く入ったみたいだ。

いわゆる“初心者”だけの特権であろう。

だが、彼はその機械の音を雑音と称し、関心すら向けなかった。
力量レベルが上がったら強くなるとギルドの人は言ってたが、“機械なんかで人の強さは決められない”と思っている彼にとっては、そんなのはたわごとでしかないのだ。

それからの氷雨は、何十匹のルーを見つけても無視するか、一撃で葬って先を進んだ。ルーばかり鉢合わせしていた彼には、弱いはずのルーがとても恐ろしく感じたみたいだ。

もう、ルーの顔すら見たくないらしい。

それは彼がギルドで買った冊子の中身の内、怪物の弱点は食い入るように見ていたが、それ以外はさっぱりで食指さえ動かなかった。なので、彼は各怪物がどの階によく出没し、どの階では遭遇しにくいなどを知らない彼が、——原因なのであった。



二階。

このエリアは水分が抜けきった土の壁で出来ていた。地面はさらさらした砂で、学校のグラウンドとよく似ている。

階段から登ってすぐは広い部屋のように、オレンジ色に光っている花も壁ではなく天井にあった。

キシヤキシヤ!

そんな大部屋で、やっと望んでいたルー以外の怪物と遭遇とした。シュピンネである。体長1メートルぐらいの大きさで、全体的に黒く、クモにそっくりであった。いや、間違いなく八本足のクモだった。地球上では考えられな大きなクモ。こんなのは、誰が見ても気持ちわるく思うだろうが——

「はっ!」

——彼だけは違った。

本日最初のルー以外の怪物に喜んでいた。

しかし、この光景を少し離れた場所で見っていた冒険者達は、不人氣怪物堂々の第二位を飾るシュピンネを見て笑っていた彼を、変人だと思っていたが。

シュピンネの人氣がない理由は簡単だ。

クモの中でも毒の持っていない種類で、討伐するのも比較的簡単で、体長も他の怪物に比べれば大きくはない。

だが、それでも人氣がないのは、シュピンネの独特の性質にある。シュピンネの体液は、人になんの影響もないが、金属で鍛えられた武器を錆びやすくする。いくら消耗品であっても、例えば十回使える剣を二回ぐらいしか使わないのは勿体無い。とくに浪費家の冒険者にとっては、シュピンネを殺すだけで次の日の飯が食べれない、と云うほどの問題である。

——つまり、剣の寿命を犠牲にしてまで殺すような存在ではない、
と思われてる怪物であつた。

キシヤキシヤ!

シュピンネが氷雨に襲い掛かった。彼はシュピンネが現れた事に感動していたので、対応が少し遅れる。その体当たりが“もろ”に体に当たった。

氷雨は二メートルぐらい飛び、床に転がった。

「えっ!？」

「冗談きついで、兄ちゃん!」

どんな者でも、この階のシュピンネ程度なら一メートルも飛べばいいほう。いや、殆どの冒険者はシュピンネ程度の攻撃には躲すか防ぐかの対処をする。まず、攻撃があたらないのだ。

だが、氷雨はあたった——

「意外と遅せな」

——かのように見えていただけだったが。

彼はシュピンネの攻撃を、紙一重で顔に直撃する寸前に、後ろに飛んで躲していのだ。その際、久しぶりにこんなスウエーに似た躲しかたをしたので、すっかり足の加減を忘れていた。だから、後ろに飛びすぎたのである。

氷雨は立ち上がるとすぐにシュピンネに近づき、柔らかい足の関節の付け根を狙って、手刀で一振り。その後、シュピンネは七本の足で旋回し、氷雨に噛み付こうと体を浮かせたので、体の下に潜り込み甲殻の間を貫き手で突いた。

キシャー——！！！！

——だが、皮膚が固いゆえに、氷雨の貫き手は刺さらなかった。

そればかりか、シュピンネは反撃として氷雨を押しつぶそうとする。おそらくシュピンネの体重は百キロを超えているだろう。氷雨は後ろに飛んでのしかかりをなんとか回避するが、シュピンネのほう一枚上手だった。

立ち上がる時間も無い彼へ、透明の糸を吐いたのだ。さらに粘着性も強い糸を。

氷雨は左手を前に出し、糸をもろに食らう。幸いにも、肌に着すると硬くなる性質の糸が巻きついたのは左腕だけだったので、犠牲はそれだけで済んだ。

だが、左手の手首から先は手を軽く握った状態で、固まって完全に動かなくなる。

(開けない……)

氷雨はシュピンネの突進を躲しながら、自身の左手を開こうとしていた。閉じようとする。

だが、皮膚に絡まった途端に硬くなった糸はとれない。右手で糸を触っても氷のようにつるつると滑る。

これが全身だったと思うと、氷雨は身震いした。おそらく全身に絡まると、体が全く動けずシュピンネの養分にされていた、という予想が簡単についたからだ。

彼は試しに反撃してみた。相手の弱点は頭だ。だから頭を執拗に狙った。右手で、足で。

しかし、あたらない。クモは意外と足が速いからであつた。そしてその特性も、クモをモデルとした怪物のシュピンネにもよく活きてる。モンスター

剣や槍なら多少のリスクを侵せば、簡単に勝てる怪物なのだろう。モンスター
そうギルドで貰った冊子にも書いてあつた。だが、氷雨は素手で装備も紙程度しかない。一撃でも喰らえば、いくら力量^{レベル}2のシュピンネでも大怪我に繋がる。

下手な失敗は“死”に繋がる。

戦いは好きだが、勝ってこそその世界だ。負ければ何も残らない。

氷雨はそれをよく“理解”していた為、無闇な行動に出ない。

(で、どうする? 逃げるか?)

氷雨の攻撃の大半は分厚い鎧に守られて通じないし、右手一本では出来ることが限られる。足技は隙が多く、関節技は人ではないの

でまず通じないだろう。

仲間がいれば、と云う想像もするが、瞬時に自分には合わないだろうと蹴った。

仲間がいらないこそその“体術”なのだ。あらゆる状況で、あらゆる攻撃が出来る。どの場面でも攻撃ができ、反撃ができる。その武器を持たないことで得られる圧倒的な火力こそが、“体術”なのである。――はまれば強い、それが体術の本質だと彼は教えられた。

けれども、こんな美談を語ったところで、絶体絶命なのに変わりはしない。

予想外の苦境に冷や汗が出た彼は、酷く思い悩み、自分の頬を右手で全力で殴った。“逃げる”という考えが、少しでも頭に浮かんだからだ。

ここで逃げたらスライムの時の屈辱をもう一度味わうことになる。それだけはなんとかしても避けたかった。

だが、この状況を打破できるほどの“圧倒的な力”は持ち合わせていないし、“最良の作戦”を思いつくほどの頭脳もない。

「あの冒険者弱ええええー！ー！」

「たかだかシュピンネに苦戦してるぜ！」

「というか、糸を喰らう時点でもう駄目だな！」

ギャラリーは氷雨が悪戦苦闘しているのを見て、ここに来るような人間ではないと、十人十色の嘲笑した。

氷雨はまだ思い悩んで、

（俺も老いたな。、また——逃げるといふ屈辱を選択肢の中に入るなんて）

いなかった。

彼はそんなブーイングなぞ耳にも入れず、すっきりとした顔付きとなっていた。簡単な解決方法に気がつき、これまで思いつめるほど考えた自分が馬鹿らしくなったのだ。

（集中しろ！ 力を抜け。一瞬に全てを！）

そして、次の瞬間予想外の行動に出た。彼はシュピンネとの距離をつめ、糸で固まった拳でを大きく振りかぶり——

ドゴン！！

「はっ！？」

「えっ！？」

——頭へ振り落とした。

シュピンネは鈍器で殴られたような衝撃が奔る。ギャラリーは、想定外の彼の行動に情けない声が出た。

（まだだ！！！）

キシャ！？

氷雨の攻撃は一撃だけでない。

二撃、三撃、と相手が噛み付こうとしても、彼は無視して左手だけで、殴り続けた。

左手は固くなっている。ならば傷つかない筈だ、と彼は酷く簡潔に考えたのだ。

その間に偶然激突したシュピンネの牙は、自分の糸の固さにやられて折れていた。

キシヤキシヤ……キシヤキシヤ……キシヤ……

幾つも幾つも、――殴る。そのパンチは突きだけではない。アッパーやフックなど、様々な技術を臨機応変に駆使し、シュピンネの弱点の一つである頭を集中放火した。

やがて、瘴気となって姿が消えるまで、糸というグローブのついた左手一本で戦い抜いたのだった。

周りのギャラリ―は、シュピンネが死んだことによって糸を消えた氷雨の姿を呆然と見ていた。

まさか左手が固まった逆境を、チャンスだと考えたなんて。拘束具を武器と捉えるなんて。これなら武器を消費しなくて済む。と、観客達は新たなシュピンネの攻略方法に、心を躍らせた。

だが、やはり武器を消費したとしても、武器を持たないのは正気の沙汰ではないな、と記憶の中だけに留めたのだった。

（はあ、ジジイの遺言どおりだぜ）

――俺は弱い。

氷雨は予想外の逆転劇を、冒険者にぱちぱちと拍手で賛美を送られたからといって、今回の失態を帳消しにするつもりはない。

勝てたはずの敵に苦戦する。それを“弱い”からだと彼は考えた

からだ。

スライムだってそうだ。あれだって“勝てた”のに、臆病風に吹かれて結果——逃げた。“勝てる敵”に“逃げる”のは自分が弱いからなのだ。

これからの上層部はもっと辛く強い敵が現れる。その度に逃げていれば、逃げ癖がつき、自分は今よりもっと弱くなる。

それだけは避けたかった。

弱くなりたくなければ逃げなければいい。強くなりたければ目の前の敵を全て斃せばいい。

そんな単純な考えに辿り着いたので、彼はすっかりしていたのだ。

（誰にも絶対言えねえ……）

だが、もし、祖父にこの事を知られたら、と彼は次の階を目指しながら顔をしかめた。それ程、自分の先程の痴態が知られるのが嫌だったみたいだ。

氷雨はこの時逃げ腰を改善した結果、——また強くなったらしい。

第十二話 怪物狩り（後書き）

今回は前までの書き方に戻しました。

もしご意見や要望があると、気軽に感想、ご評価などをしてください。よろしくお願いいたします。

第十三話 浮浪児（前書き）

総合評価が1,800を突破しました。

読者の皆さんには、どれだけ感謝をしても足りないと思います。本当に嬉しいです。

第十三話 浮浪児

次の日の朝。

昨日、あれから氷雨は迷宮を三階まで潜った結果、スライムとは会わずじまいだった。

スライムを専門に狩ってるパーティーがいてその者たちがスライムから出るレアアイテムをほしがり、スライムを乱獲しているのが原因らしい。

そんな風に、昨日の迷宮探索を不完全燃焼に終わらせた彼は、不法都市を歩いていたのだが、

「ねえねえ！ きょうもみちあんない、ないかな？」

彼は、腰ぐらいまでの子供に服を引っ張られていた。

肩までの髪の色は黒で、瞳の色も黒だ。服はぼろぼろの布で作られており、靴は履いていない。顔は汚れてはいるが中性的で、おそらく少年だと氷雨は考えた。

この町ではよく見かけるストリートチルドレンの中の一人でもある。

「はあ、またお前か……」

氷雨はそんな子供に向かって、面倒そうに頭を抱えた。

まだ町の全貌すら把握できていない程の広いこの都市では、目的の場所に辿り着くまでに多大な時間がかかる。なので、彼は行きたい店などがあると、金を対価にこの町で育ったストリートチルドレン達に案内を頼んでいた。

しかし、何回も同じ子供に道案内を頼んでいるとその子に――懐かれてしまったのである。

「うん！　そうだよ！　おにいちゃん、きょうはどうなの？　みちあんないないの？」

「ないない。今日は……道案内は、あったよ。つたく……」

「ほんと！　やったあ！」

氷雨は喜んでる子供を見て、溜息を吐いた。

この不法都市では、なるべく人間関係を作らないように、と注意していた。人との繋がりとは厄介を生む、と彼は考えたからだ。ただし、日本であれば別だ、厄介は殆ど生まれまいだろう。しかし、この世界では力が世を支配する。

もし、氷雨はなんらかの拍子に自分の力が誰かに利用されれば、と思う。

武術は自分の身や誰かを守るためなら利用していいが、闘争の道具には使えない、と姉や祖父からよく教えこまれている。

仮に、それを破ったことが姉に知れば、“説教”がもれなくなる。

（あー、おっかねえ）

彼は姉の説教を思い浮かべて、顔を青白く染めた。

そんなにも恐ろしかったのだろう。彼は姉のことを嫌ってはいないが、説教だけは嫌いと思っているのだ。

（まだ、大丈夫。まだ俺は“むやみな闘争”をしていない。だから――修羅道には堕ちてねえ）

貴族風の男の時も、奴隷とされていた自分や久遠等の身を守る為に戦った。階段に足をかけた時に攻撃をしてきた連中も、自分の身を守る為に戦った。と、どちらも言い訳できる。なので、“まだ”と安心しきっていた。

「じゃあ、結晶石の換金所まで頼む」

「わかった！ こっちだよ！」

「おい、こら、走るなって……」

氷雨は子供に手を引っ張られながら、徐々に駆け足へと変わった。った。



彼が歩いているこの町では、多種多様の人種が存在しており統一感はない。肌も、髪も、服も、はたまた信仰する神さえ、人によって大きく違う。

だから、今、氷雨と子供の二人で歩いても、兄弟に見えたであらう。

「ここだよ！」

「ああ、ありがとな。ほら、報酬だ」

「やった！ ありがとう！ じゃあおにいちゃん、またね！」

「そうだな、じゃあな」

子供は道案内が終わると、氷雨から銅貨を受け取り、スキップしながら去っていった。

（やっぱしがきだな）

彼は流し目でその子供を評価しながら、目的地であった換金所へ入って行く。

ギーバツタン。

扉を開くと、木製独特の嫌な音がした。

中は簡素な薬草屋だった。カウンターの下の棚に数種類の薬草が、数束置いてある。客は0で店員は一人。全身に黒い外套を包んだ老人であった。

「よく来たねえ。用はなにかえ？」

「結晶石。これだけで、分かるだろう？」

「ほう、今時、“そっち”とは珍しいのう！」

フードで顔の見えない老婆は、しゃがれた声で驚く。近頃は犯罪の目を避けて、この換金所に結晶石を売る者は少ないからであった。それは、結晶石の買取はギルドでも行っているが、諸経費として二割を、さらに税金として二割を取られる。つまり合計四割を取られるため、値段が幾分か安い。

その点、息がかかっていない“闇の換金所”は、諸経費の二割を取られるだけなので、冒険者としては儲かる。

だが、そのギルドの監視の目が、最近厳しくなった。

この“不法都市”では他の町に比べても、この程度の不正は当然であつたが、それを赦すとギルドの利益が少なくなる。だから近頃は、ギルドに一月の間に力量^{レベル}に応じた一定量の結晶石を収めなければならぬ、という決まりができた。

もし、これを破れば永久^{とこしえ}の迷宮^{ダンジョン}への探索権が三月の間、立ち入れない事になる。

そんな事になったら冒険者にとっては死活問題だ。だから、冒険者は余計な不確定要素を増やしたくないので、闇の換金所に結晶石を売らなくなったのだった。

「だろう？　で、これくらいだったらいくらになる？」

氷雨は大小様々な結晶石をカウンターの上に置いた。

老婆はそれを小さなルーペで、じつくりと目を見開いて、吟味している。

「これはのう、12000……いや13000じゃな。ギルドじゃったら約10000ギルほど売れるじゃろう。相場によって500ぐらいは変わるじゃろうが、大きくは動かん。お前さんこれは売るのがえ？」

「ああ、今すぐ売ってくれ。できれば金もすぐ頼む。」

「まだ若いのに急ぐんじゃな。じゃが、これだけ稼ぐんじゃ。力量^{レベル}はさぞかし高いんじやろ？　いいのか？　こんな“闇の換金所”を利用して目を付けられないんじやろうな？」

「けっ、店員が客の内情に突っ込むな」

氷雨がここまでの結晶石を持っているのは、あの四人の冒険者を殺した時に、持っていた結晶石を奪っていたからである。

その時は結晶石を宝石か何かと勘違いしており、売れると思って盗っていたのだ。

自分の結晶石だけだったら、1000もいかなだろう。それ程、男達が持っていた結晶石と氷雨が持っていた結晶石とでは、雲泥の差があった。

「ふんっ、ここをマークされてるかどうか聞いただけじゃ。万が一にもお主がマークされていたら……おー怖い怖い」

「どんな恐怖かは知れねえが、安心しろ。“初心者”をマークするほど、ギルドも暇じゃないだろう？」

「そうじゃな。ギルドはそんな暇じゃ……!!　じゃあ、お主は……いや、やはり、客の内情に首を突っ込むのはいかな。これが金じゃ、さっさと消えておくれ」

「分かってるじゃねえか。もし“偶然”結晶石を手に入れたらまた来るよ」

氷雨は巾着の中に入った銀貨の枚数を確認して、懐へ入れる。

「お前さん、“偶然”はたまにしかないから“偶然”なんじゃぞ。その意味を分かっておるのか？」

「ああ、たっぷりと……な」

ギーバツタン。

（化かされたか？）

老婆は店から出て行った氷雨を見て、おかしい気分になった。実は老婆も氷雨から、“ある程度”お金を誤魔化していたのだ。それでもギルドの買取金額よりかは高いのだが、詳しい相場を知らない彼を不思議に思ったのである。

もし知っていれば、何か反論していたであろう。

その辺りが、老婆にとってはアンバランスで不可解であった。詳しい結晶石の相場を知らないのに、こういう裏の商売は知っている。彼には“何か”が欠けていると、老婆は思ったのであった。



（やっぱりガキに聞いててよかったな。あいつはこの町を“よく”知っている）

氷雨は街中を歩いていた。

彼はあまり記憶力が良くないので、二日の間に手に入れた情報で興味がないのは忘れていたが、不思議に思っていたことはよく頭に入っていた。

その中の説明の一つに、結晶石は“ギルド”でしか売れない。月に一定以上ギルドへ売らなければいけない。とあった。

何故か不思議に思った。

ついこの前、学校の先生の話に、独占禁止法という法律が出たか

らだろう。何故、結晶石がギルドで独占的に商売しているのか、と。

そう思考すると、ギルドが儲かるからと思った。

儲かるから独占する。普通のことだ。ならば、と考えると、どこかで不正をする者がいるとも思った。

だから、念の為、あのストリートチルドレンに聞いてみたのだ。この町のことを“よく”知っているあの子に。

氷雨が予想は正解だったのだ。

（儲かった、儲かった）

そのため喜びながら町を歩いていると、あの子供が遠くの前方にいた。

「あっ、おにいちゃんだ！ カイにい、あのひとだよ！」

「本当か？ 本当に本当か！」

「うん！ 本当に本当に本当だよ」

「よっしゃああああ！ ユウ、走るぞ！」

「わかった！」

いや、あの子供だけではなく、“一人”増えて二人になっていた。そして、間違いなく氷雨を指差して喜んでいる。

「はあ……」

彼はこちらへと走ってくる浮浪児二人を見て、深い溜息を吐くのだった。

二人が氷雨に体当たりしようとした数秒後、

「おにいちゃん、またあったね！」

「アニキ、少しでいいから話を聞いてくれ！」

氷雨は既にややこしくなったこの現実から、即刻にでも逃げ出したかった。

その元凶は二人。

一人は朝に道案内を頼んだ子供。

もう一人は、始めて見る顔であった。朝に会った子供と同じく短い黒髪と黒目、服もやはりぼろぼろの服で、靴は履いてない。肌は焼けているのか少し黒く、顔は泥で汚れておりどこか生意気そうである。身長はもう一人の子より少し高い。

「――じゃあな、二度と出会わないことを祈るから」

氷雨は数秒前、二人の子供が腹部に突撃してきて、それを避けた。

二人の子供は勢いを殺しきれず、地面にこける。

そのせいなのか、町の皆から注目されていることに気づいている。その怪訝な視線は鋭く彼の心に刺さっており、子供達をスルーしてその場から手だけ振って去ろうとしていた。

「アニキ、待ってくれよ！」

「まってよ、おにいちゃん！」

だが、妙にテンションが高い二人にマントを掴まれ、引き止めら

れた。

「アニキ！ オレ達から逃げる理由がどこにあるっていうんだよ？」

「そうだよ、おにいちゃん！　なんでにげるの？」

氷雨は振り返り二人の顔をじっくりと見た。

二人ともぼつちり二重で、肌は土で汚れてるが血色も悪くはない。あざも見かけないし、大きな傷跡も見かけない。

服だけ変えたら、普通のどこにでもいそうな憎たらしい笑顔の悪ガキである。

「なんでって？　騒がしかったら普通は逃げるだろ」

彼は低いテンションのまま言った。お経のように、どこまでも起伏のない声質である。ちなみに騒がしいとは言葉のあやだ。実際は、面倒事に巻き込まれそうだったので逃げたのだ。

「わたしたちのどこがさわがしいの？」

「そうだぜ、アニキ！　逃げずにオレの話だけでも聞いてくれよ！　もしそれで、納得できなかつたらオレ達は帰るよ！　だから！　だから、オレの話だけでも聞いてくれよー」

一方の子供達は、太陽のように明るい。言葉の一つ一つに様々な感情を乗せ、一喜一憂する姿は、世間の汚れを何も知らない子供だからこそできることだろう。

だが、氷雨はそんな子供達の姿にも屈せず、ただ断る。

「嫌だよ、面倒な」

「ええゝなんでだよゝ話だけ、話だけでいいからさあ。頼むよう」

「おにいちゃんゝおねがいゝカイにいのはなしだけでもきいてよゝ」

「他の奴に頼めよ。別に俺じゃなくてもいいんだろ？」

「いや、アニキがいいんだ！　オレはアニキって決めたんだよ！」

「わたしもわたしも！　おにいちゃんってきめたんだ！」

彼は急遽現れた我俣な子供らしい子供の二人に、頭を抱えた。

氷雨は聖人君子というわけではないが、無抵抗で弱い子供を殴る趣味はないので、殴ることもできない。追い返しても、凶太そうなこの二人だ。いつまでもしつこく追い回すだろう。

逃げてても無駄だろう、と氷雨は思う。今泊まっている宿屋は、二人の内の一人に聞いた。

待ち伏せという案は子供でも思いつくだろうし、宿屋を変えてもこの町を知り尽くした二人にはいずれ見つかるであろう。

「はあ、五分だ。五分だけだ。五分だけなら、話を聞いてやる。それでもいいだろ？」

だから、話だけ聞くことにしたのだ。話だけ聞いて、追い返すと彼は子供だからと、どこか心の中で油断していたのだろう。子供達の要求を、あっさりと飲んでしまった。

「やった！　やったぞユウ！　話だけ聞いてもらえればこっちのもんだぜ！」

「やったー！ やったー！ さっすがカイにい！ おしたらなんとかなるもんなんだね！」

「だろ？」

「だね！」

（俺は選択を間違えたか？）

氷雨は、子供達の手のひらで踊らせたような会話に、なんだか憂鬱な気分となった。

一筋縄ではいかない人間関係は作らないと、どこか心の中で決めていたはずなのに、一番複雑で面倒な人間関係を生んでしまった。

学校にいた頃は、もっと楽であった。

彼の友達にこんな自分本位な人間はいなかったし、皆空気を呼んでくれる。本音で語る時もあれば、だらだらと語る時もあった。

思い返せば、あれもかけがいのない日々だったのだろう。あの時はあのつまらない日々で退屈していたが、今の生活から考えるとあの平凡な日常もどこか新鮮でいいと思える。

少し、あの普段に、帰りたくなった氷雨であった。



入り組んだ路地裏。氷雨は必ず迷いそうである。

氷雨は二人に連れられ、木造の家と家の間を通った先にある古い

平屋に入った。床は土の地面が剥き出しのまま、家具は小さな机しかない。

隠れ家のような家であった。

「へっへん、アニキ、いいだろうここはオレが見つけたんだぜ！」

「カイにいい！ わたしもさがしたんだよ！ かってにカイにいいのでがらにしないでよ！」

「見つけたのはオレだぜ、ユウ？ 悔しいのなら、空き家の一つや二つ見つけてみるよ？ まあ、簡単に見つかるといいけどな」

「うう！ カイにいい、ぜったいわたしだって、もっといいあきや、みつけてやるんだから！」

「へっ！ 待ってるぜ！」

「うううう！」

二人は仲良く言い争っていた。床すらない床に座って。どうやらこの場所は、見つけたから勝手に居座っているらしい。

——やはり図太い子供たちだ。

氷雨も二人に見習って床に胡坐をかき、一言した。

「——帰っていいか？」

「駄目だ！」

「だめだよ！」

「はあ、じゃあ、話を先に進めろよ」

彼は保育園の先生の大変さが、少し分かったような気がした。そして、自分には向いてないと思う。二人だけで。まだ十分と経ってなくとも、こんなにぞっと疲れるのに、先生は一日中何十人の園児と付き合う。

この時、保育園の先生を尊敬した氷雨であった。

「えっと、じゃあ、まずは自己紹介からだな！ オレはカイト！ カイトだ！ 気軽にカイトと呼んでくれ！ で、こっちは……」

二人は氷雨を引き止めるために、まずは自己紹介を始めた。子供改め、背の高いほうであるカイトは、隣の子を手のひらで指した。カイトは髪が短く、子供特有のにやつき顔が特徴だ。

「わたしはユウだよ！ ユウってよんで！ で、おにいちゃんのなまえはなに？」

ユウとは、氷雨に何度も道案内をしてくれた子供のことである。髪はカイトより少し長い肩程度。二人とも顔がよく似ているが、こちらは、はにかんでいる笑顔が特徴である。

「氷雨、どうしても呼んでくれ」

氷雨は常識知らずでない。自己紹介を相手に行われたら、こちらも自己紹介をする。

素気ない態度であったが、カイトとユウの二人は氷雨の挨拶だけで満面の笑みとなった。普通の態度で返されたのがよっぽど嬉しかったのだろう。

ここは不法都市だ。

名など、不用意には教えない。もし、悪人に教えたら最後、借金
の肩代わりや保証人、それだけでなく様々な犯罪の濡れ衣を着せら
れることなど、常識であるからだ。

だから、名を素直に明かす氷雨を、二人は善人だと思ったのだ。
彼等はまだ子供なので、それが偽名の可能性も疑わない。素直に、
氷雨の言葉を受け入れたのだ。その辺りは、まだ二人とも子供であ
った。

「アニキ、お願いがあるんだ！」

「おにいちゃん、カイにいがおねがいがあるの！」

氷雨は本題に入ろうかとする二人を、一旦ここで切った。先程か
ら、喉にずっと引っ掛かっていたことがあるのだ。

「そのお願いの前に、俺のことを兄と呼ぶの止めてくれ。俺はお
前達の兄じゃないし、そんなガラでもない」

兄である。

彼に生来弟や妹はいない。ましてや、弟分などもない。そんな
氷雨は、兄という呼称に慣れてないのだ。

「ええー話の腰を折るなよー」

「おるなよー」

「それにアニキのどこが嫌なんだ？ アニキはオレより年上なんだ
から、やっぱりアニキだろう？」

「おにいちゃんはあったときから、おにいちゃんなんだよ？ わたしはずっとそう呼んでたし、これからもそうよぶんだよ！」

「……分かったよ。ああ、分かった。それでいいよ。で、本題は？」

氷雨は投げやりになった。

彼は言葉で相手を説得できるほど饒舌ではないし、子供の相手に手馴れてるわけでもないからである。

そして、カイトは氷雨の言葉を耳に入れると、一度言葉が詰まり、真剣な顔になってから、――告げた。

「……いきなりだけど――迷宮に……迷宮に連れて行ってほしいんだ……」

「はっ？」

「だから、迷宮だよ。オレを迷宮に、連れて行ってほしいんだよ！」

氷雨はカイトの話をもう一度聞き直しそうになった。

武器も持たず回復薬も携えない彼が言える話ではないが、迷宮とは“死”が付き纏う場所だ。少しの気の緩みが破滅を招き、少しの油断が終焉を招く。

だから、確認をした。

「本気で言ってるのか？」

「うん……アニキにはこんなガキがって思うかもしれないけど、――本気だよ」

「死ぬ覚悟はあるのか？」

「うん、——目的の為に死ねる」

「あそこは、ガキが粹がっていられる場所じゃねえぞ？」

「うん、——分かってる。だって想像すると、こんなに体が言う事を聞かないんだぜ？ 十分……十分“怖さ”は分かってる」

カイトの手はぷるぷると振動していた。

「へえ……！！」

死ぬ気の少年。やる気と覚悟は見る限り十分だ。足りないのは年齢ぐらいだろう。

氷雨は目の前に座る少年を、カイトを、もう一度刮目する。やはり、体が怖さで震えている。ただ死にたいわけではないらしい。

——目的の為に、わざわざ危険を冒すのだ。

氷雨にそれは、理解できない気持ちでもない。

彼も戦いという目的があるから、死という代価を支払える。もし、戦いという目的がなかったら、戦場にすら立てないだろう。

「カイトにいい！ ほんきなのか？ あそここのきけんは、よくきいてるでしょ？ それでもほんとうにいくのか？ しんでもいいの？ しんだら……わたし、ひとりぼっちになっちゃうんだよ？」

そのカイトの決意に、一人反論した。

ユウだ。ユウが、目に涙を浮かべながら反論したのだ。ユウは力

イトが氷雨に迷宮ダンジョンの事を頼むとは思わなかった。

もし、知ってたら紹介すらしなかっただろう。

氷雨には、兄弟か友達かそれとも別の何か、か。詳しい二人の關係は知らないが、深いのだろう。

それだけの深い絆が、この短い間にも彼は見えた。

「ユウも知ってるだろ？ たった数ヶ月さあ、急にここで生きるこ
とになったけど、オレ達のような子供は、死んでいく人が多い。最
近はお金も減ってきた。たまにアニキみたいに、約束を守ってくれ
る人もいるけど……だいたいの方は道案内などをしても払わない。
下手すれば上手いように言いくるめられて、どこかに誘拐される。
やっぱりこれは、生きるためには……お金を貰うためには……しか
たないんだって！」

カイトは、顔を下に向けユウに話している。

彼らのこれまでの生活は悲惨である。

孤児であるために、自分でお金を稼がなければいけない。でも、
子供の自分達に十分なほど稼げるような仕事はない。

助けてくれる大人もいない。カイトもユウも、大人が自分達を見
ても、どこか別の裏にある“金”を見てるのが、なんとなくだが
分かった。

いや、分からなければ生きていけなかった。

孤児達が傷を舐めあうような集団は、この町にもある。だが、そ
れにカイトとユウは馴染めなかった。万引きやスリを生きるために、
平然と行う彼らと価値観が合わなかったこともある。だが、その最
大の理由は弱い者の取り分が少ないのだ。

つまりユウの食事などが少ない。そこにカイトは納得できなかつ

たのだ。

だから、二人はその集団の時に知った道案内や小金稼ぎを知っていたし、その集団から少しだけ盗んだお金のおかげでこれまで生き延びてきた。

だが、もう限界だった。もう二人は最低限の生活さえできないほど、貧しいのだ。

それは一人で下した決断だ。

たった少し、ユウより早く生まれたばかりに、決めた道。二人の年齢差に差はあまりない。おそらくカイトは6，7歳だろうと、ユウはその一歳年下とだろうと、氷雨は見ていた。

だが、カイトはどこかで年上の“自覚”はあった。年下のユウを守らなければいけないという、責任感と共に。

「で、でも、いまでもなんとかたべてけるでしょ？　じゃあそれで、それだけで、じゅうぶんだよ！　わ、わざわざカイにいが……」

ユウは泣きながら何とかカイトを説得しようとするが、

「分かってるんだよ！　ユウが我慢してるって！　食べるのを我慢してるって！　それがオレには……とても悔しいんだよ！　堪らないんだよ！」

カイトがこちらも泣きながら、激高した。

今まで、ずっと笑顔でいたカイト。ユウはその姿しか見たことがなかった。まさか、ここまで思いつめていたとは、考えられなかったのだ。

「で、でもお、だからってえ」

ユウもまだ子供だ。

いつもの取り繕ったカイトの表面上が、見えなかったのである。その裏に、どんな感情が封じられていたのかを。

だから、今、カイトのその感情が爆発したのだ。溜まり溜まった激情が。

「ユウ、分かってくれ。オレは死に行くわけではない。生きるために“命”を賭けるんだ！ 絶対に勝つ！ 負けないから安心してくれ！」

「い、いやだよ。だって、カイにいは、まだわたしとおなじことだし……ぜったいころされるって……」

ユウはカイトに縋りながら泣いている。

カイトはそのユウの姿に、心が痛くなる。

「で、でもな……悪いユウ。——オレは決めたんだ」

でも、しょうがない、とカイトは決めた。いくらユウが引き止めても、もう自分は止まらない。もう、自分は動き始めたのだ。

カイトは服の裾を掴むユウの手をそつと払い、

「まゝ、まゝでようがい、にゝいゝ」

「アニキ、行こうよ」

氷雨のもとに歩いた。

ユウはまだ地面に蹲って泣いている。

カイトは涙を手で乱暴に拭いて、赤くなった目を氷雨に向けた。

そして氷雨は――

「――嫌だよ。勝手に決めるな。そもそも俺は了承したとも言っていない」

――カイトに厳しく言った。

「えっ、でも、オレに色々聞いてたじゃん！」

カイトは急にうろたえ始めた。目に再び涙を浮かべる。
ユウは嗚咽だけで、すでに泣き止んでおり事の結末を見届けていた。

「聞いたただけだ。一度でも言ったか？ お前を迷宮ダンジョンに連れて行くって？」

「い、いや、言ってないけどさ！ でもさ！ でもさ！ この流れだったら普通連れてくдарろ？」

「でも流れも無いんだよ。――これは俺が決めることだ。お前の決断と一緒にな」

「で、でもさ！ ぞれならオレの……オレの……」

カイトは一度枯れたはずの涙を、もう一度流し始めた。
ずるい大人に泣いたのだ。ずるい氷雨に泣いたのだ。

まさかユウに全てを言い、全ての覚悟をしたら、氷雨に全てを蹴

られた。その無力感に酷く脱力して、膝を床につけている。

「決断は無駄だったな」

カイトは涙をぎゅっと拭き、唇を噛んでから、氷雨の胸を両手で叩く。

今度は泣き声ではない。

普通の声であった。

「なんでだよ。なんで駄目なんだよ！ オレの気持ちは分かるだろ？」

「ああ」

「じゃあさ、オレの覚悟も分かるだろ？」

「ああ」

「じゃあさ、じゃあさ、な、ん、で、だめ、な、ん、だよ、く、く、く」

カイトは氷雨の胸を弱い力で叩きながら、また泣き始めた。

彼はカイトの肩を持ち、強引に少年を引き離した。

「世の中はな、義理や人情だけで動いてねえんだよ。世の中の大体はな、メリットとデメリットで動いているんだよ。お前がどれだけの覚悟をしようが、どれだけの決意をしようがな、頼む人間がNOと言ったらそれで、それだけで、お終いなんだ。——お前が思っている以上に、世の中は非常なんだよ——」

氷雨は冷酷に言い放った。

「じゃあ、ざ、オレ、ばどう、じだら、い、い、んだよ、」

「――強くなればいいんだよ。目の前にある壁を乗り越えるのではなく、全てを粉碎できるような“力”を持てば、誰かに頼らなくても生きていける“力”を持てば、――きっと世界は変わる」

これは氷雨が、祖父にも云われた言葉だった。

両親が死んで、塞ぎこんでた氷雨を救った言葉でもある。あの時は、氷雨も親がいないことで苛められたりして、余計落ち込んでいた。

その時に、祖父からこう云われた。

――強くなれ、と。儂がその方法を教えてやる、と。

その言葉がきっかけになり、武術を習い始めた。

やがて、彼は考える。

いつからだろうか。“力”が目的ではなく、“戦い”が目的になったのは、と。

――そして、そこが氷雨と雪の違いでもあった。雪は目的が変わらずに、“今”も生きている。

「でも、ざ、オレ、は――」

ここで出そうになった鼻水を止め、涙を拭った。

「――オレは弱いんだよ、っ！　もう、もう、どうしようもないんだ！」

「カイにい……」

「……」

ユウはそっと、地面に手と両膝をついたカイトを抱きしめた。
数秒間ずっとそうしてる。

お互いを抱きしめて、生きてることを確認するように。二人が二人のために泣いて、悲しんで、また繋がりがあった。
氷雨はその姿をずっと見ていた。

「――ところで、俺はメリットの無い事はしねえが、メリットのあ
る事はする。誰かいねえかなあ？ 結晶石を拾ってくれるだけの人
間は。別に戦わなくていいし、俺が死なない限り命の危険もない。
ただ、結晶石を拾ってくれるだけの人間は、――どこかにいねえか
なあ？」

「えっ？」

ここで、氷雨に驚愕したような瞳を向ける二人に、彼はニヤリと
笑った。

「報酬も出す。もしもいらぬ武器や防具があったら、いくつかは
くれてやる。食事も腹一杯食わせてやる。どうだ？ 俺の為に利用
され見る気はないか？」

真っ直ぐに氷雨はカイトとユウを見つめた。
つくづく思っていたことだ。

自分は迷宮を舐めている。

前回3階までしか行けなかったことが、その証明である。本来ならあの日、10階まで直進するつもりだった。

怪物の強さで言えば、弱点の情報も生態の情報も得たので、何とか勝てると思っている。

だが、結晶石を一々拾う手間と、それを大量に持って怪物と戦う煩わしさ。その二つで三階までしか行けなかった。

だから、誰かを雇おうとは薄々考えていた。

結晶石を盗まないような善人で、自分の獲物を奪わない人間。そして、背後を安心でき自分を信頼してくれる人間。

もし、これらの条件が揃って、その人物をパーティーでも共に戦う仲間でもないが、一種のサポーターのような関係を持てたらな、と淡い考えを持っていた。

だが、この町は不法都市だ。見つかるわけが無い、と想像していた。

しかし、ぴったりの人材が丁度今、見つかったのだ。

より戦いやすい環境を、より戦える環境を、整えてくれる最良の人物が。

（あいつらの仲間に入るのは“デメリット”が多かった。でも、こいつらを仲間にするのはメリットが大きい。だから――）

それに、氷雨は数日前の久遠との会話を思い出した。

皆で、もとの世界へと帰る手助けをしてくれないか、という言葉を出していたのだ。

あの時、彼の提案に乗らなかったのは、デメリットが多かった

から。あくまで、手助け。立場はあちらの方が上で、氷雨は自由な立ち振る舞いができないからだ。

それにきつと、むやみやたらに喧嘩を買うのも駄目だろう。

きつと、一人で戦いたい敵でも、多人数で戦うことを強いられるだろう。

きつと、怪我をしている時は絶対安静、と戦いに行けないだろう。これらの理由から、氷雨は彼の案を断ったのだ。もちろん、あの空気は自分に居心地が悪い、との思いもあった。

だが、反対にこの二人――カイトとユウなら違う。メリットが多かった。

デメリットとしては、食費が多少かさむぐらいだ。

だがメリットとして、主導権を握っているのは、やっぱり氷雨。彼がイニシアチブを握っているのだから、きつと多少無茶な行動をしても許される。それに冒険で一番煩わしい結晶石も拾ってくれる。これらの理由から、氷雨は彼らを従業員として雇うことを決めたのだった。

「グスンっ、それって……オレでも……できるかな？」

カイトは今日何度目かになる涙を拭きながら、氷雨に言った。そこには、憎たらしい悪ガキの顔ではなく、子供らしく笑う顔があった。

「大歓迎だ。その代わりいっぱい働いてもらおうぞ？」

「うんっ！」

「ねえ、おにいちゃん……それはわたしも……できる？」

ここで、ユウが覚悟をしたような顔で、質問した。カイトだけに負担をかけないように、と思ったのだ。

氷雨はその目をしかと見た。

「ユウッ！ お前は危険に身を預けなくていいんだぜ？ オレが、オレが、頑張るから！」

少年にとって、ユウは宝である。

どこまでも守りたい、とユウを大切にカイトは思っていたのだ。

「ううん！ いいの！ カイにいだけに、むりはさせないから！
どうかな？ おにいちゃん、わたしもでかいじょうぶ？」

「いいさ。どうせ、戦うのは俺だ。一人増えたところで、特に変わりはしない。だが、働くのは大変だぞ？」

「わかった！」

「アニキはやっぱりいい人だったぜ！ オレの目に狂いは無かった！」



こうして、氷雨がより快適に“戦うためのサポーター”ができた。彼は保育園の先生の大変さより、“戦い”を優先したのである。

（俺は“弱い”んだ。もっと戦うには、もっと強くなるしかない。

——もっと、もっと……)

彼は強くなるためには、なんでも利用しようと考えている。そのため二人だ。

氷雨にとってカイトとユウは、結晶石専門の荷物運びである。それに二人はこの町の情報をふんだんに持っている。

そこも彼等をパートナーの関係に入れた理由の一つであった。

——こうして、氷雨にとっては利用する“仲間”が始めて出来たのであった。

第十三話 浮浪児（後書き）

特に反論も無いようなので、今回は結晶石と浮浪児の二つを纏めてみました、

ちなみに、読者も声もあって、氷雨がカイトとユウを仲間にしたエピソードも増やしております。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第十四話 VS名持ち

カイトとユウが部屋の中を駆け回りながら喜んでいた。それを氷雨は胡坐をかきながら、ずっと見ている。

だが、そんな兄妹二人の微笑ましい姿に、水を差す者が現れた。

「おい！ お前ら！ そんな喜んでるってことは、——金ができたんだろうな？」

男であった。

三人がいる家の入り口には、分厚い鎧の上から黒色のマントで覆っている巨漢の男がいたのだ。

服の隙間から見える筋肉はゴムのような弾力があり、大木のように太い。片方の耳は千切れて無くて、鼻は潰れており、顔には傷が沢山あった。

そんな男が手に持っているのは、両刃の斧である。斧は120センチ程度の長さで、刃はとても分厚い。

まるで敵を真っ二つにするためだけに生まれたような、そんな武器であった。

「い、いやっ！ あの……まだ……まだです……」

その斧の持っている男に、カイトが頭（しうべ）を垂れた。唇をぐっと噛み、服を両手でぐっと掴みながら。

カイトが迷宮（ダンジョン）に行こうとした理由にお金が必要とあるが、そのお金が無くなった原因は、この男なのだ。この家に住んでいる場所代として、金を巻き上げられ、貧困生活を送っていたのである。

もし、この男がいなければ、カイトとユウは貧乏ではあったが、

食べられないほどの生活ではなかっただろう。

「ふん、前に言ったよな！ 金ができなかったらこの嬢ちゃんを貰ってくつて？ いいのか？ 本当に売り捌くぞ！！」

斧を持っている男は、すぐ隣で壁に体重を預けていた氷雨にも気づかず、子供二人を怒鳴りつけた。

「すっ！ すいません！ 待って下さい！ お金は“必ず”次回用意します！ だから……どうか……どうか……」

カイトは男に対し、すぐに土下座をする。がむしゃらに謝っていたのだ。

そんな男はそんなカイトのすぐ前にまで行き、腰を下ろした。顔は醜くて厳ついが、どこか温和そうな雰囲気も感じる。

「俺もな、孤児のお前が大変なことは分かってる。だがな、俺にもコミュニティの面子があるんだよ。知ってるよな？」

「はい……」

「たしかお前、前回は前々回も払えてない。覚えてるな？」

「はい……」

「だが、俺もお前達が金を納めようと、努力していることは知っている。そこは認めるつもりだ」

「はい……」

カイトは男の言葉に、ひたすらオウム返しのように答えていた。否、それしか、できないのであった。

逆らったら殺される。

言い訳したら殺される。

口答えしたら殺される。」

そんな場面を、カイトは短い間に幾度となく裏の町で目撃した。この男に逆らった貧民達は、皆、あの斧で真っ二つになってるのだ。少年はそんな事前学習があったからこそ、自分にとっての適切な対応をしているのだ。

「俺も鬼じゃねえ。だが、そう何度も待っていると、上から色々と言われるんだ。裏にも詳しいお前なら分かるだろう？」

「はい……」

斧を地面に置いたまま、男はカイトを怒るわけでもなく、遠まわしにつらいのは一緒なんだ、と言いたいのである。

そして、カイトとユウに背後を向き、最後に二人に言い残した。

「次だ。次が最後だ。次、無かったら、嬢ちゃんを貰ってく。いいな？」

「はい……」

斧の男は、それだけで家から去ろう——とした。

しかし、とある人物が目映たのである。

——氷雨で、あった。

ぼろい身の上からすれば、成長した孤児もとれる。それはマン
トが日に日にぼろくなっていた。既に長年使ったような哀愁が、マ

ントから滲み出ていたのだ。

「おい、お前は——誰だ？」

だが、どこか勘に触った。

視覚でも聴覚でもない男の第六感が、氷雨の存在を“異常”と感じ、
“危険”と感じたのだ。

だから、目で威嚇し、肩にかけた斧の握り手に力が入った。腰も
少し低くなる。男は戦闘の準備を、自然としたのである。

「けっ、しがない冒険者だよ」

「嘘——」

男は否定しようとした。

だがふと考えて、冒険者としては“常識”である相手の力量^{レベル}を視
てみた。その力量^{レベル}は5。脅威などとは程遠い力量だ。だからあの“
虫の知らせ”はたんなる錯覚だったと、男は結論づけた。

「——いや、俺の勘違いだった。すまん。怒鳴って……」

「いいさ、“どうせ勘違い”だったんだろ？」

男が素直に謝っても、氷雨は不適に微笑むばかり。

ところで、男は氷雨とカイトの共通点を不思議に思った。孤児と
いう繋がりだけなら、まずこのカイトとユウとは関わらないと思う
からだ。

何故なら、孤児達はこの二人——カイトとユウにに苦汁を飲まさ
れている。大切な金を取られたからだ。そんな人物と仲いいことが

知れば、グループからは敬遠され最悪袋叩きにあう“筈”だ。
ならば次に、二人と氷雨が、兄弟……という可能性を考えたが、
ないと思った。ましてや、親子など論外だ。

何故なら、この三人が兄弟や親子など大切な人物なら、先程のユウを売ると言った時、なんらかの反応が合ったはずだ。しかし、氷雨は声すら出さなかった。

「おい、カイト、もしかしてお前の“金のあて”はこいつか？」

だったら、と男は思った。

数分前、カイトは“金のあて”がある、と言った。浮浪児に“金のあて”など、そうそう出来るものではない。

身売りか、仲間を売るか、それとも盗みか、これらに共通するのはどれも確実性は無く、危険な手段ばかりである。

また、カイトがユウを溺愛してるのは男も知ってる。そんなカイトがユウを売るわけない。売れるような友達もいなければ、盗みの才能もない。

だったら、“彼”が“あて”なのではないか、と男は思ったのだ。ちよつとした予感——でもあった。

「はい……そうです。この人……いえ、アニキが迷宮で、ダンジョン結晶石を拾うだけの仕事をしないか？ って言ってくれたんです」

「……いや、カイト、お前もしかして本気で言ってるのか？」

斧を持っていた男は、カイトの“妄言”に笑った。

冒険者として稼ぎがよくなるのは、大体30階層以下に潜れる力ベル量30以上だ。それ以下だと冒険者の間でも下位で、一寸先が闇——程度の暮らししかできない。

つまり、5という氷雨の力量^{レベル}だと、誰かを雇うなど、夢のまた夢なのであった。

「はい……」

「こんな力量^{レベル}が10にも満たないペーパーの初心者が、お前達に満足な稼ぎをくれると、思うのか？　滑稽だ。非常に滑稽だな」

「えっ！？　アニキがつ、10以下っ！？」

「ああ、さっき親切心から俺が調べた。どうする他に“金のあて”はあるのか？」

「いや……ありません……」

「じゃあ、いいよな？　待っても無駄だと俺が判断する」

男はユウの腕を、強引に掴んだ。

ユウはじたばたと暴れていた。それを強引に男は引っ張った。

「す、すいませんっ！？　すいません！！　ユウだけは……ユウだけ……」

カイトの頭はこんがらがっていた。

氷雨が10以下で、急に斧を持っている男がユウを売り出すと言い始めた。もう混乱につぐ、混乱で意味が分からない。

「カイにい！　おにいちゃん！」

ユウは男に掴まれた腕の痛みのあまりに叫んでいる。

カイトは男のあまりの急転に、動くことさえできなかった。どうすればいいか、どんな判断を下せばいいか、全く見当がつかないのだ。

「ちっ、お前は頭のいい餓鬼とは思ってたが、所詮わりのいい話で騙される餓鬼だったとはな!!」

男はユウを強引に引っ張ったまま、片膝を立てている氷雨の横を通ろうとしていた。

だが、そうは彼の問屋がおろさない。

「——おい、図体だけの馬鹿が、うちの従業員を何処に連れて行くつもりだ？」

ことあるうことか、氷雨は男に喧嘩を売ったのだ。

「アニキッ！」

「おにいちゃんっ！」

「おい、てめえ、誰に口聞いていると思ってんだ？ 冒険者の素人の小僧が、溜口で話せるような存在じゃねえんだよ。俺はよお」

子供達は氷雨の名を呼び、男はドスの効いた声で氷雨を嗜めた。だが、氷雨の態度は相変わらず飄々として変わらない。立つこともなく、攻撃の構えをするのでもない。ただ、男を睨んでいたのだ。

「けっ、ウドの大本ごときが大層なこと言いやがる」

「おい、こら、舐めてんのかああ!？」

「きゃっ!？」

男はユウをカイトの方へ投げ、両手を斧へかけた。今にも氷雨へ斬りかかりそうな勢いである。

氷雨の狙い通りの展開だ。わざと挑発をし、男を怒らせる。この斧の持った強そうな男と、“戦いたい”がゆえの策であった。

ところでカイトは、ユウの体を小さな体で精一杯受け止めていた。

「待てよ。どうせ、戦^やるなら外で戦^やろうぜ。こんな場所じゃあ、斧は不利だろ? いくらウドの大本でも、負けて言い訳されたら腹が立つしな——」

氷雨はそんな男を手だけで制止した。

だが、それは謝るためではなく、より相手を煽るための行為だった。

「へえ〜小僧、口だけは一人前だな! いいぜ、低^{レベル}量^{レベル}ごときが、俺を愚弄したのを後悔させてやる。表へ出な!」

男はそれだけの捨て台詞を吐いて、家から出て行った。

氷雨はそれに、口角“だけ”を上げる。まさか従業員だけを雇っただけで、こんな大物まで引っかけたのが嬉しいのである。

「アニキっ!？ 力量^{レベル}が10以下って本当なの?」

「おにいちゃん!？ あいつだけはたたかったらだめ!！」

二人は思い思いの言葉を、氷雨の傍に近寄ってぶつけた。
だが、彼は不適に笑うだけでだ。

「いい機会だと思ってな。お前等も俺の“強さ”を知らないだろう？
ちなみに今の俺の力量は5だ。普通なら——弱いだろうな」

そして、彼は立ち上がった。カイトとユウは、あくまで勝つ気で
いる氷雨に驚嘆の瞳を向けている。

力量が自分達と全く変わらないのに、そこまでの自信が生まれる
理由が分からないからであった。



それは空は太陽が隠れ、中途半端に黒と白が混ざった色をしてい
た時だ。雲だけがそこにあり、月も星もない。

云うならば、雲が天上をとったような、そんな空模様だった。

闘技場になるべき場所は、細い路地だ。身長以上の壁が両脇を封
じ、その路地の幅は僅か70センチほどで、カイトとユウの家の前
に少しゆとりがある程度だ。さらに道の端には様々な大小のゴミが
錯乱しているので、満足に戦える程のスペースはない——と云える
だろう。

「待たせたな」

氷雨が家を出ると、細い路地裏の数メートル先、斧の男はそこに
待っていた。カイトとユウの二人も彼に続いて外へと出る。

「ふん、まだ怖気づいてないのか傲慢な小僧だ」

男は醜い顔で、苛立っていた。兜をつけてないので、鬼や悪魔と云われても違いの分からぬような恐い形相である。

それだけではなく男は、斧は刃を地面に下につき、下から上へと真っ直ぐに伸びる大きい図体を支えるように、柄を両手で持つ。

「けっ、力量^{レベル}で、“強さ”を計るお前のほうが傲慢だろ？ そんなので人の何が分かるんだよ？ それにな——」

氷雨は双眸で自分の存在を誇示し、マントを脱ぎ捨てた。

半袖の服からは、傷だらけの皮膚が見える。決して太くもなく、細くもない両腕。遠くからでは分からないほどの筋肉が、そこには詰まっていた。

「——“強さ”とはな、血と涙と汗で語るもんだ。たかだか力量^{レベル}程で分る筈がねえだろ……」

氷雨は呆れたように、話を続けた。

これが彼の語る“強さ”であった。長年武術に打ち込んで鍛え上げた彼だけが、云えるだろう言葉だ。

「ふん、そんな戯言——まあ、いい。そんなびびらないお前に敬意を評して、圧倒的な“差”を教えてやる。——俺の名はベル。力量^{レベル}は34。戦士^{ウォーリア}という“名持ち”だ」

氷雨はそんな聞いたことのない“言葉”に驚くわけもなく、びびるわけもない。

ただ、かるやかにその場に立っているように見える。

「そんなこけおどしで俺が戦いを思いとどまるわけ……」

「アニキ、やっぱり止めとこうよ！ “名持ち”は駄目だって！」

「おにいちゃん！ こんなところでいのちをむだにしたらだめ！」

氷雨は自分を抑えることなどしないが、カイトとユウが氷雨に抱きついて待ったをかけた。

二人は、この町の“裏”にいたので情報通だ。

もちろんその中に、“名持ち”の情報もある。その危険性をよく知っているから、自分達の恩人と将来なる人だから、氷雨を全身で止めたのだ。

「おい、カイト！ その無知な冒険者に、名持ちの意味を教えてやれ。教えれば今回“だけ”はユウを、売るのを諦めてやる。いい奴隷になりそうな獲物がいることだしなあ！！」

ベルが氷雨に“名持ち”を教えるのは、決して親切心からではない。

恐怖にのた打ち回って、全てを絶望に変えた上での氷雨を思いっきり蹂躪したいからである。それがベルの趣向で、弱い者を斃すときの楽しみであった。

「……分かった。分かったよ……。じゃあ、アニキ言うな？」

「ああ」

「名持ちとは、称号、二つ名、通り名、様々な呼び方があるけど、^{レベル}力量とは違う強さを持ってる”人のことを総称して“名持ち”って言うんだ！」

「力量とは違う強さ」ってなんだ？」

氷雨はまず力量レベルに対して、疑問を感じていた。

彼は力量レベルに対して、ある程度の知識はギルドなどで手に入れている。力量とは筋トレをして経験値を上げたり、人や怪物モンスターを殺した時に得る経験値で上がる。時には思春期などにある身体的な成長で、経験値が上がることも稀にある。

——そして、力量レベルとは身体能力の合計値を一般的に視覚化したものだ。

力量レベルが高いほうがパワーがあり、スピードがある。体格は関係ないが、細くても力量レベルが高く、身体能力が高い者もいる。

しかし、そうだとしたら、自分はどんな存在なのだろうか、と氷雨は不思議に思ったのだ。

——自分は身体能力が低いほうではない。

これまでに何人も人間を斃してきたが、その全てが自分より力量レベルが高いと思う。それは、全員が自分を見下していたから、そう思ったのだ。

だが、そのどの者より、決して身体能力が劣っていると感じたことが彼にはない。むしろ、優っていると感じた部分さえある。

だから、氷雨は——力量レベルというまやかしを、信じていないのだった。

「うん、名持ちが上げられるアドバンテージは、持ってる名の種類によって変わるけど、その全てが同力量レベルなら、確実に名持ちが高いんだ！」

カイトは氷雨の疑問にも気づくことなく、説明は続く。その真剣な瞳は真っ直ぐに氷雨を見ていた。その内容は詳しい名持ちの詳細であった。

ウオーリア

戦士。武器を持った時の武器の扱いや、戦いに関する当て勘避け感などが上昇する。

ファイター

闘士。素手の状態での体の動きや身体能力等が、上昇する。

ナイト

騎士。気高い精神を持っていれば、武器の扱いや馬術が腕が上昇する。

マジシャン

魔術師。魔法を使えば、魔力の消費を抑えたり、魔法の威力を上昇させる。

どれも限度があるものの、持っていれば確実に戦いを有利に運ぶ。そして、どの名も一番の問題は、入手方法が分からないというものなのだ。戦いの中で得たものもいれば、寝てる間に得たものもある。その条件は不明だから、持ってる者つまり名持ちは、この世界ではエリートと云われていたのである。

「ふーん」

「アニキ！ ふーんじゃないよ！ どれもやっぱり危険なんだよ。オレもベル様が名持ちだったのは知らなかったけど、普通の神経を持つ人なら確実に戦いを止めてるよ！ それこそ力量^{レベル}が高いならまだしも、アニキはベル様より力量^{レベル}が低いんだよ！！」

「じゃあさ、一つだけ聞くが他にも名はあるのか？」

氷雨は思わず聞いてみた。
少し興味があつたからだ。自分が将来戦うかもしれない存在の名が。

「うん……あるよ……。詳しい詳細は知らないけど、さっきの名の上位種とされてる狂戦士。バーサーカー。剣闘士。グラディエーター。聖騎士。パラディン。魔道師。ウィザード。そして――」

カイトの名持ち講義は、まだ続く。

そして、少年は最後の名を言う時は、微かに体が震えていた。

「――救世主。メシア。これの詳細は少しだけど、オレも知ってる。最近、巷で噂になってる大衆を救う“名持ち”と云われてる……」

「そこまで終わりだ！ どうせ死ぬ奴にそれ以上話ても無駄だろうしなあ！ どうだ、小僧、震えてきたか？」

カイトの名持ちに対する簡易版の講義は、ベルの終了の声で終わった。

ベルの顔つきはニヤついていた。自分の名がいかにかに凄いものか、わざわざカイトに説明させたのだ。男は期待したのだ氷雨のうろたえる姿を。

「――つまり、お前は名の中でも下位ってことか」

「ああ――！」

だが、彼の行動は予想に反した。カイトとユウの手を解き、男へと一歩進む。氷雨は名の一部始終を知った上で、男を再度挑発したのだ。

「だから、お前の持つてる名は、戦士^{ウォーリア}は、名の中でも一番下なんだろう？ だったら何の問題もねえ。俺は……俺の持つてる力でお前と
いう壁を壊すだけだ」

氷雨はまた一歩進んだ。

顔の笑みは止まらない。足も止まらない。

ベルにとっては、その全てが胸糞悪かった。己の思い通りにならず、断固として勝つ気でいる氷雨が。

「お前は、とことん俺を怒らせる気だなあ！ もう殺してやる！
奴隷商人にも売らねえ！ ぐちゃぐちゃにして殺してやるっ！！！！」

氷雨の背後にいたカイトとユウはが竦みあがるほどに、ベルの声はドスがとても効いていた。

斧の持っている男の血は、怒りによって熱く沸騰している。顔が赤くなり、全身を苛立ちが巡り回った。大木のような腕は熱い血が回ったことで、準備体操の必要が無いほどに膨れ上がる。

ベルの戦闘準備は、これ以上ないほどに完了していた。

「——さあ、戦^やろうぜ」

一方の氷雨も、戦闘準備は完了している。

血液は強敵という興奮によって煮え立ち、ポンプの役割を果たす心臓によって、体中を流動する。

この戦いは、カイトとユウを救うという免罪符があるので遠慮の心配もない。頭の中にあつたりミッターは、既に外れている。

そして、次の瞬間、——獣達は動いた。

先に動いたのは、黒色の獣だ。

走りよってくるもう一匹の獣に向かって、持っている斧を大きく上下に振り回す。その勢いで、地面に叩きつけたのである。

ドンッ!!

斧技スキルの一つ『衝波』だった。

『衝波』とは斧から出た大きなショックウェーブが、大地を浅く割りながら蛇のように這って直進に進む技スキルのことだ。高さが数十センチの衝撃波は、氷雨を狙って突き進む。

「ちっ！」

氷雨は見たことのない技に、酷く戸惑った。

この技スキル——『飛斬』ほど早くはないので、通常の縦横無尽に走り回れるような場所なら脅威でもなんでもない。

だが、ここは細い裏道だ。

左右に逃げる場所などなく、前に進んでも『衝波』にあたり、後ろに下がっても『衝波』にあたるだろう。

彼の逃げ場は“本来”なら零であった。

「おにいちちゃん！ うえっ！」

だが、氷雨はユウの言葉によって、九死に一生を得る結果となる。彼はユウのアドバイスどおり、壁を蹴って高く上に飛び、男の攻撃を躲したのだ。

（あつぶねえ……）

彼は真下を通り過ぎていく『衝波』を見ながら、内臓が冷えたかと思うほどの緊張感を味わっていた。

ちなみに『衝波』は、カイトとユウの間を通り抜けて家の入り口へあたたったのだった。

「くそっ！ ユウの奴め、いらんことを言いやがって！ ……へへっ！」

男はユウへ憎まれ口をたたくが、あくまでそれは演技。

ベルの本来の“狙い”はこれではなく、地上へと氷雨が降りる瞬間を予測して、『衝波』を今度は当てることなのだから。

ベルは三流の冒険者ではない。一発を“わざ”と外し、二発目で決めるという定石を知っている。

男がやった行動はまさに“それ”だった。

まるで詰め碁をやっているかのようには上手いこと氷雨をはめて、――勝つ。狭い路地という限られた条件化ならでの、策であった。

（クソッ！）

そして、氷雨は今空中だ。

身動きが自由に取れる場所ではない。

さらに地面と『衝波』、両者との邂逅まで僅か一秒までに迫り、と全てが男の目論見どおりの展開だ。

そして、――氷雨は『衝波』とあたたったのだった。

「アニキッ！」

「おにいちちゃん！」

「ほれみろ！」

子供達はこれから起こるであろう惨劇に目を瞑り、ベルは『衝波』に激突した氷雨を鼻で嗤った。

彼は子供二人の近くまで吹き飛ばされ、地を転がる凄まじい轟音が氷雨の場所を周囲に伝え、砂煙が舞った。

「——やっぱり、低力量^{レベル}だったんだな！ そんな雑魚が、“名持ち”の俺に逆らうからこうなったんだ！」

全ては男の想像通りに事が運んだ。

最初の『衝波』を上にしかない逃げ道に避けられ、次の『衝波』で相手を狙う。これ以上ないほどの展開であった。

「けっ、——“この程度”の威力で、何を誇ってるんだ？」

——だから、痩せ我慢を演じながらも立った氷雨に、男は驚いたのだろう。

『衝波』は『飛斬』のような斬撃ではないので、あくまで当たっても衝撃だけが体に伝わるだけだ。ゆえに、体のどこかが斬れることはない。

だがその代わりに伝わるのは、大きなハンマーで殴られた、と思うほどの大きな衝撃である。ぶつかってすぐに立てるような、やわ

な攻撃ではない。

「おいおい、なんで……なんで立てるんだよ!？」

男が知る限り、この攻撃を喰らってすぐに立てた者はこれまでにない。

いや立てるはずの者ならば、かなりの数がいただろう。だが、怪我は一つもなくとも骨髓まで響くその痛みに、“耐えられる”者がいなかったのだ。

「けっ、——気合だよ。気合」

氷雨もやはり体のどの部分も共通して痛かった。

そして、唇を噛みながら痛みを堪え、——走った。

「次だあああああああああああああああああ!！」

男はもう一回、『衝波』を放つ。氷雨は迫ってきたそれを、右手で受けめた。激痛が奔り、拳を握れなくなった。

また、男は『衝波』を放った。氷雨は今度はそれを、左手で止める。折れてはないが神経にダメージが響き、激しい痛みによって左手も動かなくなった。

——だが、彼は止まらない。止まらなかった

最短距離で男まで距離を詰めた氷雨に、男は顔を歪めた。

もう、『衝波』を振るう余裕も無いからだ。

氷雨はこれを——好機と思った。前宙のように一回転し、そのままでの勢いで右足の踵で相手の脳天を狙う。

だが、

「——甘えな。やっぱり雑魚だけあって、煮詰めすぎたジャムのように甘え」

一歩下がられて躲された。

氷雨は回った勢いを殺しきれず、無様に地面へと倒れた。それは頭から落ちることとなるが、強引に体を捻ったので、強打したのは背中だ。

「ぐっ……!!」

氷雨は心臓を強く打ったので、呻き声が反射的に出る。

「——終わりだ」

ベルは腐っても“名持ち”だ。

戦いの経験は、同力量^{レベル}の冒険者を遥かに超える。ゆえに、この程度の予想外に慣れていた。

戦いとは、自分の予想通りに進まないもの。

だからこそ、それにどう対処するかで己の価値は決まる、とベルは思っているのだ。

男は大きく斧を振りかぶり、横たわる氷雨へ斧を——落とした。

それは『重斬』。

あの四人組の一人が行った斧技^{スキル}で、基本的な技の一つ。重さと硬さを最も活かした縦切りだ。縦切りという普遍的な技だからこそ、技^{スキル}アシストによる筋肉のリミッターを外したパワーがよく生かされる。

云うならば、巨人の一振りに近い。

パワー、スピード、どれをとっても人外の技である。
だが、それだけだ。
振りが大きいので、隙も大きい。

ドスンっ!!

氷雨は地面を転がって、何とか『重斬』を躲した。
斧は氷雨という緩衝材が消えたので、そのまま大地を抉り、深く突き刺さる。

彼は男が斧を地面から抜いている間に飛ぶように立って、斧の二倍程度の距離に立つ。

(遅い……あいつらに比べると……)

氷雨は少し距離を空けて、静かに男の戦力を分析していた。黒色の目を凝らし、男の筋肉の細かい部分まで鮮明に。

戦いによって出る興奮を一旦とどめ、客観的に男を注視すれば様々な事が得られた。

例えば、身体能力だ。

身体能力だけは、これまで自分が戦ったあの『飛斬』を操った剣士よりも、あの不意打ち上等の四人組よりも下だろう。

この男の腕の振りは、全て見切れたからだ。それ程に、この男は遅かった。

「次だあああああああああああああああああ!!」

(問題は――)

男は斧を抜いた後、斧を横に振った。路地の狭さを苦にもせず、

周りの壁も粉碎する強烈な横振りだ。

氷雨はそれをダッキングのようにくぐりながら避け、ある“重要な事実”に気づいた。

「まだまだあああああああああああああああ!!」

ベルは己の近くの氷雨へ、斧の性能が最もよく出る距離へ離れさせようと――蹴る。

蹴り自体は美しさのない蹴りであったが、太い筋肉がゆえの力強さがあつた。

(――巧さ!)

氷雨は相手から離れないために、痛みを我慢して両腕でその蹴りを防いだ。

そう、この男の最大の持ち味は、一流の武芸者のような身のこなしだった。

これまでの敵はいくら一般人より通常の身体能力が高くても、自分よりは僅かに低い。どんな優れた技スキルがあっても、戦いの技術自体は自分とは程遠かった。

例えば、武器に応じた距離感や攻め時、守り時を全く知らない。虚実というフエイントもなかったので、類稀な運動力に任せ、技スキルという便利なおもちゃに任せた強引な力技が多かったので、――勝てた。

だが、この男は違う。

技の使うタイミング。相手との勝負の駆け引き。それに自分の得

意な戦い方。

戦闘に必要な技巧を、この男は知っているのだ。

——厄介だった。

これまでにないほどに厄介だった。

「はっ！」

氷雨は敵に近づいたので、顔に拳を突き立てるようにショートアツパーをするが、顔を捻られて躲される。

さらに、斧の刃とは逆の柄の部分で殴られそうにもなる。

氷雨はそれを一歩下がり、柄が通り過ぎ去ったのを見るとまた敵に向かって前進した。



「カイにい、力量^{レベル}って、ぜったいだよね？」

ユウは目の前の一人の獣を見ていた。

拳という爪と、脚という牙で、戦う獣を。

その獣は一步も引かず、遙か高みの力量^{レベル}差と“名持ち”という有利さを、劣勢とも魅せずには戦っている。

「うん、そうだけど……そうだと思うけど……」

カイトも見えていた。力量^{レベル}差がないとも思えるほどの、“互角”の勝負を繰り広げる一匹の獣を。

本来なら、力量^{レベル}差を埋めるのは、武器か防具か“名”だ。

だが氷雨はこの内のどれかで、戦っているのではない。

武器は最弱と云われる素手と、防具は駄剣すら防がない布製の薄い服。しかも“名”は持っていない。

圧倒的な力量差^{レベル}を何で埋めているんだろう、とカイトは疑問に思っただ。

「じゃあ、あれはなんなの？」

ユウの言葉が強く胸を打った。

自分達はベルの力量^{レベル}を知っていたから、反抗しなかった。だが、もし力量^{レベル}が絶対ではないのなら、自分の耐え忍んだあの日々は何だったのだろう、と後悔に陥ったのだ。

「きっと、アニキだからだよ。ユウはあいつに勝てるか？」

でもそれは、勘違いだと少年はすぐに気づいた。

アニキだから戦える。アニキだから力量^{レベル}が絶対ではない。アニキだから武器も防具も必要ない、と。

「ううん」

「オレもだよ。オレも、ベル様に勝てるとは思わない。でも、アニキなら……アニキなら……なんとなくだけど“勝てる”と思える。ユウはどうだ？」

「ふしぎだね！ わたしもそうおもうんだよ」

彼方では、駆け引き自体は地味ながらも激しい戦闘が繰り広げられてる。

斧が煌き、拳が舞い、空気が切り裂かれる。

それは誰が見ても泥臭い殺し合いではなく、武芸者と冒険者の同格の戦いだ。

「じゃあ、することはひとつだね！」

「だな！」

二人はこの戦いを見て、一つの結託をする。

「おにいちゃん！　がんばって～～！！」

「アニキ！　負けんなよ～～！！」

カイトとユウはその戦いを見守りながら、異常な存在である氷雨だけ、を応援したのだ。

氷雨の攻防は、初心者が見れば見るほど情けない戦いだった。避けて躲すばかりで、防御もなければ攻撃もあまりない幼稚な争いに見えるだろう。

だが、二人は違った。

二人は氷雨が攻撃を出しづらいのにもかかわらず、二匹の獣を同等、いや氷雨が勝っていると思ったのだ。

カイトとユウの考えは、誰かが聞いたら嘲笑する考えだ。不利な方を勝っていると考え、有利なほうを劣っていると考えるなど、本来なら正気の沙汰ではない。

でも、氷雨だから、という理由だけで、子供達は納得したのだった。



（どうなってやる！？）

ベルは、至近距離で攻めながらも攻めあぐねている状況に、目を見開いていた。

斧を薙いでも躲され、斧が届くかどうかぎりぎりの距離を狙い定めて攻撃しても、逆にその極限の距離を逆手に取られ斧は僅かに届かない。

彼の考えなら、あの二発目の『衝波』の時点で——もう終わってる。

あの衝撃は骨にまで届くのだ。力量^{レベル}が低いのなら、筋肉も少ない。ならば、衝撃が骨まで貫通し、粉碎して、即死はないが戦えなくなるはずだ。

だが、だとしたら、目の前で起こっている状況はなんだ、とベルは思ったのだ。

己は有利なはずだ。力量^{レベル}は高いし、名も持ってる。武器も防具も装備してる。素手で碌な装備をしていない相手より、“劣る点”はなに一つも見当たらない。

「うおおおおおおおおおおお！！」

ベルは迷いを断ち切るように叫んだ。

袈裟切りも、逆袈裟も、避けられる。

相手の掠り傷を増やしたと思って、決定打にはならない。

不利な点はないのに勝てないこの逆境を、打ち負かすように叫んだのだ。

喉を震わせる。

筋肉を震わせる。

斧を全力で振るう。

決死のベルの斧。

——決着は近い。



「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

空気に轟く剛声。

氷雨は一メートルの距離をベルからとって身構えるほどに、強烈で殺気の籠った声だった。俺は上位種族だ。選ばれた人間なんだ。と、劣勢を跳ね返すように叫んだのでもある。

「——っ！」

氷雨はそれに対抗し、体勢を低くしながら筋繊維がぼろぼろの両腕に軽く力を籠めた。

——痛い。

ただの筋肉痛だが、予想以上に痛い。

先程まで、戦いの興奮で痛くなかったのに、今となって強烈な激痛となって氷雨を襲う。それは多量の電流が両腕に奔ったかのような、痛みであった。

そんな氷雨に、ベルは斧を振るう。

『重斬』ではなく、普通の縦切りだ。

巨軀から生み出される力と、斧本来が持つ破壊力。技スキルではなく、生身で上から迫るその圧力は、“本物”だった。

殺す気迫の入ったその攻撃は、これまでのどの技より、氷雨を圧巻させる。

「――！！」

彼は襲い来る斧を刹那見つめ、地面を蹴った。

数瞬の間合いを見切ったのである。

後ろに下がった氷雨と、上から下に落ちる斧の隙間。わずか一センチにも満たない隙間であった。斧によって切れた黒髪が数本、空中に漂う。前髪の一部であった。

斧が氷雨の顔の前を通り過ぎると、二人の目が黒く輝いた。

それは氷雨とベルの眼球にそれぞれに届く、お互いへの殺意。唯一の共感。絡み合う攻防の策略、である。

その時の、ぴりっと張り詰めた空気が、カイトとユウにまで届いた。

「うおりゃあああああああああ！！」

「はっ！」

そして、彼は走った。大いに叫ぶベルに向かって。

地面に刺さる鉄塊が、鏡のように氷雨を写る。ベルは氷雨を写している間に、斧を上にあげた。『重斬』ではないがゆえに、地面と衝突しなかったのだ。さらにベルは、斧の柄を胸まで引いて、氷雨を横薙ぎに斬ろうとしていた。

だが、もう遅い。

氷雨はそれよりも速く、大地を蹴った。今度は壁を蹴った。さながら鳥のように、空中を自由に彼は動いていた。

最初の蹴りで上に高く飛び、次の壁蹴りでベルの方向へ向かったのだ。

「クソおおおおおおおおおおお!!」

背後に回った氷雨に、刃は振るえない。

重たい斧は、体勢を切り返すのに時間が必要なのだ。だから男は、後ろに一步跳ぶことで、氷雨を押しつぶそうとしていたのだ。

「――!!」

氷雨はくるっとその場で回る。そして、蹴る。その無防備な背中へ、回し蹴りを、であった。

ダメージにはならない。鎧の上だからだ。

もう一度、連続でその背中へ回し蹴りを放った。既に氷雨の体は二回転している。

「――!!」

彼は、回し蹴りをもう一度。

男の体重を蹴りだけで、押し返そうとしているのだ。三度目の強烈な回し蹴りが、男の背中を次々と壮絶な速さで押した。

「――!!」

三度目の回し蹴りで、体が少し浮いた。

いかに、重力が男の味方をしていようと、諦めずただひたむきに蹴り続ける氷雨に、天秤が少し傾いたのだ。

「重いんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!」

四度目。

氷雨の渾身の一撃が、遂に男を吹き飛ばした。

これまでこちらに傾いていた男の体が、顔から地面へと向けられたのだ。

今度はベルに、重力が牙をむいた。鎧で身を固めた男が重さに勝てるはずもなく、顔から地面へと叩きつけたからだ。

これで終われば、どれだけ楽だったろう、と氷雨は思う。

回し蹴りは、あくまで男を倒れさせたただけだ。決定打には程遠い。だから、氷雨は、無防備な右腕を――掴む。

「おい……おい……!!」

ベルは痛みだけでも、自らの右腕が本来とは曲がらない方向に曲がってるのが分かる。

腕が背中側に引っ張られ、捻りあげられている。氷雨は体全体を使い、“ハンマーロック”によく似た関節技を使おうとしていたのだ。

「負けを認めるから! もう手はださねえから!! だから……」

両手を使い、右腕を背中側へ“極まる”方向に曲げ、てこの原理で折れるまで曲げるのだ。

みしししっ、と関節の音がした。肘か肩かもしくはその両方か、出所は分からない。これは、関節が引きちぎれようと、外部の圧力により引き離れようと、している音だ。

左手をバンバンと地面に叩き、必死に悲鳴をあげた。
だが、氷雨は“極める”のを止めない。

[illegible]

そして、ボキッと音が鳴り、男の関節は――折れた。



「次は左も“極める”からな」

氷雨は斧を遠くに投げ飛ばした後、ベルを目の前で正座して座らせている。

男はもう、抵抗する気にもなれなかった。右腕はだらんと動かず、強い痛みが絶え間なく奔っている。

それに氷雨の発言で。次の恐怖も脳裏に浮かんだからだ。

「分かってるよ。それで……俺をどうするつもりだ？」

ベルは黙ったまま、冷徹に自分の今後を聞いた。

男は先程の、あの情けない悲鳴が耳に残っている。止めてくれ、止めてくれ、と叫んでいた悲鳴が。感じたことのない醜態だった。一生の恥だ。

もし、男が生きてこの場から帰れるなら、この戦いは忘れること

がないだろう。

「どうするって、とりあえず殺す気はねえよ」

「えっ！」

この発言に、ベルではなくカイトが驚いた。

氷雨はどれだけベルが悲鳴をあげても、攻撃を止めなかった、敵には容赦のない人物だと知ったのだ。

そんな彼だから、てっきり敵を殺すと思ったのである。

「そんなに俺がこいつを殺さないことが意外か？」

「い、いや、そんなわけじゃないけど……」

カイトはうろたえながらも、氷雨の軽口に返した。

「まあ、いい。今日の俺は気分がいいんだ。で、お前には命を助けてあげる代わりに、やって欲しいことがある」

一方の氷雨は愉快だとばかりに、頬が緩みきっている。

見る限りは安全そうな青年だが、近くで見ると――怖い。灰色のマントで隠してはいるが、下の服には血が滲んでおり、マントは刀傷ばかりで痛々しい。いわゆる歴戦の兵だ。つわもの

「やって欲しいことって――なんだ？」

ベルに、氷雨の提案を断る勇氣はなかった。

目の前の男には情けがない。もし断りなんてすれば、きっと死ぬより非道な結末を迎えるなど、用意に想像がついたからだ。

どんな提案をされても、適当にこの場をはぐらかして逃げればいいと思ったのだ。

「――俺のことを広めてほしいんだ」

「……はっ!? いやっ、なんでもない。続きを話してくれ」

ベルは声が出てしまった。

否定をしないと思っていたはずなのに、素っ頓狂な声が出てしまった。

それほどまでに、氷雨の要求は虚をついていたのだ。

「なに、俺が低力量^{レベル}ってことを、広めてくれればそれでいいんだよ。このエータルには、氷雨っていう低力量^{レベル}で強い奴がいるってなあ」

これが、氷雨がつくづく考えていた姉の探し方――であった。

氷雨は自身に、情報を集める手段も、情報を使いこなして姉を見つける脳も、無いことをよく知っている。

だから、自分では見つけられない。故に情報の発信を選んだのだ。

自分に情報は扱えなくとも、頭のいい姉ならば自分という情報を得たら、上手く使いこなすだろうと考えた。

氷雨は、他力本願な考えだが、これが最善の方法だと思っている。この世界にもしも姉がいるなら、きっと自分を探す、と知っているがゆえの考えであった。

（姉ちゃんは……俺の“姉”だからな）

それは、雪が氷雨の“姉”だからだ。

自分の為なら、なりふりかまわず他人を利用する。
それが、当然自分にも及ぶ、と。

「で、返事は、はいかそうですかのどっちなんだ？ 速く答えろ。
腕がもう一本――亡くなるぞ？」

「はい……ぐっ……分かりました」

男は悔しそうな声を上げながらも、氷雨の意見に従った。
氷雨は最後にうんうんと、満足そうに頷いている。

「ふう、じゃあ用は終わりだ。カイト、ユウ、行くぞ。飯を食わしてやる」

「おう！」

「うん！」

彼は、そして二人を呼んだ。

この場にはもう、何の用もないからだ。

そして、細い路地を通ってる途中で、気がついたようにベルに振り返った。

「あ、そうそう。もし、広めてなかったら、――殺すからな？」

瞬間のことだ。

ベルは身の毛がよだつ程の、寒気を感じた。

それは、氷雨が消えても、消えることのない寒さだった。

そして、知ったのだ。

彼が、敗者を自分を、殺さないのは――利用するため、と。

氷雨は、どこまでも慈悲のない男なのであった。

第十四話 VS名持ち（後書き）

今回は名持ちとVS名持ちの二つを纏めてみました、
もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただければ、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第十五話 とあるエータルでの一日

次の日の朝。

氷雨が冒険者になって、五日目の朝である。

朝なので気温は低く、日光は木で作られた窓で閉ざされていた。部屋の薄い壁の向こう側では鳥がさえずり、早朝から商人達の活気のいい声が聞こえている。

きつと窓を開ければ、いい町の情景が広がっているのだろう。

「うおおおおお……………!!」

だが、そんな本来なら、爽やかな朝を迎えるはずだった氷雨は、固いベットの上で悶えていた。体の体制は横向きで、両手をプルプルと震わしながら、ただ一心に両手の激痛から耐える。

もし、氷雨に目も見張るような大怪我を煩っていたなら、その激痛のあまりに叫ぶのは分かる。

「……アニキ、大丈夫か？」

「……おにいちゃん、だいじょうぶ？」

だが、そんな大怪我もないのに、氷雨は苦しんでいた。

そんな彼の情けない姿は、同じ部屋の隣のベットで仲良く寝ていたカイトとユウが起き、カイトがジト目で注目するほどの悲鳴である。

「いや……全然……大丈夫じゃない……」

「じゃあ、なにがだいじょうぶじゃないの？」

半信半疑で氷雨を演技ではないかと勘ぐっているカイトとは逆に、ユウは純粹に心から氷雨を心配していた。

ユウは子供だ。齡は六以下で、精神的にも肉体的にも幼い。人の気持ちも分ならず、疑うこともできない。

だからだろう。

ユウはその純粹さゆえに、氷雨を氣遣い、左腕を――触ってしまったのだ。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

彼のうずきの原因は、昨日ベルが放った『衝波』だ。

そして、『衝波』の特徴である衝撃を、両腕に受けてしまったために起きた筋肉の断裂。つまり、――筋肉痛が激痛の起因となっている。

もし、動かさなくても叫ぶほどの筋肉痛が起こっている箇所には、人の手が触れれば想像しなくても結果は分かる。

あの痺れるような痛みが、両腕全体に広がっているのだ。それも際限などなく。

「え！？ おにいちゃん！？」

「あ、そういうことか。アニキ、ドンマイ！」

ユウは見ず知らずの内に、氷雨にとって地獄となる行動を、自然にしていたのだ。

カイトは昨日の戦いの一部始終を見ていたので、氷雨が何故大声を出したのが理解できた。あれは痛い、と。



「お、おにいちちゃん！ ごめんね！ きんにくつう？ だとは、おもわなかったんだよ！」

夜とは勝手が違ったメインストリートを、三人は歩いていた。

空には太陽が今日も燦燦と日差しを注いでおり、露天は熱気で満ち溢れている。

獣人やドワーフなど様々な人種がいたが、その中には鎧を着込んだ者もいた。分厚い鉄に体を守られ、刃物で威嚇する冒険者たちだろう。

「……もう、いいから。とりあえず、“ギルド”行くぞ」

氷雨は片腕をぷらんぷらんと振って、ユウに大丈夫と意思表示していた。

朝と比べると、痛みはマシにはなっている。だが、あくまで頂点を朝と考えたら、だ。やっぱり何かに接すると痛いし、強い風が吹くだけで叫びたくなる。

しかし、それを不屈の精神だけで屈してるだけだ。

理由は、氷雨が苦しんでる理由を理解できないユウを困らせないためだ。仮に、困らせたなら、氷雨に近づき体を擦って怪我の安否を確かめようと、体にさわる。

しかも、その時に限って、腕である。

彼はそんな更なる災禍から身を守るため、筋肉痛を断腸の思いで、耐え続けているのである。

それは氷雨も自分の身を案じてくれる子供に、強く言うことなどできないからだ。むさい男には無類の強さを誇る彼も、世間知らずなお子様には弱いのであった。

「アニキ、痩せ我慢が上手いな！ オレなら絶叫してるぜ！」

「カイト……少し黙れ」

氷雨の右側にいるカイトは、軽口で彼に喋りかけた。

現在のカイトは黒い靴も履き、薄い布製の服の上から、氷雨と同じような灰色のマントを羽織っている。昨日、あの後、氷雨が買い与えた物であった。

それに顔についた泥も綺麗さっぱり無くなっており、男らしい、いや、わんぱく小僧そのままだ。

「ねえねえ、おにいちゃん！ これからわたしたち、どこいくの？」

その声の主はユウだ。

氷雨を真似した格好はカイトと同じだが、砂で汚れた髪は黒色ではなく深い藍色。氷雨も分からなかったが、少年ではなく少女で、肩で揃えたショートカットはじゃじゃ馬娘そのものだろう。

ちなみに、氷雨の天敵である。

「違えよ。今日行くのはギルドだよ」

「ギルドって、あのギルドなのか？」

「ギルドって……ぼうけんしゃになるとこでしょ？ だれがなるの？」

氷雨のギルドという単語に、カイトは目を輝かせ、ユウは疑問の色を瞳に宿したまま彼を見上げる。

「お前等が冒険者になりに行くんだよ。ついでの用事もあるしな」

「えっ!?! オレが!?!」

「ああ、迷宮ダンジョンに行くんだろ? なら冒険者じゃないと、あそこは入れねえからな」

氷雨にはその経験がある。

あの日、通行証を持っていないばかりに、門前払いを喰らったのだ。その経験を活かして、氷雨はギルドに出向いてるのである。

「おにいちちゃん、それってわたしもなれるの?」

「さあ、知らねえ。丁度ついたし、聞いたほうが早いだろうが?」

「……アニキ、行き当たりばったりだな」

「けっ、ほっとけ。それより……ついたぞ」

冒険者ギルドの扉は、肉厚で取っ手がない。頑丈さを優先して作られているのだ。

カイトは、ギルドの中から聞こえてくる男達の蜚声に少し怖気づく。しかし、人を気遣わない氷雨が、少年の繊細な心の動きを分かるはずもない。

ボタン!!

腕が筋肉痛のため、足で鍵のついてない扉を開けたのだ。

反動のついたドアは、反対側の壁に大きな音を立てて激突する。その派手な登場には、中で酒に吞まれてた冒険者たちも注目し、目を丸くした。

「お、おい、アニキ！ 本気かよ！」

「さっすが、おにいちゃん！ かつこいい〜！！」

氷雨の横を、アルコール臭に顔をしかめたカイトとユウが歩き、その動向を一瞬も冒険者は見逃さない。

「生意気な小僧め！」

「ガキ二人つれてるぜ、あいつ！ ここは子供の遊び場じゃねえんだよ！」

「いや、武器を持ってないのだから、単なる馬鹿じゃないのか？」

「あははっ！！ 違いねえ！」

多くの罵声を浴びながらも、氷雨は歩みを止めなかった。

「こいつらの迷宮ダンジョンの通行証をくれ。二人分だ」

「……あつ、はい、通行証ですね。もちろん新規……ですよね？」

「ああ、分かってるじゃねえか」

向かった先はカウンターだった。

そこに座ってたのは数日前と同じ、アッシュブロンドの短髪の受付嬢だ。印象はお互いに強かったため、よく覚えていた。

「しょ、少々、お待ちください。すぐにご用意いたしますので……」

受付嬢に数日前の焦りはなかった。

あの氷雨の件があってから、新規の入る時期以外にも、新規の登録者に迅速に対応できるよう準備していたのだ。

だが、そんな受付嬢にも驚きはあった。

新規登録者が――幼児なのだ。

これまでの最年少は十二歳だったので、大幅に記録更新である。いや、幼児のような歳で

「では、こちらに生体情報として血を垂らしてください。ところで、ナイフはお持ちでしょうか？」

受付嬢は石を二つ机の上に置いてから、氷雨に“しか”しない質問をした。

「アニキ、オレ一本だけなら持つてるぜ！」

「わたしはもってないよ！」

「じゃあ、一本だけ頼む」

「ええ、かしこまりました」

彼女は氷雨におどおどとナイフを渡した。前回のナイフと同じナイフである。

カイトは自分の指を傷つけるのに軽く呼吸を置いてから、少しだけ切る。

ユウもナイフを怖がっていたが、ここで泣かれると氷雨は厄介と思ったのだろう。筋肉痛を我慢しながら、ユウの手を刃物に驚いて目を瞑っている間に切った。
すると、

「お、お、おにいちや……ん……手が……手が……」

ユウが手を見て泣きそうになっていた。

目に涙を浮かべ、瞳をうるうるさせせる。

痛みは殆ど無かった。薄皮一枚だけを綺麗に氷雨が切ったことにより、痛みは少なかったのだが、手から“血”が出るといふ現状に、ユウは泣きそうになったのだ。

「ユウ、ほら、泣くんじゃねえ。急に切ったのは悪かったって」

彼はユウの方を向き、泣き出さないよう説得しようとするが、黒真珠のような目に浮かべる涙は大きくなるばかり。

そして両手を前に差し出し、一言。

「……だっこ……」

「はあ……ぐっ、すいません、許可証を頼む」

氷雨は呆然とする受付嬢に登録を急ぐよう急かしてから、ユウを泣き止ますため、抱っこした。そして体を軽く上下をしながら、あやしている。親子にも兄妹にも見えなくはない。

だが、この時、氷雨は必死に耐えていただろう。――激痛を。

「う、う……うう……」

「アニキ、なんかごめんな。ユウが」

「い、いや、大丈夫だ……痩せ我慢も根性の内だから……」

彼女は子供らしく、氷雨の肩に顔を擦りつけながら静かに泣いていた。

カイトはそれに兄として、痙攣してる両腕を我慢している彼に謝罪した。

受付嬢が、時計のような機械をカウンターの上に置くまでの数分間。氷雨は地獄のような苦しみを味わっていた。それは、祖父の拳よりも格段に痛いのであった。

「では、こちらが通行証となっております。子供なのでサイズが合わないかもしれませんが、持ってさえいれば迷宮ダンジョンに入れるので問題ありません。何か聞きたいことはございますか？」

「ユウ、とりあえず降りろ。また今度抱っこしてやるから——」

「ヒック、エッグ、うん……わかった。こんどはじゃ、だめ……だよ。ここからでたら、だよ」

氷雨はユウを下ろし、カウンターの上に銀貨を二枚払って、通行証を二つ受け取った。

「はいはい。分かったよ。——それで……結晶石の換金はどこになるんだ？」

「少しなら、こちらでできますよ。大量なら手続きが必要ですが…

：。ご存知の通り、冒険者には一定期間内に、力量^{レベル}に応じた量の結晶石の換金が必要となっています。もし遅れれば、一度目は三月の間迷宮^{ダンジョン}に入れなくなります。二度目からは冒険者の権利剥奪か、10万ギルの罰金となっています。——お気をつけくださいませ」

受付嬢はとってつけたような挨拶を、氷雨に述べた。
これが——このギルドのシステムである。

最新技術満載の腕時計や、便利な機能が沢山あるギルドへの入会金が安いのは、結晶石の利益のみで十分元が取れるからだ。

どんな凄腕の冒険者であろうと、税金などとして引かれる四割の数字は変わらない。それこそ、力量^{レベル}が高い一流の冒険者ほど、多くの金を搾り取れる。

しかも、迷宮^{ダンジョン}を牛耳っているのはギルドだ。

つまり冒険者からは抗議の声が挙げたくとも、稼ぎがなくなるのは嫌なので、挙げられないのだった。

「これだけ頼む。量は少ないから大丈夫だろ？」

「ぶはっ！ 少ねえ！」

「駆け出し冒険者か！？ いや、子連れ冒険者だな！！」

「いやいや、駄目駄目冒険者だろ！！ それにしても、よくあんなので冒険者になろうと思ったな！！」

氷雨が巾着から出した結晶石が、小指の爪ほどの大きさもなく、数も十個に満たなかった。この結晶石は、氷雨がルウなどを斃して手に入れた結晶石である。

つまり、自分の力で怪物^{モンスター}を討伐した唯一の成果なのだ。

だが、ごつい冒険者はこの有様を見て笑った。
大いに笑った。

こんな結晶石、冒険者なら拾わない者も多い、とても価値が低い俗に云う“屑”結晶だからだ。

「ええ、ではお待ちください。ついでにその『デバイス』をお貸しください。現在の力量と比較して、後どれぐらいの量で期間が伸びるかお伝えしますので」

「ああ、分かった」

数十人いる冒険者達は、奥の受付嬢が帰ってくるまで、じっと三人のことを見ていた。

そして、戻ってくると、

「す、すみません！ 遅れてしまいました！ ええっと、貴方の現在の力量では、三月は収めなくて大丈夫ですね！ 今後とも当ギルドを便利にご活用ください」

受付嬢は、氷雨に数枚の銅貨を渡した。一人の冒険者が、一日程度しか生きられない程の銅貨であった。氷雨はそれを結晶石が入っていた別の巾着に入れる。

冒険者達に想像していたよりも氷雨の力量が低いことが知られると、一気に吹き出し、大声で笑う。

「あいつ、一体どれだけ低いんだよ！ あれだけの量で基準量を満たすなんて……最弱だろ？」

「お、オレ見たぞ！ 力量は5だ！ 最弱記録更新じゃないか？」

「だな！ 弱っええー冒険者だな。あいつと俺達を同類と思われたくないぜ！

三人はそんな冒険者の嘲笑の中、ギルドから出て行った。

カイトが去り際に言った、アニキは本当は強い、は聞こえずじまいである。

少年の心の中には、あんな飲んだくれに言い返さない氷雨に対して、苦い思いばかりが募っていたのだった。



「アニキい、なんで言い返さなかったんだよ？」

ギルドを出てから数分後、メインストリートを歩いていた時のことだ。

カイトは先ほどの氷雨の態度について、聞いてみた。声質はふてぶてしく、馴れ馴れしいものである。

「なんでって、言いかえしたところで俺に何の得があるんだよ？」

「得って、さ。そう言われると何も無いけど……それでも……あの“名”を持っているベル様に勝ったんだぜ？ もうちょっと堂々とするとかさ、俺は強い、って必要以上に示すとかさ、色々あるじゃん。アニキにそういう誇示欲？ そんなの無いの？」

「誇示欲なんて俺にあるわけねえだろ。あったとしても“戦闘欲”ぐらいだろうが」

苦笑いをした氷雨はカイトの横でユウを抱っこしながら、カイトに返事した。

ユウはあれからもう一回彼に抱っこをせがんだ。それを氷雨は“約束”だと素直に従った。氷雨にも、その程度の常識はあるらしい。

「おにいちゃん……」

それから、ユウは離れようとしないのであった。氷雨のマントの端をぎゅっと掴み、口を真一文字に結びながら、一向に氷雨をはなさなかったのだ。

だから氷雨とカイトはユウが自力で歩くのを諦め、人ごみに紛れていたのであった。

「戦闘欲って、アニキはそんなに戦いたいのか？」

「ああ、当然だろ。食欲、睡眠欲、戦闘欲が、人間の三大欲求だろ？」

「アニキ、それ本当か……？ いや、似たようなの聞いたことあるけどさ……」

人と人の間をすり抜けながら、三人は歩いていた。

目指す場所は、あの宿だ。今日は氷雨の調子が悪いから迷宮に潜るのとは不可能なので、早々と帰ってしっかりと体を休めることを選んでのである。

カイトはメインストリートを歩きながら、周りを興味津津に見渡していた。

例えば、数メートル先に見える出店では、焼いた肉の香ばしい匂

いが食欲をそそる。その隣の出店では、果物の甘い匂いが空腹を進めた。この出店は、料理を出しているなどところの他に、貴金属や武具などを売っている出店さえある。

「うっわ！」

感激の声が漏れるほど、カイトはこの光景に歓迎していた。

この町の裏で貧しい生活しかしてなかった彼だからこそ、この眩しい様子を目をキラキラさせながら見ていたのだ。

「あっ、すいません……」

と、そんな時であった。

ユウを持った氷雨に、カイトと同じぐらいの子供がぶつかったのは。おそらく、その子供は少女だろう。深く黒い外套で全身を覆っているため分からなかったが、声から少女だと分かったのである。その少女は氷雨にぶつかったのを謝りながら、また、人ごみの中へ消えていった。

「おにいちゃん……だいじょうぶ？」

「……ああ」

ユウは氷雨を気遣ってか労わりの言葉をかけるが、氷雨の返事は曖昧なものであった。

（まあ、人が沢山いるし……ぶつかるのは当たり前……だよな？）

カイトは先ほどの少女の行動に何の疑問を持たなかった。数百人の者が歩くこのメインストリート。無論、こんな場所では

犯罪などの少ない。目立った場所で犯行がばれると、次の日から“色々”と目を付けられるからだ。

だから、こういった場所では、陰湿な犯行がよく行われるのであった。

(……っ!!)

だが、カイトは町中に歩きだして数分後思い出した。

こんな場所で行われる一つに、窃盗があったのだ。普通なら貧相な格好をしている氷雨など、狙うに値しない獲物だろうが、

「アニキ、実はさ、オレたちがこの町のストリートチルドレンの奴らに嫌われてるんだ。あいつらの大切な金に、オレが手をつけたおかげで、さ」

カイトやユウがいるとなれば話は別だろう。だから、カイトは氷雨に最初から説明し始めた。

「で、それがどうかしたのか？」

「うん。それでさ、奴らのすりの常套手段の一つにさ、わざと体をあてて財布を盗むってのがあるんだけど……アニキは何か盗られなかったか？」

この方法は、カイトやユウも仕込まれた技術の一つであった。親も、身内もない、ストリートチルドレンたちが生き残るのに編み出したのである。

そんな技術の一つに先ほどの少女の行動がとても酷似していたから、カイトは氷雨に訪ねたのだ。

「よく分かったな、その通り盗られたぞ」

「ええっ!? アニキ本当かよ!!」

氷雨はその問いに、少しも動揺もしなかった。ユウも「わたしもむねのあたりさわられた!」と元気に返事をしている。

「アニキ、なんで金を盗られて、そんなに冷静なんだよ!」

少年は欠伸をしながら歩いている彼に、大きく怒鳴った。

だが、氷雨は全く動じなかった。ピクリ、とも眉を動かさない。代わりにカイトの大きな声に反応したユウが、氷雨の胸元をあさる。何が盗られたか、確かめるためだろう。

「だいじょうぶだよ、カイにい。とられたのは“おかねのはいったきんちやく”じゃなくて“なにもはいつてないきんちやく”だから!」

「そういうことだ」

ユウの言ったことに、氷雨は深く頷いた。

先ほどの少女との邂逅。実は、少女の少しだけ感じられた“悪意”に反応した氷雨は、反射的に少女の手を何も入っていない巾着へと誘導していた。

少女もそんな長い間相手の懐をあされないので、不意に掴んだ巾着を手にも、この場所から逃げたのだろう。

それが氷雨の意図したこととは知らずに――。

「なんだ。そういうことかよ……心配して損したじゃないか?」

カイトが安堵の声を漏らす。

そこからは特に何もなく、宿へと帰れた。

途中に恐喝にあっている者や、ひったくりにあっている者などがいたが、氷雨たち三人は特に気にもとめなかった。

流石不法都市だと、慣れていたようだ。

そして、次の日。

三人はやっと、――迷宮^{ダンジョン}へ潜っていたのであった。

第十五話 とあるエータルでの一日（後書き）

今回の話は、天敵に少し付け足す形となりました。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第十六話　そして、一週間

カイトとユウのギルド登録の翌日。

暗く閉ざされた迷宮^{ダンジョン}、三人はその石床を踏みしめながら歩いていた。

光は花。壁は石。

何度ここを訪れても変わらない光景が、そこにはあった。

「アニキ、迷宮^{ダンジョン}って……ここまで怪物^{モンスター}が出ないのか？」

今、彼らが居るのは、まだ1階である。

カイトは氷雨の後を追いながら、想像していた迷宮^{ダンジョン}とは勝手が違う様子に戸惑っていた。

少年の中ではこの場所を、冥府と変わらない場所だと、地獄に最も近い場所だと認識していたのだ。

だが、想像は現実とは異なっていた。怪物^{モンスター}と全然出くわさないのだ。

この1階にいる怪物^{モンスター}は二種類。スライムとルー^{ベル}だけ。両方とも力量^{ベル}1だ。わらわらと蛆虫のように湧き、殺しても殺しても旨み^レが無くきりが無い、と冒険者から嫌われている種類で、どの階にも出現する怪物^{モンスター}の代表格でもあった。

「はあ、いつもこんなもんだよ。だからお前達を雇って、もっと地下に行きたかったんだよ」

「へえー！　そうなんだ！　“じじつはしょーせつよりきなり”って、このことなんだね！」

「まあ、そんなとこだな」

「やったー！あたってー！」

ユウは最近覚えた言葉を発した。

数ヶ月前からこれを教える機会をずっと狙っていたが、ストリートチルドレンのチームからの脱退や、ベルの場所代などでごたごたしていたので、そうそう使うチャンスは訪れなかった言葉だ。

なので、やっと使えた喜びから、ユウはぴよんぴよん跳ねながら歓喜を表していた。

「おにいちゃん！わたしってすごい？」

「さあな、まだ子供だしな」

「むうー！えいっ！」

ユウは子供扱いする氷雨に、ぽかっとお腹を叩いた。

服の下に幼少から鍛えられた腹筋がある氷雨にとっては、ユウの拳など痛くも痒くも無い。むしろ気持ちいいマッサージのような感じだ。

ところで、ご機嫌にユウと喋る氷雨の本日の調子は、最近の中で一番よかった。

昨日の筋肉痛は嘘のように消え、肉体の調子もここ数日で最高だ。それは、戦いの前に関節は外さず、出来た傷も全て無くなったからであった。

そんな風に、氷雨とユウの話に花が咲いていたが、カイトが一石を投ずる。

「……いや、そんなわけないじゃん！ アニキ、これはおかしいよ！ 普通だったら1階を通過するなら、ルーやスライムの一匹や二匹は遭遇するって！」

ダンジョン
迷宮の中で、反響する大声を出したため、氷雨とユウの二人は後ろにいたカイトに振り返った。

ユウはその拍子に、殴っていた手を止める。

カイトは背後を怪物が狙っていると、ずっと後ろを見ながら警戒しているのだ。

凄い緊張感が少年にはあった。

初めての冒険が、カイトを臆病にさせた。危険と隣り合わせの、死と隣り合わせの冒険者になったとカイトは氷雨と違い自覚していたのだ。

「そうなのか？」

「そうだよ！ ったく、アニキは冒険者になって何年なんだよ？ このぐらいの情報、オレのようなガキでも知ってるぜ！」

首を傾げた彼に、カイトは酷評を述べた。

だからカイトは、冒険者の素質としては氷雨より向いているのだろう。

事前に情報をよく集め、それを活用する頭を持っている。戦い以外では常に気の抜けた氷雨とは違い、迷宮にダンジョン一步踏み入れた瞬間から、罠と敵を慎重に注意していた。

武力は及第点だが、その用心深さは冒険者に必須のモノだ。

——冒険者は、決して死んではならない。これは“当たり前”だその言葉通り、冒険者は常に周りを用心し、常に緊張の糸を垂ら

せておかなければ、との教訓がギルドの標語として、示されている。死ぬ者が最も多い職業、ならではの標語だった。

「なんか生意気だな」

「い、いひゃいって、あふいき！」

言ってることはカイトが正しく、自分は気の緩みが多いと氷雨は知ってる。だからといって、年下の戯言に怒らないほど、氷雨は人でもない。

彼はカイトの目の位置までしゃがんで、頬をこねこねと引っ張っていたのだ。

「カイにい、きたよ！ これでふつーだよね！ ほら！」

そんな時、彼女は遠くの目の前を指差した。

彼女だけ、物音が聞こえたようだ。

「なんだ？」

「やっぱり……！？」

目を凝らし、暗闇の先を見た。

その先には、半透明なゲル状の――スライムがいた。氷雨が好敵手だと思っていて、唯一逃げ出した最恐の怪物である。モンスター

「おっ……！」

氷雨は喜びの声を上げた。

夢にまで出てきたスライムに仕返しするチャンスが、やっと回っ

てきたのだ。

戦闘準備を即座に開始した。

片手の指をわきめきと動かし、全身の筋を程よく伸ばす。スライムに関する情報も頭の中で確認し、最適の行動を考え始めた。

「――スライム程度ならオレに任せてくれ！」

だが、そんな彼の復讐が実現することはない。

氷雨が動くよりも先にカイトが走り出し、持っていたナイフで縦に一閃したからだ。

スライムは形を保持する力がなくなり、ぐにと地面に広がった。そして煙となって消える。カイトの手によって、死んだのである。

――ピコーン、力量が6になりました。^{レベル}

そして、少年の右手についた『デバイス』から、音が鳴った。スライムを斃したことにより、力量^{レベル}アップをしたのだ。

魂の昇華とも云われる力量^{レベル}アップ。

この時、カイトは少しだけ強くなったのだった。

「アニキ、見てくれた……」

「けっ、いい気になるなよ」

カイトは褒められようとスライムを討伐したのだが、氷雨にとっては大きなお世話だ。

むすつとしたしかめっ面のまま、彼は落ちた結晶石の横を通り過ぎた。折角のスライムを横取りされて、どこまでも機嫌が悪かったのである。

「あーあ、おこらせちゃった〜！」

ユウは慌てるカイトを面白そうにからかって、氷雨の後を追った。彼女の足取りは軽く、スキップまでしている。

その際、彼女が結晶石を拾うのは忘れなかった。

「オレが、オレが、何したって言うんだよぉ〜！！！」

少年は遠く過ぎていった彼の背中を見つめ、叫びながら追いかけた。

氷雨の機嫌を損ねた理由が、いまいち分からないカイトなのだった。



6階。

これまでの階に出現した怪物は、氷雨がほぼ全て斃してきた。ギルドで手に入れた情報と、カイトが持っていた肉声による情報。

この二つの情報が合わさった結果、氷雨は楽勝とまでは行かなかったが、掠り傷程度の怪我で出遭った全ての怪物を斃せた。

——ちなみに、スライムはまだである。

三人が歩いていたエリアは、先が見通せず暗い。どうやら、この階の構造は壁がないようだ。

迷宮は階層ごとに、構成がガラッと変わる。壁や床の素材から、出る怪物の種類まで、千差万別であるのだ。

そんな6階の景色は、1階となら変わらなかった。
だが、1階と比べると簡単に息が切れる。この迷宮^{ダンジョン}は下に伸びているため、下に行けば行くほど基本的に空気が薄くなり、体力が無くなりやすいのである。

「おにいちちゃん、カイにいい、疲れた……」

だからユウは腰を大きく曲げながら、深呼吸ばかりしていた。未発達な身体に、地下型の迷宮^{ダンジョン}はつらいのであった。

「じゃあ、カイト。おぶってやれ。お前は兄だろ？」

「ええ……!? アニキ、やだよお！ オレだってしんどいんだよ？」

そこで氷雨はカイトにユウを背負うよう頼むが、一蹴された。カイトも心身的にまだ未熟なので、自分のことだけで精一杯なのだ。この時、雇うのを失敗したな、と氷雨は心の中で思っていた。

「つかれた、つかれた、つかれた……!!」

「俺は……できねえよな。だって、あれ見ろよ」

駄々をこねる子供二人は、氷雨が指差すほうを見つめた。
遠い先は闇。

並みの夜目では見えないので、カイトとユウも疑惑の色を氷雨に向けた。

「アニキ、なに言ってんだ？」

「おにいちゃん、なにもいないよ？」

しかしそれは、すぐに間違いだったと気づく。

キーーーーー、ガッシャン！

氷雨の指差すほうから機械音が、いや歯車の回る独特の鉄と鉄が擦れる嫌な音が聞こえたのだ。甲高く、それでいて不快な音が三人の耳に深く残る。

足音も特徴があった。

一歩動くたびに金属がぶつかるような高い大きな音を響かせる。まるで自分達が“来たぞ”と、自己顕示欲に強いかのようであった。

やがて、現れた姿は、白い鋼で包まれたボディ。二足歩行で基本的なモデルとしては、人と大きく変わらない。腕にあたる部分には四本の指があるし、関節も人とはほぼ同じ場所にある。

だが、胸が大きく発達しており、“そこ”だけは一枚の鋼で覆われていた。

人にあたる関節部分から見えるのは、沢山のコード。

赤や青、緑色など沢山の線が見えている。

それ以外の箇所は、全て鋼で守られていた。

そんな怪物モンスターが持っている武器は、一本の剣。

この剣はバスタードソードと呼ばれていて、長さは1，2メートルほど。幅は狭く、両手でも片手でも扱える剣だ。

「アニキ……あれ多分、“メンシュ・アイゼン”だよ！」

カイトが言った。

氷雨もメンシュ・アイゼンという名の怪物は、強く脳内に残っている。モンスター

ダンジョン 迷宮の中でもオークと二強と云われる人型怪物で、もしオークが生物を強調して創られたなら、メンシュは機械を強調して創られたとされている。

メンシュの後に付けられている名は、すなわち装甲の金属の名だ。アイゼンの意味は――鉄。

メンシュの中でも最下位に位置する怪物であつた。モンスター

だがメンシュの中では最弱でも、ダンジョン 迷宮の中ではそれなりに強い。同じ力量なら間違ひなく苦戦をし、パーティーを組んでいても負ける可能性がある怪物だ。モンスター

「おにいちちゃん……」

ユウは氷雨を心配した。

彼女も噂として聞いてたが、メンシュに関するのは悲惨な話ばかりだ。レベル

力量が高い場合は何の問題も無い。しかし、近い場合やそれ以下レベルの場合は、死ぬ可能性がギルドの統計で六割を超えている危険な怪物だ。モンスター

「これって……俺のカモだよな」

「えっ!？」

「おにいちゃん!？」

でも、氷雨の捕らえ方は常人と違った。

メンシュの弱点は人と変わらない。心臓、頭、関節など、ただし、関節以外の重要な装甲には、金属の鎧が邪魔をする。

そこが、“普通の冒険者”には苦手なのだ。

「ギルドで最初に見た時から、思ってたんだよ。お前は俺のいい“練習台”だって」

氷雨はメンシュ・アイゼンを、舌なめずりをしながら見ていた。

彼が、“人の弱点”を熟知しているからだ。

それはギルドよりも。どの冒険者よりも。

「アニキ、それ……どういう意味なんだ？」

「簡単な話さ。あいつの装備は、ベルやその他冒険者と変わんねえ。だから力量の低いあいつは、いい“踏み台”になると、な」

「あっ!？　でも……」

カイトは、氷雨の言葉の意味に気がついた。

「おにいちゃん、わたし、いみわかんない。むずかしいよぉ!」

「はあ、——簡単に言うと、そうだな。俺があいつに勝つんだよ。分かったか？」

「うん!　そうなんだ!　へえ」

ユウに氷雨はにっこりと笑った。

メンシュ・アイゼンは律儀にも、まだ襲ってこなかった。否、三人を敵視すらしていなかった。

メンシュ・アイゼンの目は、近くの高い温度のみに反応する。ヘビのピットセンサーに近かった。

そして、この怪物は他のとは違い、自らが襲うことは――無い。モンスター

だが、自らが襲うことは無いが、襲われたら抵抗する。

これまでに死んでいった者も、メンシュ・アイゼンが持つ希少なドロップアイテムを求めて戦ったのだ。

「――さあ、戦^やろうぜ」

氷雨はそれだけ言うと、一気に大地を駆けた。

キリキリッ！

嫌な音がメンシュ・アイゼンからし、剣を両手で持って“それは構えている。”

そして、彼が近づくと、――長い剣で突いた。

氷雨は化勁、つまり手で剣の側面を触り、逸らすようにして左に剣を屈いだのだ。

ダンッ！

剣を手で往なすと、氷雨は距離を詰める。

そのまま一歩大きく踏み込んだ勢いで、メンシュ・アイゼンが剣を掴んでいた手の部分を肘で上から下へ。

カランカラン！

彼による、重力を上手く利用した肘鉄に、メンシュ・アイゼンの握力は適わなかった。剣が手から離れたのだ。

モンスター
この怪物は自身の特徴である怪力を使おうと、氷雨を包容力で潰そうとした。

「――遅いな。誰よりも」

だが、その大きく広げた腕の速さは、これまで彼が会った敵の中で最も遅い。

それはあのベルでさえも超えるほど、だ。

氷雨はその機械で創られた右手を取り、――飛んだ。

メンシュ・アイゼンではなく、――氷雨が飛んだのだ。

彼は相手の右腕に絡みつくように飛び、上腕部を自分の両脚で挟んで固定する。

同時に両手で掴んだ小手返しのように横に捻って、身体を大きく捻る。

氷雨は飛びついた慣性と自身の体重、それに小手返しによって、メンシュ・アイゼンを頭から落とすように投げ、そのまま腕を逸らせるように腕挫十字固に似たのを極めたのだ。

投げと関節の複合技である。

技名は、『竜巻』

技をかける方が、派手に身体を回すことから付けられた名であった。

ガッシャン！

メンシュ・アイゼンは頭を強く打ち、そのまま肩を関節技によって大破させられる。

頭は凹み、肩からはコードが沢山飛び出た。

そして、霧となってメンシュ・アイゼンは――死んだ。

――ピコーン、力量が8になりました。

関節技をかけていたので、仰向けに寝る体勢のままの力量アップだったが、氷雨はやはり大して関心を向けなかった。

（久々に使ったから、決まってよかった……）

それよりも関心を向けたのは安堵感。

『竜巻』は氷雨が使える中でも強力無比な技だが、その分でたれなほど隙が多い欠陥品だ。だから、これを使うのは二年ぶりなのだ。

「アニキ、今のかっけえ〜！ オレにも教えてくれ！！」

「おにいちゃん、今のすっごお〜い！！」

だから、既に結晶石やドロップアイテムの回収が終わってる子供二人から、感激の目を向けられると、なんだか申し訳ないような気持ちになる。

これはまだ、氷雨の中では“不完全な技”なのだ。

――まだまだ大技すぎる、と。

「――さて、帰るぞ。今日は、この程度で十分だろ。ベルからは金を奪ってたし……」

「おう！」

「うん！」

氷雨はこの日はこれで帰った。

まだまだ、己の未熟さが見えた日だった。

例えば、技の選択肢であったり、大群との戦いで二人の守り方、などだ。

次の日も氷雨潜っていた。

子供達には、“ある情報収集”を頼んだから、一人で迷宮ダンジョンに出向いたのである。

その探索の帰り道で、今日遭遇したメンシュ種の一つに出遭った。

その名は、メンシュ・ブロンズ。

銅のメンシュだ。

メンシュ・アイゼンとの違いはスピード。装甲が薄い分、ブロンズの方が早いのだ。

——そして、プロローグへと戻る。

第十七話 エピローグ

彼がメンシュ・ブロンズを斃して力量^{レベル}アップしたすぐ後のことだった。

すると、これまでとは異なりもう一回『デバイス』が鳴ったのだ。それは、氷雨が初めて技^{スキル}を手に入れた時でもあった。

——ピコーン、『力量^{レベル}読み』を獲得しました。

彼にとっては聞きなれない名称である。

だが、冒険者にとっては“これ”がないと、死活問題になる。何故なら、相手の強さの基準となる力量^{レベル}が、無制限に“視れる”からだ。もし敵の戦力を読み間違えたら、己の死に直結するからである。

そして、この技^{スキル}は他の全ての技^{スキル}と違い、特異な点がいくつかあった。

まず、武器の種類に左右されたりしない。これは剣だろうが、弓だろうが、条件さえ満たせば誰にでも使えるのである。

次に、力量^{レベル}が10を超えれば、誰にでも扱えたのだ。氷雨がこれまで戦ってきた冒険者達も、この技^{スキル}を使って彼の強さを下に視たのだ。

（でも、使わねえだろうな）

一般の冒険者ならこれ以上ないぐらい便利なものだが、“強さ”を力量^{レベル}以外の基準で測っている彼には無縁のものだった。

そんな風に氷雨はメンシュ・ブロンズの結晶石や、ドロップアイ

テムである大剣を拾いながら考えていると、あの三人組の一人が駆け寄ってきた。

「お前……いや、こんな呼び方じゃあ、俺等の窮地を救ってくれたのに申し訳がたたねえな！ 俺はレン！ 是非、名前を教えてください！」

槍を持った男。レンである。

兜をとったレンの肌は若干焼けてはいて、身長は180と氷雨よりも若干高くモデルのような八頭身。髪は短い茶髪でツンツンに立っていた。顔は綺麗には、整ってはいない。だが、太いその眉毛も含めて、男らしい顔立ちだ。

声は大きく、細い中に詰まった筋肉も、燃え滾ったような目も、その全てが炎のように――熱い。

「……氷雨だ」

「そうか！ 氷雨か！ これからよろしくな！」

「あ……ああ」

レンは戸惑う氷雨の右手を強引に握り、尊敬するような眼差しで見つめた。

そんな青年の武器は槍だ。現在は背中にかかっており、穂先は幅広く火を模した複雑な模様となっており、色は赤い。

鎧は革で作られており、関節以外のほぼ全身を覆っていた。

「それにしても氷雨は凄いなあ……！！ あいつは俺達^{イレギュラー}が手も足も出なかった異常だ！ それにあんな力量^{レベル}で勝つなんて……！ 憧れるぜ……！！」

「そうだな……」

氷雨は相槌だけを打ちながら、マシンガンのようなレンの話に答えていると、それを止めるように一人のがやってきた。

走らず、慌てず、ゆっくりと歩んできたその男は、先程氷雨がメンシュ・ブロンズに立ち向かうのを止めた者だった。

「レン、君はただでさえ暑苦しいんだ。それよりすまなかったな、力量が低いってだけで君の実力を下に視て……。お恥ずかしい限りだよ。ボクはアキラだ。もし、差支えがなければこれからも宜しく頼むよ」

アキラは強く握るレンとは違い、優しく氷雨の手を握った。

氷雨もそれに握り返す。彼にとってはレンよりも、好感がまだ持てる男だ。

「ああ、よろしく」

アキラは、長い金属で出来た棍棒を持った男だった。装備はレンとよく似ている。ただし、兜はなしだ。

背は氷雨よりも低く、体の線は細い。特徴としては透き通った白髪よりも、眼鏡に目が行く。こちらはレンとは違い、女性のように目鼻が整っていた。

文武両道と眉目秀麗、どちらの言葉も似合いそうな男だった。

「おい！ アキラ！ 俺が氷雨と喋ってたんだぞ！」

「ふん、君のような猪突猛進の男のせいで、彼は困ってたんだ。それを分からずしてどの口が言う？ 先程のメンシュだって、君が戦

うと言わなければ、彼に火の粉が飛ぶこともなかった！」

「だからって、しょうがねえじゃんかよ！ お前も知ってるだろ？俺が“あいつ”を早く助けたいってことは！ その為には金が必要って！！」

「ああ、知ってるさ！ 僕も君が“あの子”を助けたいと、頑張っているのは分かる。それに僕だって“あの子”を助けたいさ。だからって、命を無駄にするのは違うと僕は言いたいんだ！」

氷雨は、急激に発展したレンとアキラの会話をずっと聞いていた。お互いに強い眼差しを向けた言い争いは、次第に発展していく。冷静と思っていたアキラの語尾も、どんどん強くなっていった。

そんな口喧嘩を、彼は半分も聞いてはいない。

仲がいいから、すぐに治まると彼は思っていたのだ。仲が悪かったら口喧嘩をすつとばして殴りあいになるとか、口喧嘩の内容も下劣な相手を罵る言葉ばかりになる。

だが、この二人は違う。

この二人はあくまで価値観の相違で、争っているだけなのだ。だから、口喧嘩の内容も考え方の違いだ。

氷雨は詳しい事情は知らないが、大体の理由は分かった。レンは誰かを救うために金が必要で、そのために沢山の金を稼ごう、危険を冒している。アキラはそんな命を犠牲にして、金を稼ごうとするレンを非難していた。金より命のほうが大事だと。

「こらっ！ 喧嘩しちゃ駄目でしょう！」

そんな二人の言い合いを、止める者がやっと現れた。

女性であった。

腰まであろう癖のある黒髪を、一つのゴムで結い上げながら縛っている女性だ。

「で、でもよ……」

「マミさん、し、しかし……」

「でももしかしても関係ないっ！ 争いは絶対駄目って、約束したでしょう！」

その威圧感のある女性は綺麗だった。

長いまつげの下で茶色の猫目が映えており、唇はワインのように深く赤い。アジア系の綺麗な顔立ちだった。チャームポイントは、口元にあるほくろだろう。

それに身長は高く、スタイルは完璧。特に氷雨の姉とは違い、胸部は大きかった。

見る限りは非の打ち所がない女性だった。

持っている武器は木製の簡易な弓。背中にある矢筒には三本の矢しか残っていない。今日の激戦でいくつか失ったのであろう。

装備は金属製であるが、ほぼ全身を隠している男性二人に比べると、胸と腰しか隠していないので薄い。

遠距離武器ならではの、軽装備だった。

「ごめんね。見苦しい姿を見せて……」

「い、いや、大丈夫だ。じゃあ、俺はこれで……」

氷雨は口元を隠して笑う彼女の登場にしめたと思い、ここから立

ち去ろうと軽く手を振った。

しかし、首もとの襟を掴まれ、無理やり振り向かされた。

「ちょっと待って！ まだ、私の紹介が終わってないでしょう？
名前はマミ。これからよろしくね！」

「お、おう……」

マミは優雅に氷雨に自己紹介をしたが、彼の顔は若干引きつっている。

早く彼は帰りたいのだ。

彼がメンシュ・ブロンズから手に入れたドロップアイテムは、大剣。持ちにくく鞘も無いので、肩に背負う羽目となる。これは高く売れると思うので、捨てたりはしないが非常に重い。早く帰ってこの武器を部屋に置きたかったのだ。

「それと――聞きたいことがあるんだが、氷雨ってもしかして、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーじゃないのか？」

「!？」

氷雨は、アキラの質問に心臓がドクンと高鳴った。

ゲームプレイヤーと聞くのは、必ず同じゲームプレイヤーだ。それ以外の人間では、ゲームプレイヤーなんて言葉知らないだろうし、氷雨も実験として街中の人にゲームプレイヤーと尋ねてみてが、結果は不発だった。

なので、この摩訶不思議な世界で、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤーは、あの広場にいた“数十人”しか氷雨は会ったことがなかったのだ。

(どうやって答える?)

彼は自分に問いかけた。

この場で自分がそうだと答えても特に問題点はない。同族意識から仲間意識が生まれ、いい関係が築けそうでもある。元の世界に帰る方法も、一緒に考えてくれそうだと。

それに立場的には現在、敵を斃した氷雨のほうが上だ。一方的に利用されるのはあり得ないだろう。

考えれば考えるほど、利点ばかりであった。

「……いや、“ダンジョン・セルボニス”のゲームプレイヤー？
なんだそれ？ 聞いたこともねえぞ」

「へえ——そうか」

「質問はほかに無さそうだな。じゃあ俺は帰るわ」

でも、彼は教えないことを選んだ。

それはまだ、この世界を楽しみたかったからだ。

強大な怪物も、最低な冒険者も、敵になりそうな相手はまだ残っている。この世界の生活は——まだ始まったばかりなのだ。

「じゃあ——また、また会おう」

「ああ、じゃあな」

アキラは焦りながら去っていく氷雨の背中を、細い目で睨んだ。
彼は氷雨が自分の問いに即答しなかったことから、彼をゲームプレイヤーだと確信したのだ。もし、本当に知らないなら即刻に慌てもせず、知らないと答えるからであった。

「氷雨、じゃあな〜!!」

「氷雨君、また会いましょう!」

レンとマミも、一回も振り返らない氷雨に別れを告げた。

疑惑を向けているアキラとは異なって、レンとマミは氷雨に好印象しか残っていなかった。

(あーあ、ばれたか。俺は——嘘が下手だなあ)

だが結果的に嘘をついたとしても、氷雨はアキラにゲームプレイヤーだと気づかれたのは気づいていた。

最後にアキラの顔を見たとき、表情が一変して鋭くなっていたからだ。そんな彼のアキラの評価は高かった。やはり、あの秀才のような雰囲気からして——意外とやるな、と。



「アキラ、どうして氷雨にあんな質問したんだよ? あんな“強い奴”が俺達と同じわけないだろう?」

「レン、なんだっていいだろう。単なる確認だ。情報は一つでも多く必要だからな」

アキラは誰にも疑いを向けないレンに、真実を話さなかった。

彼は親友として、レンの長所を変えたくなかったのだ。そんなレンの長所は、——あの熱さだからだ。頭は回らないが、困ってる人

がいたら迷わず手を差し伸べる。その性格に、アキラも助かったことがあったのだ。

「ねえ、なんの話をしてるの？　もしかして男どおしの会話かな？」

「ち、違えよ、ママ！　だからそんなに顔を近づけるなって！」

ママは、男二人で話しているのを不思議に思ったのか、不本意にレンの顔に近づけた。

その顔は怪しい魅力に満ちていた。天然なので男を騙すことはできないのが、口元にあるほくろが彼女の魅力を最大限に引き出しているのだ。

その魅力は、レンを真っ赤にさせるほど、だ。ついでにママも、レンの顔に近づいたので赤くなった。

「ママ！　レン！　いつまでもイチヤイチヤしてないで、そろそろ僕達も帰るぞ！」

「お、おう」

「う、うん」

アキラは、親友二人を溜息をつきながら、行動を即した。イチヤイチヤと指摘された二人は、完熟トマトのように顔を真っ赤にする。

彼が考えるに、この二人は早く付き合っしまえばいいと思う。相思相愛だからだ。二人とも鈍感なので気づいてはいないが、端から見れば瞬時に気づく。

ところで、とアキラは帰る道を辿りながら、レンに聞きたいことがあった。

「レン、君は“あの子”を本当に助けるのか？　こう言っちゃあ聞こえは悪いが、あんな境遇の奴なんてざらにいる。それでも“あの子だけ”をまだ助けたいと思うのか？」

だから、アキラは一回レンに確認をしてみた。

あの、“銀髪の女性”である奴隷を、救うのは事実なのか、と。非合法の奴隷なんて、この世界には数え切れないほどいる。その種類も様々だ。エルフ、ドワーフ、人間、それも老若男女問わず様々な値段で売られている。

それら全てを救うなんて、奴隷商法の根本から壊さなければいけない。

そんなの不可能に近い。

だから、再確認したのだ。——本当にあの子を助けるのか、と。

「おう！　だってあいつは何も言わないけど、助けを求めているんだぜ！　だったら、助けなくちゃならない！　例え、それが数多くいる奴隷の一人という氷山の一角でも、あいつを助けちゃならない理由にはならないんだ！」

でも、レンは言った。

偽善とも云えるその考えを。

レン自身も、これが自己満足とは分かっている。この世界に来た時ではなく、“ダンジョン・セルボニス”のゲームをプレイしていた時に知り合った“彼女”を救う、と。

「フン、君らしいな」

アキラも始めから、答えが分かっていた質問だ。

あの“レン”が、“彼女”を奴隷から開放しないなんて、ありえないと思っていたのだ。

でも、あえて聞いた。中途半端な覚悟は実を結ばないからだ。

「俺らしいだろう？」

レンとアキラはお互いに拳をぶつけ、笑いあった。

その姿に嫉妬し、別の女に興味を向けるレンに嫉妬し、その後ちよつとした騒動が起こったが、それは別の話だ。

——これが“始まり”だった。

氷雨が冒険者になって早一週間、色々なことが起こった。様々な敵と戦い、色々な人物と知り合い、不可解な出来事が数多く起こった。

ここから、彼の“本当の冒険”が始まるのだ。

彼の現在の装備、古びた灰色のマント。持ち物、売却予定の装飾品や武器多数。

所持金、84070ギル。

今日の氷雨の怪物討伐数^{モンスター}26。力量^{レベル}11。

獲得技^{スキル}、『力量読み^{レベル}』。

仲間、カイトとユウ。

第十七話 エピローグ（後書き）

ここで第一章は終わりです。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第零話 プロローグ

太陽の日差しが、惜しげもなく降り注がれるメインストリートには、沢山の人々で賑わっていた。

その界限には、果物や干し肉などを売っているような露天が多数あるような町だった。

そう、ここ——無法都市エータルの表の昼間は、とても明るかったのである。

そんな町中の無数の人間の中に、一人の男がいる。

——灰色の男だ。

身を古びた灰色のマントに包み、その隙間からは下級の町人が着るような粗い目の布の服が見える。その干からびた風貌から一風変わった空気を醸し出すが、冒険者と云う際立って異色なりわいの生業なりわいの者がこの町には溢れるていので、さほど注目もされてなかった。

ただ彼の事を近くから見た幾人かの冒険者にはとても——濃く見えた。

腰に武器はなく、背中にもない。防具を装着している様子もない。身なりだけでは成長したストリートチルドレンかと思える。

だが、服からはみ出た四肢が、常人の“それ”とは違っていた。細かな傷が多数ついており、筋肉で皮膚が隆起していたのだ。“

それ”は筋肉自慢の冒険者に比べれば細いが、戦うには十分なほどの量だと感じた。太すぎず、細すぎず、まるで戦闘に特化した肉だと思えば納得できる。

瞬時に戦意を失い、恐れを抱くほどの“それ”だった。

そんな風に、一部の人間を黙らせる者の名は——南雲氷雨。なぐもひさめ

ついこの間までは、武芸を嗜んだだけの地味な青年だった。学校では勉強でもスポーツでも殆ど目立たず、友達も数人。どこにでもいる――とは云いがたいが、とにかく印象が残らないような学生だった。

それが十七日前、世界初のVRMMORPGである“ダンジョン・セルボニス”をログアウトした時、わけの分からな異世界で目覚めてしまった。

その後、沢山の紆余曲折があった後、現在氷雨は冒険者になり、このメインストリートを歩いているのだ。

そんな彼は、数多くの迷宮探索で結晶石を沢山手に入れたので、目的地は“闇の換金所”だった。

九日前、三ヶ月は結晶石を納めなくていいと、ギルドの受付員から言われた。なので、本来なら不正である“闇の換金所”を悠々と利用しているのだ。

ちなみに、カイトとユウの分の結晶石はついこの前、二人の力量^{レベル}が低い内に納品してる。

(あっちい……)

氷雨が人ごみの中を暑苦しそうに項垂れていると、少し先に丸く開いた空間があった。

その空間“だけ”、避けるように人がいないのだ。丸く開いた場所には、には二人の男女だけがいる。

「おらああ！　どういいうつもりだああ！！」

男は鎧で隠した肉だるまのように肥満と筋肉で強制に大きくしたような体と、ドスの効いた低い濁声で怒鳴っている。

その相手は、簡易なエプロンドレスの少女。可愛らしく幼さが残った氷雨と同じ程度の女性に、詰め寄っていたのだ。

「えっ……いや……あの……！ 申し訳ございません！！」

少女はただ、頭を下げていた

一心不乱に頭を下げ、冒険者崩れ風の男に謝っている。

他に術が無いからである。

「謝ってすむ問題じゃあねえんだよ！ オレの体に当たったのはい。それは許す。でもな！ あんたのせいで武器が欠けちゃったんだ！ 武器は冒険者の生命線だ。どうしてくれるんだよ！！」

男は背中にかけていた剥き出しでぼろぼろの槍を、女の眼前に出していた。確かに男が指差している箇所は、ほんの少しだけ欠けている。

争いの原因は分からない。

だが、後ろで目を光らせている“騎士”が手を出さないことを見ると、冒険者崩れ風の男が正論のようだ。

“騎士”とは、貴族の中でも実力者がなれる職業で、警察のような組織のことでもある。つまり、この町の“法”なのだ。

法律などが意味をなさないこの町では、基本的に“強者”が上だ。その“強者”の頂点に位置する人種、それが“騎士”だ。彼等は自らを“法”と称し、楯突いた者は粛清として全て殺すことができる。

これが、この町の“法”なのだ。

だから——理不尽を我で通し、わがままを我で通せる。

しかし、なんでも好き勝手出来る、というわけではない。

“法”を施行するには、大義名分が必要だ。大義名分とは、庶民が反逆を行わないようにと、作られたものだ。昔、あまりに騎士が好き勝手に行動した為に、起きた庶民による反乱。その抑止力として大義名分という正論が必要になったのだ。

つまり、――民衆を説得できる大義名分があれば、いつでも“その”権力を行使できるのだった。

「申し訳ございません！　どうか……どうか……」

「だから！　そうじゃねえんだよ！　こっちとしてはな誠意を見せてほしいんだよ。分かるか？」

「は、はい……」

「じゃあ、払え！　ほんの10000ギルだ。高くはねえだろ？」

「で……でも……」

「どっちなんだよ！　払えるか払えないか？　払えないならお前を売っちまうぞ！！」

「払え………ません」

男はニヤついた顔で、少女を見下ろしていた。

少女は少し顔を上げて誰かに助けを求めるが、庶民はもとより騎士でさえも野次馬根性で面白がって見ているだけ。

絶体絶命のピンチだった

（いい獲物だ……！）

そんな光景を見て、氷雨は、いや彼の仲の獣は、貌は愉悅に浸りきっている。

首を突っ込む気満々なのだ。

だが、決して勘違いをしてはいけない。

彼は少女を救うわけではなく、戦いに心を惹かれたのだ。

準備体操のため、体中の骨を鳴らす。体の筋も伸ばし始めた。

氷雨はあのベルという斧使いを斃すと、ぱったりと対人戦に遭遇しないようになった。だからこれまでの九日間怪物退治ばかりだ。モンスターそれも彼にとってはそれ程強くない。

——故に餓えていた。

心の内に潜む獣は、上質な戦闘に餓えていた。

あんな冒険者崩れで獣が満足するかどうかは別だが、確かにこの時——氷雨は戦いたかったのだ。

「——止めるよ！ この外道っ！！」

しかし、——氷雨は結局戦えない。

彼が準備体操をしている間に、男が少女の腕を掴もうとする凄くいいタイミングで、氷雨にとっての冒険者にとっても“邪魔者”が現れたのだ。

「お前！ 彼女をどうするつもりなんだよっ！」

その男の名は、レン。

奇しくも武器は男と同じ槍で、鎧は軽装。街中のため、がちりとは身を固めていないようだ。

氷雨が前回出遭ったときと同様、——熱い男だった。

ただ、今回の熱さは前回とは違う。

怒りで、男に対する憤怒の感情で、心を燃やしているのだ。

「どうするって？ こいつを売るんだよ！ こいつが！ オレの槍を！ 駄目にしたんだ！！！！ 慰謝料は貰って当然だろうが！！」

冒険者崩れの男は、さも当たり前とばかりに——吼えた。

だが、正義感に溢れたレンが、そんな男にとっての正論で納得するわけがない。

男の正論が、レンにとっての正論ではないからだ。

「そんないたいけな少女を“奴隷”にするのが当然だっ！ ふぎけるな！ お前はたんに金が欲しいだけだろうがっ！ こ、このっ

……………」

「レン、悪口が見つからないなら、無理に言わなくていいんだよ？」

啖呵が途中で止まるレンに、その後ろから出てきたアキラが突っ込みを入れた。

アキラも棍棒を携帯しており、服も前回と比べると軽装だ。

「…………こ、この外道めっ！！」

レンは心が強かった。

いくらアキラに凶星を指摘されたからだといって、途中で言葉を止めるような男ではない。

どれだけ恥ずかしくても、最後まで言い切ったのだ。

「だからなんなんだよ！ これはこいつとオレの問題だ！ お前に何か口答えされる覚えはねえんだよ！」

男は頭が悪くはない。

ここでレンの挑発に触発されて、激情するのではなく、ここは耐えて少女を早く奴隷商人に売ったほうが得策だと考えたのだ。

レンに勝てる勝てないの問題ではない。

どちらの方がより合理的で、より自分にとって得かを考えた結果、こういう答えが出たのである。

「く、くっそお〜」

彼はこの男の反応に、低く唸るばかり。レンが唯一考えていた策が、失敗したからだ。

しかし、だからといって迷宮ならまだしも、街中で急に殴ることは出来ない。
ダンジョン

後ろで騎士の目が光ってるからだ。

騎士に捕まったら、その後の人生を左右される。

迂闊な行動はできないのだ。

「はん、他に言うことがねえな……」

「君はその槍を直して欲しいんだろ？ ならこれで十分だ」

胸をはり、堂々とレンに屈辱の言葉を浴びさせようとした時、アキラが止めた。

彼は槍の材質や少女が欠けさせた量ならこの位が妥当と、銀貨を一枚男に投げる。

「どういうつもりだ？ 折角、大金が手に入るんだ！ こんな、はした金で足りるわけねえだろうが！！」

「フッ、拾ったな？」

男はその銀貨を拾いアキラに見せ付けながら、激昂した。

だが、彼はおもしろそうに笑っている。

咄嗟に考えた“作戦”が、成功したからの、笑みだった。子供が悪戯を成功させた時の“それ”に近い。

「ああ、拾ったが……いやそうじゃねえ！ どういうつもりなんだ！！」

「――拾った、ということとは、その子が傷つけた武器の慰謝料を受け取ったと考える。大人しくその子を開放するんだ。それにその程度の粗悪な武器、銀貨一枚でも多いぐらいだ」

おおーと、観衆はアキラの取って付けたような作戦に感心した。どんな後付であっても、どんないい加減な考えでも、この町では民衆を納得させたほうが、正義なのだ。

そこに何が正しくて、何が間違ってるといった、道徳的理論は――ない。

――多数派が正しいのだ。

それを証拠に騎士は何も言ってこなかった。

悪知恵は、アキラのほうが働いたのだ。

（不味い。不味いぞ。このままじゃ、最初から欠けていた槍を使った“猿芝居”が、台無しになっちまう。ということはヤバイぞ！）

冒険者崩れの男は、アキラの理論に焦る。

自分の所属している“闇ギルド”への滞納金が、今月分まだ払えていないのだ。迷宮^{ダンジョン}で手に入れた報酬は、一時の気の迷いで酒と女に消えた。

今月は残り三日。

迷宮^{ダンジョン}では滞納金の全ては稼げないし、装備を売ったら生活が出来なくなる。

だから、こんな凶行に男は及んだのだった。

「フン！ そんな屁理屈が通用するかあああああああああああああああああああ！！」

男はアキラに、欠けた槍で突こうとした。

そんな男の判断はもう正常ではなかった。

もともと、道中で多少肩がぶつかっただけで、あんない加減なことを言ったのだ。もともと正常ではなかったのかもしれない。

「アキラっ！」

だが、その攻撃をレンが持っていた槍で弾いた。

そのまま、“防衛”^{スキル}として、技を放つ。

——槍技^{スキル}『疾槍』。

ただの早い突きだ。

「ぐばあっ！」

向かった先は男の左肩。

だが、当たったのは刃の部分ではなく、裏の棒の部分だ。

レンの攻撃は死ぬことのないが、武器を持たなくした。
肩の骨を砕いたのである。そのまま地面に横がり、男はのびていた。

「レン、恩に着るよ……」

「おうよ!!」

これで一件落着だった。

男は倒され、少女も売られることはない。
だが、問題は“他”に残っている。

「――あ、あのっ!!」

エプロンドレスの可愛い少女が、レンに話しかけたのだ。
誰も助けてくれないようなピンチを、王子様のように助けてくれたレンに、特別な感情を抱かないわけがない。

その少女の茶色の目は、――恋する乙女のようにキラキラと光っている。

「よかったな！ 助かって！」

「はううう……」

そして、最後に、レンの少年のような瞳に少女は心をやられた。
止めをさされたのだ。

その背後で、鈍感なレンに代わって、今までと同じような展開に向かってアキラが一言。

「はあ、やっぱりこうなったか……。ママさんがもう少しでここに

来るというのに……」

アキラは未来を想像していた。

レンがマミに、理不尽に殴られる未来を……。

ちなみに氷雨は、この時に目の前で起こった事実からやっと回復し、目的地である“闇の換金所”へ向かっていた。

心の中ではとても、レンのことを羨ましく思っていたらしい。



その日の夕方、氷雨が宿へ帰るとベットのの上に二人の子供がいた。カイトとユウだ。

服装は氷雨と同じような服の上に灰色のマントと、数日前と変わりはしないが、顔の血色はよくなっている。

ストリートチルドレン時代とは違い、栄養価の高い食事が多く取れるからだろう。

なので、カイトもユウも子供らしい丸い体つきとなっていた。

そんな二人に向かって、帰ってくるや早々、氷雨は驚愕の一言を述べた。

「——おい、“美人の奴隷”はどこに売ってるんだ？」

「はっ、本気……なのか!？」

「えっ……!？」

今日の遠くから見たレンたちの一幕を見て、彼が考え付いたこと

だった。

氷雨の表情は真剣で、子供たち二人を見つめる。
下劣なセリフとは正反対の、真面目な顔つきだった。

「ああ、本気だ。で、売ってるのか？ “美人の奴隸”は」

氷雨は“美人の奴隸”を必ず強調する。
どうやらこれが一番大切なようだ。

「売ってると思うけ……」

「おにいちゃん！ ほんとうにほんとうなの？ ほんとうに“美人の奴隸”をかうの？」

カイトの肯定の言葉を遮るように、ユウが大声を出した。
だが、氷雨は毅然として態度は変えない。
当然のように彼は答えた。

「ああ、本当だ。――じゃあ、これから行こうぜ」

氷雨の懐はたっぷりと潤っている。
度重なる不正行為によって、南国が訪れているのだ。
買うならお金のある今しかない、考えているのだ。

「うーん、分かったよ。でもさ、一日待ってくれよ。奴隸の情報は、
入れ替えが激しいんだ」

「そうなのか？」

この業界にあまり詳しくない氷雨は、確認のように聞いた。

「うん。そうだよ」

「おにいちゃん、わるいものでもたべたのかな？」

カイトとユウは、氷雨を疑惑の目で見つめていた。

二人はまだ子供であるが、もと裏の世界の住人として、内容は詳しく知らないのだが、大人の男が美人な娼婦を好きなのは知っている。

氷雨が娼婦へ行ったことは——まだ一度もない。
だから、この急激な彼の要求についていけなかったのである。

「じゃあ、ユウ。オレはちょっと行ってくるな」

「うん！　いってらっしゃい！！」

「気をつけろよ？」

そう言って、氷雨は金貨を一枚カイトに投げた。おそらく、いい奴隷の居場所の情報代だろう。

「分かってるよ！」

時は黄昏時。

モンスター
氷雨は怪物でもないのに、興奮している。子供達二人は、氷雨の変貌に驚きとどまっていた。

——氷雨はやはり変わっていた。

第一話 歓楽街

——不法都市エータル。

暗く、陰鬱で、真っ暗闇の希望もない町だったが、唯一東南だけには——夢があった。

そこは夜がない場所だと、町中の者から言われていた。この町で唯一、夜間営業が“騎士”から黙認されているエリアだからだ。

いわゆる——歓楽街。

夜でも明かりが差し、魅力的な女性がたくさんいて、常世に疲れた冒険者が羽を休める場所であった。

「すっげえ!!」

現在、カイトはたった一人で、そんな禁断のエリアにいた。

少年の目の前では、怪しい外灯で蛍のように人を集め、妖艶な女性で店に誘っていた。子供である彼には、初めて目の当たりにした欲望うごめく場所だ。

決して子供であるカイトが、居て、大丈夫な場所ではない。もし歓楽街の表通りへと出れば、たちまち身ぐるみを剥がされるだろう。

「……っと、仕事しなくちゃな! アニキからの久しぶりの依頼だしっ!!」

だが、彼がいたのは幸いにも裏道であった。

それもネズミが闊歩^{かつぽ}し、ゴミが溢れる裏道。これから女を抱き、美味しい酒を飲もうとしている冒険者が入るような場所ではない。

無論、そこにはカイト以外の人間はいなかった。

カイトはそんなところから、表の華やかな世界を見ていたが、す

ぐに用事を思い出し、行動に移した。

年端もいかぬ少年が、慣れたように闇に紛れるのは驚嘆の二文字だろう。

「……さ、てと……」

彼が向かったのは、一軒の酒場だ。

それも税のかかるギルドとは違い、少しばかり安く、法を守っていないエータルならではの酒場である。カイトはまずそんな酒場に、店の裏口から入った。

そこはキッチンであった。

明かりが全くなく、もう使われていないキッチンである。クモの巢まで張っており、長年使われていない鍋やお玉が、悲しげに放置されていた。

（昔は料理屋だったのかな？）

カイトが予測する。

売れなくなった店が、借金のため売り払い、別の用途に使われるのはよくあることだ。中を改装したり、立て替えたりするのが、容易に行えないこの世界ならではの“当たり前”であった。

この歓楽街にある遊郭ゆうかくも、そのほとんどがもとあった店や家、宿屋などを使っていた。

「おい！ 姉ちゃん！！ こっちにも酒頼む！！」

「はいはい！！」

「ちょっとこっちでサービスしてくれよ！ な？ な？」

「それは隣の店に行ってくださいな」

最初、カイトは物陰に隠れながら進んでいた。すると、数十センチ進んだあたりで、遠くの方から彼の耳に、野太い声と艶やかな声のはっきりと聞こえた。と、同時にアルコール臭もした。

その瞬間、より一層、見つかったらと思うと、気を引き締めることになるのだった。

カイトは抜き足、差し足、忍び足、とキッチンをまた歩く。

「っ！！」

そして、暗いキッチンから、酒場の中の様子を遠目から覗き見ると、鼻血が出るかと思った。

透けるほど薄い一枚の布を身につけた女性が、筋骨隆々な冒険者たちの給仕を務めていたのである。酒を出し、簡単なつまみを出し、話をするといった仕事だ。

「ユウガオちゃん！　ちよつとこっちで話を聞いてくれよ？」

「いいわよ！　ちよつと待ってね！！」

酒を煽るように飲む野太い冒険者が近くの女性に声をかける。するとそんな従業員は嫌な顔一つせず、隣の席に座り、話し始めた。

「ウスクモちゃん！　オレにエール酒を頼む！！」

「はーい！」

同じパーティーの冒険者と呑んでいた男は、切れた酒を近くの女性に頼んだ。別の木の器に入っていたエール酒を、女性は間髪も入

れずすぐに入れる。

（時間との戦いだな……）

カイトは様々な者の話し声が聞こえる暗いキッチンで、じっと身を潜めた。

これが、彼の情報の得方であった。

金も、コネも、力も無いカイトは“普通”の方法ではなかなか情報は手に入らない。いい宿、いい食堂など。これらは町をすみからすみまで歩いたら、まだ、手に入るが、高値な情報であるホットなニュースは手に入らない。

だが、そういうのを手に入れないければ、ストリートチルドレンを抜けたカイトは生活できなかった。

だから——裏技、ともいえる方法を作ったのである。

それは“盗み聞き”。ばれれば即死物の危ない方法だが、生きるためにはしかたがない、とカイトは危険を顧みず、この方法をずっと続けていた。

今なら氷雨からお金を渡されたので、普通に情報を買うことができるが、それは彼は使わなかった。

恐いのだ。

金を持っているのを、どこかのゴロツキかハイエナに聞かれ、目を付けられるのを。この方法なら、バレさえしなければ目を付けられることはない。

そして、カイトは、これが見つかった回数は——零。

小動物並みの危機感知能力は、脱帽に値するものであった。

彼はそんな風に、注意のネットを張り巡らせていてから、数十分

が経った。

「なあ、知っているか？ 最近下位の名無しの迷宮に、凄く強い怪物モンスターがいるらしいぞ！」

や、

「そうそう最近さあ！ 人をこけにしたようなふざけた“名”があるらしいぞ！」

など、様々な情報は手に入ったが、念願の情報は聞けなかった。そうカイトの考案したこの方法は利点が多いのだが難点として、聞きたい情報が聞けないのである。

（もうちょっと粘るか……）

少し、月は落ちた。

だが、カイトはもう少しここに残ることにした。残れば残るほどリスクは高まるのだが、彼はそれをとった。

アニキと親しみを込めて呼んでいる氷雨の期待に応えられないのが、嫌だったようだ。

それは貰った金貨を使わず、情報を手に入れて、氷雨に褒められたいとの胸中もあったのだろう。

「……オレさあ、今日いいアイテムを手に入れたんだよ……それも高く売れたアイテムなんだよな……」

雑談によるノイズが入り混じった多数人の会話。その中に、ふと、注目するような会話があった。なのでカイトはそっと、耳を済ませた。

「へえ、そうなんだ……。どのくらい手に入ったの？」

囁くように応えた妖美な女性は、腕首や太ももに宝石をあしらったアクセサリーをつけていた。白く透き通るような肌に、赤や青など色鮮やかな宝石はとても似合っている。

いや、彼女だけではない。どの女性も自分を引き立てるため、邪魔にならない程度につけていた。

「内緒だったらいいぜ？」

「ええ。誰にも言わないわ。だ・か・ら、おしえて？」

その女性は足を組み替えた。

それだけで、クラッと脳髓に響くよう刺激が、そこにはある。それだけではない。熱い吐息。滴る汗。少し透ける服、など溢れんばかりの魅力があった。

「……70万ギルだ」

酒の酔いに騙され、女の色香に騙され、場の明るい雰囲気にも騙され、男は女の耳元で喋った。

「……っ！」

「凄いだろ？　俺のような中堅どころじゃ、絶対に手に入らない金だ——」

男が語るそれは、真実だった。冒険者は金を生活費だけではなく、装備にも使う。それは武器の

殆どが消耗品だからである。使えば使うほど切れ味は落ち、鎧は欠ける。それにより強い新たな武器も欲しいだろう。

だから冒険者は、高い給料の割に儲からないのであった。

「――で、だ。そこで、だ。この後、仕事の後どうだい？　一緒にフラッとどこかへ行かないか？」

そして囁くように、男は誘った。

甘美な魔力がある言葉を。

詳しくは語っていない。だが、女には意味がよく分かった。

「……………遠慮しとくわ」

しかし女は断った。

「……………なんでだ？　美味しい話だと思うぜ」

「そうね。でも、私はそんな気無いいし、今日はいいわ」

「そうかい…………。悪かったな…………」

男は簡単に諦め、それ以上無理強いはしなかった。

もし彼女たちに何かあれば、すぐにこのオーナーの直属の兵士が飛んでやってくる。ここは“そういう”場所ではない。ただ魅力的な女性と会話をし、酒を飲む場所なのだ。“そういう”ことがしたければ、隣の店に行けばよかった。

「でも、代わりといってはなんだけど、いい情報をあげるわ」

「いい情報？」

「ええ。とってもいい情報だね。その程度のお金があれば——とびつきの美女が買えるのよ」

男は眼を見開いた。

奴隷は——高い。

この町でいい物は、おそらく豪邸よりも上回るだろう。それに比べれば、70万ギルなどはした金である。

「ウソだろ……。どうせ美味そうに太った女だろ……」

男は興味がなさそうな目で、女を見た。

「いえ、本当に美女よ。私なんか足元にも及ばないぐらい……。そうね。一応そこは信用していいわ。あの“ユビキタス商会”だし」

「本当かよ！……いや、待てよ。確かユビキタス商会って、奴隷商売やってなかったよな？ 大通りにある俺の知っている店は、奴隷なんて売ってなかったぞ？」

「で、しょうね……」

「は？ どういうことだ？」

女の知ったような感じに、男は疑問を持った。

「そこじゃあ無いのよ。そこじゃなくて、南東の表に果物屋があったでしょ？ ほら、あの珍しい無花果が売っている店よ……」

「ああ」

「その裏にある店で、とても安くいい奴隷が売ってるのよ。これも内緒よ？ 私知ってる秘密だから……」

禁断の情報を、女は男へ教えた。

その瞬間、キッチンで物音が聞こえた。

それを不思議に思った客がいない女性従業員は、長年使われていないキッチンに足を踏み入れるが、そこには誰もいなかった。ただ、扉が開いていただけ。女性はそれを疑問に思っていた。

「内緒か……。分かったよ。じゃあ、お代はここに置いといていいよな？ ちょっと用事が出来たんでな！」

「ふふっ、忙しい人ね。じゃ、また来てね」

「一生来ないかもしれないな」

口がにやけた男は硬貨を何枚か机の上に置いて、店から出て行った。

女は急に態度が変わった男に向かって、ほっとしたようなため息を一つ。そして、それから女は先ほどの男のことを忘れるように仕事に励んだ。

そして黎明が来て、仕事が終わる、店から出て、自分の住んでいる家へと帰ろうとしたころ――声が鳴った。

「――ユウガオさん！ ユビキタス商会のエータル支部奴隷部門の宣伝ありがとうございます！ あなたの奴隷契約は、あと200万ギルで終わりですね！！ それまで、これまでと同じように、妹さんのため存分と働いてください！！」

人を挑発したような変に甲高い声だった。
それに、

「……はい」

「素直はいいことですねっ!」

女は歯を噛みしめながら、首を縦に振ることしかできないのだっ
た。

第一話 歓楽街（後書き）

第二章の第一話は変わりました、前回には無い話になっております。もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけます。と、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第二話 奴隸

——奴隸商売。

一応犯罪なので、他の町や他の国なら裏町でしかやっていないが、ここは——不法都市エータル。当たり前のように、大通りに店を構えている商會が数箇所あった。

騎士も、町人も、冒険者も、全ての者がこの商売を合法とし、黙認しているのである。

氷雨がただ奴隸を欲しいだけなら、大通りに店を出しているような安っぽい所でいい。質の低い奴隸ならば、安価でそんな店に大量に売ってるだろう。

だが、彼は、“美人の奴隸”を求めているのだ。安い使い捨ての奴隸ではない。

そんな奴隸の入手方法は様々だ。

庶民の身売りや孤児。借金の返済が遅れて結果、売られてしまった者もいる。

——だが、いくら入手方法は様々でも、一流の物は、一流の店にしか売っていない。

それをよく知っている氷雨は、この町の情報通であるカイトに情報の手を頼んだのだ。

そして、その翌日の日の落ちた頃。氷雨ら三人は少し出遅れたが、この町で一二を争う商會の一角——ユビキタス商會に来ていた。

「——アニキ、ここだよ」

カイトは未だジト目だ。

その視線は深く突き刺さるが、氷雨は気になどしていない。彼は前にある入り口を、注視していたからだ。

入り口は立派な金属製の門だった。

氷雨の身長を少し超えるほどの高さに、大人四人分はあろうかと思える横幅。表の装飾に宝石はあしらわれてはいないが、幾重にも折り重なった模様が重厚な高級感を醸成していた。

彼は無防備にも鍵のかかっていないそれを手で押し、――中に入った。

「あれ、珍しいですね。部下が誰も誘ってないのに来るとは思いませんでしたよ。でも！　ようこそ、御出で下さいました！　ここがユビキタス商会のエータル支部奴隷部門です！！　わたくし、この奴隷部門の所長であるワルツと申します！　今後、お見知りおきください！！！」

「……」

ばたんと氷雨は一回扉を閉め、もう一回開けた。

だが、やはり立っていたのは同じ男。

一面白色の、変な男だった。

「あれ、もしかして、想像と違ってましたか？　すいません！　わたし、元来からこの性格なんですよ！！！」

彼らの眼前にいたその男は、とてもキャラが濃かった。

奥に続く通路に敷いているレッドカーペットも、壁際に置かれている壺などの高価な品も、少し後ろで待機してるような剣を持った戦士も、視界に入らないほど、その男は目立っていた。

パーマを満遍なく当てたようなくるんとした灰色の髪に、これまたカールした灰色の髭。

顔の至る所に皺が寄っているもので年は40程度と氷雨は思ったが、軽い雰囲気からして実際はもう少し若く見える。

服はとてもいい素材で作られた縦襟のブレザー。色は白で、同じ色のシルクハットも被っている。

だからだろう。本来ならとても几帳面に映るはずなのに、何故かふざけて見えた。

「おにいちちゃん、とりあえずはなしだけきいて、むりだったらかえろ？」

氷雨は帰ろうかと思ったが、小声でユウから励まされたので、なんとか踏みとどまった。

「ところで！ お客様達の求める商品は何ですか？ 武器ですか？ 防具ですか？ それとも奴隷ですか？ と、言ってもここじゃあ奴隷しか売ってないんですけどね！！ アッハッハッハ！」

彼は、笑えないアメリカンジョークを聞いているような感覚に陥り、頭を抱え込んだ。偏頭痛が来たような感じがしたのだ。

そのジョークの感想としては、凄くつまらない、である。

笑えないワルツの発言に、ぐっと拳を握った氷雨であった。顔を思い切り、殴りたかったのだ。

「――で！ どんな奴隷をお求めでしょうか？？ 今なら！ わたし――の！ ジョークもお付けしますよ――！！」

ワルツは一回だけターンをし、片目を瞑ったまま、顎に手をやった。

本人ではこれが決めポーズらしい。

顔は目を大きく開き、決まった大絶賛だと、得意げな顔になっている、いわゆるどや顔だ。

「ジョークはいらねえ。欲しいのは“美人の奴隷”だ」

おおー、等の絶賛の拍手を求めていたワルツは、冷たい顔の三人にそっと流されたので寂しそうな顔を見て少し寂しくなった。
しゅんと、顔が曇る。

「そうですか……で……も！ 落ち込むわたしではありません！！
ところで、“美人の奴隷”はどういう使い方をするんですか？
それともも・し・か・し・て、下のお世話ですか……？？？」

しかし、立ち直るのに一秒もかからなかった。
こういう扱いには慣れているみたいだ。

そんなワルツが氷雨に近づいてまで聞いたのは、とても最低な話だ。男として、とても興味があるようである。

「はあ、言わなくても一つしか使い道はないんだ。男なら分かるだろう？」

「おう！ 素晴らしい！ 小さな子がいる前でのその回答！！
じつに！ 想像力を働かせるいい回答だ！！ さては貴方、天才ですね……？」

氷雨の発言に、ワルツは大絶賛した。

“真実”を分かっている人と、分かっている人。それだけの違いで、この意味の捕らえ方は変わる。

カイトとユウは話の流れを掴んでいないが、氷雨が褒められたと

いうのは分っていた。だが、ワルツの語る“本質”までは掴んでいないのだった。

「では！ 案内しましょう！！ 当店きつての美人を！！ ではこちらについてきてください！！！！」

三人は、背中を見せたワルツに向かって、赤い絨毯を踏みしめながら歩き始めた。

「あ、ちなみに——変な物は触らないでくださいね。隣の剣士くんが殺しちゃうかもしれませんから！！」

振り返ったワルツの形相は、先程までとは一風変わっていた。暗く、冷酷で、鋭い顔つきなのだ。

カイトとユウはこれにビクツと、一回体が跳ねた。

気づいたのだ。どれだけフランクな様子でも、やはり、ワルツは、“この町”で営業する商会の所長なのだ。



三人はワルツに連れられ、左右に鉄格子がある通路の先を抜けていった。鉄格子の先にある牢屋の中身は、多種多様の奴隷たちだ。泣いている物、開き直っている物、様々な人間がそこにいた。

ちなみに、この通路は明かりは花。ダンジョン迷宮の花とは違って、淡い青色が儚げな様子を漂わせている。

そして、ワルツが大見得を切って、手を広げた。

「では！ しっかりと！ 目に焼き付けるように、ご覧ください！

！　これが当店きつての美人！！　その麗しさは王都の歌姫も、素足で逃げ出すほどです！！！！」

その者は不自然な“首輪”がついていたが、確かに美人だった――。

「うわぁ……！」

カイトはその姿を見て、感激の声しか出ない。

――最初に目についたのは、一切のうねりがないプラチナブロンドの髪だった――。

まるで銀糸である。一本一本きちんとキューティクルがあり、神々しささえ感じるほどの光沢なのだ。

「わぁ……！！！」

ユウはその端麗された容姿に、同じ女として羨ましいと思った。

そこは“格の違い”からか嫉妬さえ抱かない。

――次に目に付いたのは、陶器のような白い肌だった――。

その肌は、クリームのようにきめ細かく、パウダースノーのように柔らかそうなのだ。

「ふーん……」

氷雨はその魅力的な見栄えに、口角を少し上げた。

――最後に目に付いたのは、黄金比のように整頓された容貌だった。

大きな蒼い目も、高い鼻も、全てが整っていた。どの部分にも欠損はない。スタイルも程よく整っていた。座っているので身長は分からないが、160程度はあるだろう。

「どうです！ 大層な美人でしょ??? いやあゝわたしたちも苦勞したんですよ！ これだけの美人を手に入れるのに！！」

確かに、と三人は頷く。

上品なシルクの薄いドレスもそうだが、全身を宝石で着飾っていても、その容姿ゆえに嫌味がないのだ。

だが、表情は険しい。ワルツを憎むようにきゅっと睨み、視線を外さない。そして――口を開いた。

「“また”、私を売る気なんでしょうか？ 昨日も売ったというのに、もうですか……」

「ふう、あなたは会話を楽しむという最高の娯楽を知らないんですか??? 今回のお客様は非常に、冗談に優れた方だというのに……。ああ！ わたしは非常に悲しいですよ！！ ——『黙りなさい』」

その瞬間、女性はワルツに向かって何かを言い返そうとしたのだが、強制的に口を閉じられた。

女性にある大きな“首輪”の効力であった。

“首輪”の名は、『スレーブ』。この世界の常識の一つである。

「すみませんね！ 奴隷が生意気なこと言って！ でもご安心下さい！！ 『スレーブ』で黙らせましたから！ 『スレーブ』は当然ご存知ですよね！！」

「ああ、知ってる」

氷雨も『スレーブ』はここ数日間のうちに聞いた言葉だった。

『スレーブ』とは、ほぼ全ての奴隷の首につけられている“首輪”のことだ。

この首輪は国の研究結果が存分に詰まっており、付けた者に強制的にどんな命令も降すことが出来る物だ。

元は、怪物^{モンスター}を使役する為に生み出されたものだ。

しかし、怪物^{モンスター}に『スレーブ』をつける条件が厳しいのと人にも使えるということから、現在では怪物等^{モンスター}には使わず、ほぼ奴隷相手に使っていた。

と、ここで、ワルツが氷雨に無駄な動作も込みで、大きく振り返った。

「それはよかった！ 説明が不要ですからね！！ ところで、お望みの商品は、彼女でお気に召しましたか??？」

「お気には召したが、彼女は幾らなんだ？ 俺の手持ちにも限りがあるんだよ」

「おう！ 助かりました！！ わたしの店はほかにも商品を多数扱っておりますが、美貌で云うと彼女が最高位ですから、これ以上の商品は用意してないですよ！！ お値段ですね！ お値段は——1000万ギルとなっております」

氷雨は虚を食らった。

想定外の値段だったのだ。

この町では子供の一番安い奴隷で、1万ギルぐらいの値段となる。もちろん労働力にも使えなさそうな小さな子供が、この値段だ。

それより年上になったり、魔法を覚えて^{レベル}いるや力量が高いといった付属により、累乗と値段は上がっていく。美貌もその中に入る。

でも、いくら絶世の美女でも、奴隷に1000万ギルも出す馬鹿はいない。

値段が規格外すぎるのだ。1000万ギルもあれば、国籍どころか貴族の身分まで買えるお金だ。普通の感覚の人間なら、そこらの安い奴隷か娼婦で我慢するだろう。

それにどこかの大富豪な商人なら、希少価値に釣られて買うかもしれないが、そんな上流階級の人間はこんな不法都市には来ない。

故に、冒険者が成り上がりを見てる商人しかいないこの町では、彼女を買う者が現れないのだった。

「高え……」

これは氷雨にも手が出せる金額ではなかった。

彼が用意していたお金は120万ギル。この町では間違いなく大金の部類に入る。

これまでに斃した怪物の戦利品、冒険者などからの戦利品を全て売って作った金だ。その戦利品の中には、異常であるメンシュ・ブロンズを斃して手に入れたあの赤い“大剣”も入っている。

この“大剣”は当初、カイトとユウから売るのを反対された武器だ。

これは魔法武器の中でもランクが高い物の一つで、なかなか手に入らないので希少価値が高く、今手放すと二度と手に入らないと言われた。

だが、氷雨はその反対意見押し切って売ったのだ。ちなみに70万ギルほどで売れたのである。

「やっぱりそうですか!! いや、予想していたことです! で、どれぐらいの額をお持ちなんですか??? それによって次に紹介

する奴隷も変わるので!!」

ワルツも半ば、予想がついていたのだろう。
特に疑問も持たず、氷雨の手持ちを聞いた。

「出せるのは、120万ギルだな。これ以上は、俺にも無理だ」

油断しきっている氷雨の発言に、カイトとユウは動揺した。大金の持つてる雑魚から、エータルでは襲われる。集団で金を奪われ、下手をすれば殺されるのだ。

二人の子供は、それを口をすっぱくしながら氷雨に言い聞かせているのだが、彼に子供二人の忠告を従ってなどいなかったのだ。

一方のワルツも目を見開いていた。

やはり、100万を超える程のお金は大きいのだ。ワルツは一応、ユビキタス商会の雇われ者としての地位なので、もし規則を破れば本社から怖い刺客がやってくる。

だから、ワルツは、まだ会社の規則は破っていなかったのだった。そんな男は、氷雨の力量の低さを見て、いつも通りのセリフを述べた。

「120万!! その格好からしては相当な量をお持ちですね!!
!!! う〜ん! こうしましょう!! もし、こちらの条件を全て飲んでくれるなら! そのお金で! ——彼女を買いませんか? ? ?」

「はあ?」

「いえいえ! 条件さえ飲んでいただけたなら!! 彼女はいくらでも安くなるんです!!」

「その条件って？」

「まず、あの宝石を全て取り外します！ それだけで20万は安く
なりますね！ 次は——『スレーブ』です！ 『スレーブ』さえ外
したら、もっと安くなるんですよ——！！ これでギリギリ120
万円になります！ どうしますか——？？？」

ワルツはその後、氷雨の耳元に口を近づけ、『スレーブ』のシス
テムを話し始めた。

『スレーブ』は、税金から取り出した開発費用に多数のお金がか
かっている。

だが、一定の額にするとそれ以上税金をとれないので、政府はこ
れをつけた奴隷の半分の値段を『スレーブ』の経費としたのだ。

もちろん『スレーブ』をつけないと、商会側としてはとても儲か
るのだが、客はよく言うことの聞く『スレーブ』付きの奴隷を欲し
がる。

なので、それを外せば、かなりの奴隷の値段を落とせるのだ。

「わかつ……」

「おにいちちゃん！ ちょっとまって！」

氷雨は、この上手い話に景気よく乗ろうとしたのだが、すぐにユ
ウが止めた。

彼女はこれを危険だと、裏があると思ったのだ。

エータルを、氷雨より長く住んでいる経験からの考えだ。その点
については、カイトも同じだった。カイトもユウと一緒にあって、
氷雨に彼女を買うのは止めといたほうがいいと言ったのだが、

「よし、分かった。――彼女を買う」

「アニキっ！」

「おにいちゃんっ！」

彼は独断で、決めた。

子供二人は氷雨に、それからも説得を続けるのだが、彼は聞く耳を持たない。

「――ちょっと」

そのすぐ隣、ワルツの護衛としていた剣士が、男を呼んだ。

「なんですか??？」

「あの男がいくら力量が低くても、あの子を売るのは止めといったほうがいいと思います」

剣士は、独特の直感から、氷雨の違和感を小声で指摘したのだ。だが、ワルツも氷雨と一緒に。

“いい話”にはもちろん乗り、そんな不確定要素を疑わない。

ワルツは、目にも留まらぬ速さで剣士を殴り、壁に激突させ――気絶させた。

「うん？ 何の音だ」

「いえいえ、なんでもありませんよ！ では！ お客様待望のご商品を用意します！！ 少々、お待ちください！！！！」

ワルツの顔は、実に笑顔だった。
これからの事を思うと、自然と笑顔になるワルツであった。



「じゃあな」

「ええ、では“また”のご来店をお待ちしております！！！」

それから数十分後、氷雨は彼女を連れて、この店から出て行った。
勿論金を置いていってで、だ。

ワルツは現在、店内の一角にある黒い部屋で椅子にいた。
明かりは丸い机のおいたロウソク一本だ。

彼はその数十枚置かれた金貨をホクホク顔で見て、目の前にいる
数十人の立った剣士達に告げたのだ。

「皆さん！ では！ ショーの開幕をお願いしますね！！！」

——次の瞬間、剣士達はぞろぞろと動き出したのだった。
その首には、全員首輪がついていたのだった。

第三話 闇夜

深かった。

特に、今宵の闇は深かった。

星も、月も、全てを覆いつくすような雲が塞ぎ、微かな光でさえ地上に降り注がない。このエータルの町に外灯はなく、四人は懐中電灯のような先を照らす道具さえ持ってなかった。

「――皆さん、すぐに私を置いて逃げたほうがいいですよ」

銀髪の美人はこれまで氷雨達に大人しく着いて来たのにもかかわらず、唐突に口を開いた。それは、あのユビキタス商会から出てきて、メインストリートにたどり着いた頃である。

内容は忠告だ。

“先”を知らない彼らに、彼女は親切心から忠告をしたのだ。

「な、なんでだよ!？」

美人に返事をしたのは、氷雨ではなくカイトだった。

昼間とは違い、四人しかいない大通りに慌てた少年の声が響く。

「詳しいことは時間がないから言えません。――ただ、“奴ら”が来ます」

透き通るようなソプラノ声から出たのは、冷徹な助言だけだった。と、高い声と同時に遠くからは、多数の低い音だ。

「やつらって……もしかしてあれ？」

暗闇の中、その方向を目を凝らしながらユウが呟いた。

それは一定の間隔で刻んでおり、金属特有の鈍い音だった。そして、この世界に訪れてから、聞きなれた音でもある。

——鎧を着た者の歩く音だ。

現代では絶対聞こえず、戦いの絶えないこの世界ならではの足音である。

「すいません。私が原因です。本当に申し訳ありません」

銀髪の美女は声質からして、哀しげ顔をしていただろう。またもワルツに利用されたのを、優しい彼女は本当に悔いていたのだ。

だが、ワルツに逆らうことは出来ない。

彼女がワルツにとっての“餌”だからである。

「——へえ……！」

だが、そんな慈愛に満ちた警告を、氷雨は聞いていなかった。

極上の“餌”に寄ってきた虫に期待を寄せ、意識を“敵”のみに向けていたのだ。

見えない敵は、足音から察するに二十数人。武器は不明。強さは中堅者より低い、が、氷雨の見立てだった。

「あ、アニキ……オレらはどうしたらいい？」

戦闘態勢に入った氷雨を見て、カイトはこれから来るであろう惨劇に怯えながらも、自分の行動の指示を求めた。それは氷雨が戦い好きだと、少年はこの数日の間で学習していたからだ。

そして、その戦いを邪魔されると、彼の機嫌が悪くなるというのも学習していた。

触らぬ神に祟りなし。

その諺どおり、カイトは余計なことをしない為、自分達にとってではなく氷雨の為に指示を求めたのだった。

「邪魔だから端で隠れてろ」

「うん、分かった！ ユウ、こっちだ」

「ちょっとまって！」

カイトは氷雨に従って、数十人の兵士に見つからないような小脇の道を見つける。少年は妹を戦いに巻き込まないようにと、手を引っ張るがユウのわがままに止められた。

「おにちゃん……がんばってね！」

氷雨へと近づき、声援を送ったのである。彼はユウの応援に、口角だけ上げて答える。それを見たユウは満足し、カイトのいる路地裏へと隠れたのだった。

「――本気ですか？」

だが、氷雨が目をやったそこに銀髪の彼女は居なかった。代わりに隣から疑問の声がやってくる。そこに立っていたのは彼女だ。

「何が？」

「“奴ら”と戦うことです」

彼女は“奴ら”の戦力を知っている。個々の質はお世辞にもいい

とは云えないが、数だけは膨大だ。

一方こちらの戦力は、子供二人に力量^{レベル}13の男が一人。間違っても、二十人にも及ぶ兵士に適う戦力ではない。

「本気って言うか、その為にお前を買ったんだぜ」

「は、はい？」

突然すぎた発言に、彼女は疑問と驚きの声しか出なかった。

これまで彼女を買った人間は、その殆どが下劣な者だ。目が欲望に塗れて怪しく光り、口はだらしなく開いたまま。

金は稼げて、人間としては最低だっただろう。

「まあ、隠れて見てろよ」

しかし、近くで見た氷雨は違う。目は闘志にあふれてぎらぎらと光り、口はきゅっと真一文字に縛っていた。

横目に入った背中からは“鬼”のようにおぞましいと思えたが、“あの人間達”と比べたらまだ好感が持てる。

それは彼女自身に敵意が向けられてないからであった。

氷雨の現在の形相は写真で見ても、映像で見ても恐ろしくない。

だが、直接その殺気を身に浴びることにより、初めてその貌に最大限の畏怖の感情が生まれるのだ。そして彼を、恐れ戦^{おそれおののく}くのである。

——だから、彼女は氷雨に少し好感を抱いたのである。

「で、でもっ!! 奴らは危険なんですよ?」

「だから?」

「奴らは確かに力量は低いです。でも、貴方の力量はもっと低いのです！ それに数は二十人近く居ます！ それに比べて貴方は一人です！ 戦力差は明らかでしょう？」

「で？」

「他にも貴方は武器を持ってません！ でも奴らは高価な武具をつけているのですよ！」

なので、彼女は捲し立てるように氷雨を説得した。無謀な挑戦しないよう、自分だけ置いて逃げるよう。

全てが彼を死なせないための、善意からの行動なのだった。

「はあ、でもでもうるせえなあ。そんな戯言はいいから、あいつらと一緒に隠れて見てろよ。——お前は邪魔なんだよ」

けれども、自分本位な善意ほど、鬱陶しいものはなかった。

氷雨にとって戦いは、他の何にも耐え難い大切な物だ。そして、それを侵され、邪魔されるのを、彼は最も嫌悪している。

カイトはこの数日でそれを嫌というほど知っているから、先程大人しく身を引いたのだ。ちなみに、ユウはカイトの言うことに従っただけだ。

「……わかりました」

彼女は聞く耳も向けない氷雨へと、ぐっと歯を噛みしめた。

潔くカイトやユウの元へ身を引いた。路地裏まではとぼとぼと歩き、その場所に着いてからもしばらく彼の末路を想像して悲しそうな顔をしていたが、

「おねえちゃん！　きつとだいじょうぶだよ！」

「そ、そうですか？」

「うん！」

ユウの無邪気な励ましによって、彼女は少し元気を取り戻せていた。

ガチャンガチャン！

三人は大通りの小脇から、見えない氷雨を見守っている。兵士は氷雨まで数十メートル先の所に来て、主人の命令である彼女を取り戻そうと、腰の剣を抜いた。氷雨はただ一人、敵をきつと睨みつけていた。

「そうそう、お前等。――逃げる準備しておけよ。俺でもあの人数をすべて斃すのは、無理だろうからな。――さあ、戦^やろうか？」

そして、戦いの幕は、――氷雨の大声によって開けたのだった。



ダンッ！

氷雨は敵に自分の居場所が知れるのが分かると、まず地面を強く蹴った。

先制攻撃のためだ。

この戦い、圧倒的にこちらが不利だとは、彼女が言う前から気づいていた。

だが、内に潜む“鬼”が、戦場から逃げるのを赦さない。

——肉が欲しい——血が欲しい——興奮が欲しい、と身体の中で暴れ回っていたのである。

彼もそれを制御しようとは、思わなかった。

理由の一つに、ストレスが溜まるから。それに、もしそれが何かの拍子に“鬼”がはじければ、被害がカイトやユウにまで及ぶかも知れない、と彼は危惧していたのだった。

しかし、だからといって、たかが欲望の為だけに無駄に神風特攻をして、死ぬわけにもいかない。

道は一つしかなかった。

満足に戦った上で、快勝するか逃げる。

その過程の一つが、——先制攻撃なのであった。

「前列っ！ 敵は一人っ！ 並べっ！」

一方の兵士たちは、急激に近づいてくる一体の灰色の鬼に、警戒を強めていた。これまで二人ずつ真っ直ぐに並んでいた隊列を、一人ずつの大通りを区切るような横一文字に変え、皆が地面と平行になるように刃を敵へ向ける。

これが——ワルツの度重なる“教育”の成果であった。

敵の数ははっきりとしているが、戦力が未知数な状態ではこれがいいと、この軍団の隊長は判断したのだ。

この的確な命令により、これまで力量差^{レベル}という不利があっても、

全戦全勝を納めてきた。

いや、失敗すると首につけられた『スレーブ』から、どんな非人道的な命令が降されるという恐怖感からの、必死さがあったのかもしれない。

ダンッ！

氷雨は右の一番端の者まで距離を詰め、地面をもう一度強く蹴った。

空を飛んだのである。

兵士は突くように向けた剣を、飛んだ氷雨へと向けるが、

ダンッ！

氷雨に壁を蹴って方向転換をされたせいか、無残に脳天に踵落しを喰らった。

「うがっ!？」

力量が低いせいか実践経験が低いせいか、詳しい原因は不明だが、その兵士は命令に従うことは出来ても、氷雨のフェイントに攻撃を合わせることは出来なかったのである。

兵士は酔ったように千鳥足になっていた。

「全体っ！ 囲めっ！」

彼の追撃よりも、隊長の判断のほうが早い。

兵士たちは一定の間隔を開け、壁が直径となるように、半円となった。剣は先程と同じく構えている。

（厄介……だな）

それが氷雨の感想だった。

実力は高くないが、指揮がしっかりとしている。まるで、山狩りをされてるような気分だ。じわじわと追い詰められ、ゆっくりと^{なぶ}戮られる。

彼にとって、地味で、興奮の少ない嫌な戦い方だ。

「とつげ……」

次の瞬間、氷雨は兵士たちに先手を取られる前に、酔っ払いを蹴った。

囲んだ兵士に盾として、ぶつけたのである。

「なっ!？」

兵士達は大きく悩んだ。

仲間を切るべきか、優しく受け止めるべきか、大きく悩んだ。だが、——その刹那の迷いが、氷雨にとっての狙いだった。

——灰色の鬼は、次の瞬間には闇夜に舞っていた。その隙をついたのである。



「カイにい、あれいったいどういういみ？」

道の真ん中では激戦が起こっている所ではなく、細い道の中でユ

ウが疑問をあらわにしていた。水雨の発言の意味が、いまいちわからなかったのである。

「そのままだよ！ アニキはきつとオレ達の身を案じてるんだよ！だから、ピンチになったらすぐに逃げろと言いたかったんだよ！」

「へえ〜！ やっぱりおにいちゃんだね！」

「だろ？」

カイトは水雨の言葉をいのように取っていた。

（本当にそうなのでしょうか？）

だが、銀髪の彼女だけは、子供達と一緒にいながら、別の考えに染まっていた。

——負けた場合の懸念だ。

彼は圧倒的戦力差を痛感していながらも、“何かの理由”により撤退できない。だから、あの中隊からも逃げなかったのではないかと考えたのだ。

そんな風に、難しい顔をしていると、ユウが彼女に声をかけた。

「おねえちゃん、どうしたの？」

「い、いえ、なんでもありませんよ。そう言えば、音が消えていますね」

「そうだねえ！ なんでかなあ？」

彼女は自分の話題を逸らすため、彼の激戦の場へ視線を向けた。

そこは、氷雨が戦っていた時と比べると、無音に近い。

（いや、まさか……ありえないですよ？）

銀髪の美女は、最悪の結末を予測した。――彼の死である。
彼が死んだために、静寂が訪れたのではないかと思ったのだ。

「みなさん！　いますぐ……」

「――よし、逃げるぞ」

だから子供達に逃げるよう、と言おうとしたが、いつの間にか横にいた――氷雨に遮られた。

偶然にも、言葉の内容は同じであった。

「あ、アニキどうということ？」

「簡単に言うと、――無理だ。色々」

氷雨は自分から始めたが、三人斃したところで、これが負け戦になると気づいた。

まず、敵一人を斃すのに無駄が多い。次に一桁までの人数なら何とか斃せるが、数十の統率された兵士を退ける経験が足りない。

これらの理由から、自分にはまだ“一騎当千”の実力はないと判断したのだ。

――つまり、氷雨は、まだ武術の至極まで辿り着いてないのだ。
だからある程度“鬼”が満足したところで、氷雨は戦闘を切り上げたのだった、

「えっ！？　えっ！？　なにが……どうなって!？」

そんな氷雨のすぐ横で、この急展開に驚いた彼女が居た。様々な現象が一気にやってきたので、それを消化できてないのだ。

「あの人数は俺でも斃すの無理だから、今から宿に帰るんだよ。ほら、あの音が聞こえるだろ？」

後ろでは「追えー！追えー！！」等の怒声や、低い足音が沢山聞こえる。

氷雨は勝てないと思ったことに、悔しく思っていた。子供達二人は目を点にしながらも氷雨に従い、逃げる準備を開始した。彼女はわけが分からなりながらも、氷雨の背中についていこうと決意している。

「ユウは俺が背負う。――さあ、死ぬ気で逃げるぞ？」

――こうして、凸凹な四人と一八人の鬼ごっこは始まったのだった。

第四話 クリス

細く曲りくねった路地裏での――逃走劇。

それは決して、楽なことではなかった。

宿まで直進に帰れないという肉体的苦痛と、兵士に追いかけられるという精神的苦痛。この二つが相まって、三人の疲労はさらに増していた。

「ま、まだなんですか!？」

「ユウに任せてんだ。知らねえよ」

そんな中、最初に悲鳴を上げたのは、銀髪の彼女だ。

ロングスカートの端を走りやすいように持ち上げ、先頭のカイトを追うようにヒールの折れた靴で一生懸命走っていた。

どうやら、あんな暗い牢屋の中で一日を過ごした割合が多いので、この中で一番体力が無いようである。

「あ、アニキ、もう走れないって……!!」

「じゃあ、ユウに走らせる気か？」

「うう……」

次に弱音を吐いたのは、カイトだった。

マントを風にたなびかせながら、誠心誠意で走っている。

その身に重りと云う重りはなく、枷も全くないカイトだったが、やはり――つらい。体が未完成なので、大人には当然体力では齒が立たないからであった。

カイトはそれを気力でだけで捻じ伏せ、現在も必死に走っていたのだ。

「おにいちゃん、はっやゝゝゝゝい!!」

ユウは氷雨の背に乗っており、身体的負担は全くない。

むしろ、逃走をジェットコースターかなにかと勘違いしており、きやつきやと背中ではしゃいでいた。

「おい、こら、暴れるな」

だが彼にとって、そんなユウの行動は好ましくなかった。

日ごろからの山間でのランニングによって、人並み以上の体力はあるが、子供をおんぶしながら走った経験はない。

これなら、パワーアングルを付けて走ったほうが楽だと思う氷雨であった。

「いたぞおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!!」

――何度目だろうか。

後ろから野太い野郎の声が聞こえた。

奴らはワルツの命令に従順に従っていて――ハイエナのようにしつこかった。それに人数がどんどん鼠算レベルのように増えてる。力量は、やはりどれも30にも満たなかった。

だが、氷雨が見た限りの奴らの合計は、ざっと見るだけで50人以上。たかだか、彼女を捕まえるには十分すぎる量だった。

氷雨は彼らに喧嘩を売ったのだ。

もう捕まったら死から、逃げられない。

奴らから逃げるしか、生き残る道は残されてなかった。

「つぎはみぎだよ！」

「もう……!!！」

「はあはあ……!!！」

「りょーかい」

この町に“とても”詳しいユウの道案内に、返事できる者はもう氷雨しか居なかった。あとの二人は激しい呼吸音しか出ない。これでは、いつ限界が来てもおかしくはなかった。

（ちょっと“まだ”無理があったのか）

秒毎に疲弊する二人を見て、氷雨もそれは酷く痛感していた。まさか、ここまで二人の体力がないとは思わず、もっと簡単に逃げ切れと思っていたのだ。

こればかりは仕方がない。

氷雨は全滅しない為にも、すぐに手を打たなければならないと思う。

彼は、周りを見渡した。

回りは壁。ここは曲がり角。道は二つ。北か東だ。敵は北からのみ、三人が来ている。どれも武装しており、力量^{レベル}22。

「ユウ、近くに隠れる場所はあるか？」

「うん！　あるよ！」

「どれぐらいの距離がかかる？」

「あっち！」

ユウは、兵士の方向を指差した。

氷雨はちらりと彼女とカイトに横目をやる。

どちらも肩で息をしており、限界に近い。しかし、走れない程ではなかった。

「よし、——行くぞ」

あの人数なら行ける超えられる、と彼は思った。

無言で彼の意思に、カイトと彼女は頷く。カイトはもとより彼に従うしかないのだが、彼女はそれを否定できた。

このまま、奴らに捕まるというのも残っている。

（でも、もつと見ていたいです……）

しかし、彼女だから彼の命令をこれとして否定せず、態度で従ったのだ。

それは恋愛感情ではなかった。かといって、氷雨が自分を買ったという同情でもない。彼の無鉄砲な生き方と、現在も先に見える背中にもまとう空気に惹かれたのである。

絶対なる力への抵抗なんて、彼女はしなかったからだ。
だから、彼女は彼に妙な“憧れ”を抱いたのだ。

「いっけ〜〜〜〜！！」

——そして、鬼が駆けた。

速い。速い。

先頭にいる灰色の者は、真っ直ぐ奴らのもとまで向かう。背中に興奮している子供も、その速さには振り落とされないよう必死にしがみつくしかない。

それは彼はあくまで、他の二人の速さに付き合っていたからである。

全速力の彼の速さは二人の距離を大きく突き放し、逆に奴らとの距離を大きく詰めるほどだ。

兵士も背に子供が乗ってる彼が勇猛果敢に突っ込んでくるとは思わなかったが、対応は冷静だった。

剣を突くように構え、いつでも彼を刺せるようにする。奴らの顔は、少し“楽”の色に染まっていた。

氷雨がユウを背負ってるからだ。

“冒険者”が通常持つどの武器にも適応されることだが、武器は手で持つ。足で持つ武器など存在しない。

「敵は一人！ 増援はまだだ！ だが、我々なら殺れる！ 殺れるんだ！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！」

だから、僅か三人と云う兵力ながらも奮起した。

命令尊寿の為、全力を尽くした。

声も。

腕も。

脚も。

そして、無防備な氷雨を——一斉に突こうとした。

「なっ!？」

だが、跳ばれて、躲された。

氷雨は剣を超え、真ん中にいる一人の兵士の肩辺りに、踏み切った方とは逆の左足をかけた。そしてそのまま、もう一方の足で、サッカーボールを蹴るように男の顔面を——蹴った。

兵士の身体が宙に浮いた。足が地面から離れ、そのまま背中から大地へと向かう。蹴りの衝撃で手からは剣が離れており、白目を向き口からは涎を垂らしている。

ドスンッ!

男は重力に従い、やがて——落ちた。

氷雨は蹴った直後に、突いて来た別の男の攻撃のために、後ろへ戻るように跳んでいた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!！」

残る二人の内の一人が——天高く吠えた。

彼を止めようと、気合を入れたのだ。

だが、もう意味がない。

彼女とカイトはすぐ傍まで来ている。

「いっけ~~~~~!！」

ユウは先程までの氷雨のアクロバティックな動きに愉悦し、この

状況を楽しんでいる。氷雨も口の端が釣りあがっていた。“時間稼ぎ”が終わったからだ。

三人で守っていた道は、一人が抜けた事により、大きな穴が出来る。

一歩戻った氷雨の横を、彼女とカイトが過ぎ去る。

敵まで、――僅か1メートル。

「まず！ 私がつ！！」

その数秒後。

一人目。先頭を走っていた彼女がその穴を――駆けた。

横を通り過ぎる彼女を見て、男達は悔しそうに唇を噛んでいた。

男二人はワルツの命令により、彼女に攻撃を仕掛けることができない。商品に傷をつけてはならない、がワルツの考えだからだ。

兵士達は彼女を追おうとはしない。

やはり、金属製の鎧をつけているだけあって、その重さにより追いつけない可能性が高いからだ。兵士達は、それよりも後から来る者を足止めするほうがいいと考えたのだ。

――彼女に体力が無いからである。

「次はっ！！」

二番目はカイトだった。

カイトが彼女に続いて、その穴を抜けようとする。

だが、今度は男達も突いてきた。

少年を攻撃するのに、縛られた制約が無いからだ。

全力で二人は突いた。

遠慮はしない。戸惑いもしない。

ただ殺す。彼女を捕まえる為に殺す。仲間を全員殺せば、彼女は大人しくこちらの言うことに従うだろうと考えたからだ。

カイトは彼女の背しか見えていない。

ゆえに、その銀色の刃が見えなかった。

「屈めっ！」

ヒュッ！

交差した剣のすぐ下を、カイトは抜けた。忠告とも取れる氷雨の怒声を、素直に少年は聞き入れたのだ。

だから、安全にここを抜け抜けられたのだ。

「……っ！！」

カイトは先へ走りながら、鋭い音が鳴ったほうに顔を向けた。

そこには、殺気を目に充満させ、悔しそうに口元を歪ませる二人の男がいる。

足が進まない。冷たい汗が背中を流れた。急に身体が冷える。

本物の“殺意”を、その身で味わったからだだった。カイトは、まだそれを断ち切るほどの胆力は、持ってはいなかった。

「きゃ~~~~~！！！」

その頃。氷雨も二人の横を越えていた。ユウが相変わらずの声を上げてる。

奴らは寸分違わぬタイミングでわざわざ突いてきたので、氷雨は剣が当たる直前に止まる。そのまま奴らの腕が伸びきった瞬間に、最高速で駆けて行った。

一度伸びた腕は、引かないと反撃できないからであった。

「あ、アニキ……」

「カイト、なに止まってんだ？ さっさと行くぞ」

うろたえ、進めないカイトに、氷雨は声をかけた。

「えっ！？ でもさ……」

カイトは恐怖のため、全身を針金で縛られたような倦怠感に襲われていた。簡単に歩けるような、そんな一日程度で拭えるイメージではないのだ。だからカイトは立ち止まっていた。恐怖に怯えながら。

氷雨はそんなカイトを、

「いいから走れよ。ほら？」

「いたぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！！」

「こっちだあああああああああああああああああああああ
あ！！」

背中を蹴って、激励した。

氷雨が指差す方向には、大勢の人間が集まっている。後ろの兵士の叫び声を聞いた奴らが、次々と湧いてきたのだ。

カイトはそれらを目に写した。ぶるっと、一回飛び跳ねる。生物が原始的に持つ生存本能が、頭の中で勝ったのだろう。いつの間にか、あの恐怖は消えていた。

「アニキ、オレオレ……」

「速く走れ」

氷雨にカイトの様子を伺う余裕など無い。

先に待っている彼女を追って走っていたので、カイトもそれを追跡する形となった。

[illegible][illegible]

後ろからは、威勢がいい奴らが、人狩りを大胆不敵に行っている。少々走るスピードが速くなった一同であった。



現在、あれから何とか逃げ切った四人は、すぐ近くにある裏道に立っている沢山の家の内の一つ。

空き家にいた。

数十日前まで、カイトとユウが住んでいた家である。彼等はここに、あれから始めて帰ってきたのだ。

「どこだ！
どこにいるんだ！」

壁際の向こう。

たったの数センチ先では、奴らの低い声がした。

四人はそれを、息も忍んで去るのを待つ。

「あっちを探しましょう！」

「ああ、そうだな！」

やがて奴らが近くから去ると、四人はどっと溜まった二酸化炭素を吐き出した。そして、深呼吸を一回したのだ。

まだ、空はまだ暗かった。

夜が明ければ、流石の奴らも騎士の目が光っているので手は出せない。

だが、その黎明^{れいめい}まで、まだ数時間ある。

氷雨達の不利は、以前として変わらなかった。

「おにいちちゃん……またおぶってね……」

彼女とカイトはあの光景を、まだお遊びだと思っているユウを少し羨ましく感じた。

二人の顔には、疲れが色濃く出てる。

氷雨は楽そうに壁へ背を預けているが、全身が湿っており、その尋常じゃない汗から疲れは目に見えて分かる。

ユウに疲労感が出てないが、何度も目を擦り欠伸をしている。おそらく眠たいのだろう。

「すみません。私の自己紹介がまだでしたね。クリスティーナと申します。気軽にクリスと呼んで下さい」

そんな四人の中で、口を開いたのは彼女改めクリスだった。

ぐったりとした顔をしているが、その美貌はまだ失われてない。

姿勢を崩してないからだ。下は土の上だが正座しており、まるで牡

丹のような気品があった。

「ユウだよ……よろしく……ね」

ユウは自己紹介をしてから、深い眠りについた。

あぐらをかいている氷雨の上、頭を置いて。

彼はそれに嘆息をするが、心地よさそうな少女を起こすほどの無駄なエネルギーは無かったので、特に何もしなかった。

「あ、寝ちゃいましたね……」

クリスはそれを、慈しむような瞳で見つめていた。

彼女にとってこれは、久しぶりに感じたぬくもりのある雰囲気だ。あの欲望が満ち溢れた牢屋では、決して感じぬものであった。

「オレはカイト。宜しく……な……」

次はカイトだった。

こちらもいつもの元気が無く、半分目が閉じかかっている。うとうととしているのだ。

「はい、宜しくお願いしますね」

「うん……」

カイトは既に眠たさから、生返事しかできないのだった。

「氷雨だ」

最後に自己紹介をした氷雨だ。短く自分の名前だけ言った。

彼だけは、他の三人と違って緊張感を失っていない。

戦場では気の緩みが死へ繋がる、と祖父から口を酸っぱくして言い聞かされてきたからだ。いつでも動けるような準備はしていた。

「ヒサメさんですね。分かりました。ところで、一つお伺いしたいですか？」

「何だ？」

「では無礼を承知でお伺いします。何故、何故ヒサメさんはその力量^{レベル}でそんなに強いんですか？」

クリスの感じた最大の疑問だった。

氷雨の力量^{レベル}は、――実はクリスよりも若干低い。だが、クリスはあの20台の三人を、突破できる実力でもない。彼女の力量^{レベル}は18なので、頑張ったら一人程度は斃せると思ってるが三人は無理なのだ。

だから、――クリスは不思議だった。

力量^{レベル}は低いのに、圧倒的な強さを誇る氷雨が。“名”や武器などの、強さを底上げする要素さえ、持っていない氷雨が。珍獣のような珍しさを、彼に感じたのだ。

「――さあな。知らねえよ」

「そ、そうですか……」

二人の間に気まずい空気が流れた。それを感じているのはクリスだけで、氷雨はさほども感じていない。

実は、氷雨も自分の強さの理由を、本当はよく分かっていない。

“名”は相変わらず発現してないし、武器は鍛え上げた肉体だ。

この強さの原因が、並みではない祖父との鍛錬だというのは何となく分かるが、元の世界で鍛えた人間がここまで強いのであれば、何かしらの形で噂になるはずだ。

だが、彼も自分以外のゲームプレイヤーが、力量差^{レベル}を無視できるほど強いなんて聞いたことが無いし、カイトとユウもそんな都市伝説は聞いたことが無かった。

——謎は深まるばかりだ。

「——来たな」

そんな思考を巡らす内に、彼は不意に思考を止めた。

周りへの警戒を怠らわらない氷雨だからこそ、気がついたのだ。

すぐに、クリスとカイトに小声で活を入れた。ユウは起こさないよう背に乗つける。

「そう言えば、ここの空き家探してなかったな？」

すぐ壁の向こう側。声が聞こえた。

——奴らだ。

氷雨は靴の擦れる音や布の擦れるような音が耳に入ったから、緊張感を他の者にも与えたのだ。最初はほんの、リスクマネージメントだった。

「そうだな。念のため調べるか」

だが、彼のその予感の間違ってなかった。

兵士が一步家の中に入った。四人は入り口のあるすぐ近くの壁際

彼らの夜は——まだ終わらないのであった。

第五話 遠征

氷雨が命からがら逃げている同じ日の夜。

地下へと深く伸びる永久とこしえの迷宮に、暗く閉塞な空間があった。明かりは太陽ではなく光る花で、周りは石。階層は地下は15階だ。細い道を数分歩いて出るのは、人ではなく、怪物モンスターばかりであった。

そして、15階層のある転送テレポート近くに、三人の者がいた。
転送とは、永久とこしえの迷宮に設置されている。階層を跨ぐ際に使われる装置であった。

この迷宮では1階、15階、30階、45階に用意されている。
一回の利用毎にお金がかかるが、手軽に下層へと行けるので、ある程度以上の実力がある冒険者たちはその気軽さからよく利用するのであった。

「レン、分かっているな？」

最初に喋ったのはアキラだ。眉目秀麗で、細いフレームの眼鏡をかけていた。

鎧は黒い革で作られており薄くて軽そうで、武器は細く長い白い棍棒だ。棍棒は長さがどこも均一であり、どちらからといえば普通の棒であった。

「ああ、こつからが本番なんだろう！」

アキラの問いに答えたのはレンだった。

赤く穂先は厚い槍を持っている。鎧は赤黒い薄い金属の板を、何枚も重ねたような重厚な形となっており、防具自体は大きい。

だが、アキラはゲームプレイヤーになる以前スポーツをやっていたのか、氷雨までとは行かないがかなり筋肉がしっかりしている。だから防具の着こなし事態に問題は、全く無かった。

「これからが本番ね！」

ダンジョン
迷宮内特有の浄化作用によって腐臭はしない。だが、本来なら命を賭ける迷宮探索と云うデスゲームに、猫目を鈍く光らせている女性^{ダンジョン}がいた。

マミだ。

胸と腰のみの軽装備に、背中には矢筒。手には金属製の弓。口元のほくろが、変わらない妖艶さを醸し出していた。

レン達は“黄昏時”を抜け出すと、すぐに迷宮^{ダンジョン}へ訪れていた。目的は——遠征だ。

より深い場所に潜るためには、当然広い迷宮^{ダンジョン}では一日では足りない。数日間に渡って迷宮で過ごし、冒険することを総称して——遠征と云うのである。

「思えば私たちって“遠征”、今回が始めてよね？」

マミがおもむろに呟いた。

「そうだな。そう思えば、どうして俺達はこれまで“遠征”をしなかったんだ？」

レンが疑問を疑問で返す。

まだこの階に来てから一匹^{モンスター}も怪物に会ってないので、会話するほどの余裕はあるのだ。

「資材も力量^{レベル}も足りないから、ボクがまだだと判断したんだ。だから遠征のことは知ってたが、話題には出さなかった。本来ならもう少し地道に力量^{レベル}を上げてから、“遠征”をしたかったのに……」

「ごめんって！ アキラ。そう言うなよ」

レンはアキラに平謝りをする。

アキラはこの“遠征”の前、実は大反対していた。

だが、レンが早く“奴隷の彼女”を愚直に素直に助けたいというやられ、今回のレンの案に乗ったのである。

「まあ、済んだことだから仕方ないけどさ……」

「さっすが！ アキラ！ 話が分かるぜ！」

「痛いぞ。レン」

レンはアキラの肩をばんばんと、叩いた。
彼は目が笑っていてとても嬉しそうだが、アキラは迷惑そうにしている。どうやらレンは力の加減が、余り出来ていないのだ。

「レンとアキラ、相変わらず仲いいわね！」

そんな時、二人の傍からマミが出てきた。

「んなわけねえだろ！」

「そんなわけないだろう！」

マミはくすくすと笑っている。

揃って大声を張り詰めた二人が、面白おかしくてしょうがないのだ。

「そんなわけ……あるでしょ！」

「どこがだよ。なあ、アキラ？」

「うん。全くもってその通りだ。どうしてボクが、こんな馬鹿と仲がいいんだ？」

レンもアキラのこの意見には、深く頷いていた。

「うんうん。って、おい、こら！　誰が馬鹿なんだよ！？」

「レンに決まってるだろう？　君が馬鹿じゃなくて、誰が馬鹿になるんだよ？　まあ、自覚してないのは仕方がない……か」

この時、ささっと何かが動く音がした。

即座に三人は臨戦態勢へと入る。

レンはちゃきつと槍を中段に突くように構え、アキラは正眼の構え。マミは右手で一本矢を持った。弦は引かず、あくまで弓に矢を携えるだけだ。

「アキラ、てっめえ、覚えとけよな……」

「ふん、君が覚えてられるとは思わないけどね」

「こらっ！　二人とも喧嘩しない！　今日始めての戦いなんだから、気を引き締めなくっちゃ！」

マミはレンとアキラに活を入れるのと同時に、自分にも気合を入れていた。

不安なのだ。

弓を持つ手が震えた。

もし矢で相手を斃しきれなかったらと思うと、もし仲間が自分を庇って大怪我を負ったら、もし現れた怪物が異常だったら、と思うと毎回ここに来て震えるのだ。

何回訪れた15階層でも、例えこれが絶対に簡単に突破しなければならぬ関門でも、危機感は拭えない。死と云う漠然なこの場所で、平和な世界をなに不自由なく歩んできた彼女は、やはり――怖かったのである。

――生と死の境界線が曖昧な迷宮が。
ダンジョン

「マミ、絶対大丈夫だって！　　なんたって俺がついてるじゃねえか！」

そしてその度、レンが励ましてくれる。

「レン、ボクだっているんだぞ？」

「俺を馬鹿って言ったお返しだ」

「君って奴は……。マミさん、安心していいよ。もしマミさんがしくじったら、レンを楯にしても守るから！」

そしてその度、アキラが緊張をほぐしてくれる。

「おい、アキラ、冗談だよな？」

「ほ……いや、冗談だ」

「おい！ 今本気って言おうとしてただろ！」

「そんな事より、前を見てみなよ。いっぱいいるよ？」

数十メートル先にいるのはルーだ。

狼のような怪物である。氷雨もよく狩った比較的弱い怪物でもあつた。

だが、レンが技でこの目の前にいるルーを見てみると、氷雨が戦つた力量^{レベル}1ではなく、15。

軽く見積もると、1階層にいるルーよりも十五倍は強いだろう。

それに、この階層のルーは単独ではなく、ほぼ数十匹まで群れる。斃せる難易度だけで云えば、氷雨が数十日前に斃した際の、二十倍以上であつた。

それ位、迷宮は奥へ奥へと潜るほど、大きな戦力が必要になってくる。さらに20階層以降には、罠^{トラップ}さえも出現した。

「なんかアキラに話を逸らされたな……。よし、ここは急いで突破するからな！ 目標は20階！ 金の稼げなさそうな雑魚は全部無視だ！ 狙うは一攫千金だっ！！」

レンはアキラにいいようにコントロールされながらも、今後の方針を決定した。

「了解だよ」

「オツケ〜！」

その隊長のレンの案に、アキラもマミも了承する。

もしレンの発言が間違っていれば、死なない為に二人とも疑問の言葉を投げかけるがろうが、今回の指示は的確だ。

ダンジョン

迷宮の攻略には、戦闘の技術だけでなく、冒険者としての資質も問われる。

どこで戦い、どこで逃げ、などの確な判断が、冒険者として必要になるのだ。これができない冒険者は命を落したり、一生戦えない体になったりするのである。

「じゃ、1、2、3、な！」

じわりじわりと滲み寄ってくるルーに、レンは言った。二人は深く頷く。

ルー達はまだ数十メートル先だ。鋭い嗅覚ゆえに三人の居場所が分かっているが、絶好な好機を狙うため一気には攻めなかった。

「1！」

三人は腰を深く落とした。クラウチングスタートまでとは行かないが、それでも早くスタートダッシュを踏むために、少しでも体勢を落としたのだ。

ルー達は三人が逃げも隠れもしないので、喉も鳴らさず少しずつ歩むばかりである。

「2！」

三人は暗闇に紛れるルーを深く睨んだ。三人の中では誰一人、敵をルーだと気づいていない。ただ力量が^{レベル}15で大量の敵だと気づいただけなのだ。

一方のルー達は、レンたちを嗅覚だけで、ほぼ全ての情報を得ていた。

体長、武器、防具など、をである。

「3！」

一気に二人が疾走した。先陣を切るのは、レンとアキラのツートップだ。その二人の後ろを追うように、マミが矢を数本放ってから走った。

ワオオオオオオオオオン！

矢に刺された仲間が数人いた。だが、どれも致命傷には至っていない。

ルーも急に走り出した三人に、牽制のため高らかに吠える。その遠吠えはボスが仲間へと出す、突撃の指令と報復の折り合いも兼ねていた。

三人の少し後、ルーも数十匹が一斉に走り出したのだ。

「えっ！？」

マミが驚きの声を上げた。敵の正体がルーだったというのもあるが、数が尋常じゃないのだ。

ルーは群れるといっても、精々十匹まで。それ以上は特別な理由が無い限り、集まることが無かった。

だが、作戦はそのままである。

もし変更があるなら、誰かが止まったり声をかけたりするはずだ。三人は固い絆で繋がれている。この程度の苦難で、負けたりするようなそんな弱いものではないのだ。

最初にルーと立ち会ったのは、――アキラだ。

飛び掛ってきた一匹のルーに向かって、走りながら長い棒で側面を叩く。ルーは力のベクトルを横に逸らされたので、頭から地面を滑る。

マミは前から来たそのルーを飛び越え、事なきを得たのだった。

次にルーと相對したのはレンだ。

真っ直ぐ噛み付いてきたルーの攻撃を、^{スキル}技で受け立った。

――^{スキル}槍技『疾槍』。

真っ直ぐ伸びた槍は、ルーの甘く開いた口内を狙う。

――槍は赤きまま、紅を浴びた。そのまま血で槍を滑り、牙が柄を持つていた手の寸前まで来る。

レンは突き刺さったルーを横に振り回した遠心力によって、槍から放す。ごろん、とレンが屠ったルーは、地面へ横たわった。

そのレンが槍を振り回した隙を、^{モンスター}狙う怪物がいた。

ルーである。

その開いた胴体に、ルーは噛み付いたのである。衝撃は大きく、レンの体は大きく浮いた。

「うっ……!!」

幸い牙は鎧に拒まれて、身体には届かなかった。この階の怪物^{モンスター}にとっては脅威の代物だが、レンは僥倖だった。

まだ、この階層で良かったのである。

これが30階、40階だと、ルーも簡単に鎧を牙で貫いただろう。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おお!!」

レンは一回、全てを振り切るように大声を出し、噛んできたルーを柄で全力で叩いてから、また先へ走り出した。次に前からやってくるルーは避け、避けられないルーは槍で払うように切った。

どれも突いて殺そうとは、しなかったのだ。

（クッソ！ 甘かった。注意が甘かった。こんなので、こんな実力で、誰が守れるんだ！）

彼は走りながら、深く自分が弱いと反省していた。

例え鎧で助かったとしても、レンは楽観などしない。どこまでも強くなりたいと思うストイックな男だったのだ。

（ボクも見習ないとな）

レンの様子を近くで見ていたアキラも、深く丹田に力を入れた。

そして、鈍器とも云えるその棍棒で前からやってくるルーを、上に下に横に、最低限の動きで殴り始めたのである。

どれも死へと繋がる致命的な打撃とはならない。

だが、先を切り開いて進むには十分な攻撃だった。

（凄い凄い！ 道がどんどん開いていく！）

その頃、マミは目の前の二人に驚いていた。

細い道を埋め尽くすほどのルーを、先頭二人がどんどん蹂躪していった。まるでドミノを崩すように。

やがて、道が終わり、大きい広間^{モンスター}に出る頃、遂にルー達は居なくなる。三人の道程には、傷ついた怪物ばかりが倒れていたのだった。

第五話 遠征（後書き）

遠征について、無駄だと言う意見もありましたが、作者としては必要と思ったので書きました。これが無いと、第二章ではダンジョン描写が少ないことになるので、題名に作品の内容が合いませんからね。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第六話 遠征？

三人が立っていた大きな広間。

形としては、ぽっかりと開いた正方形だ。天井は高く、天井に咲いた多くの大輪の花によって先が見渡せた。

「もうすぐ……ね」

マミがぽつりと言った。

彼女を含めて三人とも、先程の全力疾走でぜえぜえと深呼吸している。汗は背中に滴り、服と皮膚がくっついて気持ち悪い。

この世界に快適な素材であるポリエステルはないので、彼らが鎧の下に着ている服の素材は安い麻だ。彼らの服に対する不快感は、気温や湿度よりも高かった。

「まだ……まだ油断……するなよ」

いつもは饒舌のアキラも、この時ばかりは言葉が詰まっていた。肺が酸素を欲しがってるのだ。日本にいた頃は勉強ばかりしていたので、この三人の中でも特に体力がないアキラ。故に体が華奢であった。

「あれだな！」

レンは心肺能力が高いのか、数十秒息を整えるだけでよかった。彼はアキラとは逆に、日本にいた頃は運動部で体を鍛えていたのでこの程度の運動は楽である。

ただ、その元気により行動が先行しすぎてワンマンプレーが目立つので、アキラはもう少し抑えて欲しかった。

現在もレンが先頭を歩き、この部屋にある階段へと向かっている。

「少し……少し待ってくれ」

そんなレンを、アキラが止めた。

「あーそう言えば、そうだったな。急いで死んだら洒落になれねえし、ここらで一回休もうか？」

「もちろん……賛成だ……」

「私も……もう無理……」

二人もレンの意見に賛成した。

不幸中の幸いか、この広間には怪物モンスターが“まだ”いない。ルーは、怪物通しの縄張りを忠実に守っているから来なく、討伐された怪物モンスターの復活は最低でも数十分はかかるので、三人はゆっくりと階段の近くで休憩するのだった。

「ほら、水」

アキラはレンから受け取った革の水筒を、一口だけ飲んだ。

この世界になんでも無限に入るような、便利な革袋はない。水は迷宮ダンジョンの中にある泉等で補給できることもあるが、食料は殆ど手に入らない。干し肉などの保存食を持ち込む者もいるが、一人だと多くは持てない。

だから冒険者は必要だと思いう物資を見極め、迷宮ダンジョンに持ち込むのである。必要とあらば荷物運びの人間さえ、雇うことがあるぐらいだ。物資の調達は、それ程冒険者に必要不可欠な物なのである。

「じゃ、行こっか？」

それから数分。

出発を示したのはマミだ。

時間としては短いが、既に冒険者になって一ヶ月近くになる彼らには、十分すぎる休息だった。何故なら、本来なら一休みすら与えられない方が多い。多数の怪物による連戦に次ぐ連戦など、“この中”では珍しい事ではないのだ。

「気を抜くなよ」

段へと足を踏み入れる少し前、アキラが囁いた。

「ったく、アキラは俺の母親かよ？」

「ふん、そうしなければレンはすぐ無茶をするだろ？」

二人は一旦目を交わし、ふっと笑った。

小さき頃からの幼馴染ゆえのアイコンタクトだった。

三人は、まずレンから段に足を入れた。

——深淵へ、また一步近づいたのである。



——黎明時。

朝方の、夜と昼が混じった時間の事である。

黄昏時と対をなす黎明時だが、こちらもやはり危険であった。迷宮^{ダンジョン}の怪物達は、何故か昼と夜の間は気が高ぶるのだ。

この時、黄昏時の“赤い”眼とは違って、反対に黎明時は眼が“青い”のである。

理由は不明。原因は不明。

悠久の間、様々な研究者や冒険者が調べたが、有力な仮説すら生まれなかった世界七不思議の一つである。

出来た仮説と云えば、その二つの時間帯は怪物^{モンスター}に影響を与える秘的なパワーが出るや、生物としての本能など、胡散臭いものばかり。どれ一つとして、確証のある仮説は無かった。

——命を賭ける冒険者に就く者は、この時の冒険を“必ず”避ける。

例え後少しで最下層でも、例え冒険が快調に進んでいても、この時間帯は絶対に“冒険”しない。

ここでの冒険は、危険に身を晒すことだ。常に安全を心がけることの反対を総称して“冒険”と云うのである。

「——ねえ、目が青くない？」

20階層。

あれから三人は何時間^{ダンジョン}も迷宮を突き進んで、やっと5階も進んだ。その間、殆どの敵とは戦わず、殆ど逃げながら進んできた。

そして、20階層の中間に差し当たったころ、三人は大きな広間にいた。横幅は十五メートル程度。形としては立方体である。

天井で光り輝く花によって、遠くの視界が見渡せた。

マミはそんな時、遠くにいる怪物の瞳が、通常の黒や茶色ではなく、“青色”であった。
残酷なまでに冷徹で、一度見たら恐怖で目が話せないそんな眼だった。

「青い……そんなわけないだろ！　これまで“一度”もそんな眼見たこと無——」

グルルル！

「——いや、いたな」

マミの感情には気づかず、レンは笑った。
ただの彼女の見間違いだと思っていたが、こちらに向かってきた一匹のルーの眼を見るや否や、レンの態度は変わった。
そのルーは確かに眼が“青”かったのだ。

「青、青、青、どこかで聞いたような覚えがある」

ところで、アキラはその“青”いルーを観察していた。

——青い瞳。

聞いた覚えがあるのだ。

誰が、何を、いつ、どこで等は明らかになっていない。ただ、その一部分だけ靄がかかり、思い出せないのだ。

だが、“青”い瞳の怪物が、迷宮攻略モンスターダンジョンに関わる重要なピースだとは、思い出せるのだ。

「こいつは俺が——倒す！」

アキラが思い出す少し前、レンは既にマミの前へと出て動いてい

た。

ル一匹。

力量は20なので、おそらく彼は勝てるだろうと思ったのだろう。

流れるような体捌きを彼は行った。

右が後ろになるような半身になり、下段ヘルーの眉間を目掛けて突こうとする。

――槍技『式連突』。

筋肉アシストを活かした技で、二回連続で行う突きのことだ。一撃の威力は『疾槍』に劣るが、二発合計の威力で『疾槍』を越える技なのだ。

「――レン、駄目だっ!!」

ここでやっと、アキラの脳内に電撃が奔った。

“青”い瞳を思い出したのだ。忘れたらいけない特記事項だった。青い印は――黎明時。

冒険を止めなくてはいけない時間帯なのだ。

だが、もう遅い。

技は発動したも止まるような、そんな便利な代物ではない。暴走列車のように、スタートを切ったら終わるまで止まれないのだ。

レンの赤い槍は、ルーの眉間を正確に狙う。

一発目――眉間に浅く刺さり、すんなりと抜けた。

二発目――眉間にもう一度刺さった。ただし、浅くではなく深く。貫いた槍から赤い血が流れ出た。

「お、おい、アキラなんなんだよ? 急に言っても止まれるわけないじゃねえか! それにルーだ! 何が心配なんだよ?」

「ああ、もう！　過ぎてしまったことはしょうがない。――今は、逃げるぞ！」

驚愕に染まっているレンを無視して、アキラは話を続けた。

「どうしてなの？」

「黎明時だからだよ！」

「えっ、黎明時って、あの！？」

「ああ、そうだよ！　そうなんだよ！　だから……！！！」

マミの疑問に大急ぎでアキラは答えた。
黄昏時と二分する黎明時の名は有名だ。

「でも、アキラ――もう遅いぜ？」

二人はレンの知らせによって、背後を振り返った。

――大勢いた。

狼のようなルー、クモのようなシュピンネ、機械人間のメンシュ・アイゼン、それ以外にも沢山いた。

いずれ劣らぬ腕達者ばかりであった。

それも皆平等に、眼が青い。

三人の中に何かがざわめいた。

――恐怖だ。

恐怖が体をざわつかせたのだ。

冒険者としての冒険――すなわち生き残りを賭けたデスゲーム。
レン達三人にとって、初めての経験であった。

第七話 遠征？

「逃げろおおおおおおおおおおおおおおお！！」

レンが叫ぶその前に、三人の足は動いていた。

隊列は自然と決まっている。

まず機動力が一番高いアキラが先頭で、真ん中から多種多様な遠距離攻撃をするのがマミ。そして、重装備ゆえの防御力から、しんがり殿を務めるレンだ。

広間は大きい。

後ろにいる怪物をモンスターちらちらと見ながら、レンはマミの背中を追う。

三人の場所から、広間の出口まで僅か数メートルだ。その間には敵が一匹もおらず、それだけが三人にとっての逃げ切る希望だった。

「はあはあ……！！」

口から言の葉をつづる余裕さえ、三人には無い。

止まれば死は確実に向こうから襲ってきて、全力で走っても死という未来は遠のかない。この二つの現実が、彼らを自らの限界から超えさせる。

だが、限界を超えてた故に、彼は前しか注目していなかった。

キシヤキシヤ！

そんなレンの無防備な背後を、まずシュピンネが透明の糸で狙った。シュピンネから出た直後は粘着性だが、絡まったら硬質化する厄介な糸である。

「レンっ！ 危ないっ！」

彼に危険のシグナルを告げたのは、マミであった。

射手ゆえか、常に敵に近づかれないよう四方八方を気にする彼女。この町によって鍛えられた危険察知能力は草食獣並みに高く、レンもアキラも適わない程であった。

「……っ!？」

若干遅れたが、レンはシュピンネに反応できた。素早く見返って槍を突くように前に出し、糸を巻き付かせる。

そして、――急ブレーキをかけた。

重戦士は自らの意思で、足を止めたのだ。

「レンっ!？」

きゅっと鳴る独特の靴のブレーキに、叫んだのはアキラだ。

肩越しにレンを見て、逃げない彼を止めようとしたのだ。無駄事を言ってる暇さえ惜しい。だからアキラは、短く大声ではっきりと名前だけ言ったのだ。

「レンッ！」

同じく、マミも彼に説教を説いた。

だが返されるのは、甲冑の上からでも分かる笑み。

レンはまだ、歩みを再開してはいなかったのだ。

やがて、彼女も足を止める。レンを説得するがゆえの行動であった。

「これは俺の責任だ！ だからこいつらは俺が止める！ 心配すんな！ 先に“泉”に行って待ってろ！」

レンはそんなマミに気づいたのだろう。

背後を振り替えろうともせず、多数の怪物を睨んだまま告げた。
モンスター

彼は仲間が逃げる為の、時間稼ぎをしようと思ったのだ。

けじめではない。先程の失態であるルーを不用意に殺した責任を取ろうとしたわけではない。ほどよい悪意に、心を焦がしたわけでもない。ましてや、目の前にいる敵を斃して、金を稼ごうと思ったわけでもない。

ただ、仲間を守るために、彼が降した決断なのだ。

「レン！ でもっ！！！」

「さっさと行け！ 俺は大丈夫だ！ “泉”には必ず行く！ 絶対だ！ 絶対に“泉”に行く！！！」

背後からだったが、アキラにはレンの覚悟がとても理解できた。髪が少しの風によって踊り、肉体は今後の決戦を前に熱く火照っている。槍は光によって、綺麗に赤く光る。

英姿颯爽、まるで御伽噺のような偉大な男の有様は、そこに存在した。

「くそっ！ 後で責任はとってもらうからな！！！」

「えっ！？ 放して……放してアキラ！！！」

「アキラ！ 恩に着るぜ！！！」

アキラは急いで今走った道を戻り、動こうとしないマミを担いだ。日本に住んでいた頃ならこんな行為不可能だったが、力量レベルというこの世界の万人に与える努力の結晶が、それを可能にした。

23という力量レベルが、体力を、膂力を、上昇させたのである。

担ぎ上げられたマミは激しく揺り動いてアキラの手から抵抗するが、結局腕がその身から手放せることは無かった。

彼のレンを思いやる気持ちだが、マミのレンに対する思いに打ち勝ったのだ。

そして、広場から、二人の姿は無くなった。

残ったのはただ一人。

——偉大な男だけであった。



「マミさん……」

「嫌！ 聞きたくない！！」

一方、それから数十分、二人は迷宮ダンジョンの憩いの場として知られる“泉”モンスターに着いていた。

何故か怪物達はこのエリアに足をあまり踏み入れようとしていないので、給水ポイントも兼ねた休息所として、よく冒険者たちには利用されていた。

泉がある場所は、事細かに冒険者ギルドによって公開されてるが、

その出来る場所はランダムだ。だから、泉を初発見をした者には奨励金が送られる事すらある。ギルド側は泉の公開情報によって、また一儲けが出来るゆえの先行投資であった。

「……」

ここに着いてから、もう実に数分も経っている。

アキラは連れてきたマミを、岩壁に囲まれた広間の中心にある湖のほとりへと降ろした。

マミは大人しくほとりに座ったが、ずっと暗い表情のままだった。アキラはそんな彼女の具合を、延々と伺っていた。

「ねえ、どうして……どうしてレンを置いて行ったの？」

やがて、ぽつりと、水面に向かってマミは呟いた。

「言い訳かも知れないけど、レンが大丈夫だって言ったから……だよ」

アキラもマミと並ぶように座る。

水面に浮かぶ自分の、友一人置いて逃げた顔をじっくりと見ていた。色は黎明時によって彩られた怪物^{モンスター}と同じ、青色である。

「仮に、もし、大丈夫じゃなかったら……どうするの？」

「その時は——ボクが責任を取るさ。嫌われても……虐げられても……ボクがレンの代わりにマミさんを守る」

アキラは空ろげな表情のまま、言い切った。

“最悪の結末”の、覚悟はしている。彼はもし想像の通りに事が

運んだら、自らの人生を彼女のために捨てようと思っているのだ。

「でも……それで私が納得するとも思ってるの？」

「いや、思わない。思わないさ。でもボクも男だ。“けじめ”はつける――」

アキラはそれだけ言って、手で水をすくう。そのまま口へと運び、喉の渴きを潤す。そのまま空になった水筒にも水を入れた。

「――でも、ただの杞憂だと信じたいけどね」

「そうなければいいけどね――」

「なるさ。絶対になるさ。だってレンは――レンだろ？ あいつがきっと、巷で話題の“名”である救世主^{メシヤ}だと、ボクは信じている」

信じていた。

アキラはレンを、この“物語の主演”だと信じていた。

漫画やアニメの主人公のように、どんな強大な敵だとしても歯向かって、――勝つと信じていたのだ。

それは単なる予感でも、希望ではない。

予感である。

幼き頃からずっとレンを見続けて、アキラは感じたことがあった。

例えば昔、中学時代にレンはとある部活に入っていた。その部活は万年一回戦敗退であったが、レンが入部した時を境に次々と部員の才能が開花した。それから続く数々のドラマの果てに、やがて全国の花を咲かせた。

そして、今回。レンはたまたまこのゲーム、ダンジョン・セルボ
ニスをプレイした。そして、ログアウトしようとするど、“ゲーム
に似た世界”に立っている。そんな世界は自分達に、現代に馴染ん
だ自分達に、とても合わなかった。

ならば、とアキラは思うのだ。

——もしも、この世界から数々のゲームプレイヤーを救う存在が
いるとすれば、レンなのではないかと。

「その通りかも……しれないかもしれないね」

やっとここで、マミは笑ったのであった。



レンはたった独り、孤独の戦いに挑んでいた。

敵は無数。仲間は逃げた。

後は自分がここから脱出すれば、それだけで“勝利である。

だが、それが難しかった。モンスター怪物は理性を失っている。一筋縄で勝
てる相手ではないのだ。

武器はリーチが長いことから、白兵戦最強と云われる槍だ。

この世界では、『衝波』等の遠距離への攻撃方法がある。これに
よって、リーチの差はある程度埋まった。

だが、レンは未だに槍を最強だと思っていた。変わらないリーチ
は、力だと考えたのである。

「よしっ……!!」

彼は足を地面に滑らしながら、ざっと腰を落とした。そのまま槍を中段に構える。

次に、技を全身に施した。

その名は、『強化』。冒険者の間では、万能で不合理だと云われている技であった。

(やっぱりきついな……!!!)

『強化』が万能なのは、“全身”に筋肉アシストが起こるからだ。ただ、その時の体力の消耗が、一部分を鍛える『飛斬』等に比べると尋常ではない。

だから、冒険者たちはこれを不合理だと云って、あまり使おうとしないのである。

(でも……これで戦える……!!!)

そして『強化』これには、『重斬』とも『疾槍』とも、似つかない性質があった。

武器の熟練度が必要ないのである。これは力量が20あれば誰にでも使え、その辺りは力量が10になったら使える『力量読み』に近い。

だが、他のどれのは違い、単発型ではない。一度発動すれば永続的に効果が持続するので、今回レンが使用したのであった。

「はっ!!」

レンは『強化』を使っただけ、敵陣へと――突っ込む。

キシヤシヤシヤ！

一番に狙ったのは——同じく走り向かってきたシュピンネであった。

刃に固まった糸を巻きつけたまま、上から下へ槍を鈍器のように叩きつける。

キシヤ……！

シュピンネは少しだけ怯むが、レンはそれに止めは刺せなかった。

ガッシャン！！

厚い鉄の塊に囲まれたメンシュ・アイゼンは、これまた太く分厚い大剣を横に振り回したのだ。

躲しきれなかったレンは鎧の上から大剣を喰らい、衝撃と共に——吹っ飛ばされた。内臓まで、もっと特定すると肝臓まで、衝撃が伝わった。

より硬く身を固めた重装備のおかげで、素早く動けなかったのであった。

「うお……！！」

膝が折れ、槍を持ったまま地面に手を着いた。ついこの前に食べた食物を、吐き出しそうになった。だが出たのは涎。同時に呼吸困難にも襲われた。

戦う気力など、たった一発の肝臓まで伝わる大剣の水平切りで削がれたのである。

しかし、まだ怪物モンスターの攻撃は終わりはしない。レンが力尽きるまで、一方的に蹂躪するつもりなのだ。そのだから、上から別のメンシュ・アイゼンが、無防備な背中を大きな両刃の斧で狙った。

「がっ……!!」

——叩き潰されたのだ。

キリキリッと歯車の回る音の後、全体重を乗せた斧により、レンは四つん這いから仰向けになる。

でも、まだ、終わらなかった。

ルーが鎧の間の左肩に噛み付いた。

「ぐっ……あっ……!!」

メンシュの時とは違う激痛が走った。衝撃ではなく、牙による刺激なのだ。

口からは呻き声しか出ない。

また、——痛かった。

キー、ガッシャン！

怪物モンスターの暴走は、まだ続く。

またこれまで攻撃したとは違う、メンシュ。しかもメンシュ・アイゼンが、巨体を大きく浮かして、ルーもろともレンを押し潰した。

「ああああああああああああああああああ!!」

レンは眼窩から目玉が飛び出そうになった。口から絶叫が、漏れる。鎧ともども体に押し付けられた。

足音は止まない。敵の賛美歌は止まない。レンに対する宴は――止まなかった。

（俺は……俺は？）

激しい痛みによって、思考が狂いそうになった。

上からの圧迫感による呼吸が困難にもなる。

だが、まだ右拳に握った“一本の槍”だけは、手放してなどいなかった。

（今――何をやっている？）

自問自答をレンは頭の中で繰り返した。

メンシュの下という閉鎖空間。痛みによって覚醒しだす脳。頭に伝わる生暖かい血の感触。どれもがどれも、アキラやマミの泉に行くという“約束”と――違っていた。

（俺は何を――何をやっているんだ――！）

レンは槍を強く握った。唇を噛み締める。

（元の世界に戻るんだろ？ あの子を助けるんだろ？）

レンは丹田に気合を入れた。

眼は覚悟と共に開くと、強い意思をそこには映し出していた。

――逆転への奇跡。

それを行うのに、これらは必要不可欠なのだ。

「――だったらこんなところで寝てる暇は無いだろうが――！！！！」

そして、レンは——叫んだのだった。

——ピコーン、特殊項目条件“ 勇気の源 ”をクリア。

と、こんな時だった。

レンの左腕につけていた“ デバイス ”が鳴ったのは。

ピコーン、スキル技を手に入れました。

ピコーン、スキル技『勇気の種』を獲得しました。『勇気の種』、すなわち勇気を力に変えること。ただし、非効率。

ピコーン、『勇気の種』は特殊な“ 名 ”のプロセスとなります。

次々と周囲に機械音が鳴り響きわたった。レンは今手に入れた新しいスキル技を、何の疑問も持たずに使う。

と、その後、メンシュ・アイゼンが上へとぶっ飛んだ。

それを行ったのは一人の男だ。

鈍重な装備に身を包み、赤い槍を右手に持つ男。

長身で、髪が茶髪の男でもあった。

「……」

男の出す威圧感に、モンスター怪物は一步引いた。

「……」

レンはそこから右足を踏み出した。

左足はその後、勝手に出た。

向かったのはやはり、シュピンネであった。

弱点である頭を、これまでとは違う圧倒的な速さで一突き。

技は『^{スキル}勇気の種』しか使っていないのに簡単に斃せ、シュピンネは瘴気となって消えた。槍に絡みついた糸も同時に消えたのであった。

次にレンが向かったのは、——多数のルーであった。

それから数十分後、この広間に——数十の結晶石が地面に転がるのに、そう大した時間はかからなかった。

第八話 無垢

「はあ、疲れた……」

今は黎明時である。

空がオレンジに染まった頃、やっと氷雨は宿へと戻ってこれた。ユウはもうおぶっていない。何度か隠れている間に仮眠を取ったユウは、宿の前に来た時に下ろしたのである。

「アニキ、これからどうするんだ？」

「寝る」

氷雨はマントを部屋の中に投げ捨て、二つある内の一つのベッドに寝転がった。

実は彼、数時間あった逃亡劇の間に、一時も気を休めていない。常に気を使い、神経を尖らせていた。数分から数十分、仮眠をとっていた三人とは違い、徹夜もあってか目の下のくまが尋常ではなかった。

「氷雨さん、私はどうしたら……」

「知らねえ。勝手にしろ。とにかく俺は寝……る……」

クリスは、これからどうするか of 行動方針を氷雨に伺ったが、即座に打ち切られた。

そんな彼は五分もかからずにすうすうと、穏やかな寝息を立て始め、薄い掛け布団を体に巻きつけたまま、眠ったのだった。

十数人の兵士を撃破し、子一人抱えたまま走った氷雨のライフは

既に限界だったのである。

「あの、どうしたらいいと思います?」

クリスはカイトに聞いた。

実は奴隷は『スレーブ』によって、寝食はおろか排泄でさえ制限される。主人が自由にしたいとの命令を出すと、奴隷側も好きに行動できた。

彼女は首輪をつけていないのだが、そこだけは氷雨に従おうと思っただのだ。

だが、結果は見ての通りだ。

氷雨は奴隷のそんな予備知識はおろか、関心さえ抱いていなかった。要するに今の彼は、ただ惰眠を貪りたいだけなのだ。

「ええっと、好きにしていいたいと思うぜ。ずっとアニキと行動してきたけど、基本そんなのだし」

その少年は尊敬する氷雨の無知な言動に、苦笑いしか出なかった。カイトの思う限り、迷宮でも氷雨はずっとそうだ。^{ダンジョン}基本自己責任で、最低限の命令しかない。それも流すように言うだけ。失敗もあまり咎めないし、上層部の慣れた弱い怪物を狩る時は、^{モンスター}いつも気だるそうにしている。

最近カイトが見極めた氷雨は、殆どの事が“適当”なのであった。

「そ、そうですか……」

クリスが氷雨の行動に戸惑っていた時、ユウに服の端を引っ張られた。

「おねえちゃん、いつしよにねよ？」

「ええっ！？　でも私は奴隷ですし……」

「いいから、ねようよ」

クリスはこの中で一番仮眠を取ったのにも関わらず、欠伸をしているユウに困っていた。

奴隷は——人ではないのだ。——物なのである。

物は人と同じ扱いをされてはいけない。

彼女は、そう教え込まれていた。だから、一緒にベットで寝ようと、誘ってくるユウに困惑していたのだ。

「クリスねえ、寝てやったら？　ユウもそれで納得すると思うぜ」

クリスは目だけをうるうるさせ、カイトに助けを求めたが一蹴された。カイトはできるだけ、母親の温もりを欲しがっているユウの願いを、叶えて欲しいみみだいである。

「わ、分かりました。では失礼します」

「やった！　じゃあねよねよ！」

クリスはユウに続いて布団に入った。

ユウは寝つきがいいのか、すぐに目を閉じ、すうすうと寝息を立て始めた。左手を小さな両手でぎゅっと握るユウに——

「……かわいいですね」

——クリスは顔が若干綻んだ。

奴隷になって数ヶ月。

詳しい年月は暗い牢屋の中にいたので分かってないが、ある程度の日数が経ったのはクリス自身も実感している。その間に受けた“教育”で、奴隷の基礎を学んだので、すっかりワルツに毒されていたのだ。

（こんな穏やかなの……いつぶりでしょうね……）

だが、そんな凍り固まった心も、無垢な汚れも知らない少女によって融かされ始めていた。

何も知らないがゆえの、純粋で裏表がない子供ゆえの、クリスの心の与えた影響である。それはまだ小さな炎だったが、着実に心を溶かしていた。

と、そんな時だった。

——クリスの瞳から、涙は落ちたのは。

「あれ……あれ……なんででしょう？　なんで私は泣くのでしょうか？」

体の内側にある冷たい氷。

それらがユウによってとけた時、クリスは泣いた。目からポロポロと大粒の涙を流し、ユウの手をぎゅっと握りながら、泣いた。

「悲しくないはずなのに……諦めたはずなのに……どうして？」

クリスは分からなかった。自分の涙の流すわけが。

暗い牢屋で過ごす後、ワルツを憎むように過ごす後、すっかりクリスは人間らしい感情を失くしていた。

だが、今、少しだけユウによって、それが戻り始めた。

そのことが、何よりもクリスの心に、動揺を与えているのだった。

「クリスねえ、オレもいいかな？」

「はい、どうぞ」

「じゃあ……」

そんな二人の和やかな雰囲気、ちょっぴり嫉妬したカイト。返事を聞くとクリスを真ん中として、布団に潜り込んだ。

仮眠を取ったとしても、眠たかったカイトはすぐに眠った。少年らしいあどけない顔を見てまたクリスの涙で濡れた顔は綻び、泣き疲れた彼女もまた眠りについたのである。



それから十数時間。

やっと氷雨は眠りから目覚めた。

そんな彼の第一声が、

「なんだこれ？」

これである。

仲良くぐっすり川の水に眠っている三人に、ふとした疑問を浮かんだのだ。ただし、まだ目は半開きで、脳は完全には覚醒していない。

「まあ、いっか。それより……腹減ったな」

だが、そんな疑問も食欲によってかき消され、上半身だけを起こし腹を擦っている。

ふと窓の外を見つめた。

少し欠けた月と満点な星空。

この世界特有の、綺麗な夜であった。

「何食うかな？」

そんな心打たれるような情景よりも、今の氷雨は飯だった。

ほぼ一日半食べていないのだから、当然のようにも思える。景色なんていくら見ても、腹も膨れないだから。

「あ、おにいちゃん……おきたの……？」

寝ぼけ状態の氷雨に気づいたユウが、ベットの上で首を傾げる。
彼女もまた、寝ぼけていた。

「ああ、飯に行こうと……」

「わたしもいく！」

「……えっ!？」

「……はっ!？」

氷雨の提案の甘い話に、大声でユウが大賛成した。

一気にご飯という甘い話によって、頭が冴え渡ったのだ。

そんなユウの声は、寝ていたクリスとカイトの目覚ましとなったのである。

「起きたか。どうする？ お前らも飯行くか？」

氷雨は起きた二人を見て、提案だけした。

「アニキ！ オレは肉な！ たっぷりの肉が食べたい！」

「勝手に頼め」

「やったぜ！」

氷雨の手持ちのお金は、まだ10万ギルほど持っていた。

彼も馬鹿ではないので、全財産で奴隷を買うような真似はしないのである。多少のお金をプールするぐらいの知識は身に付けていたのだ。

「あの……では私は……」

「おねえちゃん！ いっしょにいこうよ！ ここのごはんはおいしいよ？」

「でもですね。私は奴隷ですし……そうだ、氷雨さん！ やっぱり、食事の席を共にするのは駄目ですよね？」

今回のユウの意見には、しばらくクリスは喰らいついていた。

やはり、自分は奴隷なのだ。

だからクリスは、しつこいユウには逆らえそうにないので、氷雨なら共に食事するのを断ると思ったのである。

「好きにすれば？ 一々考えるのがめんどくさいし」

彼は、物凄く投げやりだった。

それだけ言い残すと、扉を開けて部屋から出た。

「アニキ！ ちょっと待って！」

カイトもそんな彼に続いた。

「じゃあ、おねえちゃん！ いこっか？」

「……………はい」

クリスの心の中では数秒の壮絶な葛藤があった後、素直にユウに従う。

彼女の弱点は、小さい子供なのであった。



ここは、氷雨が泊まっている宿の一階にある食堂ではなく、宿の斜め向かいにある少しだけ飯屋だ。

金属と金属のぶつかる音や冒険者たちの喋り声の中では響き、ジューシーな香りや食欲をそそる匂いが漂っていた。

「あれ、すごい美人だな？」

「子供連れ……？ 家族か？ でもなんでここなんだ？」

「おいおい、あいつどれだけ食べるんだよ！？」

その幾つかあるテーブルの一つ。
皆の注目を引き付ける四人がいた。

「うつま！ やっぱ肉は焼いたのだな！」

一人は肉汁が溢れている小さな100グラム程度の肉の塊に、ナイフとフォークをあてがい食べている少年だ。

肉は鉄板で焼いたのか、表面には焼き目が綺麗についており、中は赤みのレアで酷く柔らかそうな肉である。味付けは塩コショウしかかかってない。

なのに、何故か特別に美味しそうであった。それは少年が、一口一口幸せそうに口に入れ込むのもあるだろう。

カイトにとって、焼いた肉は久しぶりだ。それに、このエータルで現在流行っている飯屋に來たのも久しぶりであった。

宿の備え付けの食堂よりは割高で、メニューの種類も多いこの店の味は、やはり、格別であった。

「おねえちゃん！ それ！」

「これですか？ 殻はどうします？」

「とって！」

女性陣二人は横に仲良く座って、夕食を食べている。

ユウとクリスが食べているのは、近海で取れた豊富な魚介類だ。様々な大きな貝や、蟹っぽい生物。他にも数種類の魚などである。

そんな食材の調理方法は、様々である。

貝は網にばかばかと開かれたまま焼かれたのを、塩だけで頂く。

蟹は湯引きしたのをぽきんと関節を折って殻を取り、一口で頂く。
魚はムニエルで頂いたり、ブイヤベースで頂いていた。

どれも氷雨と比べると少量であったがまだ作られたばかりで、暖かい湯気が空中に待っている。

「それもとって！」

「はい。と、その前にお口を拭きましようか？」

「うん！」

クリスはそれを、じっくりゆっくりと味わっていた。ユウはすぐに口を汚すので、それを拭きながら。

——母子か姉妹か。

初めて彼女らを見た人には、仲良し家族に見えた。
そんな中に入り込む勇氣など、このお店の中にはいなかった。ゆえに誰もクリスにナンパなど、しないのであった。

「……」

がつがつ。

そんな効果音が流れるかのように、氷雨は次々と口へ流し込むように運んでいた。

彼の食べているメニューはクリスとカイトとユウ、三人が食べているメニューを別途に頼んでおり、それにまたパンを数個。拳大ほどのチーズと、大きな大皿に乗ったグリーンサラダまで食べていた。

その量は、店にいる客の中で一番多い。

本来なら、大食いなど行うような安い店ではないのだが、氷雨はそんなのを気にしない。筋肉に溢れた猛者にも負けず、次々と口い

っぱいに頬張っていた。

「おい、あいつまだ食べてるぜ？」

「頭湧いてんじゃないか？」

そんな声も聞こえるほど、氷雨は次々と皿を綺麗にして行く。

「あ、アニキ……」

「ひ、氷雨さん……」

食べ終わった彼の仲間も、休憩を入れずに一心不乱に食べ続ける氷雨に引いていた。

それから数分。

最後のお皿を積み重ねると、

「ふう、ごちそうさま」

「おにいちゃん！ すっごーい！」

やっと彼も食べ終わったのだった。

量としては二、三キロだ。沢山食べたといっても、たかだかそのぐらいなので、お腹はそれ程膨れていなかった。

そして、四人は会計へと移った。

「ぜ、全部で、9万5千ギルとなっています」

この日、氷雨はお金の殆どを失ったのだった。

第九話 スライム

——スライム。

ダンジョン 迷宮の中では、最弱と云われる怪物である。モンスター 何故なら、反撃を殆どせず、ある特定の攻撃——斬撃や魔法を喰らうと一撃で死ぬからだ。

そんなスライムの特徴は、半透明なゲル状。常にプヨプヨと震えているだけで、目や鼻などの感覚器官も無い。体長は60センチ。横幅は40センチ。

ダンジョン ただ、その場で少しだけプルプルと振動しているような、どの迷宮の中でも“一般的”に危険度が一番低い怪物だった。



——2階。

空気が薄く暗い場所で、クリスは氷雨達の無謀とも云える攻略の仕方に、懐疑の声が自然とでていた。

「ヒサメさん……本気ですか？」

それもその筈。

彼が貧乏になった次の日、四人はクリスのギルド登録を済ました後、暗く深い迷宮ダンジョンに訪れていた。

服装だけ見れば、到底冒険するような格好ではない。皆が皆防具をつけず、彼と子供はマント。クリスは簡素なワンピースなのだから。

「ああ、なあ、これが普通だよな？」

「うん……アニキはいつもこうだよ。クリスねえ、諦めたほうがいいよ」

「おにちゃんはいつもこうだよね！」

彼らが歩いているのは細い道だ。

そこでは、誰もクリスが感じる異様さに、応じる者はいないのだった。

「いや、これは絶対おかしいです！ 貴方達は死ぬ気ですか？ 私も一度ここに潜ったことがあります……その時の彼等は、文句なしの準備で壊滅したんですよ！ もっとしっかりと準備をするべきです……！」

無謀だと彼女は思った。だから、大声彼らに反論した。

万全な状態でも死ぬ恐れがあるこの箱の中で、唯一近所へ遊びに来ているような服装の彼ら。緊張感はそれぞれが十全に持っているようだが、回復薬を一つも持っていない時点で死ににきているようなものだ。

「準備って、例えばどんなのだ？」

氷雨は思わずクリスに聞き返した。

「死なない為の準備です！ だから冒険者は死なないように高い武具、より高い回復薬に手を出します！ それが氷雨さんには無いのですか……？」

「ああ、お前が言ってるのはそっちなのか」

彼はクリスの口上と、自分の考えとの違いに気づいた。

氷雨もしつかりと、気構えという“心”の準備は常に行っていた。いつ誰に襲われようが、敵を返り討ちにするという心構えはもう持っているのだ。

だが、彼は道具に関しては全く用意をしていない。

武具は必要ないから興味も無く鍛冶屋なんて行かないし、回復薬などの薬物類は現実^{リアル}にそんな便利な物が無かったので、手に入れようとも思わなかった。

「そっちって……他にどのような準備があるのですか？」

「いつでも戦えるという気構えだろ」

「えっ!？」

「いや、なんでもねえよ」

氷雨の考えは、一般の考えとは——ずれていた。

彼は、死なないために戦っているのではない。日々の糧を得る為、明日を過ごす為に戦っているわけでもないのだ。

——彼は、戦いたいから戦っていた。強くなりたいや誰かを守りたいの理由があるのではなく、ただ、心が、血が、本能が、叫ぶから戦っていたのだ。

だが、こんな与太話を人にしても、煙たがられるのは目に見えてる。

狂人か変人か。

三人にばれても問題は無いのだが、何故かそれを氷雨は拒んだ。もしかしたら、嫌だったのかもしれない。――祖父の言ったとおり、堕ちかけているのを認めることが。

「分かったよ。分かった分かった。次から――な」

「そうですか！ 分かっていただけで幸いです。」

「うん。アニキ、そこはオレも賛成する。アニキは準備をもうちょっととした方がいいと思うよ」

氷雨はクリスとカイトの口うるさい意見に反対することも無く、適当に答えていた。クリスは全身全霊で氷雨を説得したので、少しは彼にも思いが届いたようだ。

「そう言えば、まだ運がいいようで敵には会ってないですが――」

クリスが思い出したことだった。

四人はまだ二階にいる。

その間に通常ならどんな冒険者でも特殊な技スキルを使っていない限り、怪物モンスターの一匹や二匹に会うのだが、まだ彼等は一匹も会っていない。

異様――ではあったが、

グルルル！

遠くからすぐに獣の呻き声が聞こえたことで、特に気にはしなかった。

「――いえ、勘違いでしたね」

その遠吠えが聞こえ、最初に動いたのは氷雨。

風のように速く走り、敵の元へと走る。

三人の前からは、灰色のマントが深い闇に消えた瞬間であった。

「あっ！ おにいちゃん！」

それをユウを始めとした三人は、すぐに追いかけた。

直後、鈍い肉がぶつかる音が鳴り、獣の悲痛な声が響く。三人の歩みを速めるのに、それ程適したものは無かった。

「アニキ！」

思わず、カイトが叫んだ。

「なんだよ、一体。ちゃんと拾っとけよ？」

木霊する少年の声に返ってきたのは、青年のいつもどおりの声だった。

敵は――既に葬られており、結晶石へと変化している。ユウは氷雨の指示通り、結晶石を持っていた巾着へ入れていた。

「うん……分かってるよ……」

カイトは、あの時、氷雨が敵の声を聞いた時、口が“にたあ”と嗤っているように見えたのだ。

それが、カイトの背中に鳥肌を立たせた。

仲間だというのに、それがとてつもなく怖かった。ベルよりも、幽霊よりも、だ。

（足りねえ。全然足りねえよ）

一方の氷雨も、つい先日――クリスを連れ帰しにきた兵士の時に
出た“鬼”が、また再発したのだ。カイトが感じた恐怖は、“これ”
であった。

――肉が欲しい――血が欲しい――興奮が欲しい、と欲望の限りを
を身体の奥で訴える。

彼も、それを前回同様、止める気が無い。

原因がストレスだからだ。

この数日の間に溜まった戦闘衝動。一昨日の兵士達と行った、満足
できなかった戦い。その他としては、強敵と巡り合えないことが。
“鬼”の出現理由となったのだった。

「ヒサメさん、これからどうしますか？」

だが、そんな彼の様子に気づいたのはカイト一人だった。

“鬼”が表に出たのは、敵の声を聞いた刹那。その瞬間だけだった。
ゆえにクリスとユウは、彼のその貌を、見ていない。

だから、クリスはなんの畏れもなく氷雨へ話しかけるのだった。

「先へ――急ぐぞ」

依然として、氷雨は嗤っていない。

だが、着実に“鬼”は彼の心の中で蔓延していた。それが幸か不幸か、まだ誰にも分からないのだった。

そして、四人はまた迷宮を進むのである。

――4階。

シュピンネがいた。

それも一匹ではなく数匹。

氷雨はそれの頭に踵を落とし、左の拳でアッパーのように突き上げた。

決してとどめは刺さず、後ろでナイフをしっかりと握るカイトに手柄も経験値も譲っている。クリスはそんなカイトの援護を魔法でして、ユウは斃した後の結晶石を拾っていた。

――5階。

オーク種であるゴブリンが、狭い道を阻んでいた。

背は80センチにも満たず、四肢は短く太い。尖った大きな耳に、緑色の体色。手には短い棘のついた棍棒を持ち、まさしくメンシュと双壁を成す人型怪物^{モンスター}だった。

質で戦うメンシュ種とは違って、量で戦うオーク種。当然のことながら量は多い。

数としては五匹。しかし、獲物を見つければ仲間が仲間を呼び、狭い通路にわらわらと湧くそんな怪物^{モンスター}だ。

それに自己防衛しかないメンシュ種とは違って、彼等は酷く好戦的だ。獲物を見かけたら襲うという獰猛さを持ちえている。

「お、おねえちゃん……」

数匹の奴らを見て、その牙の間から流れ出る涎を見て、ユウはゴブリンに畏怖した。ぎゅっと、近くにいたクリスの腰に抱きつく。カイトもクリスも態度には出さないが、気持ちはユウと一緒だった。

“小鬼”^{ゴブリン} そう呼ばれるのも納得できる形相であった。

ブオオオ……！

ゴブリン
唸る小鬼。

だが、ここにもう一匹の“鬼”がいた。
彼もまさしく“鬼”だったのである。

ゴブリンを斃そうとする彼に、戸惑いの二文字は無く、躊躇の二文字は無かった。

「――まあ、待ってろ」

「ひ、ヒサメさん……!?!」

大きく足音を鳴らしながら、氷雨はゴブリンへ近づいた。

ゴブリンはその声と足音に気づき、目を輝かせ、より一層激臭のする涎を地面へ垂れ流している。早々とゴブリンは、いい獲物であろう氷雨に、“歓喜”の感情を思ったのだ。

ダンッ!

だが、それは勘違いであった。

ゴブリンが棍棒を振るその前に、氷雨は右足を大きく振りかぶった。

上から下へ。踵落しではない。膝を折り曲げ、下へ足の裏を真っ直ぐ落とす。俗に云う踏み付けであった。

ヴウオオオオオ!!

ぐにゃつと、氷雨は柔らかい肉の触感を靴越しに味わった。

三人には暗かったためよくは見えなかったが、想像はできる。一匹のゴブリンが、息絶えた瞬間であった。

ブンッ！

そんな氷雨へ、他の一匹のゴブリンが、棍棒を振るった。
棘のついた棍棒は、氷雨の右腰を薄く切り裂きながら殴打する。
おそらくマントの下では青く膨れ上がり、血が滴り出てるだろう。
しかし、氷雨は声一つ漏らさない。

その反撃してきたゴブリンの頭を掴み上げ、大きく腕を回して横の壁へ叩きつけた。

ピコーン、力量が14になりました。

また、一匹、ゴブリンが息絶えた瞬間であつた。

「あ、アニキ……」

“鬼”が表へと出ている氷雨に、届く言葉など——ない。

また、別のゴブリンがただちに大きく棍棒を振りかざした。

氷雨は、今度は受け止めずに避ける。そのゴブリンの右側面へと回り込み、足を大きく後ろへ引いた後の足の甲での蹴り。

頭を狙うサッカーボールキックだった。

大の大人でさえ、一発顔面へと喰らえば悶絶し、気絶するような業。

それが——効かないわけではない。

身体の小さなゴブリンは、その業だけで、大きく飛び、遠くの地面へと転がった。

だが、低い声が“まだ”聞こえるので、どうやら死んではないようだ。

今度は残った全てのゴブリン——三匹が、一斉に攻撃してきた。

ゴンッ！

棍棒の地面を叩く音が、三重となって響いた。

残念ながら氷雨には、当たらなかったようである。

そんな氷雨かというのと、上空にいた。彼の類稀なる危機感知能力が、四方ならぬ三方から囲むように狙うので、逃げ場所が上にしかない判断したのである。

「……」

下に舞い降りた彼は、無言でゴ布林共を蹂躪していく。

そんな氷雨の貌は、“明らか”に嗤ってる。

ある者は上に持ち上げてからの膝蹴り、ある者は真下への正拳突き、など様々な方法で斃していった。

やがて、また一匹また一匹と数を減らしていき、最後には遠くへ飛ばしたゴ布林も斃した。

グ……グモオオオオオ！！

最後にゴ布林が奏でたのは、仲間を呼ぶ嘆きであった。

「はあ……」

「お、おにいちゃん？　どうしたの？」

既に、敵はいない。

故に、彼は嗤っていない。

だが、氷雨は少し物足りなさそうにしていた。

そんな彼に違和感を感じ、ユウは問いを発した。

「いや、なんでもねえよ。それより――先だ。先へ進むぞ」

氷雨はユウの問いになにも返さず、きびすを返し前へと進んだ。
否、言えなかった。

足りないなど、敵が少ないなど、渴きに満ちているなど、到底言えなかったのである。

「……どうして……ですか？」

傷つき、だが決して治療しようもしない氷雨に、クリスは憂いしか出ない。

――悲しんでいた。

彼の物言わぬ後姿に、彼女は悲しみしか出ないのだった。

――6階。

メンシュがいた。

メンシュ・アイゼン。鉄を纏ったメンシュ種である。

氷雨はそれに三体遭遇したが、全て逃げ出さず、真正面から撃破した。

全て、『竜巻』。

彼は相手の腕に絡みつくように飛び、上腕部を自分の両脚で挟み、同時に小手返しのようにその腕を横に捻って、自分の身体を大きく捻る。

彼は飛びついた慣性と自身の体重、それに小手返しによって、敵を頭から落とすように投げ、そのまま腕を逸らせるように腕挫十字うでひしぎじゅうじがため固に似たのを極めたのだ。

投げと関節の複合技であった。

前回斃した方法との理由もあるが、最大の理由は『竜巻』の練習の為だ。

成功すれば強力な業だが、失敗すればリスクも多い業だ。その為、どんな敵と出会ってもかけれるように、練習台として彼はメンシュを選んだのだった。

一気に飛んで――12階。

ここに来るまで彼は、ただの一度も逃走は無く、ただの一度の敗北も無く、全部の怪物を討伐していた。モンスター

途中で泉で休憩もしてる。干し肉や乾パンも食べ、腹も満たしている。ただし、もう迷宮に潜って10時間超。ダンジョン

だが、その姿は遠征ではないのなら、冒険者としてはまともではない。

出会った数は全て合わせて三十五とこんなに歩いたわりには少ないのもあるが、やはり誰からも逃げないのは普通としては考えられなかった。

それには、三人の内の誰も止められなかった。

彼は、言っても止まらないのだ。

大丈夫、心配ない、など適当な言葉を見繕ってその場をしのぐ。やはり戦っているのがほぼ彼だけなので、三人も強くは彼に言えないのである。

「アニキ、もうこの辺でいいんじゃないか？」

全く冒険を終わろうとしない氷雨に、カイトは思わず提案してみ

た。

「そうだな。じゃあ、次を斃したら……な」

「次って……さっきもさっきもそれだっただろ！ アニキはさあ……！ もうちょつと自分の体の心配しろよ……！」

カイトは、自然と心の声が出てしまった。
ずっと前からのらりくらりと、自分達への言い訳をしている彼への叫びでもあった。

「ヒサメさん！ それは私も賛成です！ もう……もう限界ではないのですか……！」

クリスが心配しているのは、彼の体のことだった。
灰色のマントは三割を赤で占めており、通常の冒険者なら迷宮ダンジョンの探索を止めているところだ。

「お、お、おにちゃん！！ わたしもおねえちゃんたちに……さんせいだよ……もうそれじゃあむりだって……グスンッ……！」

ユウも泣いていた。

クリスの服の端を、片手で強く握りながら。
氷雨が傷つきながらも戦いを止めないことに泣いているのだ。

「はあ、でもな……いや、気が変わった。あいつを斃したら——帰るぞ」

そんな氷雨も“鬼”がやっと落ち着いたのか、戦いに満足——していた。

だが、目の前に、ぷるぷると震えていたスライムを見つけたのだ。苦節数十日。なかなか見つからなかったり、見つけてもカイトに討伐されたりと、逃げ出して以来戦う機会の無かった敵だ。

“鬼”による衝動は落ち着いたが、個人的な復讐は別だった。

「あ、アニキ、でも……いや、スライムか」

カイトも、他の怪物なら反対しただろうが、スライムに反対はしない。
モンスター

所詮、最弱怪物と割り切ったのである。

「――さあ、戦^やろうぜ」

氷雨は足を地面に滑らしながら、これまでのスライムに対する“思い”を振り返っている。

弱点を様々な方向で探したこと。どうやって“武器”を使わずに斃すか考えたこと。出会うのを様々に願ったこと。

そんなのが、頭の中で何度も巡った。

プルプル。

そんな返事は、震えるだった。

だが、氷雨はそれでも嬉しかった。

こうして、再度巡り会えたことが。

タッ！

氷雨は歓喜に震えてから、一気に距離を詰める。そして、そこで止まった。

どうせ反撃はしてこない。ここで、一回彼は集中力を高めたのである。

「ふう……」

まず放った正拳突きは——無駄だった。
やっぱり斬撃系の業でないと無理なのは、分かりきったことだ。
だから、大して落ち込みもしない。

「次は……!!」

今度放ったのは手刀。

鋭い手刀の一閃なら斬れると、そう思っていた。

だが、——スライムは震えるだけ。

祖父の云っていた名人は何でも手刀で斬るとのことから、“まだ自分は未熟なのだ、彼が悟った瞬間であった。”

「はあ、最後か……」

彼の策はまだ残っている。

素手で行える最後の方法。

実は使いたくなかった方法でもあった。

それは何故かというと——口を大きく開き、——綺麗に並んだ白い歯で、——敵に齧り付くからだ。

ぐっ、と顎に力を入れた。

噛み、そしてスライムを強引に食い千切る。彼は口の中に残ったどろっとした触感を、ぺっと吐き出すと、その先にはスライムの部分的に噛み千切られた箇所があった。

——スライムはたった一撃で死ぬ。
その謂れの通り、瘴気となって消え、極僅かの小さな結晶石となった。

「やっとだ……さ、帰るぞ」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

こうして、彼の因縁は終結した。

三人は疑問符しか浮かばなかったが、彼にとってはこの世界で一番大切なことだったのだ。

スライム、普通の冒険者には最弱だが、彼にとっては異常である
イレギュラー
メンシュ・ブロンズよりも、心に残る強敵になったのである。

やっぱり彼は、——冒険者としては異端なのだった。

第十話 経緯

あれから翌日のことだった。

「おにいちちゃん！ はんせいしてるの！！」

「はいはい……」

青年が腰掛けるベットの向いがわにあるベットの上に立ち、腕を組みながら青年に目くじらを立てる者がいた。

ユウである。

小さい身長ながらも、屈強な一人の武芸者相手に精一杯怒鳴り散らしている。いや、喚き散らしていた。ゆえにユウの姿に怖さは全く無いのだった。

「ほんとに！？」

「ああ……痛っ……」

「ちょっと……動かないでください……」

そんな青年こと氷雨は、銀髪の美女に手厚い看護を受けていた。手つきとしては不器用だが、美女ことクリスは一生懸命やっていた。健全な男なら誰でも息を飲むような光景だった。だが、灰色のマントの下に隠されていた彼の肉体を見れば、言葉を失うだろう。

並大抵の努力では成れない、細くもなく太くもない筋肉。数々の裂傷の上から巻かれる包帯。これだけでなく、氷雨には永年の鍛錬で培われた多くの傷跡まである。

——腰を抜かす。

そう表現してもおかしくない肉体だ。

現に、ユウもクリスも、初見は腰を貫かすほどの驚きようだった。辛い顔一つ見せず戦う彼に、こんな秘密があるなんて、と思ったのである。

「ふう、ここまでありがとな。後は自分でやるよ」

氷雨は片手では包帯を巻けない肩や腕などをクリスに巻いてもらうと、強引に彼女の手から包帯を奪った。

慣れない手つきのクリスより、幾度となく包帯を巻いてきた自分の方が早いと考えたからである。

「そつ、そうですか……」

クリスはそんな彼に少し寂しそうな声を出すが、

「はんせいしてるんなら、とうぶんは迷宮ダンジョンにいかないよね？」

幼子の諭すような声によって掻き消された。

「……」

「いかないよね？」

長い沈黙を氷雨は守っていた。

顔を下にし表情が分からないようにしながら、是と答えるか、否と答えるか悩んでいたのである。

別に、昨日迷宮ダンジョンで稼いだお金で数日は暮らせる。それが自分の身を案じる少女のためなら、冒険を控えるのも容易いだろう。

だが、そんな空虚な日常を、彼が望むはずはない。

せつかくの戦いに溢れた日常を送っているのに、それをわざわざ否定するほど氷雨は——大人ではなかった。

「……………分かったよ、ダンジョン迷宮には行かねえよ」

「ほんと!？」

「ああ、本当だ。行かなければいいんだろ？ 行かなきゃ——な」

「うん!！」

かといって、氷雨は——子供でもなかった。

戦いの場所を、一つに固執するほど子供ではないのだ。戦いの場など、この不法都市エータルには、無数に存在してる。それに、彼はその“火種”を一つ持っているのだ。

バタンッ!

そんな時のことであつた。

暗い空気が払拭された時にカイトは扉を勢いよく開け、部屋へと戻ってきた。

「おっ!？ 話がついたんだな！ アニキ！ ほら、換金してきたぜ!！」

明るくなったユウや何故かほんの僅か暗いクリス。そしてマントを着た普段どおりに見える氷雨。軽くなった部屋の空気を、カイトは感じていた。

「ありがとな、カイト」

「おうよ！」

カイトは氷雨に褒められながら、ユウが未だ立っているベットに座った。その顔は褒められた嬉しさからほこんでおり、浮き浮きとしながら腰のナイフを抜き、布で磨いていた。

そのナイフは短く、薄く、刃物としては最低ランクの品である。

三人のうちの誰もが、大切そうにするカイトのナイフを一瞥していた。

「ちょっと……ちょっと、いいでしょうか？」

クリスが右手を上げたのは、丁度カイトがナイフを拭いて数秒経った時だった。

「どうしたの、おねえちゃん？」

「いえ、これまでは機会が見つからなかったので、そろそろ“あの夜”に私達が狙われた理由を説明しようかな、と思ひまして」

時が止まった。

あの夜——つまりクリスが言っているのは、あの多くの兵士に襲われた夜のことだ。死ぬ気で走り、根性だけで逃げ、眠気も惜しんで黎明を待ったあの夜の事は、誰もが今でも色濃く頭の中に残っている。

「……何か知ってるのか？」

氷雨が、再度重くなった空気を取り去るように尋ねた。

「ええ、その原因は、全て私にありますから」

「どういうことなの!？」

「順を追って説明します。なんせ、私も初めてですからね! これをゆっくりと説明するのは! 長くなるかもしれませんが、ご了承下さいね!」

クリスは氷雨の横に腰掛けながら、綺麗にはにかんだ。まるで美の女神が微笑んでるように。汚らしい宿のベットの上でも、後ろに後光が差すような美貌だったという。

それを見て、カイトはにひひつと笑い、ユウはにかつと笑った。

氷雨もそんな三人の釣られてか、にやつと笑ったのだった。

「始まりはあの日、名前を言うのも憎たらしい……あのワルツに私が捕まったことからでした――」



覚えている最初の日、その日は生憎の雨だった。

詳しい日月は、暗い牢屋で過ごした日々が分からないので詳しくは分からないとのこと。

ただ、ゲームをログアウトした直後のことだ。暗い闇の中に意識を落とし、目が覚めると温かい母に会えると思っていた時である。

「いやあ〜まさか、まさかこんな美人を300ギルで!! 貴方

「はいい人ですねえ〜!!」

「いえいえ、礼には及びませんよ。私も奴隸の入手方法は、溢れておりますからね。これでワルツ様にも恩を売れるというところですよ」

「カナヒト様も貴族というのに、悪いお方ですねえ〜!!」

「そうですねえ！ では今後ともよりよいお付き合いを！」

「こちらこそ！ お願いいたします!!」

目覚めは妙に高い男の声であった。

その男の名は、後日知ったことだがワルツ。手品師か道化師のような奇妙で珍妙な格好をしており、その時からあんな軽快でテンションが高い喋りである。

もう一人の貴族風の衣装を着た男の名はカナヒト。奇しくも氷雨が斃した“あの男”であった。

周りは豪華な家具で囲まれた部屋だったが、そこに唯一あった窓の景色が灰色で、多数の水が地面へと落ちる音が耳に入ったので、この日の天気を雨だと判断した。

「おや！ どうやら目覚めたようですね！ 是非、貴女のお名前を――『教えて下さい』」

「くっ、クリスティーナです」

クリスの体に、びりつと電流が奔った。

既に彼女の首には『スレーブ』がついており、今後一切ワルツに逆らえないのも、後日同じく牢屋に閉じ込められた女奴隸に聞いたことである。

「こんな！ 美人とは！ 今後の教育のしがいがありますねえ！！
！ さて、どうやって……使いましょうか？」

彼女は、わけもわからない状況に追い込まれて、その時は怪しく
笑うワルツに震えることしか出来なかった。

今置かれている事情を整理するのに、数日はかかるのであった。

「さて、今日はも儀作法の勉強でもしましうか！ 美しさは内面
から生まれるといえますし！！」

ワルツがクリスに行った教育は、殆どが礼儀作法の勉強だった。
ワルツいわく、高い水準の教育を施した奴隷ほど、高い値がつく
らしい。他にも身なりや美貌、年など様々な査定要項があるらしい
が、クリスの耳には奴隷という悲惨な未来を想像すると、そんなも
のはあまり耳に入ってこなかった。

「どうでしょうか！ お値段は1000万ギルとなっております！
お買いになれますか？？？」

そして、教育からの数日後だっただろう。

様々な客に商品として、身を晒される羽目となった。

現代の日本の教育を受けていた彼女は、ワルツからの教育は奴隷
としての骨を覚えるだけである。それも、聡明な彼女は早く覚えた。
もし、覚えなかったら——という危機感が、彼女の記憶力を増進さ
せたのだ。

「ちっ！ なかなか売れませんねえ！！ やっぱり値段の設定が、
このエータルでは高すぎたでしょうか？ でも、もし数百で売ると
したら、こちらの手取りが少なくなりますしねえ！！」

クリスは来る日も来る日も様々な客に、どれも同じような緩みきった目に晒された。

だが、一向に売れることはない。

例えば、騎士でも、商人でも、貴族などの特権階級の者でも、貧困と犯罪が溢れるこの町では、1000万ギルの設定金額は高かったのである。

「どうでしょう！ お客様！ 実は彼女は1000ギルですが……『スレーブ』をもし外すのなら、もっとお値打ち価格となりますよ」

そして、ワルツの“策”が始まった。否、趣味が始まった。

『スレーブ』を外して、クリスを売ることにしたのだ。

ただ、だとしても彼女の値段は『スレーブ』代の税金を抜いた、500万ギルとなる。これでもまだ、エータルの町民に手を出せる金額ではなかった。

「今回だけですよー！ お客様！ 今回だけ、80万ギルにしておきますね」

だが、ワルツはそれを大きく下回った金額で、醜く豚のように太った貴族へとクリスは売られた。

最初はクリスも首輪が無くなったとしても、暴れることはなかった。

これが運命だと直感したのだ。この醜悪な男に自分の処女を、捧げたくはないが捧げるのだと、そう——思っていた。

「いやー！ よかったですね！ 生娘が守られて！ これも私のおかげでしょう??？」

しかし、その覚悟は無駄となる。

醜惡な男に売られた数十分後、クリスはまたワルツの前にいたのだ。その首には、当たり前のように『スレーブ』が付けられている。

それは醜惡な男に売られた直後、その男や護衛数人と共に街中を歩いていた時のことだった。

急に黒づくめの兵士たちに襲われたのだ。それも、数人ではなかった。一人、二人と、どんどん数が増えていく。

男の護衛も力量^{レベル}の差で最初は勝っていたが、最終的には数の利に負けた。

そして、その兵士たちに連れられ、ワルツの前にクリスは戻ったのである。

「これから貴女はこうやって働いてもらいますからね！ 簡単でしょう??? ただ黙って従っていればいいのですから!！」

その日から、クリスの売られ、また黒づくめの兵士達に連れ戻される日々が始まった。

クリスを買ひ奪われた者から、ワルツに苦情や非難が無かったわけではない。

だが、売られた時首輪を付けていないので、買った側は所有権を主張できなかった。新たにつけられた首輪が、ワルツを主人だと認めていたとの理由もあった。

——これでは騎士に訴えても、ワルツを捕まえることは出来ない。

その為か、ワルツに直接会って武力で片付けようとした者もいたが、結果はワルツに一方的に斃されて終わりだった。

噂では“珍しい名”を持つとされるワルツに、たかだか一介の冒険者ごときが勝てるわけがないのであった。

「お客様！　今回だけ大特価！　彼女は110万ギルとなっております！
ます！！！」

何回売られたかなど、彼女は一々数えていない。

ただ、十以上は確かであった。

そんな彼女も普通なら騙しつくす罪悪感と、一方的に利用され自由がない精神的重圧から押しつぶされるのだろうか、幸いにも彼女には“救い”があった。

その日は雨が振っていた。冷たく、漆黒の夜を彩る雨が。

その日もやはり彼女は売られていた。

だが、黒づくめの兵士が、その日クリスを買った者達と交戦しているその隙に、彼女は逃げ出したのである。細い、全速力などあまりしたことの無い足で。

どこに向かうのか、どこに逃げるかなど全く考えていなかった。似たような毎日が続く今の日常に嫌気が差し、ワルツに反抗しようと思ったのだ。

入り込む路地を必死に走り、大通りまで出たとき、彼女は転んだ。どうやら、ヒールの高い靴を履いてたため、そのヒールが折れていたようであった。

「大丈夫か？」

そんな優しい声を、クリスにかけたのは赤い鎧に身を包む彼女であった。

その後数十分、赤い鎧に身を包んだ男――レンとの話は弾んだ。今いるクリスの状況の小言を、レンは文句一つ言わず聞いてくれた。彼女はそんな何気ないことが、とても心に染み込んでいる。

やがて彼の仲間が駆けつけ、別れの時がやってきた。

街中では金属が擦りあう音が、多数の場所から聞こえてくる。自分を探してる兵士たちの音だ。

彼女は親切にしてくれたレンに自分のことで迷惑はかけたらいけないな、と大人しくワルツのもとに戻ろうと思ったのだ。

「いつか！　いつか絶対に“救い”に行くから！　それまで待ってろよな！」

「レン、君って奴は……」

「レーン！　ちょっと嫉妬しちゃうよ！」

彼女にとっての“救い”は、この彼の“言葉”であった。

たった一日の内の何十分の一を語り合っただけなのに、“救う”といってくれたレンの淡い希望だけを支えに、これまで生き抜いてきたのだった。

その日、ワルツはクリスで数十万ギルを稼いだので、お仕置きなどはなかった。だが、「束の間の休息は楽しめましたか??？」との嫌味があったのである。

そしてそれから数十日後。

彼女にまた、急遽転機が訪れた。クリスを完璧に逃がす者が現れたのだ。

それはレンではない。灰色のマントに身を包んだ冒険者——氷雨であった。



「――と、軽く私の過去を振り返ってもらいましたが……」

「ぐすん……クリスマスねえ……大変だったんだな……急に変わる日常……良く分かるよ……」

「おねえちゃん……くろう……したんだね……」

その話に泣いていた子供二人がいた。

ちなみに氷雨は涼しい顔で、クリスマスの話を聞いていた。

クリスマスはそんな対照的な三人に苦笑いしかできず、話を先に進める。

「話にあったとおり、あの兵士は私を連れ戻そうとするワルツの手下です。もし、ご迷惑であれば……いつでも私を……」

「大丈夫だ！ クリスねえ！ アニキはそんな薄情じゃねえよ！！
だってオレ達も助けてくれたんだからな！ なあ、アニキ？」

「おねえちゃん！ おにいちゃんは、いいひとだからきつとたすけてくれるよ！ ねっ、おにいちゃん？」

いつでも身を引くようなクリスマスの発言に、子供二人が遮って否定した。

急に話を振られた氷雨は、ああ、うん、などの曖昧な相槌を打ってから、

「当然だろ。そういうのと戦うのがお前を買った理由だしな……」

発言した。どうやらクリスの説明に、少し気になるところがあったらしい。

「えっ、それはどういう意味……」

「さっすがアニキ！」

「さずがおにいちゃん！」

クリスは氷雨の発言に引っ掛かったものがあつたが、結局氷雨に飛びついた子供二人によって押し流される。

「おい、抱きつくな」

「いいじゃねえか！　なあユウ？」

「うん！　ねえカイにい？」

本日、この日は、晴天であつた。

閑話 とある男の物語（前書き）

注意。

この話は若干鬱表現が入っております。見なくても大丈夫な作りになっていますので、気の弱い方は見ないようお願いいたします。

閑話 とある男の物語

氷雨がクリスを買う前日の晩のことであった。

すなわち、カイトがユビキタス商会裏の部分であるエータ支部奴隷部門の、情報仕入れた直後のことである。

一介の冒険者である男が、誰もいない夜の町を歩いていた。

この町では一般的な冒険者であった。長年愛用の革でできた丈夫な服。その上に鉄でできた鎧で、身を守り、背中にはより防御を強固にするための盾。

腰には、商売道具である鞆付きの片手剣が刺さっていた。

その男の無精ひげの生やした顔は、紅色に染まっており、酒の臭気を帯びている。先ほどまで歓楽街のとある店で旨い酒を呑んでいたので、ほろ酔い気分になっているのだった。

そんな男が夜の街を歩いているのには理由があった。

奴隷を、それも美人の奴隷を、買いに行こうとしているのである。それは歓楽街のとある店で酒を呑んでいる途中に、一緒に呑んでいたとある女性従業員から“いい”情報を手に入れたからである。

——いわく、表通りとは別のユビキタス商会には、安価で上質な女奴隷が売っているらしい、とのことだ。

「へへっ……！」

男はその情報を思い出し、笑った。

上質な女奴隷とは、戦奴隷でもなく、家事奴隷でもない——性奴隷のことだ。男はそんな奴隷を買った後、どうやって愉しむか想像し、顔を緩めたのである。

その者は、下品で、卑しい男なのだった。



男が数十分歩くと、やっと、ユビキタス商会のエータル奴隷支部に着いた。

「ようこそ、御出で下さいました！　ここがユビキタス商会のエータル支部奴隷部門です！！　わたくし、この奴隷部門の所長であるワルツと申します！　今後、お見知りおきください！！！」

そこで出会ったのは、ふざけた所長であつた。

なので、一瞬、帰ろうかとも思ったが、酔っていた勢いでワルツに話しかけた。

「この時間帯でも、やっているのか？」

「はい！　我が店は表通りにあるエータル支部とは違って、二十四時間営業ですからね！！！！」

「へえ……。そりゃあ、凄いな」

「ありがとうございます！！　ところで！　お客様達の求める商品は何ですか？　武器ですか？　防具ですか？　それとも奴隷ですか？　と、言ってもここじゃあ奴隷しか売ってないんですけどね！！　アッハッハッハ！」

「奴隷だ。奴隷を頼む――」

そう男が頼むと、ワルツは困った顔をした。
悩むように顎鬚あごひげを撫で、俯いていたのだ。

「奴隷ですか——うーんと、そうですねえ。奴隷——ですか——。貴方も男なんですから戦奴隷ではなく、性奴隷でしょ???」

「ああ」

男はワルツの問いに、即座に答えた。
だが余計にワルツは顔色を悪くするばかり。

「残念ですがね——。遠い噂で知ったのですが、私が御最前にして
いた商人が亡くなりましたね——それっきり、“いい”性奴隷が入
って来なくなっただけですよ——」

そして、ワルツはある意味本当のことを述べた。ゆえか、表情に
いつものニヤけた笑いも、人を小馬鹿にしたようなポーズも無い。
だがワルツはこうも考えていた。ここまで言ったのだから、男は
そろそろ“あれ”を切り出す、と。

「嘘つけよ。とある店のユウガオっていう源氏名の女に、俺は聞い
ただぜ。——ここに美人の奴隷がいる、と」

やはり、切り出した。

と、この時、ワルツは嗤っていた。
カモ。カモ。カモ。いいカモが、自分の垂らした釣り竿にかかっ
たと。もちろんその餌は、ユウガオであった。

「あは……は……!! なんですか!! そっちのお客でしたか!

「！！！！ いやー、最初からそう言ってくればよかったのに！！
てっきり私は貴方を、紛れこんだネズミかと思いましたよ！！！！！」

ワルツは手を大きく横に出し、まるで自分の存在を大きくアピールした。

男はそんなワルツに、濁った笑顔をかけた。その歯はところどころ欠け、黒く腐っていた。歯磨きなどの概念が存在しないこの世界ならではの、歯である。

「そうかよ。そりゃあ狙った通りの客が来て、嬉しいだろう？」

「ええ！ ええ！！ ええ！！！！ とっても！！ 嬉しいです！
！！！！ ——では、どうぞこちらへ」

ワルツは綺麗なお辞儀をした。

そして男へと、例の場所へ案内する。

その途中の牢屋には、色々な奴隷がいた。けれども殆どは野郎。それも戦奴隷にしか使えないような、不細工な者たちだ。とても売春に使えそうな美男子もいない。

それは少しだが見かけた女の奴隷も一緒だった。

まだ、安い娼婦の店に行った方がマシなレベルである。だからか男のテンションは、どんどん下がっていった。

これは期待するだけ無駄な、と。

だが、それは——杞憂であった。

ワルツに案内された奥には、クリスがいたのだ。深窓の令嬢のような彼女が。

最初、ワルツが提示した彼女の額は1000万ギルだった。しか

し、高い。安いと聞いて訪れた店なのに、見つけた奴隷は実は高かったのである。

「クソ高えな。おい——」

と、男は言った。ごねよう、とも男は考える。
だが、すぐに止めた。

ワルツの隣に屈強な男がいたからだ。冒険者でも十分やっていける肉体。それを持つ男がいることにより、男は少したじろぐ。
何故なら、男は酒が入っていたからだ。酒が入っているのは、満足な戦いは行えない。となれば、負けることは確実だ。

負け戦など、馬鹿がすること。そういう現実主義者であった。

「やっぱりそうですか!! いや、予想していたことです! で、どれぐらいの額をお持ちなんですか??? それによって次に紹介する奴隷も変わるので!!」

「俺が出せるのは70万ギルまでだぞ?」

「うーん! こうしましょう!! もし、こちらの条件を全て飲んでくれるなら! そのお金で! ——彼女を買いませんか???」

そして氷雨の時と同じような条件をワルツは男に出し、それを飲むとみるみる内に値段は下がっていった。

男は値段が下がったお徳感からか、特に迷いもせず、クリスを買うことにする。

こうして、まんまと男は噂通りの美人であるクリスを買った。
それも旨い手口で。



それからの男の結果は、ほぼ氷雨と同じであった。

ただ一つ違うのは、氷雨は逃げ切れて、男が逃げ切れないということ。それが両者の決定的な違いであった。

男がゴキブリのようにわらわらと湧く兵士に捕まると、買ったクリスを奪われ、両手を縛られたままワルツの前へと歩かされた。

そこは暗い部屋だ。

目隠しされてきたのでどこかは分からないが、木製の椅子がたった一つあるだけの狭い場所である。

そんな場所で正座のまま、それも両側にいる二人の兵士に首へと剣を当てられたまま、ワルツに男は挑発された。

「どうです、気分は???」

「てっめえ!! ハメやがったな!!!!!!」

「人聞きの悪いことをいいますねえ!!」

男は気が高ぶって仕方がない。

命がけの冒険である迷宮という場所に慣れたせい^{ダンジョン}か、どうやら男は死への恐怖、という感情を失くしているようだった。

「お前! ユビキタス商会がこんなことをしていいのかよ? いや、いいわけねえだろうが!!」

そして叫びたいことを、思うがままに男は叫んだ。

ユビキタス商会は実はこの町だけでなく、この大陸で有名だ。ど

の者も、まず名前が上がる商会在ユビキタス商会というほど、有名な商会であった。

そんな大商会在、こんな悪徳商法を赦すわけがない。そう、男は思ったのである。

「いえ、いいんですよ！ 私は実は、ユビキタス商会の中でも敏腕支部長と、あつ、違いました！！ これは今の設定ですね！！ 本当は、最高幹部の一人に数えられてる一人でしてね。そう、呼ばれているので、ある程度の行動は赦されているですよ！！！！」

だが、違った。

目の前にいるワルツは赦されるような側の、“下”の存在ではなかったのだ。もっと“上”。しかも、赦す側の人間である。

「嘘つけっ！！ そんなわけあるかっ！！ なら！ どうしてそんな偉いやつがこんな場所にいるんだ！！」

また、男は叫ぶ。あまりの現実に目を逸らしたかったのある。

「まあ、強いて言えば、趣味？ ですかね！！ 絶望する人間を見るのは愉しいですし——」

ワルツはそんな男を見ながら、嗤う。

そして、ワルツはひとしきり嗤った後、

「ああ！ そうだ！ そのうるさい男は奴隷としても要りませんか、早く殺してください！！！！」

「あ——あ——」

周りの兵士へと、そう命令したのであった。

その瞬間、男の頭の中で巡るは記憶で、声すらもまともに出なかった。幼いころからこれまでの人生である。いわゆる走馬灯を男は刹那の時間に体験していたのだ。

――やがて、二つの剣が首を狙い、皮を裂き、身を抉り、骨を断った。

すると、自然と血が飛び出る。

もう、この時に男の命は無かった。

こうして――男は、三十六歳という短い生涯の幕を閉じる。

そんな無残な男の名は、もうこの時に知るすべは殆ど無いのであった。

閑話 とある男の物語（後書き）

第二章の第一話は変わりました、前回には無い話です。

もしよろしければこれらについてのご感想、ご評価などをいただけると、とても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

第十一話 ネズミ狩り

それは晴天だった日の夜。

三日月が頭上に輝く、綺麗な晩のことだ。

「全員敬礼っ！！」

とある広場で、多くの兵士が碁盤のように規則正しく並んでいた。そんな兵士の数は数十にも及び、一つの軍隊と云っていいだろうか。

闇夜で見つからないように、月光でも光らない黒く塗りつぶされた鎧。

腰には剣があった。ただし、手にも数メートルの槍――パルチザンも持っている。剣はあくまで予備のようだ。

顔は兜で見えないが、おそらく脂汗をかいてるだろう。

数日前、彼らは始めての失態を犯した。これまで幾度となく行われてきたクリスの奪還を、しくじったのである。

これではワルツから、首に付けられた『スレーブ』によって、どんな非道な命令が降されるかも知れない。自害や仲間殺しなどの命令でも、『スレーブ』をつけていたら逆らえないのである。

「では！ お仕置き……のその前に、件の彼のこととはどこまで分かりましたか？？」

全ての兵士の前に存在するふざけた男であるワルツが、この隊の最高司令官のようだ。

ワルツは売れ残った戦奴隷を、自分の手ごまに使っていた。

彼らは、未だ売れてないので税金は払わなくていいし、日中は国

からの審査を抜けられるよう牢の中に入れて奴隷としても販売している。

要するにワルツは、在庫の有効利用としてこれらの奴隷を毎晩使っているのであった。

「はっ……！ 仇敵である彼の名は……ヒサメ。一介の冒険者……であり、ギルドに訪れた……最終記録では、力量^{レベル}は……7。武器は……無し。パーティーは……子供二人であります。現在とある宿屋に潜伏中で、その他経歴は……一切不明であります」

兵士たちの中でも、一步前に進んだ兵士がワルツの問いに答える。彼が兵士の中でも一番偉いというのは、兜についている羽飾りの枚数で分かる。他の兵士は一枚であるのに対し、彼だけが二枚なのだ。そんな彼の声は、ワルツへの畏怖からか、少し掠れていた。

「それって……！ 本当なんですか……？ もし嘘でしたら……殺しますよ？」

ワルツの語尾は低かった。

それにより、兵士達には急に体が寒くなる。

「いつ、いえ、本当です！」

「そうだぜ！ 隊長言うとおりで！」

「隊長の発言に間違いねえ！」

ワルツを説得しようと、様々な兵士が隊長の意見に同意した。

その声は野太く、音があまりない深夜のエータルではとてもよく響く。まるで、田舎の田んぼで聞こえるカエルの合唱のようでもある。

った。

「冗談に決まってるじゃありませんか！ 私の子飼いの情報屋と全く同じですしね！！」

「で、では……」

「ですが……煩いですねえ。これでは近所迷惑です。『黙りなさい』」

ぐっ、という呻き声の後、兵士全員の口が開かなくなった。

『スレーブ』から発信した電気信号によって、強制的に言葉を発せなくなったのである。

「では、貴方達に命じます！ 『綺麗な綺麗な私のお姫様を奪還しなさい！』 もし、しくじれば……殺しちゃうかもしれませんからね！ 貴方方全員！！」

一方的なワルツの命令に、兵士達は首をぶんぶん縦に振る。

そして、すぐにその場から立ち去った。

兵士達は知っていた。――ワルツは気分屋だと。

いつ言っていたことを覆すのか分からないので、早々とこの場から逃げ出したのだった。

「さて！」

ワルツはどこからかナイフを一本取り出した。

それを空中に投げると、二本、三本と増えていき、やがてジャグリングをやっているかのように、ナイフは手と空中を行き交いした。

「どうなることやら……！ 非常に楽しみです！！ さて、私はお空からの観察と参りましょうか！！！！」

しゅん、とナイフは全て消え、ワルツは広場から動き出した。

景色は黒い。顔色も黒い。だが、何故かワルツの服は白で、それが返って凄く不気味に見えた。

——今宵は、とても長そうであった。



同時刻。宿。

数日前からずっと付いている、ねっとり絡みつくような不穏な視線。カイトも、ユウも、クリスも、誰一人感じていないようだったが、彼にはそれが色濃く思えた。

だから、彼は、こんな深い夜でも起きているのだった。

「へえ、奴らも馬鹿ではないんだな……」

氷雨はベットに座ったまま、窓の外を見ている。

彼が部屋をとって場所を地上から三階に位置しており、そこからは奴らの動向がよく見えた。

窓の下では黒い鎧に身を包んだゴキブリのような奴らが、できるだけ足音を潜めて動いている。そのどれもが揃った足並みで、乱れ一つ無い。

ふと、彼は仲良く並んで同じベットで寝ている三人に目を向ける。危険など無いかのように、ぐっすりと寝息だけ立てていたのだった。

（どうするかな？）

敵はすぐ傍まで近づいている。

こんな土壇場で、三人を起こさず、奴らだけ斃す方法を考えられるほど氷雨は頭がよくなかった。だが、今更逃げ出したとしても、できる逃亡策は限られている。

それに、氷雨もまだ調子が万全ではなかった。やはり、昨日の怪物との連戦は、身に堪えたのである。まあ、もともと彼は数十にも及ぶ軍勢など、万全な状態でも退けることはできないのだが。

ボタン……。

氷雨がそんな思考を回してる内、ついに兵士達は宿の中へ侵入してきた。入り口からの正面突破であったが、宿の従業員の叫び声をあげさせないほど手際がいい。

宿の中に侵入したのは、ほんの三人ほどだ。どうやら、他の兵士は入り口で待機しており、もしもの場面に備えている。

兵士達は、リスクマネージメントも十分に行っているのだ。

「ふう」

仕事が早い奴らに、氷雨は溜息を一回。あまりにあざやかに、素早く侵入してきたので、彼が奴らに送った賞賛もあった。

そして、クリスを揺さぶり、

「えっ……」

「いいか？　今“奴ら”がそこまで来ている。絶対に叫ぶんじゃないぞ」

叫びだそうとする彼女の口を手で押さえてから、小さな言葉で言い放った。

もちろん氷雨も小声である。

そんな彼に対するクリスの返事は、首を軽く縦に振るだけだ。今の状況を、瞬時に、一を聞いて十を知ったのだ。

「で、クリスは二人を起こしてベットの下に隠れてろ」

「は、はい」

物言えぬ彼の態度に、クリスは大人しく従う。もとより彼女がこの原因であるのだから、断る理由は何一つ無かった。

「しいゝゝ」

クリスは氷雨の指示に従い、カイトとユウを揺さぶり起こした。

こんな夜にどうして、など二人は言いたいことは沢山あった。だが、ただ人差し指を口に当てて、喋るな、の行動を示すクリスに寝ぼけた脳で従い、従順にベットの下へ隠れる。

ゴトツゴトツ！

階段を焦らずに上る兵士達が奏でる足音に、クリスは緊張の汗をかいた。

部屋の様子は、ベットの下からは見えない。ゆえに氷雨が今、どこにいいのかさえ、彼女には分からなかった。

「おねえ……ちゃん？」

「しいゝゝ喋っちゃ駄目ですよ」

首を可愛く傾げるユウに、クリスはまた指を口に当てた。

そうすると、ユウはこくりとクリスに頷く。カイトはその間、いや起きてから一度も声を発していないが、クリスの握る手が汗ばんでいたのも、それだけで緊急事態だと予測していた。

ゴトツゴトツ！

いよいよ奴らは扉の前にやってきた。

そこで、これまで聞こえていた足並みは途絶える。やはり、この部屋が奴らの標的であったのである。

ガンッガンッ！

大体の良識な宿屋の話であるが、この世界では部屋の鍵を宿の従業員が持たない。

冒険者にとつての――盗難防止であった。冒険者は人によっては、自分が使わない良質な武器を部屋に置くことがある。

そんな物を盗られるのを防ぐため、宿屋もスペアキーを持たないのだ。もし、スペアキーを持っていたなにか部屋の私物を取られた場合、その盗られた物の責任は全て宿屋の主人にかかるからである。だからといって、盗難が完璧に無くなる訳でもないのだが。

カチャカチャ！

ピッキング、こういわれる技術は、もちろんこの世界でもある。

この世界の鍵の技術は、氷雨達の故郷である日本と比べると非常に幼稚だ。ピッキングが難しい鍵の形である四方に歯のある鍵等が作れないからである。

だから努力さえすれば、たかが不法都市エータルの宿屋の鍵程度、

誰でもピッキングできるのであった。

ガッチャン！

錠が――開いた。

カイトとユウの握るクリスの力がより一層強くなった瞬間でもあり、三人が息を潜める瞬間でもあった。

ギー！

やがて、扉が――ゆっくりと開いた。

ゆっくりと歩みを進める奴らは、誰もいないもぬけの空だった部屋を、敵に注意しながら探索する。槍は長いので室内戦闘では不向きと隊長が判断し、彼が握っている武器は腰の剣であった。

「……どこだ？」

ふと、兵士の一人が疑問の声を出した。

ベットの上に人はいない。部屋どこにも人はいなかった。兵士達はもしものため、一人しか室内には入ってなかったが、疑問に声に釣られて残り二人も室内へ入る。

「もしかして……ベットの下のか？」

「そうなのか？」

「じゃ、とりあえず……俺が見るよ」

クリスがない不安を拭うため、兵士の一人は膝を折った。兵士達は誰もいなかったので、少しだが気を抜き、開きっぱなしの扉を

閉める。

そんな状況では、三人の心音も最高潮に高鳴った。

ボタン！

扉が完全に閉まった時、兵士がベットの下を覗き見るその時だった。

一匹の“鬼”が動いたのだ。

「はっ!？」

叫び声を上げる暇もなく、一人の兵士は首に鋭い手刀を喰らい、――昏倒。意識を失なった。氷雨はこの兵士に付けられた首輪により、手刀を行った右手に強い痛みを感じるが、気になどしている時間が無かった。

「い、いた……うおえっ!？」

次に仲間を呼ぶため、叫ぼうとした兵士がいたからだ。

だが、それが氷雨に二番目に狙われた要因となったのも事実だ。

彼は、真正面から兵士の口内に手を突っ込む。男もそれに抵抗しようとして、氷雨の腕を両手で掴みながら歯で思いっきり噛んで抵抗するが、そのまま地面へと叩きつけられた。

男は頭を床にぶつけた衝撃で、歯が数本折れ、白目を向く。

「し、死……」

最後に後ろから唯一残った兵士が、剣で襲ってきたのだ。

だが、その剣の描く軌跡よりも、氷雨が描く蹴りの軌跡の方が早い。彼は兵士の位置を確認せず、後ろ蹴りを放ったのだ。

「うっ！」

蹴りは、鋭く兵士を飛ばした。
そんな兵士は部屋の端まで宙を漂い、狭い部屋の壁に激突する。
その状態ではまだその男は気を失っておらず、剣を強く握り締め
ている。

氷雨は壁に背中のかける兵士に、一歩で距離を詰める。
次に――首を両手で挟む。

兵士も氷雨に斬りかかろうと弱い力で剣を水平に薙ぎ払うが、
脇腹に浅く刺さるだけ。分厚い筋肉に、反撃を阻まれたのであった。

「うっ……！？」

氷雨の呻き声が出た。

だが、彼は脇腹の痛みを堪えながら、

「や、やった？」

男の期待を砕くように、廻す。

ぼきっと、音が鳴る。

首が、不自然に折れ曲がる。

兵士は、ぴくりとも動かなくなった。

「おい、逃げるぞ」

「おう！」

「うん！」

「はい！」

氷雨は、そんな兵士達の生死を確認している暇などない。先程、二回ほど大きな物音を立てたので、兵士達が追撃を待っている理由など、どこにもないのである。

彼はその場にあつた少ない荷物を全て腰につけ、三人の仲間と共に部屋を去ったのだった。

ところで話は変わるが、実は氷雨は扉を開けた時、ドアで自分の身が隠れる場所にいた。

兵士たちはクリス達起きないようにゆっくりと、扉を開いたのが氷雨に気づかない最大の要因である。

もし、扉を勢いよく開けていれば、そこに隠れていた氷雨に気づいたであろうに。

これは氷雨の一種の賭けだった。

見つかるか見つからないか、彼は自分の運を試したのである。

もし、見つければ即座に叫んだ兵士が駆けつけ、彼は死んでいただろう。

だが、氷雨は——勝った。持っていた強運により。

——しかし、この強運が、今回の脱走劇の最後まで続くとは限らなかった。

第十二話 ネズミ狩り？

「隊長、まだ待機か……？」

一方、氷雨が三人の兵士を圧倒的に斃していた時のことだ。

一度目の大きな音——つまり氷雨が鳴らした兵士を床に叩き付けた音でも、まだ兵士は動いていなかった。じっと、突入、との隊長の言葉を待ち、表口で仲間に駆けつけるのを我慢していた時のことだ。

「ああ、もしあいつらが負けていたしても、出入り口は一つ。絶対に奴らはここに来る」

隊長は、言い切る。

氷雨達の行動を予測し、断言したのだ。

だが、そんな隊長の思惑とは裏腹に、二度目——つまり氷雨が兵士を蹴り飛ばした音が鳴る。

「隊長っ！ あいつ等を……あいつ等を、見殺しにするのか……！！」

一人の兵士はそう隊長に食って掛かるが、

「……ああ。私達はワルツ様に為に、クリス様を捕まえるのが使命だ。それに、だ。大多数の仲間の命を守る為なら……多少の犠牲は否めん」

兵士達の隊長は、それを苦汁の決断で蹴る。

それにワルツ様がどこで見ているかも分からんしな、とも頬が責

任感で痩せこけた隊長は付け加えた。それに兵士達一同は大きく頷く。

ワルツは、ここにいる兵士達の認識では神出鬼没だ。いつ、どこで、などを問わずにワルツは現れる。それは、兵士がワルツの悪口を言っていた時でもあった。それは兵士がワルツの命令に背いている時でもあった。

こんな事もあったか、兵士達の“命令尊寿”の心情は、死という犠牲を免れるために強くなったのである。

バンッ！！

そんな時だった。

三度目の爆音が、夜中に響いたのは。

「隊長っ！ まだなのか？ もう俺は我慢できねえよ」

一人の兵士がその音によっていきり立ち、

「こらっ！ 待て！ 待つのだ！！」

隊長の制止も無視して、宿に入って行った。

兵士もいくら自らの命のために、と感情を殺していても、生身の人間である。これまで苦楽を共にした仲間を切り捨てられるほど、割り切って生きていないのだ。

「俺も――行くぜ！」

「おいおい――オレを忘れちゃいけないえよ！」

「だったら儂も行くぞ！　ここでこんなに待ってる必要は無いからな――」

「待てっ！　待っていたら標的はここに現れる！　だから――待っ
んだっ！」

そんな一介の兵士の情動に、乗る者まで現れた。数十人いた兵士のほんの一握り。4〜5人ほどだ。小より大を生かそうとする隊長は、そんな少人数のために増援など送れるはずがない。隊長は犠牲が増えたが仕方がない、と諦めるしかないのであった。

「いや〜！　楽しいですねえ！！　やっぱり舞台にハプニングは付き物ですからね！！！！」

だが、確かにこの場の情勢に風は吹いた。微かな風ではあった。それに、なにより兵士の隊長は嘆いていたが、一人の男はさも嬉しそうに嗤っていたのだった。



「ヒサメさん！　ところでどうやって逃げるんですか？　表口には兵士がいますし……」

部屋を出た直後、ユウを背負ったヒサメにクリスから飛んだ質問だ。

クリスは先程、氷雨が荷物を素早く整理している時、ふと窓の外を見た。すると兵士が大勢いた。一人二人なら目立たないだろうが、数にして軽く十を超えている。目立つには十分すぎる量であった。

それに、この宿の出入り口は、表口の一つしかない。

現代の日本のような消防法があるわけではなく、非常口を必ず作らなければいけない、という制約が無いためである。

だから、クリスは氷雨に逃亡経路を聞いたのだった。

「まあ、ちょっとした秘策があるんだよ」

氷雨は一段飛ばしで雑に階段を下りながら答える。

彼もクリスが危惧している事に、とある最良の手段を思いついていたのだ。そんな彼は階段を降りている最中に、急転換する。

「えっ、アニキ……!?!」

そこは二階だった。

四人の見知らぬ客人が過ごしている部屋の前だ。

そんな部屋の扉を、氷雨はユウを下ろしてから――全力で蹴った。

「お、おにいちゃん!?!」

回し蹴り。

氷雨のずっしりとした胴体から放たれるその蹴りは、轟音を奏で、細かい木の屑を撒き散らした。勿論扉を支えていた止め具は外れ、氷雨達が簡単に侵入できる形となっている。

これが、兵士達による突入の引き金でもあった。

「な、なんだっ!?!」

「なにぞますっ!?!」

「ちょっと失礼するぜ」

彼はそんな部屋に罪悪感を微塵も感じず、中に入る。

そこは氷雨の部屋と同じような構造だった。ただ、シングルベットが二つ在るか、一つあるかだけの違いだ。

そしてダブルベットには寝ていた一組の夫婦がいる。ぽっちゃりしている同じ体系の二人は、一緒に布団に包まっており、氷雨を見る目は怯えている。

どうやら先程の衝撃音で、目が覚めたようである。

「お、お、お前達は何をしたのか分かっているのか!!」

そんな部屋にいた二人のうち一人、男のほうは氷雨へ怒鳴る。

「ああ、少しここを通らしてもらっただけだ。叫んだら——殺すぜ？」

「ひ。ひいっ!!」

氷雨は堂々と部屋を突き進みながら、笑顔で振り返って夫婦を脅した。

瞬時に夫婦は真っ赤だった顔が、真っ青に染まる。いくら夜間でここがエータルだとしても、こんな派手な進入方法をする氷雨を、只者ではないと悟ったらしい。

「ヒサメさん……」

胸を張って犯罪行為を犯す氷雨に、冷たいクリスの視線が突き刺さる。

だが、氷雨はクリスに釈明もせず、窓を開けた。そして、驚きの言葉を言い放つ。

「ここ、超えるぞ」

「ええっ!？」

氷雨が親指で差した窓の位置は、氷雨の部屋にある窓の位置と反対で東にある。ここなら、表口がある西にいる兵士達にも見つからない。

まさに絶好の逃走路ではあるが……ここは二階だ。常人が選ぶような選択肢ではない。

「カイト——お前が先行け。どうせすぐそこが屋根だ。跨ぐ位で行ける」

「え、でもさあ……」

カイトは氷雨への答えを洩りながら、窓の外を見た。

宿の隣にある民家の屋根と、今カイトが顔を出している窓との距離は、僅か約六十センチ。超えられない距離ではない。だが、落ちる可能性もありえる距離であった。

「じゃあ、クリス先行け。もう時間は無いからな」

氷雨は耳を済ませずとも聞こえる重厚な足音に、警鐘を鳴らしている。

彼が行った再三にわたる衝撃音で、兵士達も気づいたと彼は考えた。

——仲間は全て斃された、と。

「あっ、分かり……ました」

クリスは窓に足をかけ、下を見て、最悪の事態を想像する。
すると、足が強張った。

彼女は落ちる恐怖で体が硬直したのだ。

「心配するな。落ちても二階だ。死なねえよ」

「そんな心配結構です！ 私は――」

彼女は甘くなかった彼の言葉に反抗し、悠々と窓から消えた。

「――落ちませんから」

そして聞こえたのは、安否を伝える返事だけ。

「じゃ、次、カイト行けよ」

氷雨は二人目は、とカイトに振り返る。

「うん……分かるよ。分かるんだけどさ、オレ、さあ……高所恐怖症なんだよ。だから……さあ？」

「へえ……そうなのか？ 仕方ねえな、そうなら、そうと言ってくれればいいのに」

「うん！ アニキなら分かったくれる……と！？」

カイトの告白から数秒、氷雨は少年を持ち上げた。少年の腰と首にある服ががちり掴む。彼は軽くカイトを横に振り、準備体操のような行動もしていた。

夫婦は何をするのか、と氷雨達をその双眸で見ていたが、カイトは違う。おそらくこれから起こるであろう、自分の想像した未来に――絶句していた。

「着地は……自分でしろよ？」

氷雨から出たのは優しい天使のような声だったが、内容はカイトにとっては悪魔の振る舞いに近い。

「いや！ アニキ、止めてくれ！ いや、止めて下さい！」

「カイにい……ドンマイ！」

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

そしてカイトは氷雨に、隣の民家の屋根へと投げ込まれたのだった。

「ユウ、行くぞ」

「うん！」

窓越え、クリスとカイトは渋っていた行為だが、ユウはすんなりと氷雨の背に乗った。

嵐のような四人は、こうして夫婦の部屋から――いや、宿から退散したのである。それは隊長の予測していない事であった。



屋根の上。

それも氷雨達が逃走路に使った屋根よりも、もつと上。

——四人が泊まっていた宿の屋根に、ワルツがいたのだ。

「おや??? まさか彼等、あんな道から逃げ出したんですか!? いやはや! これは私も思い浮かびませんでした!! 彼は非常に悪知恵が働くんですねえ!!!!」

豪華な椅子に足を組みながら座り、高みの見物を味わっていた。

誰かがこれを見れば、趣味が悪いとも思うだろう。自分は決して手を出さず、他の誰か——即ち部下の手によって自分の願いを叶える。そして、それを命令した本人は、誰も気づかぬよう高みからの傍観。

本当にワルツの根性は捻じ曲がっていた。

「強い上に、知恵達者! 部下としては理想的ですが……彼と私ではそりが合わないそうなんです。なんせ、彼、独りよがりそうですからね!! で、ところで彼って、ヒサメ君でしたっけ?」

虚空に、誰へでもなく自分へ質問した。

答えてくれる者は勿論のこといなかったが、それでもワルツは満足だった。空中からどこからともなくビンに入ったワインを取り出し、また、どこからともなくグラスを取り出した。

ガラスで作られた薄い薄いガラス。その脚にあたる部分を、ワルツは親指と人差し指で持った。

ワルツはグラスを片手に持ち、口でコルクを掴みワイルドに開けたワインを、ことごとくワイングラスの半分より下まで注ぐ。

そんなお酒は俗に赤ワインを云われるもので、色は鳩の血のように紅く透き通っていた。

「そうそう確かヒサメ君でしたね〜〜!!」

ワルツは自分の問いに納得したように答え、グラスをクルクルと回した後、鼻を近づけた。上質なアロマのような香りがした。

ワルツはその香りに納得したのか、まず一口。その余韻を目を瞑って味わってから、また一口飲んだ。

「彼等はいい肴です！ 私に極上の時を与えてくれる！ それにしても、今晚の三日月は綺麗ですね〜〜!! これだけでも十分お酒は進みますよ!!!!!!」

ワルツは頭上を見上げてから、また一口飲む。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

その時、カイトの絶叫がワルツまで響いた。

ワルツは思わずそちらに顔を向ける。

「彼等は見えていて非常に愉しいですね！ これまでも、一二を争うほどではないでしょうか？ でもまあ、一番見たいのは——追い詰められて捕まえられる——寸前ですがね!!!!!!」

今宵は、いい夜になりそう、と思い、またワインを注いでから一口飲むワルツ。

そんな彼には程よい狂気が満ちていた。

絶望に染まった人間を見たい、という——程よい狂気——が。

第十三話 ネズミ狩り？

三度目の轟音が鳴った数分後のことだ。
宿の三階に付けられたガラス製の窓から、一人の兵士が顔を出した。

「隊長っ！！」

「何事だっ！？」

その兵士は思わず言葉に詰まる。
顔面は夜なので詳しくは見えないが、おそらく血の気が引いていただろう。

「標的が……クリス様が……部屋にいません！ 多分……どこかに逃亡したかと思われますっ！！」

「なにっ！！」

兵士は叫ぶ。それに呼応するように隊長も叫ぶのであった。
隊長は痛感の思いで、歯をギリギリと擦り合わす。悔しかった。
手配書のような紙で見た氷雨は、それ程頭が良さそうに見えなかった。

だが、現在、知恵比べでは遥かに負けている。それもこちらの方が有利な状態で、だ。

「隊長……どうするんだ？」

一人の兵士が、顔を酷く歪ませる隊長に問いかけた。

決して、隊長を責めるわけではない。だが、隊長の目論見が外れたのも事実。覆せない現実であった。

だから、今後の行動方針を、兵士の一人は隊長に伺ったのだ。そんな隊長は、すぐに開きたい口を開くのであった。

「――全隊っ！ 五〇六人で行動せよ！ いいな？ 五〇六人だぞ！！ 前は三人編成のだったが為、標的にいいようにやられてる！ 今回はそんな失敗は赦されない！ 分かったな！！」

「はっ！！」

まるでよく教育された軍隊のように、全員統率された敬礼を行った。

「では、目標を捕捉次第、順次仲間を呼び集めて捕獲せよっ！ 敵はとても強大だっ！ 必ず仲間で、数で、抵抗するように！！」

「はっ！！」

隊長は大きく叫んだ。

次こそ兵士は、いくつかのグループに分かれて闇夜に紛れていった。

――失敗は赦されない。

その言葉を胸に刻み、心に刻んみながら。



一方、氷雨。

彼等は民家の屋根をから下り、路地をジグザグに進んでいた。
まだ兵士達の姿は見えていない。だが、出来るだけ遠くにと、彼等
等はひたすらと逃げるように町の端へ向かっていた。
氷雨達にどこに逃げるか、どこに隠れるか、など大きな目的地は
ない。ただ、安息の場を求めて走るのだけであつた。

「ヒサメさんっ！ もう足が……」

「じゃあ……どこかで休憩するか。ユウ、いい場所はあるか？」

「うんっ！ つぎのつうろをみぎね！ そこにむじんのみんながあ
つたよ！」

走って数十分。宿から逃げて、数十分程度経った頃。

仲間の内から悲鳴が上がった。

四人いや、ユウは氷雨の背に乗っているので、実際に走っている
のは三人。その中で氷雨は全くといっていいほど疲れてないので、
残り二人。カイトとユウであつた。

そんな二人は限界になるまで足を酷使していた。

それも足に乳酸が溜まるぐらいで、休憩できる場所と聞くと、最
後の気力を振り絞るように走り、氷雨よりも早く逃げるようにその
民家へ入る。

中は埃塗れだった。

クモの巣があり、カビが生えている所まである。

人が長年使っていないのは、歴然であつた。

「はあはあ……」

「ぜえはあ……」

そんな汚い家の中でも、息切れは、クリスとカイトに重くのしかかる。

両方とも、革で造られた水筒を氷雨から受け取った。乾いた喉を潤すためである。一口飲むと二人とも落ち着き、そしてやっと動悸が治まった。

ゴールのないマラソンほど、しんどいものは無い。

それをカイト達は思い知らされていた。

あの時、前回の逃亡では明確なゴールだった“宿”があった。だが、今回はその宿を襲撃されたため、絶対とも云える安息地が、この不法都市エータルには存在しない。

故に、どこに逃げていいか分からない四人には、これまで以上に精神的プレッシャーが襲い掛かる。

無言ではあった。四人とも。

疲労は誰にも同様に顕著に見られた。

今回襲ってきた兵士の数や、詳しい敵の情報。どこに今いるか、など必要なデータが全く手に入らない状態で、氷雨も詳しい今後の予定を立てられない。

（全員斃すのは……分けても無理だな。数十人はいくらなんでも多すぎる）

氷雨は自分の実力をよく分かっている。それに今の状態も。

いくら敵が弱いといえど、氷雨は数十の軍勢を一人残らず斃す技術も無ければ、体力も無い。十人までならいける、と考えるがそんなのは焼け石に水であった。

暫しの間、氷雨は思考を廻した。

だが、良案は出ない。

敵は多数。こちらにジョーカーは無し。宿まで襲うという奴らの必死さから、黎明時を過ぎても襲ってくるだろうと氷雨は考えている。つまり、時間経過は全く意味がなさなのだ。

将棋で云ったら六枚落ちのような、四面楚歌だ。

ここを知能だけでこれを覆せるなら、どんな頭の良さだと氷雨は思う。

「アニキ……どうするんだ？」

カイトが、ポーカーフェイスを守っている氷雨に尋ねた。
おそらく氷雨が良案を思いついたとでも思ったのだろう。

「ああ、そうだな。カイトだったら、こういう場合どうする？」

「どうするって……そりゃあ奴らの全滅が一番早いと思うけどなあ」

「どうやって？」

「そりゃあ男なら真正面からずどん、どかん、と正面突破だろ！」

「ふーん」

「まあ、これはオレの浅はかな考えなんだけだな！ アニキだったらもっといい考えが思いつくと思うけど、さ！」

「そうか——」

カイトはにかつと笑って、氷雨へと返す。

氷雨はたいした助言も貰えなかったので、軽くカイトを流した。

「クリス、お前だったらこういう場合どうする？ カイトの同じ考えか？」

彼は次はクリスに質問した。

いい案などカイトと同様で得られないとも思うが、念のためである。

「私だったら……一つの案としては私を奴等に返すというのも……」

「おねえちゃん！ それはだめだよ！」

反射的にユウがクリスを否定した。

それに彼女はくすくすと笑い、続ける。

「あらら、ユウさんに否定されちゃいましたね。それでですね。私だったら、この町から逃げ出しますね。深い思い出も無いですし、いや、むしろこんな町には本音でしたら居たくないですから。着の身着のまま逃げ出すのも大変ですが……私ならそうしますね」

「結構いい考えだな」

「でも、私は、ヒサメさんのご意向に従うのでご安心下さい」

「ああ」

氷雨はしっかりとしたクリスの意見に尊敬さえ抱いた。

未だ、自分は考えさえしっかりせず、のうのうと埃っぽい部屋で考えている。一瞬でも、クリスの意見に賛成しようとした自分が恥

ずかしくもあった。

さて、と氷雨がまた脳を働かせようとした時だった。

「クリス様！！ 自分等は二人です！ どうか、お話だけでも聞いてもらえませんか？」

男の声がしたのだ。

優しい温かな声であった。だが、不思議と裏は無いように感じた。クリスはそれに立って会いに行こうとするが、氷雨は腕を掴み、首を横に振って止めた。危ない、と彼は判断したのだ。

「クリス様！ どうかお姿でも現してください！ 私達は、貴女と同じ“ダンジョン・セルボニス”の“ゲームプレイヤー”です！ 無理矢理捕まえる気はありません！ 話だけでも聞いてもらえませんか？」

また、男の声がした。

今度は先程とは別の男の声であった。足音から考えても、二人なのは間違いない。

とっさにクリスは“ゲームプレイヤー”に反応し、氷雨の手を振り払って外へと出た。それにカイトとユウも続いた。彼等も、クリスと同じ言葉に反応したのであった。

氷雨はそれに、溜息と舌打ちしか出ないのであった。

氷雨が重い腰を上げながら外に出ると、月明かりの下兵士と三人は相対していた。

カイトとユウはクリスより前に出て、勇敢に彼女を守る騎士のよう。兵士達は槍を下に置き、剣を鞘付きのまま下に置き、いかにも捕まえる気は無いといった風に、だ。

「あんた等は本当にあのゲームの“ゲームプレイヤー”なんだろうな？」

何故か兵士二人に質問をぶつけたのは彼女ではなく、似非騎士のカイトであったが、兵士達は特に疑問を持たずに答える。

そんな質問を答え始めた兵士の顔には、どこかやつれた印象を感じた。

「はい。クリス様ならご存知だと思われます！ 覚えていませんか？ ゲームをログアウトして起きた時に見えた六角形に囲まれた砂地の広場を？ その時に縛られていた御自身の手首を？」

「残念ながら……覚えてません」

クリスは数秒、自分の記憶を探った。

だが、そんな記憶は無い。

クリスが目覚めた時、周りの景色は広場でなく、豪華な部屋であった。縛られていたのも縄ではなく、『スレーブ』。

兵士の男との認識は、随分と違う。

（あれ、確かそれって……）

だが、クリスではなく、氷雨はそれを強く覚えていた。

あの広場であった血みどろの戦い。氷雨は目の前の剣士相手に詳しい周りの状況は覚えてないが、確かに久遠を中心とした軍勢が歯向かっていたあの時の広場に、兵士が言っていた情報と一致する。

「そう言えば、あの時確かクリスマス様は気を失っていましたね。すいません。では、あの、貴族のような豪華な衣装に身を包んだ——カナヒト様は、ご存知ですよね？」

「ええ」

「実は彼が……私達“ゲームプレイヤー”を専門に奴隷にしていたのはご存知ですか？」

「えっ！？ それって……」

「やはり……知りませんでしたか——」

氷雨のまた感じた既視感は置いとくとして、クリスと一人の兵士の会話は進んだ。

「——実は彼は、エルフィンむねの森に“定期的”に召喚されていた“ゲームプレイヤー”を旨として、商売を続けていたらしいです。最も、毎回全ての“ゲームプレイヤー”を捕まえられるわけではなく、半分以上は取りこぼしていたらしいですけど……」

「なんでお前がそんなこと知ってるんだ？ 奴隷だったらそんな情報知らねえだろ！」

カイトの兵士に対する口答えも、当然であった。

奴隷、階級としては一番下だ。

そんな身分の者が、そんな極秘情報知るわけが無いのだ。

「君の言ってることも最もです。ですが、最近、彼は“とある”奴

隷に反乱されたくてね。身分も財産も全て失ったそうですよ。それで奴隷へと堕ちた私達の気が、晴れる訳ではありませんけど……」

「ええ、それは分かります……」

クリスも、心境は兵士と同じであった。

クリスはカナヒトに奴隷へと堕とされた。その現況であるカナヒトが、誰かに裁かれたとしても、被害者の身分が良くなるわけでも待遇されるわけでもない。その証拠に、未だクリスはワルツの部下に追いかけてる。

——奴隷の身分は“何”も変わらないのである。

誰かが行動しない限り、誰かが救ってくれない限り、現状は何も変わらないのだ。

所詮、カナヒトが裁かれたことで、ざまあみろ、とは思ったが愚痴にしかない。辛く、苦しい日々、変化は無いのだから。

「オレはその情報が、どうやって耳に入ったか聞きたいんだ？ 確か、奴隷は閉鎖された空間にいるから……まともな噂さえ、耳に入らないはずだろ？」

また、カイトは兵士に聞いたのだした。

彼の兵士に対する疑惑は、まだ拭えなかった。奴隷の主人は、余分な情報を奴隷へと与えない。少しの情報で巻き起こる反乱を防ぐためであった。

ユウもその点は詳しく理解してないが、どこか、兵士たちを怪しいと思っていた。

その証拠にユウは、まっすぐな瞳で兵士を見つめながら、クリスを連れて行かれないよう彼女の腰に抱きついている。

「普通なら……そうでしょうね。ですが、私達の主はワルツ様です。彼は、人の絶望や苦痛を見るのが好きでね……。ワルツ様はこのことを知ると、私達カナヒト様から売られた者たちを集め、先程の内容を言い聞かせながらお酒を飲んでたんです。私達の辛酸を肴にして……ね」

氷雨も、残りの三人も、一辺して喋っている兵士の顔に、どこかやつれた印象を感じていた。

その原因が、ワルツなのだ。

苦しみも、痛みも、絶望も、憂いも、痛みも、怒りも、全てワルツに吸い取られ、空っぽになったなれの果てが、今の兵士なのだと思います。

「でも、それは私、聞いていませんよ」

「ええ、ご存知です。ワルツ様は……その方が……自分だけ知らないほうが……クリス様はより苦しむとのご見解でしたから……」

「なっ!？」

クリスは言葉が出なかった。

ワルツの考えが、すぐに分かったのだ。

あの時の自分は希望を持っていた。

レンに助け出されるという希望を。

だが、ワルツはそれを知った上で、その希望を潰した上で、この事実を披露した方が、より悲しむと、より自分が愉しめると、分かっているクリスに聞かせなかったのだ。

（どこまで……どこまで人の心を弄んだら……気が済むのですか！）

クリスは爪が深く皮膚に食い込むぐらいに、拳を握り締めていた。彼女は、静かに憤怒の炎に燃え上がる。猛々しい炎が、彼女の心の中では燦っていた。

「で、お前の要求はなんなんだよ？ まさかそれだけ言うために、俺たちを誘き出したのか？」

確信に迫る氷雨の言葉。

それが、どきっと、大きく兵士の心臓を鳴り上げた。

「実は――」

やがて、意を決したように兵士は紡ぎ出す。

「――クリス様に――」

自分達の思いの丈を――

「――あの牢屋へと戻って欲しいのです！！」

それに猪一に否定したのは、まだ穢れの知らない一人の少女であった。

「どうして……なの？ どうして……おねえちゃんが、また、あのいやなひびにもどらなきゃいけないの？」

土下座し、必死に懇願する兵士に、ユウがその思いを呟いた。
彼女は前日、クリスから最悪だった日々の様子を聞いている。
だから、兵士に聞くのであった。その様子を、クリスのあの時の
日常を、知っているであろう兵士に。

「すみません!! 実は私達……クリス様を連れ戻さなければ……
皆、兵士達は見境無く殺されてしまうのです!! どうか、お願い
です! 同郷の仲間を、同じ境遇の奴隷を、助けると思って、どう
か、私達に捕まってはくれませんか!？」

「だからって、だからって、おねえちゃんが……ぎせいになるひつ
ようはないよ! おねえちゃんは……やっとすくわれたんだよ?
だったら……だったら……」

額を地面に擦り付けるような兵士達の土下座。

それに対するは、顔をクリスの腰に隠しながら、嗚咽の入った声
をあげるユウ。決してクリスを逃さない、という強い感慨から服を
ぎゅっと強く握っていた。

「申し訳ありません!! ですが、私達が助かる道は……クリス様
に来て頂くしかないのです! お願いです! どうか……どうか……
…」

同郷の人間。

それも真摯な思い。

ワルツのことは嫌いだが、酷くクリスは彼等に同情できた。

(私しか——私しか——いないんですよね。もし、ここで逃げれば、
大勢の人間が殺される——)

クリスは大きく悩んだ。

彼等はただ、ゲームを、新発売のゲームをやっていただけなのだ。それだけなのに、なんの因果か奴隷へと成り、生き死にを他人に左右される存在となった。

（――確かに――ワルツの言いなりになるのは嫌――です。ですが――自分の幸せのために――数十人が殺されるのは――もっと嫌――です）

クリスはいくら同郷の人間といえど、面識も全く無い人間に、同情した。

自分では救えない、だが、見殺しにすることもできない。
根が優しい彼女は、どうしても兵士達を見放すことは、できたかった。

「おゝ……おゝねぢゃん」

クリスは、優しくユウの手を振り払った。

「ユウさん、やっぱり私は、誰かの屍の上に幸せを掴むことは出来ない性分のです」

泣いているユウに優しく微笑みかけ、そして彼女は前を向く。
もう――決心したのだ。

「クリスねえ!!」

カイトの制止もクリスを止められなかった。

一步、また一步、彼女は進んでいく。

その歩き振る舞いからの気丈さ、気高さには、とても麗しいもの

があつた。

もう——後悔なんて、彼女はしていなかった。

「あ、ありがとうございます!! ううつ……ありがとうございます!!」

土下座したまま、兵士は近づいてくるクリスに感謝していた。

女神のような美しさと、聖母のような優しさを兼ね備える彼女に。
だが——

「えっ!?!」

——だが、そんなクリスの動きを、強引に止める者がいた。

肩を抱き、鋭い目つきを兵士達に向けながら、灰色の者がクリスを、時を、止めていた。

「で? お涙頂戴のシーンはもういいだろ。どいつもこいつも、虫唾が走るような発言ばかりしやがって——」

「……!!」

驚きの顔を向けたのは、そこにいた全員であつた。

口を殆ど空けなかった彼が、冷酷な瞳で全員を見渡すのであつた。

「——助かる道? それしかない? 屍の上の幸せは掴めない? どれもこれも綺麗ごとだな。やっぱり、こういった戯言には虫唾が

走る」

「では、ヒサメさんだったら！ どうするんです！ 私はやっぱり、誰かを犠牲になど出来ないのです！！」

「では、お前は私達にどうしろと言うのだ！ 逃げ続ける、強者の君たちを捕まえるには、殺されないためには、どうしたらいいんですか！！」

氷雨の発言の後、クリスと兵士の発言が重なった。

悲痛の叫び。それが重なったのだ。

「――知らねえよ。けどな。だからって、な。“俺が買った奴隷”の未来を勝手にお前等が決めるな。決めるのは“俺”だ。正義の味方でも、ヒーローでも、他の誰でもねえ“俺”が決めるんだ。そんな“俺”の選択は、お前たちにクリスを渡さねえ。金が無駄になるしな」

全員が、この氷雨の自分勝手な考えに、言葉が出なかった。

彼は綺麗ごとでもなく、悪意でもなく、善意でもなく、自分本位で動いている。そこに他人の入る余地は、全く無かった。

「だったら……！！」

「もし、嫌だったら、齒向かえよ。敵対しろよ。必死にもがけよ。――俺は、受けて経つぜ？」

氷雨は挑発するように、クリスを後ろへやってから片手で兵士達を拱きした。

彼は“正義の使者”ではないのだ。

それは、今までの彼の行動からでも分かることだ。“正義の使者”が、戦いを望み、懇願するわけが無いのだ。

「ひ、ヒサメさん……キャツ！」

それに反抗しようとしたクリスは、後ろへと押し飛ばされた。

クリスは、今まで手一つ出されなかった氷雨の横顔が、この時急に恐ろしく感じた。

本気だったのだ。

それが感じ取れたがこそ、ひ弱な自分の力ではどうにもならない、と抵抗を諦めたのである。

「く、くっそ！」

遠く離れていた自らの死が、急に近づいた事への嘆きが、兵士の口から出る。

そんな死からもう一回離れるため、地面に置いてあった槍を二人の兵士は拾う。

——叫ばない。

兵士達は仲間を呼び、氷雨達がこの場から逃げる恐れよりも、絶対に彼を斃して生を得ると、そう誓ったのだ。

「くっそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！」

咆哮。

獣のような咆哮が、兵士の口からで出た。それは絶叫にも近いものだった。

地面を強く、二人の兵士は踏みしめた。

——勝負は一瞬。長引きはしない。数秒の命のやり取りを、勝敗

のやり取りを、氷雨は勿論兵士二人は感じていた。

トンッ！

軽い足音。

それは氷雨の物であった。

対角線を描くように、左右から寸分違わぬタイミングで突いて来る渾身の槍。『疾槍』の技を付け加えた二本の槍が、氷雨を襲う。それを躲すように、氷雨は軽い足音で飛んだのだ。

上に低く飛んだ後。氷雨は伸びきった槍を、踏むように着地した。『疾槍』を使ったことにより、筋肉アシストを利用した技を使ったことにより、その反動からなかなか自分の思い通りに動かせない腕。

氷雨はそこを狙い、槍を踏んづけたのだ。

そこからは、氷雨の独壇場であった。

兵士二人の『スレーブ』のついた首を、片手でそれぞれ持ち、まづ二つの頭をタンバリンのように重ね合わせる。

そして――それにより怯んだ兵士の頭を、抵抗できなかった兵士の頭を、地面へと叩きつけた。

氷雨はその後、トドメを差すように、動けなくなった男をそれぞれ順番に、無防備な腹へ足を落とす。

敗者の抵抗を赦さない――彼らしいトドメであった。こうして、氷雨は同郷のゲームプレイヤーを、何の躊躇もなく斃したのであった。

「さ、行くぞ」

「行くって……どこへ行くんですか！」

そして、敗者に一瞥もせず、先を目指す氷雨にクリスは吠えた。遠くで聞こえる足音から、敵が迫ってるのは分かっている。だが、どうしても、逃げる気にはなれなかったのだ。

「どこへって？　——決まってるだろ。ワルツを殴りに行くんだろうが」

しかし、彼から出た言葉は全く違う。

全ての諸悪の根源である——ワルツを斃しに行くと言ったのだ。

「ひ、ヒサメさん……」

クリスは、まだぴくぴくと動いている兵士達を見て、彼に付いて行く。それに続いて、カイトとユウも後を追った。

クリスは兵士たちが生きているのを確認してから、氷雨に従ったのだ。彼女は、氷雨が中途半端な存在だと、この時気づいたのであった。

何故なら、彼は“善人”ではなかった。かといって、“悪人”でもなかったのだから——

第十四話 ネズミ狩り？

「どこへって？——決まってるだろ。ワルツを殴りに行くんだろ
うが」

氷雨が戦っていた上。

またも別の屋根の上で美味しそうにワインを飲んでいたワルツは、彼の自分に対する宣戦布告に、思わずグラスを落としそうになった。今度は椅子には座っていない。ただ、立って、四人を見下ろしながら、ワインを飲んでいたのである。

「くくっ！ 笑いを堪えるので精一杯ですよ！ ヒサメ君！！」

ワルツは腹が振れそうなほどの爆笑を、体の震えで表していた。もし、笑い声のせいで氷雨達に姿を見つかるのを危惧して、大きな声は上げなかったが、顔には嘲笑が見える。

四人が向かっているのが、ユビキタス商会のエータル支部奴隷部門のあの店だったからだ。

彼は酷く彼に近い位置でこうして見守っているのに、それに気づかず、あの店を目指した彼等を酷く滑稽だと感じたがゆえに、氷雨をせせら笑ったのだ。

「さて、と、そろそろ私も動きましょるか！ このまま盤上を見ている“だけ”ではつまらないですしね！！！！」

ワルツはグラスに入っていたワインを一气飲みし、ふっとワイングラスを消した。

そして、辺りを見回す。裸眼ではない。細長い筒のような望遠鏡

をどこから取り出し、片目に当て、探索する。

ワルツは、面白そうな動きをする“駒”を彼は探していたのだ。

人生にはスパイスが必要だ。

ワルツの座右の銘であるが、彼はそのスパイスを甘いのではなく、激辛を入れなくては、と思っている。

自分の持っている兵士では足りない。これまでの幾つかの戦闘から、明らかに氷雨と陣取るには力不足と判断したのだ。

スパイスは強烈なのを、それを心に決めていたワルツは“やっと見つけた――”

「いました！ いました！！ この上ない逸材が！！！！」

――光輝く宝石を。

強さも申し分ない。カリスマ性も申し分ない。氷雨と戦う動機も申し分ないかった。

優れた工芸品のように鈍く光のではなく、カットされたダイヤモンドのように力強く、誰もを引き付けるような人物を、ワルツは――発見したのだ。

その人物の望遠鏡で大きく拡大した様子は、赤い鎧に身を包み、これまた赤い槍を持っていた。仲間は棒を持った青年と、弓を携え、色香に包まれた女性。

冒険者としては、現在有望の上昇株で、クリスを欲しがっていた者の一人。

ワルツの思い描く盤上に、最も適した人材であった。

「いいですよ！ いいですよ！ 非常に今後の展開が愉しそうです！！！！！」

その数秒後、その屋根の上からワルツは消えたのだった。



「レン、もう無茶は……しないからな……」

とこしえ ダンジョン
永久の迷宮から帰った三人のうち、ぼそつとアキラが言う。
彼等にとって、空から降り注ぐ月の光は久しく感じていた。

遠征に出て数日。一日目からハプニングがあり、続行は困難かと思われたが、レンの強い希望によって続けられた。

レンが手に入れた『勇気の種』という新たな技スキルのおかげで、誰も死んではないが、仲間が一人減ってもおかしくはないような遠征内容だったと、後の三人は語るだろう。

「分かってる。俺も、あれは二度としない」

ダンジョン
レンは疲れたような声色だった。

迷宮内で数々の激戦を繰り広げたので、疲労した肉体。それを裏付けるかのように、三人の鎧はところどころが欠け、血で赤く滲んでいた。

それに、レンは槍を、アキラは棒を、杖代わりに歩いている。もう早く帰って寝たいのは、三人とも同じ気持ちであった。

バサッ！

そんな風に、三人が夜道を歩いていると、目の前から“人”が落ちた。

——白い、まるで道化師のような男であった。

思わず三人の目は点になる。

「夜分遅くに申し訳ありません!!」

「……誰？」

耳が遠くなるような大きな声。

それに驚きながらも、まだ目の前の人物が分からないマミが疑問の声を上げた。

「私のことをご存じないですか??? ユビキタス商会エータル支部奴隷部門所長ワルツです!! 流石にここまで言えば分かるでしょう???」

ワルツは帽子を取ると、綺麗にお辞儀をした。右足を引き、右手を体に添え、左手を横方向へ水平に差し出す。貴族階級の者が良く使うお辞儀であった。

「で、そんなお方がボク達に何の用なんだ? 普通なら、こんな時間、こんな場所で、一人でいないのではないか？」

「おやおや! アキラ様はお厳しいですね!!!!」

「なんとも言え。お前のような怪しい人間を疑わなくて、一体誰を疑えと言うんだ？」

「そうですか! そうですか!! でも、念のため、話だけでも聞いていただけませんか??? それにどう行動するかは、お任せしますで!!!!」

ワルツはお辞儀を止めると、不意に背後を向いた。にたあと嗤う貌を、隠すためである。だからか、背中にはアキラの疑惑の視線が突き刺さるが、気にするわけにはいかない。

これは、ワルツの勝負なのだ。いかに相手を騙し、氷雨と戦い合わせるか。肴のためにも絶対に譲ってはならないのである。

「……聞くだけ聞こう。話はそれからだ」

「貴方たちが話の分かるお方で良かったです！ 最近は人の話を聞かない若者が増えているのでね！！！！」

「それは……ボク達への褒め言葉と受け取っておくよ」

アキラはワルツに——おだてられなかった。

ここで無様に喜ぶのなら、ワルツも苦労しないだろう。相手の言葉を真に受け、裏を真意を知ろうとしない人間なら、交渉も無しに最初から本題に入ってよかった。

だが、ワルツはアキラを、初めて会った時からある種警戒していたといえる。

あれは、レンがクリスと知り合った次の日だった。

レン達はアキラのクリスの詳しい情報を知りたいと、ワルツの店へと訪れているのであった。

そこでワルツは、アキラの行動に驚いた。クリスの値段を聞いた上で、値切り始めたのである。それも、様々な視点から。

宝石を外したら安く出来るか。首輪を外したら安く出来るか。などを聞いたのである。

勿論、ワルツはそれをこれまで客に言ったことがあるので、嘘偽りなく答えた。もし、アキラが事前にクリスの黒い噂を手に入れて

るとして、ワルツは嘘をつかなかったのである。だが、その上でのクリスの値段は六百万ギルだ。大幅なワルツの“良心値引き”を抜いた上での価格であった。

それを聞くと、すんなりとアキラは帰っていった。なんの駄々も捏ねずに。

アキラ達は最初から、自分達が集める目標金額を知りに来ただけ、とワルツは瞬時に悟ったのである。そして、この時アキラ達が知った情報から、粗を見つけ出した値引き交渉をするだろうとも。

この時から、ワルツはアキラに——目置くようになった。下調べを行ったアキラに、関心を抱いたのである。

「では、お話しますね！ 衝撃な内容ですが、あまり騒がないでくださいね！！ 頼みますよ???」

「おう！」

「分かった」

「うん、分かったわ」

もったいぶる様なワルツに、三人は煩わしさを覚えていた。だが、そんなワルツから出た言葉は、やはり衝撃であった。

「——実はクリスマス嬢が攫われたのです！！」

「はっ！？ どうしてだよ！？」

「レン、少し黙れ」

「……分かったよ」

レンが、勢いよく食いつく。ぱくつと餌に食いついた魚のように。そんなレンをアキラは嗜めるが、理解は出来ても納得はできない彼であった。

ワルツはこんなレンに、出だしは良好と感じた。

「すいません！！ 実は誘拐犯は“悪鬼”のように強くてね！！ 全力を尽くしているのは、いるんですが……」

「ふーん、その辺り、もう少し詳しく聞いていいかな？」

「ええ！ 実は彼は——ここでは分かりやすく“鬼”としましょうか？？？」

「どうでもいい。先を聞ければ、ね」

「分かりました！ では、私の独断と好みで“鬼”とします！ で、その“鬼”がですね！ まあ、灰色の格好をした“鬼”なんですけど……！！ 彼がですね！ あそうそう、その“鬼”は言ってませんけど、男性なんですよ！ でも、美男子では……」

「そんなのはいい！！ 簡潔に話せ！！」

焦らしに焦らすワルツに、レンは怒鳴った。

先を言わない彼のおかげで頭に血が昇り、カッとなったのだ。ワルツも当然アキラを怒らすために、わざと行うのであった。相手を激情させ、正常な思考判断を狂わすため一種の策であった。

だが、それも不発に終わる。

アキラは大きく息を吐いて呼吸を整い、冷静さを取り戻したのだ。これにワルツが、心の中で舌打ちをしないわけなかった。

「分かりました！ で、その“鬼”は、クリス嬢を買う振りをして、真正面から連れ去ったのですよ！ 肩に抱いてね！！ いや～～！ あれには驚きました！！ まさか、私の兵を全てぶつちぎって逃げるとは思いませんでしたから！！！！」

「ふーん、そうなんだ」

マミが相槌を打った。

顎に手を当て、深く考え込んでるアキラを他所に。

“鬼”は強かったですよ～～！ こう千切っては投げ、千切っては投げてましたから！！ 一騎当千——いえ——万夫不当にふさわしい怪物でした！！ もうそれはそれは……私は“鬼”に、こういう黒い魅力を感じましたよ！！！！」

ワルツは腕をぶんぶんと振り、“鬼”の強さを表現した。

幼稚な表現だったため、シリアスな空気なのにどこか三人はコミカルな空気を感じた。

そんな時、アキラが不意に話を切り出した。

「で、そろそろ無駄話は置いて、本題に入ろうか？ 一体、ボク達に何を望んでいるんだ。奴隷の管理官？」

「へえ～～！！ 分かっていたんですか！」

「ふん、なんとなく……な」

天性の勘か、フル回転で回した頭脳で出た結果か。

どちらにしても、本意を読み取られたワルツは、また舌打ちを心の中で鳴らした。度重なる交渉で手に入れたポーカーフェイスにより、貌には何の変化も無いのであった。

「そうですね！ 私からのお願いは、是非——クリス嬢を取り返して欲しいのです！！」

「分かつ……」

「なんで、ボクたちなんだ？ 優秀な部下が沢山いるはずだろう？ 有名なエータル商会の支部長なんだから？」

即座に頷こうとするレンを、アキラは止めた。

これからが“本番”だと、アキラは感じ取っていたのだ。

「いえ！ 実はですね！ 私の部下は数はいんですがね！ 質はあんまり……どの兵士も力量が25にも満たないんですよ！ それなら、現在ギルドで一番の有望株の貴方達に頼んだほうが、成功率が高いと思っただんです！！」

「俺達に任せ……」

「まさか、タダ、とは言わないだろうか？ ボクは、報酬としてなら——クリス嬢の値段を再考してもらおうか？ できれば、100万で」

瞬時に首を縦に振ろうとするレンを、アキラは止める。

アキラの狙いは、ずばりこれであった。ワルツの提案である仕事を、タダで受け取るようなレンのような、善意の塊で出来ている人

間では無いのだ。

仕事には対価を。レンはきっと嫌がるだろうが、クリスを救うためだと後に説明すれば、レンもきっと納得してくれるだろうと、アキラは考えていた。いや、納得してみせる、と。

それに、ワルツには黒い噂が密かに流れている。クリスのためとはいえ、そうやすやすと頼みを聞くわけにはいかないのだ。

「ええ！ 当然ですとも！ では、クリス嬢のお値段は――500万でどうでしょうか？ いくらなんでも100万はがめつきすぎです！！」

「高いな。200万。こっちは遠征の後なんだ。残業代ぐらいついて当然ではないか？」

「400万！ 敵はあくまで一人なんです！ 貴方達程度の“強さ”で嵌めたら簡単なのはですね！！」

「300万。深夜代として、高くないはずだ。こんな時間に依頼を受けてくれるような冒険者もいないだろうしな」

「欲張りですねー！！ 350万！ これ以上下げると、私の明日の生活は危ぶまれます！」

二人の熾烈な争いは、終局へと向かっていた。

これを端から見ていたレンとマミは、なんてシビアな戦いなんだと思っている。二人は長年一緒に歩んできたアキラの、知らない一面が垣間見えた時であった。

「分かった。クリスを取り返した後、ローンで即刻売ってくれるなら、それで手を打とう。どうする？」

ニヒルに笑うアキラに、ぐぎぎ、とワルツは歯を強く噛んだ。
これがアキラの狙いだったのだ。

最初からクリスを救うことを前提に考えており、その上で救った後、すぐに自分達が購入できるように仕向ける。

（将来有望！ ギルドで噂されるのは、あながち嘘ではなさそうです
ね！！）

分かった途端に、ワルツが想定していたアキラの考えよりも上を行かれた。自分の予想が狂ったことにより、少し悔しさを彼は覚えるが、それだけであった。

「ええ！ それで手を打ちましょう！！！！」

ワルツは片手を出したアキラの手を、強く握る。ワルツとアキラの契約は、こうしてしかれたのだった。

狡猾な狐同士の騙し合いは、これで終わる。勝負の結果としては、どちらが勝ったかはわからない。

ワルツの老獪な頭脳が勝ったかもしれないし、それともアキラの早熟な知能が勝ったかもしれない。分としては、おそらく全てをさらけ出したアキラよりも、まだジョーカーを数枚隠し持っているワルツの方が有利であろう。

そして、その結果は、夜を照らす月だけが知っているのだった。

第十五話 ネズミ狩り？

四人はただ、歩いていった。氷雨の赴くままに。

その場所は大通り。横幅は十数メートルもあり、逃げるのも戦うのも、たやすい場所だ。だが、見つかるのが最大のデメリットといえるだろう。

そんな場所を通っているのに、誰も文句は言わなかった。いや、言えないに近い。既に数十分。まだ、幸運が彼等についているのか兵士とは一人も会っていない。だが、エータルの町の中心から、少し外れたところに位置するワルツの店。氷雨達はそこに町の端から向かっているのだが、戦地へと自ら背く彼から、クリスは言いようのない“鬼気”を感じたのだ。

黒く、黒く、黒く、まるで一面が漆黒で塗り潰されたような、危機迫る感情を。

——鬼。

いや——と、そこまで感じた時。

「おい！！ お前等が！！ クリスを誘拐したのか！！」

「敵か？」

目の前から男が現れた。

レンであった。大通りの遠くの場所から一直線に、氷雨へと近づいたのだ。

ワルツの目的証言どおり動き、彼が誘拐犯だと思っている氷雨を見つけたのである。そして、氷雨をレンは睨む。二人は睨み合いながら、硬直状態に入っていた。

レンは——赤いと比喻される男だ。鎧も赤く、槍も赤く、内に秘めた彼への真っ赤だからである。

その背後にアキラとマミもいるが——もはやレンの付属品に近い。レンが今にも増幅に増大を重ねた激情に身を任せ、槍で斬りかからん勢いの彼が、この中で一番輝いていたからだ。

その様子を——英傑と、アキラとマミの二人は、クリスを助け出す正義の味方だと思っていた。いや、酔っていた。

「うっ……!」

マミが氷雨を見て、思わず呻き声を出した。もしかしたら、彼ら三人も感じているかもしれぬ。とある青年を中心に溢れ出る、——鬼気を。

「はあ？ なに言ってんだよ？」

「ふざけるな！ もう、ネタは上がってんだよ!!」

カイトは妙な言いがかりを付けるレンに、呆れた様子で言い返すが、逆に怒られた。

理不尽だ、とカイトは思った。

レンの瞳に氷雨しか移っていない。それを自覚するのに、まだカイトは気づいていなかったのである。

「おねえちゃん……あのひと……しってるの？」

ふと、クリスの話題が挙がったので、ユウが聞いてみた。

「ええっと、そうですね——」

クリスは隣で手を握っているユウに言われて、暗闇で眼を凝らす。集中して、レンを見る。

はっと、気づいた。見覚えがあるところではない。自分を助けてくれると、そう信じていた人が、そこにいたのだから――

「――知ってます。あの人が――私を助けてくれると、言ってくれた人ですよ」

「へえー！ あの一ひとが、そうなんだ！！」

結局は叶わなかったですけど、とクリスは付け加えた。

ユウは興味深そうにレンを見る。

見た感じは平凡そうだ。冒険者としては体格は並み以上だし、下手をすれば細く引き締まっている氷雨よりも太い。ただ、兜の下から覗く眼光は、庸俗な猛禽類ようぞくよりも鋭かった。泣く子も黙る切れ味だ。その標的が、氷雨ではなくユウだったらおそらく泣き出していただろう。

（あれがおねえちゃんの……おうじさま……か）

しかし、ユウは少しクリスを羨ましく思っている。

同じ女として、だ。

シンデレラストーリー、少女が夢見るそれに、ユウは憧れたのだ。
った。

「レン、もしかして――あの人はヒサメじゃ――ないか？」

「えっ!？」

硬直状態は数分続いた。それを終わらせたのはアキラ。

ワルツから言われた灰色の男の顔に――見覚えがあったのだ。数

日前、^{ダンジョン}迷宮での異常との邂逅の果てに、知り合った人物だ。

命を助けられ、一生の恩を感じた者であった。

「本当だ。――ヒサメ！ どうして、どうしてあの時は俺達を救ってくれたのに、クリスを攫ったんだよ！！ 信じられねえよ！！」

「いや、よく分かんないから」

びしっとつつこむカイト。

「ガキは黙ってろ！ これは子供が口を出すような問題じゃないんだ！！」

それに、レンは熱く反抗した。

レンとカイトの二人の温度差は、太陽と月のように激しかった。

「……アニキ、どうしてオレはボロクソに言われてるんだ？」

「ま、運が悪かったな」

少し怒鳴られて涙ぐむカイトに氷雨は苦笑しながら同情し、頭を撫でた。少し理不尽に怒られるカイトを、哀れだと思うのであった。

氷雨は目線を隣のカイトから上げ、レンへと移す。目つきは多少鋭いが、眼光だけで言えば、レンよりもたどたどしい。ただ、空気というか雰囲気というのが、レンの“それ”とは違った意味で怖かった。

「で、一体俺に何のようだ？ 邪魔するなら——強引にどかさぜ？」

「だから！ 俺はどうして無理矢理クリスを攫ったと訊いてるんだよ！！」

一歩踏み出て、相対している二人。

レンは、氷雨が動き出しても戦えるように、腰を低くした。半身になり、槍を腰のあたりに水平に構えている。氷雨は臨戦状態の彼とは打って変わって、ただ立っているだけだったが、目だけは据わっていた。口は笑っているのに、目は据わっている。

空気がぴりっと乾き、一触即発の緊迫した状態であった。

（まさか……！？）

そんな剣呑なレンの勘違いの意味を、クリスはもしかして、と気づいた。

ワルツ。あの自分のためなら、快楽のためなら、悪魔に近し頭脳を発揮する。もし、レンに、ワルツの息がかかっているなら、騙された可能性がある、と。そして、その様子を、どこかで見ているのではないか、と。最悪の想像が、頭をよぎった。

クリスはその一分の可能性に賭け、二人を止めようとするが、

「ヒサメさん！ 少し待って……」

「——黙ってるよ」

氷雨に制された。

静かに、小さな声で、まるでクリスにしか聞こえないよう。声量を調整しているように。

「で、でも……」

「男同士の戦いに、女が口を出すもんじゃねえよ。例え——あいつが誰かに——食わされたとしても、な」

氷雨は口角をほんの少しだけ上げた。

そして、前へと進む。彼は「お互いの尊厳と主張は、男なら拳で決着付けようぜ」と笑いながら歩く。

それは人の論理としては破綻していた。とても身勝手に、横暴な考えだ。

「もしかして……」

クリスは、前進する氷雨の背後を見つめた。

女の第六感が働いた突拍子も無い想像ではあった。氷雨がレンの勘違いに、それも高次元のレベルで気づいている、と。それを分かった上で歩みを止めない、と。

どこまで合っているか分からないが、元々氷雨は謎が多い男であった。自分の素性や経歴を全く話さず、ゲームプレイヤーかノンゲームプレイヤーかも、クリスは勿論カイトやユウにもはっきりと言っていない。強さの訳を述べたことも無い。とにかく、氷雨は秘密が多い男なのであった。

「ヒサメ、命を助けられたからって——躊躇はしねえぞ!」

「気にするな。なんだったら——三人同時でもいいぞ?」

「そんな卑怯な真似、誰がするかよ!」

二人は少し、会話を交わした。

氷雨がレンと会話を巡らせた直後のことだ。

「アニキ！ 負けんなよ！」

カイトからは激励が飛び、

「おにいちゃん……けがしないでね」

ユウからは応援が飛んだ。

「ヒサメさん……」

ただ、クリスは氷雨に何も言わなかった。

勘違いを解くことはできるのに、それをしない彼。むしろ戦いを望み、自ら戦地へ突っ込む彼。そんな彼に、クリスは応援することなど出来なかったのだ。

だが、この三つの言葉のいずれも、氷雨の耳には入らなかった。内から響く情動。“鬼”の叫び。狂喜への誘い。これらが心の中で巣くい、彼を黒く塗り潰していたのだ。

『レンだけとは言わず、あの二人も一緒に戦^やろうぜ？ そっちの方が、絶対に嬉しいだろ？』

——鳴る。

体の内側で、全身の肉に深く、酷く、鈍く響くように鳴った。

——震える。

筋肉が、脂肪が、内臓が、黒い自分の姿の“鬼”の声に従うように、氷雨の意思とは無関係に、三つの屍を作り上げる事に歓喜した

のだ。

『一緒に——仲良く堕ちようぜ——欲の闇に——』

最後に、“鬼”が氷雨に再度いざなう。

我等は一心同体。親よりも兄弟よりも深い関係と、血縁など超える関係性だと。深く訴えかけた。

そして彼は“鬼”の提案を——

(ちよつと邪魔だから、黙ってるよ?)

——断絶する。

断った。違う。最初から“鬼”に従うつもりなど毛頭無いのだ。

ただ邪魔はしなかったから、喋らせていただけ。最初は主張も小さかったが、暴れも小さかった。それがだんだん大きくなり、遂には邪魔へと成ったので、沈ませた。

『おい！ 暴れようぜ！ 俺とお前なら、いや、俺と俺なら、天下無双の筈だろ？ だから——』

闇へと氷雨を誘っていた“鬼”は、激しく内で暴れまくった。

肉体を乗っ取ってやろうと、この快樂なしには生きられない戦闘中毒に仕立て上げようと、氷雨のせいで育った“鬼”は、酷く抵抗した。

だが、それを氷雨が赦すはずはない。

（おい、なんか誤解してるな。確かに“俺はお前”だ。だがな。だからと云って、“お前は俺”ではないんだ。あくまでお前が“下”なんだよ。“副人格”なんだよ。それが、これ以上喋るなら——喰らうぞ？）

『——ヒイツ！！』

そして、悲鳴を挙げた“鬼”を迷いも無く、氷雨は喰らう。
暗い腹の奥底へ。

元々、“鬼”の思い通りになるような、快楽に溺れるような氷雨ではないのだ。祖父の意向で、武術の練習には精神修行も入っている。それを積んだ氷雨が、たやすく“鬼”の言いなりになることなどないのであった。

（なんか、消えたらスッキリしたな。現れたら“また”喰らうか）

デキモノが取れたように、ギプスが取れたように、氷雨はこれ以上ない爽快感を味わっていた。

心の内に欲望がある限り、“あれ”は現れると祖父は云っていた。それも自身の弱みに強く出る、と。

なら、また現れたら、喰らおうと、氷雨は決めた。

（でも、なんでだろうな）

祖父は、この負の感情を受け入れたと言っていた。説得したと言っていた。氷雨の祖父はその経験則から、あれとは、互いに助長しながら付き合っていくものだと言っていた。

だが喰らったほうが、いいのではないかと彼は思ったのだ。

そんな簡単に消せるものではない筈だが——やっぱり、彼はおかしいのであった。

ードがほぼ同じのため、動きが最小限の氷雨の方が、“避けるのは上”なのであった。

（ちっ、槍ってこんなに厄介なのか？）

だが、氷雨は攻められなかった。マントを掠りながら、皮膚を掠りながら、自嘲していた。

どうしても攻守が入れ替わらないのである。

白兵戦最強、と云う人も多い槍。剣よりも古い永い歴史も有名だが、やはりリーチという利点は戦いにおいては無類の強さを発揮する。

この世界なら技で、現代なら技量で、それを埋めることができるが氷雨にはそれができない。

技量は祖父と比べても、姉と比べても全然足りない。技は碌なものを持っていなかった。ゆえに、彼は“覚悟”したのだった。

（あと少しなのに……！）

一方、レンも中々倒しきれない氷雨に、煩わしく思い始めた。

軽快な風切り音になり、いい一発が出ても、ひらりと、躲される。連続で突いても躲される。嘗めていたわけではない。油断していたわけでもない。

ただ、『勇気の種』があると勝てるって思っていた。それが驕りだと、レンは気づいていなかったのである。

ゆえに——使わなかった。奥の手とも云える“それ”を。

『勇気の種』を発動中の時に、別の技を重ねて使おうとは思わなかったのだ。迷宮内で一度使ったが、『勇気の種』を単発で使った時よりも、別の技を単発で使った時よりも、ごっそりと体力を持つ

ていかれる業。『強化』では、それほどの相乗効果は見られなかったが、何故か『勇氣の種』だと絶大な効果が見られたのである。ちなみに、それが『強化』の人気のない理由の一つでもあった。

（使ってやる……！　そして、ヒサメの目を覚まさすんだ……！）

槍を何度も突きながら、レンは決めた。

選んだ技は『疾槍』。

単純、ゆえに強い、を実行しようと思ったのだ。

「はっ……！」

数十秒間レンが槍を突いている最中、氷雨がいったん距離を取ったのだ。

そこを、レンは狙った。

だんっ、と強く地を踏みつける足。両腕から発揮される槍。そのどれもに『勇氣の種』と『疾槍』の、効果がかかっており、とても速い。氷雨がこれまで戦った敵のどの技よりも——速かった。

（決める！　決めるんだ……！）

槍で中段から氷雨を狙うレンには、必死さがあつた。

二つの技同時発動の後にかかる脱力感^{スキル}は、果てしない。『勇氣の種』も発動できないほどに。戦えはするが、一切技^{スキル}の使えない状態で、氷雨に勝つのは難しいと、レンは思っていた。

だから、これで終わらせる、とレンは——決めていた。

数瞬の間の後、槍は、スピードに乗りまくった槍は、本当は氷雨の腹を狙っていた。だが、少し外れて、彼の右胸に当たり、

逸れるようにして、右肩にも当たった。氷雨がレンの攻撃を、半身にしようとして、避けたためである。

グキッ、とも、バキッ、とも聞こえる音が鳴った。激痛の走る音でもあり、骨が折れる音でもあった。おそらく、肋骨の何本かはイッただろう。

「やった——」

「——甘えよ」

レンは氷雨が悲痛な音を奏でた時、勝ったと思った。

浅はかであった。

氷雨はもとより、相手の決め球を受けると、怪我は承知の上で、槍を一発貰うと。その上で勝つと、先程——決めたのだ。

そこからの、氷雨が槍を受けてからの動きに——無駄はなかった。動かない右腕は置いといて、右上半身の激痛を決して顔に出すことも無く、一步、槍で空いたリーチを埋める。

次に、唯一動ける左手で、レンの首根っこを掴んだ。最後に左足でレンの片足の重心を崩す。

そして——足でレンの足を払ったと同時に、首根っこを地面へと叩きつけた。

レンは、抵抗などできなかった。鎧という重りが、非常に足かせとなり、バランスを崩しただけで大きくグラつく。その隙を狙い、氷雨は左手でレンを地面へと叩きつけたのだ。がっしょん、と全身をレンは強打する。

投げに近い、打撃技だった。

技名は、『驟雨』しゅうう

水溜りに強く落ちる雨が、叩きつけられた者に近いということから付けられた強引な力業であった。

「レンッ！ 大丈夫か！？」

「レンッ！ 大丈夫っ！？」

そんなレンに、アキラとマミは駆けつけ、労わりの声をかけた。

「さ、行くぞ。ワルツはすぐそこだ」

氷雨はそんな敵に、相変わらず一瞥もしない。
睨むは、ワルツの城。

「絶対に……絶対に……許してあげないんだから……！！」

「マミ！ ボクたちの方が……」

マミはそんな敗者に興味を失った彼に、強い憎悪を湧いた。灰色の背中をキッと睨む。

アキラは彼女を止めるが、残念ながら殺意の炎が消えることはない。メラメラと黒い炎を燃え上げ、ただし幸いなのか、レンの身を案じて、この場で氷雨に襲い掛かることは無かった。

レンの容態を、マミとアキラの二人は鎧を外して確認するが、それなりに酷かった。

全身を鎧で強く強打し、青い痣へと変わった。しかも顔が一番酷い。強く、それも兜の上からだったので、皮膚の薄いまぶた等は薄く切れ、そうでなくても青くなっていた。硬い重い装甲が、あだとなったのである。

レンの怪我はそれだけではない。

それだけでも重症なのだが、“遠征”で出来た傷も開いていた。だから、レンは、今真っ赤に染まっているのだ。

「――すいません。本当にすいません」

そんな彼等に、そっとクリスは頭を下げた。

「どうして、どうしてあんたは謝ってるのよ！」

そんなクリスに、氷雨への不満をぶつけるように、怒鳴うのであった。

クリスはこちらから、遠くから聞こえる足音に配慮しながら、手短にぽつ、ぽつ、と勘違いの複雑に絡み合った糸をほどこいた。

今回の状況の説明を、レン達に話しながら、彼等の事情を聞いたのだ。そこにワルツが絡んでいると、やはり、とクリスは思った。

「でも！ そんな事に気づいていたなら、どうして止めてくれなかったのよ！ 止めてくれたら……レンは……レンは……」

「すいません。私には謝ることしか……」

そこまで言いかけて、氷雨が遠くに行った所で、クリスの時間切れとなる。足音が近くなったのだ。だから、氷雨を追うようにクリスは三人に背中を見せた。

悲しんではいけない。あの人は、私の王子様ではなかったのだから、と思いながら。そして、彼を止められなかった自分にも非があると思いがら。

「人でなし！ 悪女！ 鬼畜！」

様々な罵声を浴びながら、心に傷を負いながら、先を行く三人をクリスは追う。

氷雨の今回の選択は、彼女は間違っていたと思う。だが、彼を恨むような真似はしなかった。ワルツ達によって奴隷にされたときと同様、これが運命、と自分の不幸を割り切ったのだ。

ただ、氷雨をこれから変えていかなければならない、とは思っていたが……。

「外道！ ゴキブリ！ あく……」

「マミ、いいよ。彼等は悪くない。俺が……ワルツを信じた俺が悪かったんだ……。彼女に……罪は無い……」

「で、でも……」

「いいんだよ……」

「うん……」

そんな色々な悪口を向けるマミを、弱弱しい口調でレンは嗜めた。彼等は悪くない。悪いのは騙された自分等。そして、もっと悪いのは騙したワルツと、マミの炎を次第にレンは消化して行った。

（やっぱり……レンじゃないと駄目か）

そんな二人に羨ましそうな目をレンは向け、

（……よし！）

クリスは、彼女自身が持つ強さで、走り去ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0765y/>

戦人の迷宮探索（改訂版）

2011年12月3日18時58分発行